
残響の導き

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残響の導き

【Zコード】

Z5223L

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

高天原國に永久の繁栄を。

時はさかのぼり、史実にも残っていない太古。高天原國と黄眉國は争いを繰り返していた。

ヤナギは己の立場に苦しみ、世を憂いていた。やがて、彼女の迷いは高天原國を熾烈な戦へと誘つ。

和風ファンタジー。

「あなたとのおはなばで会えた」と感謝する

2010.08.27 完結しました。

現在改稿中です。2010.10.07、一章まで済み

序章 姫巫（ひめみこ）

割れ鐘のような響きが脳内に広がる。

少女は口許を押さえてその場に倒れ込んだ。

意識が朦朧とする。

睡魔に負けまいと下唇を噛みしめたものの、抗い難い眠気は彼女を侵蝕し、瞼を閉ざす。

「姫巫。ひめみこ。いずれこの国の行く末を握ることとなる運命の子供。

今は夢に遊ぶがいいや。いずれ定めの刻は来るよ、わたくしの後裔遠い意識の淵で、少女は声を聞いた。

酷く冷えた、氷のような女の声。

しかし、どこか憐憫も含んでいる声でもあった。

「触れるな」

低く、地表を這う声がした。

「誰が貴様如きに渡すものか。」こいつは姫巫にはならん。即刻立ち去るがいい

女に向かつて誰かが言つ。

怒気を含んだその言の葉は温かな言靈となり、少女の護りとなる。「無駄だよ。もう抗うことさえ赦されていない、わたくしたち青草には、ね」

女は感情の立ち消えた声でなおも言ひ紡ぐ。

もう一つの声はそれを鼻で笑つた。

「赦し、と。誰に赦しを乞うと言つのか。神にならば、もう既に赦されようとも思つてはいない」

轟音がした。

何かが大きな音を立てて崩れていく。

少女は夢と現の狭間で、浮遊していた。

最早、何の音さえ聞こえない。

響くは始まりと終わりを告げる宿運が鬨の声。
歴史に埋もれし真実はそのままに、いざ逝かん。

尊くは愛しい者の足跡。

大地に広がりし陽光はやがて、民を救わん。
巡りめぐつた全てを抱き、よつやく帰巣せん。

残響帰巣。唯一無一の居場所はかの心なり。

常闇が世の全てを支配していた。

暁が昇る気配は未だなく、ひつそりと静まり返つた高天原國の都の中心に座す王宮では、盛大な宴が行われている。

この国では、闇夜は穢れを呼ぶと言い伝えられており、大晦は特に忌むべき日、大闇という異称もある程だつた。

だから、こうして大晦には台王だいおおきみ 高天原國王に与えられるほまれある尊称みこ の住まつ寝殿の更に奥にある樂屋で夜を徹して、雅楽に酒に興じる。

神に仕えし巫みこが歌を口にし、踊りを舞えば、闇は地下にある蛮族ばんぞくたちがはびこる国々へ還ると云われていた。

渡殿の端に備え付けられた燭台が明々と一つの影を照らし出す。

「ヤナギ様、樂屋は相も変わらずとても騒がしいところですね」

付き童の中でも最年長であるサコが溜め息を吐いた。

付き童とは巫に仕える者のことと、主に巫力なき童が就く職である。彼女たちは十を過ぎると御殿内の雑務を担う宮仕えとなり、巫の世話から外れる。来年、サコは十になる。

そんなサコに、巫 ヤナギは花がほころぶように笑いかける。床に着きそうなくらい長く艶やかな髪に飾られた波留^{はる}や瑪瑙^{めのう}、瑠璃^{るり}といった宝石類が一様にさんざめく。

清き川を思わせる流麗な装束は、まだあどけなさの残る顔に似合わない。

「初めてあの宴に出席した時、そなたはすぐ興奮^{うつむ}していたわよね」ヤナギに言われてサコは顔を真つ赤にし、俯いた。

そうこう話しているうちに、一人はいつの間にか巫たちの暮らす離れへ到着していた。

彼女たちはもっぱらこの離れにいるため、自然と緊張の糸が緩む。台王の御殿内でも最も奥まつた位置にある巫たちの離れは大層広い。

庭には多くの木と花が植えられており、四季折々に景色を変える。その中の池には美しい白き魚が悠々と泳いでいる。池に架かる石橋は暗闇でも淡く光を放つており、幻想的な雰囲気をかもし出していた。

砂利^{じやり}は綺麗にならされており、調べられている。庭師は今回、高天原国の縮小図を砂利で描いたようだ。

サコは離れの妻戸^戸を引きながら、思い立つたようにヤナギへ問い合わせた。

「そういえば、ヤナギ様……宴の途中で退席してしまって大丈夫なのですか」

基本的に巫たちは宴の途中で抜け出すことを許されていない。

サコは、そのことでヤナギが怒られることを心配したのだろう。

「大丈夫よ。今回の宴は例年より騒がしかった。巫の一人が抜け出したところで誰も気が付かないわ。それに

ヤナギは唇をぎゅっと引き結び、双眸に力を入れた。

「姫巫様もいらっしゃらなかつたですものね。そのことに御王も皆も注視しておりましたから、ヤナギ様が抜け出したことに気付く者はおりますまい」

サコがヤナギの言葉を引き継いだ。それにヤナギは首肯する。自室に辿り着いたヤナギは、サコに早く寝るように言つて付き童たちが暮らす部屋へ帰した。

疲れているだろうに、ヤナギに白湯を作ると申し出てくれたのだが、サコは大切な人である。体を壊して欲しくはない。

ヤナギが十で、サコが九つ。長い間一人は共に過ごしている。この宮へ来た時から一緒にいるのだとサコは他の付き童たちにいつも自慢しており、ヤナギとサコの仲は相当年季が入っていた。

ヤナギはしずしずと装束を脱いだ。そして、枕元に置いてあつた寝着に袖を通す。

(…………姫巫…………)

高天原国つ神の口より生まれ、神言を授かる巫たちを束ねる者それが姫巫である。

今代の姫巫は齡数百を重ねた偉大なる巫だ。常人ならばよく生きても百で死地へ赴くものだが、姫巫は違う。

姫巫になるとは人の輪廻から外れて仙となること。ヤナギは巫たちの教育係を担う大巫おおみこからそう習つた。

老齢であるにも関わらず、姫巫のその姿、女神の如く麗しく気高い。

ヤナギは四年前はいえつこの宮殿へ召されてから今まで、姫巫を何度か拝謁している。それは催事の時だつたり、先のよつな宴の席だつたり。

豊かな黒い御髪を頭の天辺でまとめており、白い肌に切れ長の目。唇に引かれた真つ赤な紅は鮮血を思い起させた。

一体どれだけの人間をその口で屠ほふってきたのだろうといつもヤナギは思っていた。

“神の口”を持つ者にのみ赦された、真象の力。
しゃじょう

それは口にしたことを具現化する、恐ろしき力だ。

ひとたび姫巫に真名 人の持つ本当の名 を呼ばれれば、傀儡くぐりとなってしまう。

それほど、姫巫の力は強大だった。

ヤナギにとって、姫巫は尊敬の対象ではなく、恐怖の対象である。今もこうして考えるだけで心が凍つつく。

時折、ヤナギのもとへ届く姫巫からの高価な贈り物にさえ、触れることを恐れた。

「ヤナギ様、お帰りなさいませ。お疲れのところ申し訳ありませんが、これから禊みそぎをして頂きます」

物思いに耽つていたヤナギは飛び上がるんばかりに仰天した。

慌てて振り向くと、引き戸のところに数人の采女うねめがいた。

采女とは、姫巫の世話をする優秀な女官たちのことである。ということは間違いない、彼女たちは姫巫からの使いに違いない。

「姫巫様が私に何か御用なのでしょうか」

取り澄まして言えば、采女たちは一様に頷く。一人の年老いた采女がヤナギの方に進み出る。

「あの方はそなたに大事な話があるという。心を無にして姫巫様の邸やしきまでおいで。もちろん、一人で来るんだよ。禊を済ませ、陽炎かぎるいがちらつき始めたら梶子斎森くちなしさいのもりに入りなさい。その刻限のみ、禁足地である神杷山しんぱやまの入り口を開く。…………このことを付き童に話してはいけないよ。そんなことをすれば、姫巫様の呪じゆが降り注ぐだろ」
不穏なことを言い残し、采女たちは搔き消えた。幻影だったのだ。ヤナギはしばし呆然としていたが、頭を左右に振つて意識を覚醒させた。

立ち竦んでいる時間はない。早く禊を済ませ、姫巫のいる神杷山の社殿しゃでんへ行かなければいけない。

姫巫の命令は、台王の命令の次に優先すべき事柄である。ヤナギは震える手足を無理矢理動かして部屋を出た。

離れと梶子斎森のちょうど境にある鏡月池は古くより、姫巫に会う際に禊を行うのに使われる。

鏡月池の水はぬるく、この寒空の下で薄く湯氣立っていた。ヤナギは息を殺して池に足を入れた。つんとした空気が辺りに充満している。

ゆつくりと肩まで浸かり、ほうと息を吐いた。

白い装束を身に着けたまま行う禊は、何度もやつても慣れない。ヤナギは目を瞑った。風花の如く曇りなき肌と他の巫たちに讃めたたえられる肌が湯氣によつて朱まるのを感じる。

鏡月池を囲うように張り巡らされた橘の木が明け方の風に揺れる。

「大した用じやないわ」

ぼそりと願いを言の葉にし、空へ流した。姫巫ほどの巫力はなくとも、ヤナギだって巫である。言靈にそれなりの呪いの力を乗せることは可能だ。

ヤナギは掌を空へとかざした。

長い髪は水面に漂い、ゆらゆらと扇状に広がる。どこから迷いこんだか、薄墨色の花弁が水面を滑つた。

約束の刻限は待つてくれない。

大気の流れが止まつてしまえば姫巫のもとへ行かなくて済むのに、と無理なことを思いながら、ヤナギは禊を終える。

清めた体に木綿もがんの衣をまとい、腰のところを浅葱あさぎの帯で縛る。

そうして慣わしに従い裸足のまま、梶子斎森へ足を踏み入れた。途端に尋常ならぬ凍て付いた空気が楊を取り巻いた。梶子斎森は

神の宿る神域。静まり返ったそこは、人の身にはいささか堪える。霧深い森の中、迷わずにいたのは一重に道を標す鬼火がヤナギを導いていたからだつた。

針葉樹の生い茂る森には至るところに墓石がある。

高天原国に従わなかつた多くのまつろわぬ人々が、ここで凄惨な最期を遂げたのだと巫の一人が教えてくれたのを思い出す。

ヤナギはちょうど手近に咲いていた彼岸花を手折つた。そして、墓石が密集している場所に供えた。

「…………どうか、黄泉路は迷わぬよ。この赤き彼岸花が導となりましよう」

ここに埋葬された人々は、誰にも弔つてもらえなかつたろう。その悲しみが、苦しみが、彼らを縛り、その魂を現世と常世を惑わせる。惑う内に、ちはやぶる神となつてしまふ者さえいる。

「死した後さえも苦しまなくてよいのです。後は現世に生きる者達に託して、しばし常世で遊山されよ」

淡い光が螢のようにヤナギの周りを舞つた。それはやがて天へと向かい、消えて行つた。

ヤナギはしばらくその様子を見守つていたが、本来の目的を思い出して慌てて鬼火を追いかける。

鬼火は一定の速度を保つてヤナギを導いた。

もう半刻は歩いただろう。鬼火は巨大な楠の前で止まつた。そこが姫巫のもとへ続く道なのだ。

ヤナギは意を決して、その大木の樹皮に触れる。

すると、辺りは一変に様変わりした。ヤナギは姫巫のいる小高い神の山 神杷山しんばやまの裾野に辿り着いた。

ここから先は一本道のようで、役割を終えた鬼火は大気に融け出す。

神杷山には四季など関係なく、様々な花が咲き誇つている。常世さながらの異質さがあった。

ここに姫巫は住んでいる。

木の枝や小石によつてたくさんの傷を負つた足の裏が熱い。だが、ヤナギは気丈に山の頂上を目指した。

朝陽が完全に昇る頃、ヤナギは頂上に到着した。

大晦が明けて新しい年を迎えるこの瞬間、世界は美しく輝く。深い闇の後に見る光ほど、眩しいものはない。

目の前に広がる景色は想像を絶する。朝露に煌めく橋の木、沙羅双樹の花、池に架かる朱塗りの橋、池に泳ぐ黄金の魚。

社殿は豪奢な造りを以つてヤナギを迎えた。

新年をここで迎えることになろうとは、予想外だった。常であつたら離れて他の巫たちに新年の挨拶をしていることだらう。

「遅参が過ぎます」

苛立ちのこもつた声と共に、幾人かの采女が社殿内より現れた。皆、王宮の者でも一部しか着られない質の良い仕立ての装束を着ている。布地は絹に違いない。

「たいへん申し訳ありません」

ヤナギは素直に頭を下げた。

「まあ、いい。ほら、後に続きなさい。姫巫様は首を長くしてお待ちです」

采女たちは身を翻して社殿の中へ入つて行く。慌ててヤナギも後に続いた。

長い外廊を歩き、渡殿を行く。

王宮と同じような構造をしているため、ヤナギは思つていたよりも鼓動を落ち着かせることが出来た。

最奥だと思われる觀音開きの扉の前で、年老いた采女は振り向いた。

その形相が尋常のものではなかつたため、ヤナギはたじろぐ。

「いいね、小さき巫。これから見るものを口外してはいけないよ。このことは台王さえも知らないんだ」

「はい」

額く以外にヤナギに出来る選択肢はなかつた。

それを確認し、采女たちは静かに扉を開け放つた。

部屋の中央には神事を行うためにある、ゆずりはと橘の葉で囲われた祭壇がある。そして、奥まつた箇所に寝台があつた。普通の部屋と取り立てて代わり映えしない。

唯一違つところを挙げるとすれば、住んでいる者が高貴な人というだけだ。

「ようやく来てくれた。わたくしはそなたを待つていた」

黎明たる声が部屋に響く。采女たちは叩頭した。

ヤナギは目を丸くし、寝台に氣だるげに横たわる人物を見つめていた。

思わず口を両手で覆う。

「ヤナギ…………わたくしを初めて見た時、そなたは恐怖したね。宿運が鬨の声がそなたに響いたのだろう」

姫巫は上体を少しだけ起こして手招きした。

しかし、ヤナギの足は根が生えたようにその場から動かない。

姫巫は初めて会った時と同じく微笑んだ。

「姫巫様」

声が震え、上手く喋れない。

「その…………お顔は…………」

姫巫の顔は、醜い老婆のそれだつた。

半年前に催事の折、遠目より見たはずの豊かな黒髪も白髪に変わり果て、真珠の肌も茶色く萎びた色に変化している。

ヤナギの青ざめた表情を眺め、姫巫は神妙な面持ちで言った。

「終焉は近付いている。もうわたくしは長く持たない」

「そのような戯言。姫巫様はこの数百年、人の齢を超えて高天原国が懐刀として君臨し続けてこられたお方。貴女様がこの世を去るなど、誰が信じましようか」

「そう、ずっと長い間生きてきた。姫巫になつた瞬間より成長が止まり、わたくしは神の贊となつた。だけね、今回ばかりはついに代替えの刻が来たようだ。半年前より体が急速に年を取つて、今まで

はこの様よ」

姫巫は自嘲的に笑い、乾いた自分の手を擦る。

「まだ戦は終わっていないといつのこと」

名残惜しそうに近く姫巫に対してヤナギは初めて、恐怖を感じず相対していた。

「姫巫様、希望は常に己の身の内に宿っていると聞きます。それを見出すか否かは本人の心持ち次第。お気持ちを強く持てば、病など」

「残念ながら、神意に逆らえる者などいない。わたくしの御代はここまで」

きつぱり言い切つて、姫巫は強い眼差しをヤナギに送る。
「これからはそなたの時代。だから、ここに呼んだのだよ。全てそなたに授けてからわたくしは黄泉路を逝く」

ヤナギの顔が強張った。

再び恐怖が頭をもたげる。じつと頭を垂れていた采女たちは姫巫が指一本動かした瞬間、ヤナギを取り押されて姫巫の目の前へ引きずつた。

「いやつ、何をするの。私はただの巫姫巫などにはなれない、そのような力もありません！」

姫巫はヤナギを、静かな瞳で見据えた。

「

ヤナギの動きが止まる。大量の冷や汗が身体中を伝づ。

姫巫はヤナギの真名を口にした。ヤナギと肉親以外、知る者はいなればずのその真名を口にしたのだ。

彼女は真名を以つてヤナギを縛つた。
にんまりと姫巫は口角を上げた。

「逃がしはしないよ。そなたが生まれた時よりこうなることは決まつていた。新たな高天原国つ神の贊となる少女よ、その大きな眼でとくと見るがいい。古から今日まで受け継がれてきた歴史の全てと姫巫の全てを」

姫巫は匂の両腕にしていた勾玉を素早く外し、それをヤナギの両腕へ滑らせた。

部屋中にヤナギの絶叫が轟いた。

姫巫は昏倒したヤナギの髪を梳いた。

薄墨の花弁が一枚、その髪に絡まつてゐるのを見た刹那、姫巫の形相が変わる。

「これは………… もて、何が紛れ込んだか」

地下には、高天原国たかまのはらじゆくと同等か、それ以上の勢力を誇る国があつた。名を黄昏国たそがれじゆく。

猛威を奮う王に圧されて、民衆は日々死と隣り合わせで暮らして、いたと高天原国の書物には記されている。

高天原国と黄昏国は何度も何度もぶつかった。

地上と地下を結ぶ蜘蛛の廻廊かいろうを登り降り、激戦は繰り返された。

その戦を下火にさせたのが今代姫巫ひめみこだつた。

今代姫巫が黄昏国と戦を始めてから数百年余りが経過した今、黄昏国は傾国となつてゐる。最早、いつ何時潰れてもおかしくないだろひ。

また、姫巫は四年前に高天原国領土にて暮らしていた黄昏国の残党を散り散りにもした。国を愛す、姫巫の心が大業を成し得たのだ。

そんな采女うねめたちの話を聞きながら、ヤナギは凡庸ぼんよな表情をして采女たちにされるがまま、姫巫の証である七色の装束を身にまとつた。化粧を施されている間も黙りこくり、ぼんやりと窓の外を見つめていた。

冬晴れは大層空気が澄む。このような日に儀が執り行われるのは幸先がいいと采女の一人は満足げに頷いた。

先日、姫巫は死地に旅立つた。

姫巫の座は亡くなつた姫巫の望んだとおりヤナギへ譲られることになつた。

滞りなく姫巫代替わりの儀は進む。あとは神の御印を身に刻むだけだ。

一步、一步、緩やかに祭壇に近付く。

この日のために王宮の謁見の間に建てられた祭壇には、巫たちの中でも最年長である大巫^{おおみこ}が緊張した顔で待ち構えている。手には刻印を標すために、高温に熱された銅印を持っていた。

「これより、神の御印をそなたに刻みます」

大巫は気高くもそう言って、ヤナギの顎を上向かせる。

ヤナギは全てを諦めた瞳を伏せて舌を出す。

まだ触れてもらいないのに舌が燃えるように熱い。

肉を溶かす音と共に、刻印はヤナギの舌に刻まれた。

儀に集まつた者達はまだ十一になつたばかりの幼い少女があまりの痛みに舌を噛み切つてしまつのではないかと心配していたが、その憂いは無用だつた。

ヤナギは無言のまま、青い空を見つめていた。

「ヤナギ様…………つ。大巫様、もうその銅印をヤナギ様より外して下さい！ こんなあんまりです。まるで罪人のようではないですか」

サコの悲しい叫びが上がる。

サコが放つた“罪人”という言葉に幾人かはぎよつと目を剥いた。「そこの無礼な付き童を捕らえよ！ 反省の色が出るまで苦牢にでも突つ込んでおけ！」

台玉付きの護衛官が顔を真つ赤にさせて怒鳴り散らした。武人たちはサコを取り囮み、捕らえる。

(サコ)

声にならない言葉をヤナギは発した。

舌が引き千切られるように壮絶な痛みが思考も何もかも全て麻痺させる。

三日三晩 いや、それ以上、ヤナギは悶え苦しんだ。
舌は喉を圧迫する程に肥大し、高熱が続いた。死んでしまうのだ

ろうかと思つた最中、脳裏に過ぎたのはサコの悲しむ顔だつた。自分が死んで悲しむ者がいる。それだけが、ヤナギをこの世に留まらせた。

「よくぞ我慢しました。先代の目は確かにだつたようです」「あくる日、薄く目を開いたヤナギに采女がそう声を掛けってきた。ヤナギは重い体を起こして彼女に訊いた。

「…………サコは？」

「ああ、あの儀を穢した付き童ですか」

「無礼なことを言わないで」

怒氣を発したヤナギに怖氣づいたのか、采女はすぐに呼んで参りますと言つて退席した。

ヤナギは未だ痛む舌と心によつやく涙を零す。掛け布団に顔を埋めて声を押し殺し、泣いた。

真名縛りを受けた証拠にヤナギの爪の色は桜色から血色に変色した。

縛つた者の僕しもべとしての印。

先代が死んだ今、それを消す方法を知る者はいない。先代の遺した真名を縛る呪が消える気配はなかつた。その身をていして行つた呪だつたのだ。

それによつて、姫巫の座を降りることを許されない状況に追い込まれていた。逃げようとしても、先代の遺した言靈がそれを阻止する。

ヤナギが死ぬまでそれは変わらない。真名の持つ力は大きかつた。

「もつと、力ある巫が姫巫になるべきよ」

夢の狭間で幾人もの人が枕元で囁き合つのを聴いた。

ヤナギには並の巫力しかない。取り柄もない。

どうして、そのような者が姫巫に選ばれたのだと怨妬えんとうが耳にこびりついて離れない。それに加えて、姫巫の儀によつて得た蒼き刻印と古の記憶はヤナギをさいなむ。

「ヤナギ様つ

はりのある呼びかけが、がらんぱりの部屋に響いた。ヤナギは涙に濡れた双眸を持ち上げる。

田の前には、ヤナギと同じように涙で顔をくしゃくしゃにしたサコが佇んでいた。

ヤナギは思わず彼女に抱き付いた。一人は何も言わずにただ抱き合っていた。

少しして、落ち着きを取り戻したヤナギはサコのため、たかはい高杯に白湯を注いだ。

「どうぞ遠慮はしないで。長い間、岩牢に閉じ込められていたのでしょう。この白湯でも啜つて元気を出して」

サコは沈んだ顔をしていた。

「わたし…………ヤナギ様の付き童になつて良かつた」

しみじみと、彼女は言葉を紡いだ。

「姫巫になられたヤナギ様にはもう、仕えられないけれど、サコは転生しようがあなたのことを忘れません」

泣き笑いしたサコは、とても凜としている。ヤナギは暗い気持ちになつた。

サコのことが心配過ぎて忘れていたのだが、姫巫には付き童はつかない。

代わりに、多くの経験を積んだ采女が付くのだ。

「けれど、そなたは今年、十になる。采女になれる年齢でしょう。私はそなたを姫巫の采女に推薦するわ。そうしたら」

「いいえ」

即座にサコは答えた。

「わたしは、采女にはなりません。なれないのです」

ヤナギは不審げにサコを見つめる。

付き童を経験した娘は、采女となる資格を有す。たしかに、巫力がある者の方が采女として採用されやすいが、推薦さえあれば、身分に関係なく華々しい姫巫仕えとしての役目が『えらぶ』ことも多々あつた。

サコは采女になりたいとずつと口にしていたし、その分、作法や樂などの勉学にも励んでいた。

巫たちの中でもサコの優秀ぶりは度々話題に上っており、良い采女になるだらうと誰もが賛辞した。

ヤナギにとつて、佐子は姉妹同然。この宮殿の中で最も近しい存在である。

「私は…………サコがいてくれないと寂しい」

素直な感情を吐露したヤナギに対し、サコは曖昧に微笑んだ。「もうそろそろ、ヤナギ様が大人となる時期なんですよ。その時、わたしがいては妨げになる。先代様のように、誰にも頼らない、立派な姫巫となつて下さいますよう。サコは貴女のことをいつまでもいつまでも、見守つておりますから。長居してしまい、申し訳ございません。」これでサコはお暇致します

「待つて」

ヤナギは思わずサコに追い縋つた。

小袖を幼子のように掴むヤナギを横田見、サコはそれを振り払う。大層、冷たい態度であった。

「…………もう、ヤナギ様のお傍にいるのは疲れました」

小袖を掴んでいた手の力が抜ける。サコは踵を返した。弱々しく伸ばされた手をそのままに、サコは部屋を後にした。

入り口付近に控えていた采女が戸を閉める直前に、サコは何か助けを乞うかのような眼差しでヤナギを振り返った。

しかし、サコに投げ付けられた言葉の衝撃が酷く、ヤナギはサコの眼差しに潜む真意に気付くことが出来なかつた。

姫巫となつたヤナギのいる神杷山を下り終わり、くちなしきこのもり梶子斎森へ差しかかつたサコは、無言だった。

サコは空を仰いだ。

純粹な青は空一面に広がっており、それを背の高い木々の緑が彩る。風のざわめきは生命を育む匂いを感じさせ、鳥のさえずりは傷付いた人を癒す力となる。

呪詛の声が満ち満ちるこの森は、どこか優しくサコを包む。

帰りの案内を買って出た若き采女をどうにか追い返し、サコは梶子斎森をあてどなく歩いていた。

ぼうと数多の光が彼女を取り囲む。未だ現世から常世へ続く道で惑っている魂だろうとサコは思った。

「ヤナギ様なら、あなたたちを導いてくれるから、もう少し待つていじ。の方は平穏を連れて来てくれる。殺し合いを好んだ先代とは違う」

自分に言い聞かせるかの如く、サコは光に語りかける。

「まほろばにまつろわなかつた者たちよ、あなた達の無念を今代の姫巫は汲み取つて下さる。きっと

光たちが一段と輝きを増した。

高天原国を呪うその赤き光は落ち葉が乱れる湿っぽい地面の中へともぐつて行つた。

ふと、風のざわめきによつてくわむらの向こう側に滝が見え隠れした。

サコはゆっくりとそちらへ足を踏み入れる。

そこに広がる景色は、浮世離れした蓮が浮かぶ泉だった。対岸にあるたいそう古い洞窟を隠すかのように滝が流れている。

「…………これが、師範の言つていた常闇洞泉…………。ただ虚ろな世界が泉に映るだけ。迷いや、恐怖、憎しみ、怒り」

そう言つてサコはその泉に近寄る。水面に映つていたのは、醜く歪んだ己の顔だった。

堪えていたものが溢れ出す。

サコは、わつと顔を両手にうずめて泣いた。

「どうして、どうして、ヤナギ様が姫巫にならなければならないの」

常闇洞泉は静かに彼女を見守つている。

「でも、この方がいい。これでいいの。ヤナギ様は何も知らず、笑つていて欲しいから。そうよね、師範」
サコは遠くにいる師範に向かって答えを求める。
返事はなかった。少女の切なる願いはただ一つ。ヤナギの幸せだった。

その日、宮殿は何やら騒がしかつた。

舌の痛みもだいぶ引き、台王へ元気になつた顔を見せるために神
杷山から下りて、王宮を訪れていたヤナギは異様な熱気に押されて
顔をしかめる。

（催事でもあるのだろうか）

しかし、催し物などがある際は必ず姫巫は参加しなければならな
い決まりだ。

そのような催し物があるとは采女の誰にも聞き及んでいないため、
その線は消えた。

外廊にいても、堀の外のざわめきが聞こえてくる。
ちらちらと赤い旗が見え隠れする。

「ああ、そう言えば今日ですね。何たること。姫巫様をここへお連れ
するのではなかつた」

采女は顔を扇で隠した。

庭を幾人かの武官が駆けて行く。

ヤナギの目にする者は誰しも興味津々といった表情をしている。

「何があるの？」

ヤナギの質問に対し、一人の若き采女は驚いたように目を丸く
した。

「姫巫様 今日は付き童であるサコの斬首日でござりますよ
もしや知らなかつたのでござりますか、と嘲笑を交えて続けるつ
ら若き采女を他の采女たちが扇で叩いた。

「何たる侮辱、サコより授かつた最期の頼み……姫巫様には斬首の旨は内密にという頼みを反故し、あまつさえ姫巫様を嘲るか」

「そちに人の子の血は通つてないようですね！」

「お前など、宮仕えから外すよう台王にお頼み申し上げてくれるわ！」

他の采女になじられながらも、うら若き采女は湖畔のように静かな眼差しでヤナギを見つめる。

「貴女様は、一番近きサコの心の声も聞こえない愚か者。あの時、どう言つた気持ちでサコが姫巫様に暴言を吐いたのか。退室する時どのような気持ちで貴女様を振り返つたのか。入り口で控えていたわたくしにはわかつたのに……」

鈍器で殴られたような痛みが走る。

次の瞬間、ヤナギは外廊を一目散に走り出した。

手すりを飛び越え、西門へ急ぐ。処刑が行われるのは、決まって王宮の西門前だ。

忌み部屋という名称で呼ばれる拷問部屋がある西門前は、人でごつた返していた。

御殿中、市井中から人が見物に来ているのだろう。

「通して、通して！ お願い、やめて！ 台王様、お願いします。サコを殺さないでっ」

悲鳴に近い声を上げながらヤナギは人ごみを掻き分けて処刑台へ進む。

姫巫にのみ赦される真象の力を使おうとしたが、心が荒立つているため上手くいかない。

自分の無力さが憎かつた。

「お嬢ちゃん、もう手遅れだよ」

やつと最前列に到達した時、しなびた大きな手がヤナギの両肩を抱いた。

老人は痛々しい面持ちで頷きかけるが、とうのヤナギはそれどころではなかつた。

処刑人の持つ剣がサコに振り下ろされようとしている。声が出なかつた。

ただ、手を伸ばした。全てがゆっくりと動く。

サコは、驚愕した顔でヤナギの方を見た。容赦なく剣はサコへ舞い降りる。

最期の瞬間、サコは満たされた安らかな笑顔を見せた。

大量の血液が宙に飛散する。首がこうりと鞠のように落ちた。

自分にかかつたその血を拭い取りもせず、制止をかける老人の声も聞かず、前へ躍り出る。

処刑人は眉をひそめた。処刑人たちが咎める声も、ざわめく見物人たちの声も、ヤナギの耳には入つて来ない。手を叩く音がした。

ヤナギは射殺さんばかりの迫力で拍手をした者を睨み据える。「姫巫や、そなたがこの場に来るのはわしも予想外であつた」心底驚いていると言つた声音で台王は口を開いた。

「だが、その付き童は、そなたが姫巫になることに頑なに反対し、あまつさえわしを愚弄したのだ。万死に値する。その者を赦せば、反逆者は次々に現れるだろ?」「恨みのこもつた目で躊躇いなく台王を睨みつけるヤナギには、鬼気迫る迫力があつた。

さも面白げに含み笑い、台王は豊かな己の髪を撫でた。

「まあ、良い。処刑は滞りなく済んだ」

その一言で、この処刑は終わりを告げた。皆、興醒めした様子で散り散りと去つて行く。

処刑人は非情にも、サコの長い髪を乱雑に掴み上げて桶の中に入

れる。

（あれは、サコであつてサコでない。ただの抜け殻）

必死に、ヤナギは自分に言い聞かせた。

ともすれば、処刑人に掴みかかつてその骸を抱きしめたかつたが、それは愚かなことでしかない。

縊り、泣いて死人が息を吹き返すといつならば、迷わずサコの亡骸を抱きしめよう。

しかし、骸を抱いても体温は戻らない。

（梶子斎森に……サコも打ち捨てられるのだろうか）

高天原国に逆らつた裏切り者として。

「……ごめんなさい」

氣付けなかつた。

つら若き采女が見たという助けを求めるサコに、ヤナギは全く気付けなかつた。

ヤナギは嗚咽を洩らし、声の限り泣き叫んだ。

悲痛な叫びは真つ赤な旗と真つ赤な処刑台、そして風だけが聞いていた。

静寂が包み込む靈峰^{れいほう}、神杷山の頂に幽玄な社殿は鎮座している。
そこからは都の様子が一望出来、東門、西門、南門に囲まれた王宮もくつきりと見える。

王宮の北側に座すこの場所は都内でも有数の禁足地であるため、入れるのはその山の主神か、姫巫が赦した者だけである。

朝霧に紛れて全てはおぼろげとなり、陽光が雲海^{うんかい}に射す。風が雲を動かし、まるで波が寄せるかの如く感じさせる。

「サコは、ヤナギ様を姫巫とするのは酷だと台王に進言しました。それが台王の逆鱗に触れないわけがない。即座に処刑が決まりましたよ。ええ、わたくしはその場におりましたから、よく覚えており

ます。サコはこう言いました。『せめて、お元気になつたヤナギ様の姿を一目見させて下さい。そつしたら、安らかに黄泉路も連れます』と

サコがこの世を去つて早数ヶ月が経とつとしていた。その間、ヤナギは社殿より一步も外に出なかつた。

季節は刻々と過ぎ去り、穂波が大地を黃金色に満たす季節が巡つて来ていた。ヤナギは、神聖で美しく、しかし温かみに欠ける雲海から視線を逸らさない。

ヤナギの後ろに立つ人物は言葉を続けた。

「何故、都より追放される予定であつたわたくしを助けた。それだけの行動と発言をした、このわたくしを」

「そなたのおかげでサコの死に目に間に合つたから」

よつやく、ヤナギは後ろを振り返つた。

歯を食い縛り、うら若き采女は拳を震わせている。

「姫巫などに、礼は言わない」

「いいわ。礼を言わなければならぬのはこちらだもの。……そなた、いくつ？　名は？」

「チズコ。今年九つでござります」

ヤナギは目を丸くした。九つの少女でも采女となれるなど、聞いたことがない。

少女の横顔には深い悲しみの色が差していた。

「……いい名」

「真名はお教え致しません。姫巫に真名を呼ばれたら縛られるのでしそう？」

皮肉げにチズコは片端を上げる。

ヤナギは先代の遺した神言を思い出し、気分が沈んだ。自分は、あのよつな形で人を縛りたくない。

「……ねえチズコ、戦はどうすれば終わると思つ？」

チズコの皮肉には返事をせず、ヤナギは出し抜けに言葉を口にした。

彼女は意味がわからないと言いたげな表情でヤナギの顔を覗き込んだ。

「わたくしにはわかり兼ねますが」

「戦は、武力でしか終わらせられないものなの？」

「姫巫様、一体どうなされたのですか。急にそのようなことを
「わからない、もう、わからない」

ヤナギは静かに意識の海へと沈んで行く。

サコはもうこの世にいない。

唯一ヤナギの心を解き放つことができた、優しい娘。
その少女の死が、ヤナギの心を殺した。

ヤナギは、心を凍り付かせる道を選んだ。

誰も傷付かない、自分も傷付かない、ただ平らな世界。

高天原国の皆が忌み嫌う常闇へと落ちて行く。

少女は、すいと瞳を開いた。視界一面に薄墨色の花弁が舞つてい
る。碧い空にそれはよく映えた。

「…………」

何も言わずに頬を濡らす涙を拭う。

少女は秋風によつてかじかんだ両手を双眸にあてがつた。過去の
鈍き記憶が、彼女の最奥から溢れ出てくる。

金に色付く稻穂の波の中、少女はひと時の休息を取つていた。遮
るもののが何もないこの地は空高く飛ぶ鳥たちの鳴き声と、風の匂い、
稻穂が揺れる音しかしない。

戦も、天災も、飢餓もないよつな錯覚をもたらす、この豊穣の大
地。

澄んだ風を胸いっぱいに吸い込み、背を預けていた穂波の中央に
ただ一本佇んでいる落葉樹に向き直る。

そして、木に手を触れて額をつけた。

微かな水の音は、その木が生きている証拠だ。

少女は瞑目し、薄く笑んだ。

「そなたも私と同じ。ただ独り、皆のことを見守る役目を担いしモ
ノ」

その大人びた言い方は、どう見ても十五の少女のものではなかつ
た。

「姫巫様つ」

「姫巫」

「どこにおられるのですかつ」

遠く、風が運んできた幾つもの声は、どれも“姫巫”を案じる声

だつた。

少女はゆつくりと黒曜^{くろ}色の瞳を開いて木から体を離すと、立ち上がる。

目には幾千もの願いを宿し、風にひるがえるぬばたまの長き髪には底知れぬ決意を秘めて、彼女は唇を動かした。

「姫巫ならばここに、ここにいるつ

高天の原国が懐刀と謳われる戦神 姫巫は、声高に叫んだ。

しばらくすると、一人の少年が駆けて來た。

海松^{みの}色をした髪を頭の天辺で一つにまとめ上げている彼は、涼しげな表情をしている少女と対照的に肩で息をしている。

少女はそれに驚いて、片眉を上げる。

「ムロ、そんなに急がなくても私は逃げない」

ムロは、苦しげな息と共に言葉を発した。

「……違います、そのような……心配ではありません。ヤナギ様の御身に何かあつたらと……」

少女 ヤナギは戸惑つように目を丸くし、視線を伏せる。

彼女は小さな声で「ごめんなさい」と呟いた。

ムロは屈託なく笑い、大丈夫ですと返す。まだ幼いながら、端整な顔立ちをしたムロは深呼吸をし、息を整える。

彼もヤナギと同じように、薄い生地の着物の上から簡素な布製の鎧とゆがけを身に着けている。その小さな体躯には不釣合いな一本の太刀を腰帯に、背中には長物を背負っていた。

長い前髪を払い、ムロはヤナギの両手首を掴んだ。芥子^{けし}の実色をした切れ長の瞳がヤナギを映し出す。

「ヤナギ様、休息を取られたいのならば、皆に一声かけて下さい。あなた様が高天の原国のために尽力しているのは我々も存じ上げております故」

高天原國の王 台王が「あな、瑠璃や瑪瑙など之の寶石も靈むほどの美しさ」と賞賛したヤナギの顔が歪む。

一点の曇りなき純粹さは、時として毒となる。

ヤナギはムロの手を振り払った。

「放つておいて」

拒絶の言葉を受けて、ムロは傷付いた表情を象つた。

ヤナギは緩く首を振つた。

「姫巫になど、触らぬ方がいい。この身には幾重もの憎悪と死しか詰まつていないのでだから」

そう言つと、ヤナギは皆の待つ陣へ駆け出した。慌ててムロも後を追う。

稻穂は一人の姿が見えなくなつても、秋風に吹かれて揺れていた。

ヤナギとムロが陣へ帰ると、既に軍議は始まつていた。

國に忠誠を示した兵の中でも、選りすぐりの戦士たちが顔をつき合わせて地図を見ている様は、何とも異様であつた。

「皆の者、ヤナギ様がお戻りになられたぞ」

ムロの声に皆が振り返り、安堵の顔を覗かせた。

「ああ、姫巫様。お帰りなさいませ」

「戦局は変わらず?」

ヤナギの問い掛けに雄々しい髭を生やした大男は神妙な顔をして頷く。

「はい、高天原國にまつるわぬ者たちはどうやら、今回の蜂起を綿密に計画していた様子でございまして……。森の様々なところに呪術が施されております。迂闊に動けば、森の中で惑うことにならぬほど」

ヤナギは地図を眺めた。

ヤナギたちは、高天原國にまつるわぬ者たちの蜂起を平定せよと

いう台王の命によつて、都から西へ下つたところにある第一の都、
沢良宜に來ていた。

敵は何も地下の國々だけにいるわけではない。この國の中に多くいる。

沢良宜の最南端の邑に敵は潜伏していた。

その邑に行くためには神森といつ靈験高き森を抜けなければならぬのだが、森に精通しているまつろわぬ者たちはそこいら中に呪いを施し、ヤナギたちの行く手を阻んでいた。

「この森を抜けることさえ出来れば、平定など造作ないものを」

苛立ちを募らせた武官の一人が歯軋りした。

それは誰もが胸中で思つてゐることであった。

「…………わかつた」

ヤナギはこうなることを予期していたような眼差しで軍議に参加している者たちの相貌を見回した。

彼らは固唾を呑んで彼女の言を待つてゐる。

「神森を焼く」

「お言葉ですが、ヤナギ様」

明朗な声がヤナギを制す。

ムロは厳しい顔をして言つた。

「神森は小さき神々の宿りし森です。その森を焼くのは……」

「若造が尻込みか。姫巫様のお力があれば、神々も畏るに足らぬ」

「違う！ 決して臆病風に吹かれたわけでは」

「これだから、まだ十一のムロを軍に入れるのは反対だつたんだ。腕が立つとは言つてもまだ討伐軍の指揮官としては甘いと見える。安心しろ、姫巫様の出向かれた戦で負け戦など一つもない矢継ぎ張りに勇猛果敢な兵共は年少のムロを荼化す。

ムロは怒りに顔を紅潮させて強く地面を踏みしめた。

「ヤナギ様の身を案じる者は誰もいないのか！ 神を殺めれば、殺めし者に呪いがかかる。それをあなた方は……」

「ムロ」

ムロを咎めたのは、ヤナギだった。

いたつて冷静な目でムロを見やる。

「軍に入りたてのそなたは知らないで当然のこと。大丈夫、私は神殺しの業などで命を落としたりしない。姫巫は高天原国つ神の口より生まれし者」

「え……？」

「“神の口”を 真象の力を有する者。私が巫力を込めて発した言葉には神が宿り、それは現実のものとなる。地方の小さき神がい

くら呪おうと、この身に張つた結界が弾き返す」

静謐なるヤナギの瞳は真撃な色合いを以つてムロの反論を押し留めた。

しかし、軍議が終わる直前まで彼はヤナギの身を案じていた。

それは若さ故の素直さか、それとも無知なのか、誰も推し量れる者はいない。

捉え方一つで物事は形を変えるものだ。

「では、これにて軍議は終わる。そなたの部下にもよべ伝えておけ」

鶴の一聲。

ヤナギが軍扇を目前に広がる森へと向ける。

銀の鳥羽で作られた軍扇は力強く行く末を指し示す。

「森が燃上したが合図。混戦は覚悟の上、私たちは一刻も早く戦果を上げて凱旋せねばならない。迷いは捨て、前へ進め」

兵たちは一齊に声を上げる。

それを見てヤナギは淡く笑み、踵を返した。

艶のある黒髪は空高くに昇りつめた陽光を浴びていつやつ輝きを増す。

肌寒い風が一陣吹き抜けていく。

崖の上より見る景色は、とても美しい。

海の漣は光を反射して虹色に煌めき、すぐ傍にある神が遊ぶ森は深き縁が密集しており何とも形容しがたい。

古より伝わる多くの伝承が詰まっているだろうう神森をじつと凝視していたヤナギだが、やがて溜め息を吐き、空を仰いだ。

「このようなどころに居られたのですか」

後ろに立つ者の気配に、ヤナギは柔らかく笑んだ。

「そなたは随分と私に懐いたね、ムロ」

ヤナギの横にムロは並んだ。

同じように眼下に広がる大地を眺め、彼は目を細めた。

「……ヤナギ様。戦の焰ひのたまは、いつになれば鎮火するのでしょうか」

ムロの問いに、ヤナギは口を噤んだ。

途方もない問いかけ。

だが、同時に誰もが尋ねたい問いかけでもある。

ヤナギはゆつくりと吟味するように顎を引き、彼女なりの答えを提示する。

「姫巫を継ぐ者がこの世から消えた時」

ムロがゆつくりとヤナギの方を見る。

ヤナギの顔は西日によつて隠されている。

「己の生に悲觀しているわけではないけれど、姫巫のよだな戦女神がいる限り、戦は続く。ねえ、ムロ。人は欲するのよ、全てを……

神をも」

ムロは言葉を搜して視線を彷徨わせていたが、やがて肩を落として俯き呟いた。

「ムロはまだ、『姫巫』というのが、どうこうお役目を担つているのか半分も知りません」

「戦を勝利に導くため……高天原国がために存在し、巫たちを統括する者。……言つより生むが易し。今から私がどうやって敵を滅ぼすか、見ていいるといい」

ヤナギは憂いを含んだ顔を、すつと変化させる。

何も感じない、無の状態へと自らを持つていき、玲瓏なる声を響かせた。

『神森の西端にある一本の木に火がともる』

彼女が口にした途端、紅紅とした炎が森の西側から上がった。

『それは秋の乾いた風に乗つて次第に他の木へ、他の木へと燃え移り、煉獄の焰となり威力を増して邑を取り囲む』

『そして、我が軍の行く手にありし炎は神風によつて左右に拓け、軍を傷付けぬ』

ムロが生睡を嚙下する音がした。

四方八方に潜んでいたのだろう伏兵たちの大音声はここまで聞こえてくる。

彼らが進む道は、ヤナギが口にしたとおり炎が道を開ける。

ヤナギは大きく袖を広げる火を確認すると、唇を弓形に曲げた。

「さあ、ムロ。戦の始まりだ」

地獄絵図を描く戦場は、ヤナギの目を潰しそうな勢いで目前に迫つた。

(これは、一体)

動搖して周囲を見回すが、誰しも我を忘れて逃げ回つている。狂氣を孕んだ目で人を斬る兵たちは、殺戮人形としか見えなかつた。

ここにいっては殺されてしまつと思つたヤナギは、やつとの思いで走り出した。

怒号が止む気配はない。

木々や家屋は炎上し、人々は逃げ回る。

しかし、背の低い叢の影に身を潜めたヤナギはよつやく場の異常さに気が付いた。

兵たちは逃げ惑う人々をなぶり殺している。しかし、兵はヤナギを殺そうとしない。

昔、大巫から教わったことがあった。
強い巫力を持つ者は、現実のものと取り違えるくらいに鮮明な夢を見ると。

「……これは、夢……？」

口に出した途端、風景は薄く揺らいだ。

次に目にした光景は、先代の姿だった。

声高に軍兵に指示を出すその様は、男顔負けの存在感を放つている。

美貌の姫巫は、妖艶に微笑み、敵の兵に軍扇を向ける。

先代が何事かを呟いたと思った矢先、雷が空から降り注いだ。敵の悲鳴が木靈す。

畳みかけるように地面も裂け、敵の軍兵を呑み込んだ。

これが、世の誰もが恐怖する先代姫巫の力なのだと、ヤナギは改めて実感し、腕を抱えて身震いした。

姫巫の援護を行っている巫たちも容赦なく敵を殺す。

『助けてくれ！』

敵の兵が武器を放り出して姫巫の前で額を地面へ擦りつけた。

先代は無情な瞳でそれを見やり、水面のように刃の部分が波打つ剣を彼に落とした。

血は水しづきの如く舞い、そこから中に飛び散った。

『もうやめて！』

姫巫の両腕を押さえつけようとしたが、するりと彼女の体を通り抜けてしまう。

この夢の中で、ヤナギは何にも触れられなかつた。

死んでゆく人々を助けることも出来ず、指を咥えて見ていく」としかできない。

せめて、夢では傷付く人を見たくはなかった。

毎夜毎夜、悪夢にうなされ続けてきたヤナギだが、こんなにも鮮明な夢は初めてだった。

妙に現実味がある。

景色は次々と変わるが、その全てが戦であった。

熾烈な戦いは目を焼いてしまいたい程に惨く、一方的であつた。姫巫の力は戦に重宝される。姫巫の“真象の力”は戦の趨勢を一瞬で決めることが可能な力だ。

姫巫が一言呴けば、敵は手も足も出なくなる。

ヤナギは他の巫たちと違つて、先代の出向いた戦に連れて行ってもらつたことが一度しかなかつた。

王宮へ入つてすぐの頃だ。

その貴重な一戦の記憶はとても曖昧模湖としており、よく憶えていない。もつたいないことだと他の巫たちはヤナギのことをいつも憐れんでいた。巫たちにとって、姫巫の力を見るのはとても誇れることだつたから。ヤナギは憐れまれる度に、疎外感を感じたものだ。

と、一閃の光がヤナギの後ろで轟いた。

慌てて振り向くと、目に入るものが炎上していた。

先代が怒りと戸惑いの入り混じつた表情で何者かの肩を揺さ振つているのが垣間見えた。

それはすぐに猛る炎で遮られ、見えなくなる。

「……夢路に迷つておおせか」^{たけ}

低くくぐもつた声がヤナギのすぐ傍で囁いた。

気配がなかつたので、全く気が付かなかつたヤナギは身構えてその場を飛び退く。

いつの間にか立ち込めていた霧によつて男の顔は定かではない。

この霧がヤナギと男の夢を区切る境なのだろうと、ヤナギには即座にわかつた。

夢を見ていると、ふとした拍子に誰かの夢の琴線と触れてしまつ時がある。

それは同じ過去を共有する者だつたり、同じ景色、想いを持つ者であつたりする。

「ああ、もう思い出したくもない景色だ」

男はぶつかり合う軍兵の方を向いて言った。

顔が見えないのに、声だけで彼の大きな悲愴は伝わってきた。

「戦は…………何も産まない。縁も、人も、食物も。ただ削つていくだけ」

「そう言えるのは、あなたが恵まれているからだろう。私からすれば、削れた土地を還してもらうために…………戦がある」

男の口ぶりで、彼が高天原國の者でないとすぐに判断出来た。

取り戻すための戦　　高天の原國が奪い取つたものを取り返すために戦つていると男は言つている。

「無謀だと年老いた者は言つ。だが、全てを諦めて儻く消えるくらいなら、いっそ雄々しく最期の一瞬まで戦う」

搖るぎない意志は、移ろうヤナギの心によく染み渡つた。

景色が滲んだ。

明るさが増していき、戦の光景も、男も泡沫のよう^{うたかた}に消える。夢の終わりが近付いているのだ。

いつか見た、薄墨色の花弁が視界一面を遮る。向こう側に人影があつた。

その人物はこちらに向かつて手を伸ばしている。花弁の合間より、その人物の唇が動くのを見た。驚いて目を見開いたと同時に、花弁が一気に吹き荒んだ。あまりの激しさにヤナギは目を瞑つてしまつた。

急いで再び目を開けたら、見知った天幕が見えた。
ヤナギはしばらくぼんやりとしていた。

姫巫の受け継ぐ数多の歴史と業。

それが先ほどの夢を見せたとしか思えなかつた。
目が覚めた今でもしっかりと内容を覚えているのは、あまり喜ばしくないことである。

朝から重苦しい気持ちになつてしまつ。

胸の鼓動も収まらず、ヤナギは一人途方に暮れた。

昨日の戦は圧勝であつた。

敵味方問わず一人の負傷者もなく、乱を鎮圧することができた。
だが、その土地に住む者たちは、自分たちを加護してくれていた
榎森の消失に嘆き悲しみ、拳で地面を叩いていた。その様子を見た
ヤナギは、やり切れぬ思いですぐに陣へ舞い戻つたのだった。

高天原国の大軍は、ひとまず勝利に杯を交し合い、昨晩は盛大な
宴を催した。

ヤナギはあまり酒が進まず、すぐに寝床に向かつたのだが、それが悪かつたようだ。

このところ深く眠つていなかつたため、悪夢に対する耐性が落ちていた。

（なんとも情けない）

ヤナギは自嘲の笑みを浮かべ、額に貼りついた髪を払う。
しづしづと入り口に張つたムシロが開いた。

そちらを見やれば、青白い顔をしたチズコが佇んでいた。
彼女は姫巫の采女筆頭うねめいとうとして、常時ヤナギの傍に仕えている。

弱々しく微笑めば、チズコも困つたように微笑み返してくれた。
珍しいこともあるものだとヤナギは失礼ながら思った。
チズコがヤナギに向かつて素直な笑顔を見せることなど滅多にな

い。

「随分とうなされていたので」

そう言いながらチズコはヤナギに餅を手渡す。

ヤナギの顔が華やいだ。

「気遣つてくれてありがと」

餅を口にした途端、芳醇な花の匂いが胸に満ちた。丁寧に練り込まれた薬草はしつとりとした食感をしており、これまでヤナギが作ってきたどの餅よりも美味しかった。

「おいしい」

本心をありのままに言えば、チズコはほっとした表情を浮かべた。

「少し、顔色が戻りましたね。良かつた」

「……私、それほどうなされていた?」

チズコはヤナギの質問に頷く。

「はい、とても『やめて』と叫ばれていたので飛んで来てみれば、お姿が消えそうになつておりました」

ヤナギは呆気にとられてチズコを見た。彼女が嘘を言つているようには見えない。

しかし、消えそうになつていたというのは、にわかに信じがたい。「強い巫力を持つ者は、時に时限さえ越えると言います」

チズコは虚ろな瞳でヤナギを見つめた。

その双眸にはヤナギではなく、他の誰かが映つていていた。気のせいか、銅色のはずの瞳が波打つて見える。

「あなたは ともすれば、先代をも超える巫力を保有している」

「馬鹿なことを。先代は史上最高を誇る姫巫よ」

「……もしや、先代はこうなることを予想していたのでしょうか…

…?」

ヤナギの言葉など、チズコに届いていなかった。何をチズコが言いたいのかさっぱりわからない。

「ねえ、どうしたの。そなたの方が、顔色が悪い」
チズコの細い手がヤナギの髪に伸びる。

思わず目を瞑つた。

姫巫となる儀の時に刻まれた、他人が自分を傷付けるといつ恐怖が拭える日は来ないだろう。

反射的に身構えてしまつ。

「しおみょう捨涙の花弁がついております」

ヤナギの髪についていた花弁が、チズコによつて取り除かれる。言われて初めて気がついたが、ヤナギの体のそこかしこに薄灰色をした無数の花弁がついていた。

それは、夢の終わりに一面広がつた花弁であつた。
寝台中に散らばる花弁を搔き集め、チズコはそれに顔を埋めて目を瞑つた。

「この花は現世と常世を繋ぐ花。死者を導く標しるべ。とても不思議な花で、黄昏国にしか咲かないのです。高天原国では、すぐに枯れてしまう儂い花」

チズコの様子が當時と違うのは、一目瞭然だつた。

何かに取り憑かれたような彼女が心配になつたヤナギは立ち上がりつて、チズコを寝台へ座らせた。

チズコは仰天したのか目を大きく見開く。

「ヤナギ様……？」

「気分が落ち着くまで座つていていい。私は立つての方が楽だか

ら

「はい」

チズコは嗚咽を洩らした。

必死に声を出さないようにしている姿は、見ているにちがうが痛ましくなる程であった。

チズコの頬を伝う涙は悲しみに満ち満ちており、深い闇の匂いがした。

ヤナギは、冷たい床の上をゆっくりと歩く。鳥のさえずりが微か

ながら聴こえた。

「…………ヤナギ様」

小さな声に反応して振り向けば、チズコが寝台に横たわっていた。本当に気分が悪そうでぐつたりとしている。

彼女の傍へ近寄ると、チズコはヤナギの手を強く握った。

「ヤナギ様ご自身の未来はわたくしにもわからない。ただ、暗き道と明るき道が見えるだけ。暗き道には一閃の光もない。明るき道はまぶしきて前が見えない。あなたは、どちらの道を辿るのだろう」はらはらとチズコはまた涙を零し始めた。

「わたくしの父と母は占師の一族の出でした。その父が、近々邑に姫巫がやって来ると言つた時、邑の誰もが国の守り神である姫巫と会えると喜んでいた。でも、わたくしには覗えていたのです。姫巫が邑を殲滅させる様が」

ヤナギはただ黙つて聞いていた。

チズコは必死で何かを伝えようとしている。

それを横から口出しして、止めたくなかった。

「わたくしは懸命に言った。姫巫を邑へ迎え入れてはならない、かの人は禍を持つてくると。だが、誰も五つの子供の言うことに耳を傾けなかつた。結果、邑は滅んだ。黄昏国の残党を匿つているという名目のもと、大人たちは全員処刑された。そして、ちょうど邑の子供たちと野で遊んでいたわたくしの視界を真白き光が奪つたと思つたら、目に見える全てが燃え盛つっていたのです」

その話はどこかで聞いたことのある話であった。

「とても昔、いや、とても最近。

そう、先の夢で見たような光景である。

一閃の光と、猛る炎。

確かにその場に姫巫もいた。

「姫巫は全て奪つた。あまつ、わたくしに占師の血が流れているのを知るや否や、ここへ強引に連れて來た。憎い、憎い、憎くて仕方がない。あなたも…………彼女と同じ道を行くのですか？」

胸に突き刺さる問いだつた。

ヤナギが心に負つた傷を誰も癒せないのと同じで、チズコが心に負つた傷もヤナギが癒すことなどできはしない。

無言のヤナギにチズコは更に噛みついた。

「姫巫は…………高天原国は、いずれ現世も常世も常闇に還してしまつ定め」

「だから、大人しく地下の国に滅ぼされると言いたいの」「違う。わたくしが言いたいのは、ヤナギ様がこれ以上、修羅の道を歩む必要などないということ」

ヤナギは眦を吊り上げた。ふつふつと熱いものが喉元に込み上げてくる。

「私が姫巫になるのが定めだと先代は言つた。そして、そなたは姫巫が 高天原国が全てを無に還す定めだと言つ。そこまで定めに拘るならば、少しば模索しなさい、違う道を。私を殺し、それに乗じて都を落とすように仕向ければいい。それで現世が救えるのならば、本望よ」

ヤナギが言つてのけると、チズコは怒りを露にしてヤナギを睨み付けてきた。

「わたくしがあなたを殺そうとしたことがないとお思いですか？ 何度も何度も、殺そうとしましたとも。その度に、何も知らないあなたを殺すことに良心の呵責かしゃくを覚えて思い留まつた。今はもう……殺せないのではなく、殺したくない。わたくしはヤナギ様を殺したくない。大切な喧嘩相手なのでですから」

真心さえ感じられるチズコの言葉に、ヤナギは一の句がつなげなかつた。

「……そなたは、一体どうしたいの。その眼に未来が視えているのならば、どうすれば最善かわかるでしょう」

チズコは甘く誘う毒のように心酔わせる香りを放つ拯済の花を抱きしめたまま答えた。

「知っていますか、占師は未来を予見出来ても物事を動かす力はな

いのです。それでも、ヤナギ様は助けたいと思つた。高天原国より亡命するなりなんなりして戦から遠ざかりたいと言つならば、手を貸そうと思つっていました。あまりに今朝視た未来はつた。わたくしはもう、嫌だ。この眼など、潰れてしまえばいいのに

その眼は何を見たというのだろうか、とヤナギは華奢な体を震わせるチズコの脇で、彼女の手を優しく撫でながら考えていた。

自分に未来を見る能力があつたならば、どのようなことを思つただろう。

もしかしたら、発狂していたかもしないと思い至り、苦笑した。自分が視たとおりに起こる出来事。

それは、とても辛いことなのかもしれない。

「…………」もうすぐ、来ます。拯済の花があれを連れてくる。大きな定めを担つた者たちを

チズコのうわ言に、ヤナギは何も言わなかつた。

ヤナギ自身も感じていた。

今日見た夢は異様だった。

何がが変化する予兆にしか思えない。

ヤナギの巫力がそれを察知し、それを示したとしか言いようがなかつた。

「神の腕」

チズコが呟くと同時に、遠く大地が揺れる音がした。

月が雲に隠れていた。

朔のじときその夜は、たかまのはじ高天原國の都に住まつ人々に闇といふ恐怖を運び、無音を誘つ。

人つ子一人いなはばずの市井で、荒い呼吸を必死に整える者がいた。

常ならば一寸の乱れもなく結わえていはる髪は乱れた呼吸同様乱れていはる。上衣は胸が肌蹴はだけており、下衣には無数の泥が飛び散つていはる。

ヤナギは息を押し殺して路地裏より表を覗き見た。

追手も馬鹿ではないらしい。気配を隠していはる。

しかし、近くにいるはばずだ。

どんなに彼らが闇に紛れよつとしても、鎧と衣が擦れる微かな音でも空氣は揺れる。

それを察知するくらいの敏感さはヤナギにもある。だてに巫の修行を十数年して來たわけではない。

近頃はめつきり修練もしていなかつたが、積年の修行は身に染みついているらしい。修行をしていて良かつたと思えたのは、この時が初めてだ。

ヤナギは左手首につけた勾玉の腕輪を無意識のうちに触り、固く目を閉じる。

両手首につけた勾玉は、先代より受け継いだものである。こめかみからは冷や汗が伝つた。

さわらまき沢良宜の乱を平定したヤナギはその後、一月かけて都へ凱旋した。

しかし、台王からはねぎらいの言葉も何もない。それが常だつた。かの王は、姫巫のことなど政を行つ上での道具としかみなしていない。

特に気にするでもなく、ヤナギは神杷山へ帰つた。

台王が遣いを送つてくるなど滅多になかつた。

祭事や大きな行事がある時はその旨を伝える仕官を送つてくるもの、それ以外では全く音沙汰なかつた。

その台王より、文が届いたのがつい一日前のことであった。いぶかしく思いながらも、その内容を見れば、姿を見たい。執務が終わった後　　日が暮れてから台王の寝殿へ来てくれとの内容が書かれていたので、ヤナギも、それを届ける役目を仰せつかつたチズコも首を傾げた。

兎にも角にも、行つてみよつと思い至り、一人寝殿へ行つたヤナギだつたが、その結果がこのさまである。

行かなければ、もしくは供を連れて行けば良かつたと今更悔やんでも詮無きことだらう。

だが、嘆かずにはいられなかつた。

「おお、姫巫よ、しばらく見ぬうちに艶めかしくなつたのう」

「お久しううござります、台王。こうして面と向かつてお会いしたのは六年前以来ですね」

「そう言えば、そんなにも会つていなかつたな。そちは祭事にも何にも参加しなかつたせいで」

「…………申し訳ございません。ですが、これからは心を入れ替えて精進して参ります故。」温情頂きたく存じます

ああ、と台王はぞんざいな口調で言つた。

何気ない会話を交わしていた二人だが、場の状況は異様だつた。

少なくとも、ヤナギは逃げ出してしまいたいと思つていた。

台王は舐めるような眼つきでヤナギを見る。彼の四方には裸で眠る巫たちの姿があった。

姫巫として神杷山にこもるまでは、ヤナギよりも高位にあつた巫たちの醜態にヤナギは目を背ける。

高天原国台王はヤナギの様子を面白がるように、巫の体を玩んでいた。

「おやめ下さい。今は私と話してじるのでしょうか？」

真つ直ぐな眼差しで言えば、くつくつと台王は嘲笑する。

「やはりそちの巫力は先代に劣るか。そちが言の葉を紡ごうと、わしは痛くも痒くもない。先代の言葉にはある程度の重みを感じたが、そちの言葉には全く重みなど感じぬわ」

ヤナギは歯軋りした。

台王の言いたいことは彼女自身が一番わかっている。

台王はそれなりに呪いを撥ね^は退ける術を取得している。

真に強き言葉でないと呪いの力は効かない。

ヤナギの表情が歪む。

神の加護は純潔を喪つたとしても衰えない。

大巫より習つた教えではそうあつたが、やはり純潔を守るのが強き巫だとも教えを受けていた。

なのに、ここにいる高位の巫は台王に身を委ね、恍惚^{ゆだ}の表情さえ浮かべている。汚らわしいと思った。

胸のうちに苦い物が込み上げてくる。

「房中術^{ぼうちゅうじゅつ}、どうのを知つてゐるかね。姫巫^{ひめみこ}」

脱ぎ捨てていた薄綿を羽織り、台王が寝室の戸の前で佇んでいるヤナギに近寄つてくる。

その手がヤナギの輪郭をいやしい手つきでなぞる。

鳥肌が立つた。

「触らないで！」

怒りを込めて台王の手を思い切り払いのける。彼はそんなヤナギの態度に不快感を表すでもなく笑う。

先代の姫巫とは違う恐怖を感じた。

巫たちは鬱陶しげにヤナギを半眼で見つめる。彼女たちの顔は、巫のそれではなく、女のそれであつた。

「台王様……私は房中術など、まやかしだと思つています」

「ほう。ここにいる巫たちの位を言い連ねてもそう言えるのか。わしは房術に長けておつてな。わしの房術を受けた巫たちは皆、他の者より圧倒的な巫力を有し、高い位についている」

ヤナギは反論出来なかつた。

確かに、ここにいるのは高い地位にある巫ばかりであつた。

しかし、房中術とは男と女の交わりによって体内の氣を高めたり、乱したりできる術であり、この国では、闇のまた闇の禁術と云われるくらいに穢れしものである。

暗殺の方法の一つにもなる房中術を使える者は、希少だつた。その筋の子供か、古い書物や暗殺者に通じている者しか習得できない。それを台王が心得ているとは思い難い。

「房中術を使えばそちの巫力など、すぐに開放できる。えもいわれぬ快樂と共に、力まで得られるのだ。良いことだらう。幼きそちにそれを施すのは酷だと思い、成人するこの時まで待つていただけ有難いと思つて欲しいものだ。もう十五であろう」

ヤナギは答えなかつた。いや、答えたくなかった。

その間にも、台王の骨ばつた手は楊の胸元まで進んだ。

ふと、脳裏に過ぎつたのは、自分が姫巫の役目を全うすることが最善のことだという考えだつた。

台王に身を預ければ、それは容易に成せるかもしけない。ヤナギの心は揺れに揺れた。

時間にすれば数秒だろうが、長い時間悩んだよじりられる。

しかし、台王の次の言葉で迷いは霧散した。

「かつての姫巫がそうであつたよじり、姫巫は、妖艶に腰を振つて

夜伽よとぎをすれば良い」

ヤナギの中で何かが弾けた。両の腕輪の勾玉が飛散した。

お逃げ。

誰かが耳元で囁く声がする。

熱い空気に抱擁ほつよつされる。

気が付けば、勝手に口が動いていた。言葉ならぬその無音の声は、台王の部屋全体に広がり、ヤナギ以外の全ての者を縛つた。見えない糸が彼らの体にまとわりついている。

「姫巫よ……何を……何をしたのだ……」

喉元を押されて片膝つく台王は立ち竦むヤナギを仰ぎ見た。ヤナギは首を緩く振り、一旦散に部屋を飛び出した。外に控えていた数人の護衛官にぶつかる。

彼らは急に部屋より飛び出してきたヤナギに面食らひ。

護衛官たちはこの中で行われていることを知っているのだらうことがすぐにわかった。

よじんだ瞳は台王のそれと似ている。

狂っている。

ありつたけの憎しみを込めて護衛官たちを睨んだ。怖氣づいたのか、彼らは躊躇いの色を見せる。

しかし、「何をしている、姫巫を捕らえよー」と叫ぶ台王に背を押されて護衛官たちはヤナギにじり寄る。

ヤナギは慌てて装束の裾をたくし上げて細く長い廊を走り抜け、王宮を出た。

履物を履く余裕などなく、裸足のままひた走る。

後ろを振り向きはしなかつた。

不開あかずの門がある東門へ一旦逃げて、追手が集うのを待つた。叢の陰より、ある程度の大きさをした石を反対方向に投げる。案の定、彼らはそちらに注目する。

その隙をついて、ヤナギは鬱蒼と茂る木々の合間を縫つて西門へと急いだ。

東門を抜ければ峡谷に繋がる道があり、南門か西門を抜けば市井に出る。どこから逃げるのが好都合かぐらいは、混乱したヤナギの頭でも考えることが出来た。

チズコの待つ神杷山に続く北門に行くことも考えたが、チズコも巻き込んでしまうと判断したので西門から逃げることを選んだ。

少なくとも、ヤナギを庇わなければ殺されはしないだろう。

南門は市井と王宮とを繋ぐ、最も重要な箇所があるので常時台王の配下の者がいる。その南門より市井に逃れようと度胸はヤナギになかった。

都合の良いことに、西門は台王と近しい者でない直轄下にない武官たちの寝所がある。包囲の日も薄いとヤナギは睨んだ。自分がこんなに頭が回るとは、自身でも思つてみなかつた。

火事場の馬鹿力とはよく言つたもので、土壇場になつて初めて人は力を發揮するものだ。

（逃げなければ）

その思いだけでヤナギは走つていた。走るのをやめれば捕まつてしまつ。

捕まつてしまえば、台王の前に引き立てられて惨い仕打ちを受けるのは目に見えていた。

「ヤナギ様つ？」

西門を突破する際にぶつかった兵の一人が口の名を呼んだが、無我夢中で走つた。それが、ムロであると気付いていてもなお、走り抜けた。

ひつして、今に至る。

もう、追手は目前まで迫つていた。

あちらはかくれんぼの玄人である。

室内にこもりきりで祈祷を捧げたりする巫とは役割が違う。

確かに、姫巫も戦に行くことはある。しかし、兵と違い、姫巫は

巫力を使って敵を制す。

己の体力を削つて相手を制す彼らと、己の血や精神力を使って敵を制する姫巫は潜り抜ける修羅場の種類さえ違う。

「姫巫様」

ついに見つかってしまった、とヤナギは絶望を孕んだ目で行く手を阻む護衛官を見た。

頬が削げ落ちた男は無表情でこちらに腕を伸ばす。

雲間に浮かぶ青白い満つる月の弱々しい光の中、伸ばされた腕は恐怖そのものが具現化したように思えた。

真象の力は使えない。

あれは、大地に神気が溢れ、自分の精神が屈いだ時にしか使えないのだ。無理に使えば死ぬだろう。

先ほど台王の部屋で起こったような神事が都合良く再び起こり得るはずもなく、ヤナギは己が身を呪つた。
ヤナギはサコが死んでから、初めて慟哭した。

月はかげり、風は嘶ぐ。

一瞬の出来事だった。白き光が弧を描いた。

群雲より月が姿を現した時、追手は既に事切っていた。

背中には鮮やかな一筋の紅き剣筋が残っている。

微かな金属音が場を支配する。

ヤナギの前に立っていたのは、異国民とすぐにわかる出で立ち鉛で出来た鎧に鮮やかな色の着物、狼の毛皮で作った履物をした青年だった。朽葉色の髪目が月光に色づき鮮やかだ。

涼しげな面差しは、夜でもよく映える。

その青年は戸惑った様子で口を開こうとしたが、後ろから聞こえた足音に眼つきを変える。

そうそうたる数の仕官がそこにはいた。ヤナギは目に溜まる涙を拭い、逃亡することを諦めて前へ進み出ようとする。

大体、逃げたところで身を寄せるとこなどなかつたのにじうじて、逃げようとしたのか自分でも不思議だつた。足搔く自分が惨めに思えた。

『お逃げ』

あの声のせいだと今更ながら思つ。

ヤナギは、己を恥じた。

青年の手が、つとヤナギが進み出るのを阻んだ。

怪訝な顔で彼を見やれば、邪魔だと言わんばかりに後ろへ押し返される。

「ちょっと……」

抗議の声は続かなかつた。

青年が地面を蹴つて追手に突撃したからだ。

剣舞でも見ているかのような錯覚を起こす。月に反射したその横顔は異様な程に美しかつた。

たじろぎながらも次々と襲いかかるてだれたちを青年は鋭い剣で捌きつつ、彼は乱れなく舞つた。

鋭利な瞳からヤナギは目が離せなかつた。

血の華は、現に存在する何よりも美しいと先人たちは伝える。

そのとおりだとヤナギは感じた。

血だまりの中、剣刃を死人の上衣で拭う彼に戦慄より感動を覚える。

異常の中に長く身を置くと、それが正常だと思つてしまつよう人の頭はなつてゐるらしい。あまりの異常さに思考が麻痺する。もう追手はいない安心感から、じつと涙が零れて來た。

その場にへたり込む。

声なく流れ落ちる涙に、青年は戸惑つたようだつた。青年は腰まである乱れたざんぱり髪を肩の辺りで一つに縛るとヤナギの正面に腰を落とした。

「平氣か」

淀みなき声がますます涙腺を刺激する。

屍の臭いが立ち込める路地裏で、見ず知らずの男に縋つてヤナギは思い切り泣いた。

青年は何も言わず、ただヤナギに袖を貸していた。

夜は厳かに更け行く。

朝の日は、靄も空氣も金色に染める。

ふと、ヤナギは田を数回瞬かせる。靈む田を手で擦つた。いつの間にか、都の外れにある藁葺き屋根の空き家にもたれかかっていた。

「…………？」

寝惚け眼まなこで首をひねると右側に青年の横顔があつたので、思わず小さく悲鳴を上げた。

彼はその反応に對して関心を持つでもなく、淡々と言葉を発した。「目が覚めたのなら、どことなりとも逃げるといい。お前と会つたことは誰にも言わないでおくから」

その代わり、俺が追手を殺したと誰にも言つなよと青年は釘を刺してきた。

ヤナギはぐつと拳を握つて答える。

「逃げるわけには、いかない」

姫巫として在る以上、この国から逃げおおせることは出来ない。

「そなたが護衛官を殺したことは、決して口外しないと約束するわ」

ヤナギは、自分自身を奮い立たせて立ち上がつた。

「自ら進んで、死地へ赴くというのか」
命を粗末にしていると解釈したのだろう。青年は声を低めてヤナギに問う。

ヤナギは口を一文字に引き結ぶ。

「逃げられない」

定めに抗える自由が、ヤナギには与えられていない。

この体は高天原國の傀儡なのだ。

ヤナギの心底にある悲鳴を絞め殺し、高天原國つ神は彼女を御殿へ戻らせようと見えない糸を引く。

足が勝手に王宮の方へ歩み出す。

「ありがとう、異國の人。そなたのおかげで一夜だけ、私は自由だった」

青年と一度と会う」とはないだろうが、厚く礼を述べ、ヤナギは薄く笑んで彼に背を向ける。

「俺は……ハルセと言つ」

何の前触れもなく、突如かけられた言葉。

ヤナギは顔だけ青年の方へ向けた。

青年 ハルセはそれだけ告げ、たなびく髪を翻して朝靄の中に消えて行つた。口許には笑みが浮かんでいた。

まだ商人達も表に出ていない。喧騒とは無縁の大通りを一人歩く。ヤナギを捜して今も王宮は騒然となつているだろう。

案の定、王宮の西門には大勢の兵がいた。ヤナギは生睡を呑んで彼らに近づく。

と、ヤナギと兵の間に背の高い少年が素早く体を入れた。

「あなたはどこまで、ムロを心配させるのですか！」

ムロの声は震えていた。

ムロ、と名を呼ぶ前に腕の中へ閉じ込められる。

「北門にはチズコが上手く取り繕つていますから、何も気に病むことはございません」

小声でムロはヤナギにそう告げた。

聞き返そうとしたが、すぐにムロは彼女から体を離す。

「皆の者、ヤナギ様はお帰りになられた！ 安心して訓練に励め！」
そして、何事もなかつたかのように兵に迅速な指示を出し、朝の訓練を始める。ムロは討伐軍に駆り出される時以外は、西門軍の副武官長を務めている。

兵士たちはムロの声に、各自の武器を手にして縦横美しく整列した。

「北門でチズコが待っています」

所在なさげに立ち尽くすヤナギに向かつてムロが助け舟を出してくれた。

取り敢えず、北門 王宮の北に広がる梶子^{くわなじさき}森の入り口へと足取りを速めた。

途中、擦れ違う誰もがヤナギと目を合わせようとしている。ヤナギが王宮から脱走したという話はもう広まっているらしい。重々しい雰囲気に包まれた巫たちの離れを抜け、北門をくぐつてすぐにある鏡月池まで辿り着いた。その池をしゃがんで覗く少女が一人。

チズコである。

何と声をかけたらいいかわからず黙つていると、チズコは立ち上がり、ヤナギを見やる。

「おてんば姫巫のお守りは大変です」

肩をすくめて言つチズコの瞳には、悪戯な輝きがあつた。

「安心して下さい、ヤナギ様。台王には戦の直後で精神状況が安定しないと言つたら、あいつも納得しました。王子の口添えもあつて、今回はお咎めなし」

「クルヌイ王子が？」

クルヌイは台王唯一の息子であり、王位継承権第一位の王子であ

る。

まだ齢十四を迎えたばかりだ。

生まれつき体の弱かった王子は空氣の良い地方で育てられていた。最近ようやく体も丈夫になつたらしく、ここ都へやって來た。

「はい。ちょうどわたくしが申し開きに赴いた時、台王のもとに彼もいたのです。王子に感謝して下さい。必死になつてヤナギ様のことを庇つていた」

一度、冬と春の境の季節に王子が姫巫の社殿にやつて來たことがあつたが、その時、ヤナギと王子は会話らしい会話を交わさなかつたはずだ。

なのに、王子はヤナギを助けようとしてくれたと言つ。

「とても、心の真つ直ぐな方」

「穢れを知らないだけだと思います。あの無垢さが続くことやら」厭味を言つチズコを無視して、ヤナギは梶子蒼森へ足を踏み入れた。慌ててチズコが後に続く。

「ねえ、ヤナギ様」

少しだけ緊張した声でチズコはヤナギを呼んだ。いぶかしく思い、顔を傾ける。

「先程まで鏡月池が真つ赤に染まつていたのだけれど、心当たりはありますか」

びくりと背筋が震える。それを肯定と受け取つたチズコは、大袈裟に溜め息を吐く。

「どうしてこつも厄介事ばかり抱え込むのか。こんな調子だつたらわたくしの身がいくらあつても足りない」

「あれは……」

「異国の民がやつた」

的確なチズコの答えにヤナギは驚き入つて言葉を失つた。

「鏡月池に異国人が映つていました」

「お願い、あの人は私を救つてくれた。一夜だけでも姫巫の性より解放してくれた。台王に彼のことを言わないで、恩人なの。追手を

殺したのは私だと言つてもいいから」

懸命に頼み込むヤナギを、チズコは田を細めて見つめた。

「言いませんとも。どうして、わたくしがそんな七面倒くさいことを報告しなければならないのですか。夜盗が殺したと詭弁を吐きますよ。護衛官たちは私腹を肥やすのに夢中ですから、武の腕が錆びている。今や夜盗にさえ殺される腑抜けでござりますとでも付け加えましょうか」

華麗な毒舌にて、思わず噴出す。

「そなたの口には、姫巫の口を持つ私も参る」

チズコは、どうもと片眉を上げる。

「事実を述べているだけですがね」

飄々と言つチズコは、ヤナギの横に並んだ。

「人が常闇洞泉を横切ろうとした時、周囲を靈魂が取り巻いた。

「やれやれ、これだからあまり俗世とは関わりたくないんです。こうして彷徨える光たちが寄つてくるのは現の匂いをわたくしたちが漂わせているからに違ひない。王宮はひずみだらけです。大体、台王より文をもらつたからと言つて、一人で山を下るだなんて……無鉄砲もほどがある。貴女はわたくしに采女の役田を全うさせる気がないらしい」

靈魂のざわめきがいつもに増してうるさい。

それを忌々しげに半眼で見回しながら、チズコは愚痴を零した。

ヤナギは軽やかに口を開く。

『大丈夫、黄泉路の道は開いています。無念も怨みも、現の未練は私が引き受けましょう。そなたたちは安らかに眠る権利がある。ほら、常闇洞泉もそなたたちを案じて波立つていて。行くとい、暗き道の果てには常世がある』

神の言葉は魂を浄化する。

光たちはヤナギとチズコの周りから離れて、常闇洞泉の滝壺へと向かう。

滝壺の裏側にある洞窟の先には常世があるといつ言い伝えもある。

誰も生きてその洞窟より還ってきた者はいないので眞実かは定かでない。

「行きましょう」

連なる光たちの行方を最後まで見守つてから、ヤナギたちは神杷山に続く楠の木を目指した。

浮世と神世を繋ぐ楔部分に当たる場所にある鏡月池の面が妖しく漣立ち、水底に黒い影が揺れた。

桐一葉落ちて天下の秋を知る

一章 鮮輝くせんき 宿りし瞳くめ

着いた早々、見上げた空は虹色だった。
己の腕に抱えられるものは限られている。それをわかっているからこそ、男はここまでやつて来た。

どんな犠牲も厭わない。

一途な決意は、決して折れないだろう。

男は氣だるげに周囲を眺望した。

切り立つた岸壁の上より眺める地表は真白い。彼自身が吐き出す息も寒さに白く濁る。

男が暮らしていた、姫巫の脅威に怯える国とは正反対の色合いを持つ高天原国。

この国はあたたかい。自然がまだ息をしている。

見渡す限りに広がる森林と天とが、遙か彼方に一本の線を引き、境目を作っている。その境には陽炎が燻つっている。

（共存しているのだ）

男は祖国を出奔する際に幼子より貰つた勾玉をきつく握りしめ、瞑目した。

彼が薄く目を開くと同時に、小さく砂を擦る音がする。男は威厳ある態度で振り返る。

そこにいる者たちは皆一様に傳き、男の言葉を待ち構えていた。その様があまりに形式的過ぎて滑稽に思い、彼は皮肉げな笑みを洩らした。

「カガミ様、命を」

急かす声がかかる。

カガミは心底退屈だとでも言いたげに肩を回すと、佇まいを正した。総勢九人の部下たちに一人一人、目を配る。

ここに到るまでに、失った部下は五十を下らない。

力ガミは忌まわしき蜘蛛の廻廊での出来事を思い出して親指の爪を強く噛んだ。

彼は外套を打ち棄て声を張つた。

「蜘蛛の廻廊を潜り抜けてここまで辿り着いた勇猛果敢な兵どもよ。高天原国へ潜伏して内情を掌握せよ。時期が来た時、俺が帰国^{のゆし}の狼煙^{のゆし}を上げる。……受けし恥辱を、忘れるな。我らは高天原国に滅されし、黄昏^{たそがれこく}国^{こく}の民。今代の力なき姫巫など恐るるに足らず。姫巫^{ひみ}という名の邪神に守られたこの国、内側から打ち砕くのだ」

力ガミの言葉に、皆は腹の底から返事をした。

高天原国たかまのはるひくは、数多の国々の中でも特に際立つた権勢を見せつけ、世に榮華を誇つていた。その属国は百を下らないと云われている。

都に積もつた粉雪は、柔らかな日差しによつて融けて川に流れる清水の一部となる。

まだ春がやつて來たとまでは行かないものの、冬の凍りつく空気は幾分和らぎ、暖かな太陽の光が射している。

ヤナギは左手を天へかざし、束くわの間の休息を過ごしていた。
代々姫巫さじにわに与えられる、梶子くわのこ斎森さいしんの一角にある神杷山しんぱやま。

そこに四季しきという概念はない。下界と切り離されたそこは、神々の遊山場と呼ばれるほどに浮世離れしている。四季折々の花がいつぺんに咲き、冬でも雪は滅多に降らない。

とても不可思議な場所 不安定な場所である。

「あまりゆつくりとしている暇はございませんよ」

ぼんやりと斎庭さいにわの大石に腰かけて空を見上げていたヤナギに向かつて、きびきびとした声がかかる。

振り向くと、そこには一人の采女うりめのめを伴つたチズコがいた。ヤナギは大袈裟に溜め息を吐いてみせた。

「久々の我が家なのに、一息つく暇もない」と

「はい、ございません。よもや、姫巫に自由時間じゆじゆじかんがあるとでも?」
言いながらチズコは、ずいと持つていた反物たんものをヤナギへ差し出した。ヤナギは怪訝な顔をしてそれを見る。

「これは

「明晚、王宮で大きな宴が催されるとのことです。姫巫も必ず出席をとの旨を先ほど臣より伝えられました」

「…………何も、このよつた時期に宴をせずともいいものを」

ヤナギの呴きは最もである。今は、高天原国が真に天下を統一出来るかの分かれ目。

宴に労力を裂くくらいならば、一人でも優秀な人材を富へ召集して強い軍を編成した方が国のため。

しかし、チズコは一笑した。

「このようない時だからこそその宴で『ございましょう。姫巫』自身の休息はないも当然ですが、ひ弱な兵たちは息抜きがないと、次の行軍に耐えられないでしょうね」

ヤナギは黙り込んだ。

次の戦は東方だと聞いている。東方は、地上の中でも地下の国々と癒着の強い地域だ。

それ故、今までおいそれと手出しをしなかつたのだが、最近になつて地下の国々の動きが活発化してきてるので、先手を封じる意味合いも兼ねて東方を支配下にしようと台王や臣たちは考へているようだつた。

たくさんの犠牲が出るだろう。

ヤナギは今からそのことで憂鬱な気分になつた。

東方にはまだ古き神の教えが強く残つてゐる。高天原国にまつろわぬ土着の民の中でも特に戦闘に秀でてゐる者たちが潜んでゐるとも聞いたことがある。

先代の姫巫でさえ、何度も遠征に赴き、何度も痛手を負つて都へ帰つてきいていたくらいだ。

だからこそ、ヤナギは東方への遠征を拒否するわけにはいかない。先代よりも力があるとは言い難い。しかし、もう先代はこの世にはいないのだ。

今はまだいい。他国は、新たな姫巫であるヤナギが先代よりも力が劣るのを知らない。

それを悟られぬためにも、今回東方で完璧な勝利を収める必要があつた。

（私は、先代のように大きな事象を具現化することは、できない）

森の一角に火を起し「す」とくらいならば造作ない。

しかし、先代が戦でやつてのけたといつ敵軍を雷によつて焼き払うなどという芸当は無理である。

人にはそれぞれ巫力の限度がある。かの先代姫巫はそれが無尽蔵にあつたらしいのだが、ヤナギは並み。無理をすれば人体に影響を及ぼしてしまつ。

やれやれ、とヤナギは伸びをした。背筋を伸ばすと、嫌でも気が引き締まる。

「討伐軍の大将であるはずの私が着物を羽織るところのも妙な話だが……しきうがないね」

ヤナギの言葉にチズコも不服げに頷いた。

「全くです。わたくしとしては、おいそれと姫巫の姿を下郎に見せたくはござりません。台形はこれだから……」

チズコは後ろに控えていた采女に手をやつて、ヤナギの身支度を手伝うよつ無言で命令する。

チズコはたゞそつ厳しく他の采女や女官らの中でも噂らしく、二人のまだ若い采女は肩を震わせ、慌てた様子でヤナギの横に立つた。

ヤナギは焦り、二人の采女とチズコを交互に見る。

「ちょっと待つて。ここで身支度をするの？ ここは外でしきう」「ヤナギ様」

チズコは渋い顔をし、腰に手を当てた。

「では中にお戻り下さい。化粧も何もしていません。外に出られない姫巫がどこにいますか。お恥ずかしい。この反物は明晩用です。お召しにならなくよろしいですが、せめて寝着で徘徊されるのはやめてくださいな」

もうすく、武官長様がこちらへ参られるのです、とチズコは言つた。

人がこの神杷山にやつて来るのは珍しい。

ヤナギは興味深げにその話を聞いた。どうやら、今回の宴は新し

く就任することになった武官長やその他武官、護衛官長のためのものらしい。

その新しい武官長は、宴の前にどうしても姫巫に挨拶をしておきたいと台王に頭を下げるようだった。討伐軍の指揮官である姫巫にぜひ挨拶を、と律儀に考えるところから見ると私腹を肥やしたどこぞの貴族の息子でないことは間違いない。

「新しい武官長、か」

武官長といえば、高天原国の都を護る重要な役目を持つ、戦場に於いての最高司令官だ。

実質、討伐軍に身を置く姫巫よりも身分が高い。

先の武官長は高齢で、いつ引退してもおかしくなかつた。ようやく役職にふさわしい人材が見つかったのだろう。

ヤナギはしぶしぶ社殿の中へ引っ込んだ。采女一人は何も物言わずに後に続く。

姫巫という名は人々を畏怖させ、平伏させる。ヤナギは采女たちと戯れるつもりは毛頭なく、声もかけなかつた。

チズ口はと云えば、武官長をお出迎えしてきますと言い残して場を去つた。

沈黙が場に重く圧し掛かる。

（私を恐れる者と口を聞きたくはない）

ヤナギは唇を一文字に引き結び、着物を着込む。

終わりに萌黄色の羽織りを肩にかけると、鏡台の前に立つた。

素早く采女の一人が彼女の前へ回り込み、白粉をヤナギの顔全体に叩く。元から色白ではあるが、それによって一層白さが増した。薄紅色の頬紅を塗り、唇に真つ赤な紅を乗せる。瞼の上にも紅の線を入れられた。

瞑つていた目を開くと、鏡の中にある顔は、先代とそつくりだつた。真つ赤な口は唇つてきた魂の色を映し出したように見える。

ヤナギは自嘲的に笑む。

「あれほど恐ろしいと思った顔が、今や我が顔か」

思わず呟いた。

采女たちは顔を見合わせて首を傾げる。
ヤナギは踵を返した。

「何でもない。まあ、武官長がもう到着なされていてはまずいだろ
う。行つてくる」

「あ、お待ちくださいませ。姫巫様」

大股で歩くヤナギの後ろに采女たちは慌てて続いた。

斎庭には四季など関係なく様々な花や木が乱れているが、これ程
までに美しいと思ったのは初めてだ。

景色が澄んでいる。自然の匂いがヤナギを癒す。肌にまとわりつ
く空気は、初めてここに来た五年前のものと変わらず清廉だつた。
朱塗りされた橋のすぐ脇に置かれた長椅子に、長い髪を高い位置
で縛つた武官長とおぼしき人物はいた。

彼は、薄い生地の着物の上から簡素ではあるが、布製の鎧とゆが
けをつけている。

前屈みになつているため顔はわからないが、そわそわと指をしき
りに動かしており、緊張しているのが露骨に見て取れた。

ヤナギは着いてこようとする采女たちを手で制し、武官長へ歩を
進める。

（私を見たら、後ずさりするに違いない。いいさ、わざわざ挨拶に
来ようと思った心意気だけでも買おう）

天弓の橋を渡り、彼の後ろ側から少し距離を保つて声をかける。
「もし」

武官長は勢い良く顔を上げた。髪がしなやかに波打つ。

「私に会いに来たという武官長とはそな
言いつつ、武官長の正面に立つたヤナギは啞然とした。

「……ヤナギ様……。戦場で見えた時とは随分と印象が異なります
ね」

ムロは素早く立ち上ると、膝を付いて頭を垂れる。小刻みに震

えているのがわかつた。

「次の戦までの小休止、いかがお過ごしでしたでしょうか」

「ああ、顔を上げて。本当に、本当にそなたなのか」

ムロはヤナギの頬みに従い、顔だけ上げる。

ヤナギを見上げる彼の顔は、よもや十一の少年のものではなかつた。

吊り上がつた双眸に意志の強そうな眉。体つきも十五のヤナギよりしつかりしている。浅黒く焼けた肌がまた、ムロの精悍さを際立たせている。

ヤナギは酷く困惑した。つい一月ほど見ないうちに、ムロは尋常ではない成長の仕方をしていた。

自分よりも幼かった者が何かが憑依したかのじとく大人びている。この事実を前に、うろたえない者はいないだらう。

「何があつたの。ついこの前顔を合わせた時は、そこまで背丈もなかつたし、声も低くなかつた。いくら成長する時期と言つても、その変わりようはおかしい」

「や、ヤナギ様……落ち着いて。取り敢えず、椅子に腰を下ろしましよう」

質問をぶつけるヤナギをムロが制す。

渋々、ヤナギは長椅子に腰かけた。

チズコが用意したのだろう茶と菓子を、ムロはよきよきとヤナギに渡す。

一人とも、ゆつくりとそれらを味わつた。一息吐いて、ムロは口火を切る。

「ムロはヤナギ様に言わなければならぬことがあります」

開口一番にムロは頭を下げた。

ヤナギは面食らつ。何のことが皆田見当もつかなかつた。

ムロは長い睫毛を伏せて形の良い眉を寄せた。

「サコを、ヤナギ様はご存知だと思います」

「サコ……？」ムロ、お前 サコを知つて いるのか

ムロは力なく笑う。

「ヤナギ様は覚えていらっしゃらないようだ。七年前、サコとともに暮らしていた同郷の子供が武官長、サブライと都を後にしたこと

を」

「あ、とヤナギは驚きの声を洩らした。

「あの時の童わびがそなだと言うのか」

ムロは前屈みになり、指を組んで答えた。

「そのとおり。……サコの訃報ふほうは、遠く離れた邑に身をあいていたムロたちのもとへも伝わりました。師む サブライが何と悲しんだことか。あの時、ムロは誓つたのです。……どんなことをしてでも強くなろう、いや、サコや師のためにも強くならなければいけなかつた。ただ泣くだけの幼子でありたくなかった」

サブライ元武官長は七年前まで武官長の座にいた人物であり、戦災孤児のサコやムロを取り育てた人物でもあつた。

“激昂の大蛇おおへび”と呼ばれるほどに勇ましい人であったが、戦場以外では温厚な人柄だつたため、皆より慕われていた。

だがしかし、サブライは七年前のとある日、しゃうわい 収賄の罪で武官長の座と都を追われた。

その時、もう既にヤナギの付き童となつていたサコは都に残ることになつた。

「サコと離れ離れになつたのはまだムロが一つの時でしたが、サコのことはよく憶えています。幼いムロの手を引き、修羅のような場から連れ出してくれた」

遠い目をしてムロは言葉を紡ぐ。

「そして、一年前……ムロはこの都に戻つて來たのです」

一年 そんな短期間で武官長の地位まで上り詰めたというのは前代未聞の出来事だ。恐らく、高天原國の長き歴史の中でも初めてに違いない。

ヤナギは下界に起つた出来事全てに関心を持つていなかつたため、神杷山を下りる機会も皆無に等しく、そういうことさえ知る由も

なかつた。

ムロは黙つたままでいるヤナギの顔を、おずおずと覗き込む。燃える夕陽が彼の左半分を赤く染める。

「立派な地位を勝ち取つてからヤナギ様にサロのことを告げようと思つてこの一年過ごして参りました。サロの代わりなどいらぬと言われるのは覚悟の上です。でも、もしも許されるならば、近くで貴女を守りたい」

「駄目」

ヤナギはその申し出を素つ氣なく拒否した。

ムロはあからさまに落胆の氣色を浮かべる。

「そなたは武官長という、国を守る地位に就いた。私だけを守るのでは役目を果たせない。サロも、そんなことは望んでいないと思つ。ムロにはきちんと役割を果たしてほしいと言つはず」

ヤナギは本心からそう言つていた。

ムロがもしもヤナギだけを守ろうとした場合、彼が手に入れた強い発言力を持つ地位はもろくも崩れ去つてしまつだろ。」（ムロは優しい子だから、きっと私が一緒にいてほしい」と言つたらここにすつといふだろ。」そして、武官長の持つ役目を放り出してしまつ）

悔やんだところで、零れたものが盆にかかる」とはない。

「自ら選んだ道を行きなさい」

霸氣のなかつたヤナギの目に、僅かながら力がこもる。

「私は自分で自分を守れるから。きっと、そなたの力は高天原国に必要な力」

「高天原国に……」

「そう、日々の小さな幸せを最も尊いものだと知る人々がたくさん住んでいるこの国を守る力。守るための強い武力は、どんなに置き場所でも正道を行く」

それは幼き頃、まだ王宮へ入る前にある人物から聞いた言葉だつた。

軍を束ねる者が國の行く末を決めるとも言つていたその人物の顔は残像のよう^{おぼえ}に朧^{おぼえ}で思い出せないが、ヤナギに鮮烈な印象を与えたのは間違いない。

「わかりました。それがヤナギ様を守ることにも繋がるのならば、ムロは命を賭してでもこの道を行きましょう」

真摯な光の宿る瞳が、ヤナギには眩しかつた。

ムロは椅子から腰を上げる。つられてヤナギも立ち上がつた。

「では、また来ます。武官達の訓練もしなければならないので」

「…………都は今、冬か。たいそう寒いのでしょうか」

「はい。ヤナギ様も遊びに来てみるといい。一面の雪景色に咲く椿がとても綺麗だから。この寒空の下、子供達は裸足で駆け回つておられます。その笑い声がやがて、この神柏山にも穏やかな春を連れて来ることでしょう」

ムロの口調は楽しそうだつた。

ヤナギの眼前にその光景がいきいきと広がる。寒い冬でも笑い合つて生きる人々、美しく咲き誇る花。それらはとても大切なことで。都に下りたくなつたらすぐにチズロへ伝言して下さい。飛んで参りますから」

「そうね、わかつた。明日の宴には顔を出すつもりだけど、お忍びで都へ行く時はムロに言つ。それにしても、そなたなら本当に飛んで来かねーい」

□元を綻ばせてヤナギは最後の言葉を呴いた。

「やつと笑つてくれた」

ヤナギは気づいていなかつたが、彼女は全く笑顔を見せていなかつた。ムロに言われて初めてその事実に気が付いたヤナギは、はつとしてムロを見上げると、彼は今にも泣き出しそうだと思わせる表情を形成していた。

「戦場で誰と馴れ合つでもなく、常に笑顔もなかつたのは、サコのこと未だご自分のせいだと責め続けているからですか？」

返答に詰まつた。

そうではないと否定することは嘘を吐くことになる。

図星と悟ったムロは、寂しげに自分の長い髪の毛先を弄つた。

「本来、ムロの髪色は黒ではありません。鳶色 陽光に透ける色

「何を」

困惑してヤナギは声が大きくなる。

「よくよく瞳の色を見れば、誰でもわかるはず。ムロの目は芥子の実色をしていますから。サブライ師範の計らいによつて彼に引き取られた時から今まで、常に染髪しておりました」

「もう、それ以上言つては駄目。誰が聞いているともしれないのにヤナギのどがめにムロは耳を傾けようとしない。

「かまわない」

これ以上、ムロに言わせてはならないと頭のどこかで警鐘が鳴る。

「駄目だつたら」

「 サコもそうだつた。ヤナギ様も薄々勘づいていたのではありませんか。そう、ムロとサコは地上の人ではない。黄昏国人です」

ああ、とヤナギは呻いた。

ムロは言つてしまつた。サコが処刑台に運ばれた一番の理由を。

疲弊困憊した黄昏国から流れてくる人民は数多くいる。その誰もが、敵国出身だというだけで些細な罪も許されない。黄昏国出身だ

というだけで理不尽な扱いや仕打ちを受ける。

地下の人々は総じて髪や目の色素が薄いため、それを隠そつと染髪したり隠したりする者も多い。

王宮など、特に黄昏国人への風当たりが厳しい場所である。黄昏国人を始めとする地下の人々は能力の高いものが多いので、それなりに重宝がられるし王宮に呼ばれたりもする。だが、それは監視の意味も込められていた。

「サコが殺されたのは台王に叛く意思を見せたからに他ならない。他国人が歯向かつたらこつなるという脅しだったのです。王宮に数多くいる他国籍の者達への見せしめでもあつた」

ムロは自嘲的に笑つた。

「風の噂で聞いたのですが、当時、宮中の他国籍人が蜂起を企てていたそうです。それを抑制するには、同じ地下の國の者を裁くが最も良の方法だったのでしょうか。人は一種いる。同胞を殺され立ち上がる者と、怖氣づく者。宮中にいる者たちは誰しも後者だった。台王は確かに目をお持ちだ。それを考慮した上の策だったのでしょうか」「ムロの瞳の奥にあるものは、悲哀の炎であった。

思わずヤナギはムロの手首を掴んだ。ヤナギより頭一つ高い位置でムロの頭が揺れる。

「ムロ」

名を呼んだ。

姫巫の力が眠る自分が名を呼ぶことで、先代がヤナギにしたように誰かを縛つてしまふかもしれないという盲信じみた考えを振り払い、はつきりとムロの名を呼んだ。

真名ではない名にその人を縛る効力などないのだ。

「ムロ、ありがとう。わかつたから……わかつたから、もう言わなくていい」

ムロは虚を突かれた顔をした。そして、わなわなと唇を震わせた。

「……はい……」

蚊の鳴く声で咳いたムロの目から大粒の涙が零れた。それは止まることを知らず、零れ落ち続ける。牟呂は慌てて乱雑にそれを拭う。大人びた彼を、涙は子供に戻す。

「もう泣かないと、サコが死んだと知った日に誓つたのに。ヤナギ様は酷い」

「私のせいじゃない。ムロが泣き虫なだけ」

軽口を叩き、二人は笑い合つた。

芽吹きの時期が来たのだとヤナギは思つた。

小さく丸くなり、常闇に身を委ねてирだけではいけないのだと、痛感した。

ムロはサコが死んで五年間、血を吐くような日々を過ぐしていった

に違いない。武官長になるには武の才もある」とながら、一定の教養も必要になる。加えて異国民であるムロが武官長になるには、通常より何倍もの努力と精神力が必要だつただろ。」

「サコが願つたヤナギ様の幸せ。ムロはきっと守つてみせます」

言い残し、ムロは踵を返した。

その後ろ姿は凜としており、遠く沈む夕陽の赤をまとうて輝いていた。

一人斎庭に残つたヤナギは目を瞑つた。

淡い風が頬を打つた。

宵の宴は久方ぶりの賑わいを見せた。

都中の貴族や武官らが集まり、大声で酒盛りをしている。

静肅な祈祷などとは大違いだとヤナギは苦笑を洩らした。

先代姫巫が亡くなつてからといふもの、こういつた催しはついぞ開かれたためしがなかつたので、皆の心も躍っているに違いない。

ヤナギは口を一文字に引き結び、広間の片隅で宴の様子を観察していた。

仕立ての良い衣装は見る者全てを惹きつける。

ヤナギ様は見栄えのする容貌を持つていて羨ましいです、とチズ口は小声で言つ。

チズ口の言葉を無視し、ヤナギは格子の向こうに広がる夜空を見ていた。

爪の形をした月の光は淡く雪を照らし、幻想的な雰囲気を造り出している。奏でられている楽の音がより一層、美しさを引き立てていた。

外の凍える美しさと反対に、広間は人でじつた返しており、熱気立つて立っている。

今回の宴の主役であるムロは、台王の座す御簾の前で皆に囲まれて祝いの言葉をかけられていった。

嬉しそうなムロの表情は、ヤナギまで嬉しくさせた。

「こうして宴に興じるも、悪いことではないな」

独りじるといふと、近くにいた貴族が愛想笑いを浮かべて頷いた。

貴族は愛想笑いを浮かべながらも、どうして姫巫が広間の端にいるのだといったげな表情をしている。

国の懷刀とはいえ姫巫もこうじつた宴の席ではただの招かれ人である。どこにいようが関係ない。しかし、名の知れた貴族や武官は

ヤナギのそのような考え方をよしとしない。

先代は常に台王の横、もしくは一番近くに控えていた。それが彼らの頭にあるのだろう。

「ヤナギ様、ムロは立派に宣誓致しましたね。わたくしが気を揉むこともございませんでした」

チズコは誇らしげに笑顔を見せる。自分より若年のムロのことを、彼女は彼女なりに心配していたらしい。

聞けば昔、王宮の中にある童部屋で寝食を共にしていたというので、ヤナギは少々驚いた。

王宮内は広じようで狭い。誰が誰の知り合いか、皆目見当がつかない。

ムロの武官長着任の儀は滞りなく終わった。

高天原国秘蔵の八雲大蛇大剣やくもあらわのおおづのを台王より承り、台王への忠誠を誓う。

ムロの瞳には高天原国を一心に背負つて職務を全うしようといふ意志が感じられた。

「素晴らしい就任の挨拶あいさつだつた」

多くの人々より言葉をもらつているムロに、ヤナギはそつと投げかけた。

その声は決してムロのもとには届いていないだろうに、彼はヤナギの方を振り返る。

ムロは嬉しそうに笑つてみせた。彼の笑顔は凍えるようなヤナギの心にそつと灯を与えてくれた。

宴もより一層宴らしくなつてくる後半、最早儀式のことなど誰しも忘れているのではと危惧するほどに皆酒に興じていた。

ヤナギはチズコに酔いつぶれたムロを部屋へ連れて行くよう命じ、自分は一人のんびりと月の光を浴びていた。

ふと台王のいる上座へ目をやると、あんじや 閻者 伝達係のような者が台王に何事か耳打ちしているのが見えた。台王の顔が喜色に染まる。あやしく思い、ヤナギは眉根を寄せる。

台王は立ち上がり、手を打った。急に広間から喧騒が止んだ。

「今日の宴にはもう一つ意味があつてな。先だつて我が息子が都の視察をしていた際に黄昏国より亡命してきた者どもと出会つたらしい。その者共、たいそう稀けう 有な舞を披露したそうだ。宴もそろそろ佳境に入つてきたところ。黄昏国人の剣舞、見せてもらおうではないか」

黄昏国の舞。

そう台王が言つた途端、ざわめきが起つた。

ヤナギもじかに見たことはないものの、黄昏国に古くから伝わる剣舞は、この高天の原國の剣舞と違つて纖細な動きと技術を要するらしい。

しずしずと袈裟けさを被つた男が一人、広間に入つてくる。周囲は息を呑んだ。

圧倒的な存在感をかもし出し、異質な空氣をまとつてゐる彼らは手にした剣を鞘から抜かず、天に掲げた。

ひらりひらりと場を呑み込み、観客たちは花々が散り乱れる錯覚を覚える。

黄昏国剣舞を披露出来る者の数は限られている。余ほどの剣の使い手でないと、舞は陳腐なものにしか見えない。

技量と器量、度胸。全てを以つてして始めて体現出来るのが剣舞だ。

黄昏国人達の舞は、場をすぐ花化粧させた。誰も声を発しない。一しきり剣舞を舞い終わると、二人は台王の前に片膝をついた。彼らは息一つ乱してゐる気配を感じさせない。

一人がふかぶかと被つていた袈裟を取る。

左側の男が朽葉色くわは をした長い髪を見せた刹那、人々は大きくどよめいた。

「この都の中で」いつも堂々と異国人であると主張した者はかつてい
ない。

ざわめきが幾分か収まつた頃合を見計りつて、朽葉の髪色を持つ
男は唇を動かす。

「私はカガミと申す者。黄畠国の戦火より逃れるため、命からがら
蜘蛛の廻廊を通り、こちらにありますヤサカニと共にこの都へとや
つて参りました。此度の台王の」「温情、並びに王子の計らいに私ど
もはいたく感銘を受けている次第でござります」

ヤナギは小首を傾げた。

カガミの声をどこかでつい最近、聞いたことのある気がする。

カガミと名乗つた青年の横にいる黒髪の青年、ヤサカニは唇を一
文字に引き結んだまま頭を上げない。彼の髪が染色されているのは
明らかだ。少しだけ赤い部分が残つていて。肩まである髪の隙間よ
り見える左目につけた眼帯から、ヤサカニが隻眼であることが見て
取れた。

カガミは、俯き加減で台王の言葉を待つてゐる。

台王は扇子を広げ、口許の笑みを隠した。ひじ立てにもたれかか
り、気だるげに答える。

「よいよい、わしは趣あるものが好きでな。……剣舞は武に通ず
る者にしか舞えぬ。そなたの動向、楽しみに見守るよ」

微弱ながら棘を感じる物言いに気を悪くした様子もなく、カガミ
たちは面を上げた。

広間にいた女たちの甲高い声が響く。それとは別に、ヤナギの声
も上がる。

女たちが声を上げたのは、まさかもなくカガミとヤサカニが美丈
夫だったからに他ならない。

しかし、ヤナギが声を上げたのは別の理由からだった。

あの日 あの台王から逃げ出した日。

ヤナギを救つてくれた青年がいた。

朽葉色のたおやかな流れを作る長髪に鋭い輝きを灯した瞳。全て

を見透かしているような超然さで、ヤナギに“ハルセ”と名乗った青年はそこにいた。

妖艶に笑むカガミとは対照的に、隣にいるヤサカニの表情がヤナギと視線が合つた途端に青白く強張つた。

社殿へ舞い戻つたヤナギは眠りにつこうと目を閉じた。しかし、姫巫が受け継ぐ生々しい歴史とカガミの鮮烈な瞳がそれを妨害する。

「何故…………どうして」

口をつくのはうわ言のような言葉のみ。ヤナギは額に右手を当て、無心に天井を眺めていた。

命の恩人であるカガミに一言礼を述べたい気持ちは山々だったのだが、あの時、カガミは台王の護衛兵を幾人か殺してしまつていて、おいそれと近づくわけにはいかない。

（機会があれば、あらためて礼を言おう）

そう心の中で呟き、再び目を閉じる。

眠りの淵に立つた彼女の鼻腔にかぐわしい香りが漂つてきた。

『もう、お前を守れない』

誰かは言った。

『願わくは、もう一度と今生でまみえることがないよ』

懐かしい声が震えている。

『さよならだ、』

最後の言葉は聞こえなかつた。視界は朱色に転じ、体を生温い何かが伝つ。生温いものに手を当ててみると、それはがヤナギの体より流れ出でた血だとわかつた。

無数の声が場に響いている。

何かを語っている。この歌は何かをヤナギに語るよいつっこ
いる。

絢爛豪華な造りをしている王宮内を、我が物顔で歩いている者たちがいた。

彼らの横を女官が通り過ぎる。女官たちは顔を赤らめてひそひそ話をする。

「地下の国では、さぞ身分が高い方だったに違いない」

「ああ、せめて一言だけでも声をおかけ下さらないかしら」

「カガミ様とヤサカ二様……お一方がいるだけで、場が華やぎますこと」

閉鎖的な雰囲気を持つ王宮内では非常にまれな光景である。

高天原の民ということに自負を持つている宮内の者たちは大抵よそ者を嫌い、遠ざける。

しかし、カガミとヤサカ二は最善の礼を以つて迎え入れられた。宴の席にいなかつた者も、噂を聞きつけて訳知り顔で彼らに話しかける。

カガミはそのどれもに丁寧に言葉を返していた。彼の影の如く付き従つヤサカ二も、喋りかけられれば適切な言を述べる。

ムロはその様子を一人、西門兵の屯所の近くにある訓練場の前で眺めていた。今日は、雪解け祭があるためにムロたち武官も休みをもらつっていた。他の武官のように町へ繰り出しても良かつたのだが、何となく自主的に訓練しようと思つてこの場にいる。

つい先日、カガミもヤサカ二も、もう一月すればムロが指揮をとる西門軍へ入ると台王より聞かされた。それを拒否する権限がムロに与えられているわけもなく、ムロは、しぶしぶ一人の技能を確かめさせてもらつた。

その時見たカガミたちの力量を思い出し、奥歯を強く噛みしめた。カガミとヤサカ二の能力は非の打ち所がなかつた。ヤサカ二など、

左田の不自由などものともせずに西門兵数人を一瞬にして氣絶させた。

能力が低ければどうにかして軍へ入ることを防げただろうが、ともすれば自分と比肩する彼らの力をみすみす拒否することはできな

い。

(……黄昏國の流民……)

ムロ自身が黄昏國の民だからこそわかる。カガミたちを王宮に置いておくのは危険だ、と。

不安要素はいずれ牙を剥き、害をなすだらう。

(台王がどうなるが構わない。だが)

「随分と厳しい顔をしている」

はつとして後ろを振り向くと、悩みの元凶であるカガミが佇んでいた。圧倒的な存在感を放つそれは、少しだけ笑った。

「なるほど、頭の切れる武官長は俺たちに疑念を抱いているらしい」

「……気安く話しかけるな」

冷たく言い放つが、カガミはそれを気に留めてもいない。

「聞いた話では、武官長も黄昏國の民らしいじゃないか。同郷の者同士、助け合おう」

ムロは苛立つた口調でまくし立てる。

「一緒にするなつ。俺はヤナギ様に忠誠を誓つた者。既に黄昏國とは訣別している」

カガミの眉がぴくりと上がる。

疑惑と不快感が渦となつてムロの心を支配する。

「地下深くにもぐつていれば良かつたものを」

ムロは抜刀した。切つ先をカガミの鼻先に向ける。

カガミは静謐な瞳でムロを見据えていた。

「カガミ様！ 貴様……カガミ様に何をする」

ムロは声の主を横目見た。

怒りに身を震わせた隻眼のヤサカニが今にも飛びかかるばかりの形相で剣を構えていた。

ムロの表情が能面の「ごとく消失する。整った顔立ちは、ことさら彼を生身の人間から遠ざけた。彼は剣を構え直して名乗りを上げた。
「我が名は、高天原国に仕えし武官長が一人、ムロ。少しでも妙な動きをしてみる。その首二つとも搔き切つてくれる」

「待つた」

中性的な一声に、ヤサカ一もムロも動きを止めた。声の主を見つけようと、三人は辺りを見回した。

そして、ムロが「あつ」と叫んだ。

忌み部屋の裏から、チズコが姿を現す。

ヤサカ一は目を瞬かせた。

チズコの登場によつて、完全にヤサカ一とムロから士氣は消えてしまつた。

「ムロ、この方々は高天原国を救つてくれようとしてるんだ」「何を……この者は黄昏国^{さと}の者だぞ！ 良からぬことをたくらんでいるに決まつている！」

拳を握りしめて息巻くムロに、チズコは冷めた視線をやつた。

「元は黄昏国^{さと}の民だが、ヤサカ一はわたくしと同じ郷の者。彼らは隠密に黄昏国^{さと}の動向を探つてもらおうと「き姫巫に命じられていた者たちです」

無茶苦茶な、とムロは毒づいた。

自分がそのようなはつたりが通用する人間でないことなど、チズコはわかっているはずである。

幾たびの修羅場を越えて、ここまで生きてきたと思つていいのだ。双眸の鋭さは、大男でさえ萎縮^{いしづく}させる霸氣があるとも言われたこともあるくらいだ。

「そのような話、聞いたことも

チズコはムロの言を遮つて、乾いた笑い声を上げる。

「隠密がいると周囲に洩らしては、隠密は隠密でなくなります」

「しかし、今この時になつて高天原国へ戻つてくるなんて、不審だ」

ムロは剣をおさめ、不機嫌さを顔に出しつつ腕を組んだ。

「流れに乗じて高天原国へ帰還しようと思つたんでしよう、きっと。

……ねえ、ヤサカニ」

「ああ」

慌てふためいている様子は微塵もなく、ヤサカニは頷いた。

ムロは不審そうにしていたが、そして追及せずに溜め息を吐く。

「わかった。ヤナギ様の采女であるお前がそこまで言つのならば信じよう」

ムロがそう言つと、チズコは一件落着とでも言つそうな顔で笑んだ。

「ありがとうございます。さて、カガミ様……姫巫への謁見の件ですが」

「ようやく許可がありましたか？」

先程までは無関心そうに場の成り行きを見守っていたカガミが、身を乗り出してチズコに詰め寄る。それがまた更にムロの不信感を誘つた。

チズコは残念そうに首を横に振る。

「やはり台王の許可がおりませんでした。姫巫は高天原国が懷刀。おいそれと謁見出来る方ではないのです」

「そうか、とカガミは心なしひしそうに呟いた。

「お前は側近だろう。何とかならないのか」

ヤサカニの気安い物言いに幾分殺氣立つたムロだったが、チズコは気にも留めずに返答する。

「わたくしは側近ではなく采女。姫巫の日常の世話をする者。何とかする権限は持ち合わせていない」

「……」

重い沈黙が立ち込める。

そんな空氣を追い払うかのように、チズコが一度手を叩いた。

「さあ、そう気を落とさずに。姫巫には会わせられませんが、その代わり今日はわたくしめが都や王宮内をくまなく案内させて頂きますので」

チズコはそう言い放つと力ガミとヤサカ一の袖を引っ張り、訓練場より去つて行つた。

ムロは力ガミたちが見えなくなるまでずっとその背を睨み据えていた。

くちなしさいのもり
梶子齋森。

その圧倒的な靈圧を持った森より抜け出した力ガミたちは、鳥のさえずりさえも消え失せた荒れた土地に出た。

チズコいわく、台王の座す宮殿とは反対にある道に出たらしい。ひたすら真っ直ぐ行けば、第一の都と呼ばれている沢良宣さわらのぶへと辿り着く。

都の中でもあまり人が寄り付かないところを案内してくれと頼んだ力ガミを、チズコは北門をくぐつてここまで案内した。チズコが森に立ちいる前に北門の近くにある池で口をゆすぎ、手を洗うよう頼んできたので、仕方なしに力ガミたちは簡素な禊を行なつた。最初は木綿の衣をまとつて池の中へ入れと言われたが、片時たりとも武器を手放したくないと彼らはそれを拒否した。

梶子齋森の中心にある神杷山へ近付こうとすると、山を守護する主神おもさねが怒るために常人はこの森 자체に近付こうとしない。

地平に、大きく燃える火の玉が沈もうとしている。

空の真上は既に藍色の帳とぼりがかかつていて。

力ガミは左右に広がる竹林を眺める。

「これ程荒れ果てた土地にも、竹は生えるのか」

チズコは当たり前です、と冷たく返す。

「竹は生命力に溢れている。多少のことでは動じません」

二人のやり取りを尻目に、ヤサカ一は黙したまま、竹林ではなく煤すすけた地面に目をやつしている。通常ならば、地面は土色をしているはずである。しかし、この場所の地面は、墨を一面流したかの如く

真っ黒であった。

「…………なるほど、この近くにも蜘蛛の廻廊があるらしい」

眉をしかめてヤサカニは呟いた。

カガミは彼の方を振り返る。

蜘蛛の廻廊の出入口がある場所では、絶えず戦が起こる。それは、

万人が知っていることである。

チズコは軽やかな風に、装束の端をなびかせながら微笑んだ。

「よく気付いたね。そう、この竹林の奥には蜘蛛の廻廊がある。でも、安易に近付かないのが身のため」

「それは何故だ」

物珍しそうに、黒い塊にしか見えない小石を拾い上げながら、ヤサカニの代わりにカガミが問うた。

チズコは少しだけ逡巡してから口を開いた。

「数百年前に起きた戦によって、竹林奥部にある蜘蛛の廻廊の出入口は塞がつてしまつていると伝え聞いています」

「伝え聞いている、と言つことは、じかにその目で確かめたわけではなさそうだな」

嫌に食いついてくるカガミを恨めしげに睨みつけ、チズコは当然でしようと首を振った。

「この地は都からほど近いですが、戦で死んだ者たちの思念によつて呪われております。むやみやたらと立ち入る者なんていません」

凜然と言い放つたチズコに対し、ヤサカニが啞然とした表情をして見せたと思つたら、彼女に食つてかかつた。

「ちょっと待つてくれ、チズコ。そのような地へカガミ様を案内したというのか」

「誰も近付かないような場所が知りたいと仰つたのはカガミ様ではありませんか」

ヤサカニは言葉に詰まり、俯く。

「…………カガミ様たちが王宮に来られたと聞き及んだ時は、驚きました」

力ガミは首を捻つてヤサカニを見る。ヤサカニは心得た風情で頷いた。

「最初から都に潜伏するつもりだつたんだ」

「へえ、とチズコは驚きの声を上げた。

「てつくり、都ではなく沢良宜や近郊の邑に潜伏するかと思つてい

たけど……大胆な」

「木を隠すには森だといつだらう」
ヤサカニは、からかい口調のチズコに向かつて渋い顔をして見せた。

その横で興味なさげに佇んでいた力ガミだつたが話が一段落する
と、すつと目を細めてチズコを見る。その目の強さにチズコはたじ
ろぎ、嘸下した。えんげ彼女は小袖を口許に当てる。

「何か」

「姫巫が采女よ。ヤサカニの友として、俺たちを救つてくれたこと
には深く感謝している。だが、お前が俺たちの情報を台王、並びに
その配下へ流した時は……」

一旦、力ガミは言葉を切ると、次の瞬間艶やかに笑んだ。
「未来を視ると、宮内でまことしやかに囁かれているその眼球。二
つとも抉つてやる」

人間らしさを垣間見せることなく言つてのけた力ガミに、チズコ
は身震いする。

「力ガミ様、無駄に脅すことはお止めください。……悪いな、チズ
コ。ああ、そうだ。一応市井の様子も見てみたいんだが」

ヤサカニの頼みをチズコは了承し、竹林道を抜けたら左に曲がり、
獸道を通つて街道に出るよう指示した。獸道には時たま物盗りが出
没することもつけ加える。

「わたくしも一緒に行きたいのはやまやまなのですが、これから神
祀山へ行かなければならないので」

この時間帯であれば、まだ仕事を終えた商人たちが大勢歩いてい
るだろうから、それに紛れて駿嶺門はやみもん都に入る際、必ず通る門

へ近づく。門番は左右に一人ずつと、門上にある高門台 物見やぐらのようなもの に一人配置されていることも教えてくれた。カガミたちは黄昏国^{きみどり}の装束^{そうそく}を着込んでいるため、見咎められれば、ただで通行を許してもらえないことは明白である。なので、チズコは木端に書かれた台王の通行許可証を一人に渡してくれた。

「何かあれば、武官長のムロの名か、姫巫 ヤナギ様の名を出せば門を通してもらえるはずです」

言い終え、チズコは来た道を戻り始めた。

それをカガミは呼び止める。ゆっくりとチズコは立ち止まつた。

「助かった」

カガミが一言だけ告げると、振り返ることはせずにチズコは言った。

「礼は要りません。わたくしは、導き手ですか」

彼女の言葉は、何か起ることを暗喩^{あいゆ}しているように聞こえた。カガミとヤサカニはその後ろ姿が再び梶子齋森^{かじこさい}に消えるまで見守つていた。

「今からあいつは、姫巫のもとへ行くのだろうな」
焦燥感を感じさせる声をカガミは絞り出した。彼らしくもない、感情の入り混じった声色にヤサカニは戸惑いを感じたようで小さく「はい」とだけ返事をした。

カガミとヤサカニは、なるべく人目につかないように外套^{がいとう}をしつかりと羽織り、やや猫背氣味^{ねこぞり}で道の端を歩いた。

もちろん、異国民だとすぐにわかる髪色をしたカガミは、かぶり笠^{がさ}を田深に被っている。

王宮内では名が知れているとは言つても、町で彼を知る者などいないので、異国民と知れば何かしら因縁をつけられかねない。軒を連ねる市場の界隈^{かいわい}からわざと外れ、一人は狭い民家の隙間を

通つて人気のない区間に出了。

「あまり、大通りから離れるのは得策ではありませんが……どのよ
うな通りがあるか確認しておきたいので」

控え目な声でヤサカニは言った。

見るからに、貧困層が住まう地区である。

力ガミは何食わぬ顔で寂れた木の下に流れる川を覗いたが、濁流
とそれに浮かぶ汚物などの強烈な臭いに顔をしかめた。

物乞いがヤサカニの腕にまとわりつく。ヤサカニは、骨と皮だけ
の老人に、懐より取り出した銀を一つやつた。老人は頭を下げて、
おぼつかない足取りで去つて行く。

それを見ていた力ガミは芳しくない表情を示した。
かんぱ

「物乞いに金銀をやつても無駄だ。彼らに真に必要なのは、食糧と
清潔な衣服なのだから」

「はい、わかつてあります。ですが、今の私は食糧も、与える衣も
持ち合わせておりません」

力ガミは鼻を鳴らした。

大体、物乞い一人を助けたところで何が変わると彼は憎々しげに
口にした。整つた顔立ちの彼が剣呑な瞳をしてそう言つて、ことさ
ら言葉の強さが増す。

ヤサカニは炉端ろばたに座り込んでいる数多の浮浪者を見回し、嘆息し
た。

「光の高天原国。その甘い言に騙され故郷を棄てここまで来て、住
む場所がない人々がどれほどいるのでしょうか」

「だから何度も言つているだろつ」

かぶり笠が風にあおられて飛んでいかないように押さえながら、
力ガミは眉をひそめた。

「この国に光などない。あるのは姫巫が掲げし、まやかしの鬼火だ」
きつぱりと断言した彼の双眸は、獲物を狙う鳶とびの如く、見る者全
てを震撼させる。

しばらくして、富殿へ戻ってきたカガミとヤサカニは少し早い夕餉^{うけ}を食べ、湯浴みした。

富の中央にある露天の浴室は庭の風景も眺めることができ、田中の疲れを癒してくれた。本来ならば王族や客人だけしか使うことの出来ない浴室を使わせてもらえるのは、ありがたかった。普通、身分の高くない者たちは、西門の一角にある木造の浴室で水浴びして体を清める。

寝支度が整うと、カガミは壁に背を預けて持ち込んだ巻物に目を通す。巻物は全て黄昏国から持ってきたものだ。

隣部屋にはヤサカニがいる。一人が与えられたのは、二人一緒にでもじゅうぶん広い部屋を一つずつであった。

正式に軍へ入るまではここで過ごしていいと台王が言つてくれたため、ありがたく使わせてもらつてている。

窓から流れてくる風に、燭台の炎が頬りなげに揺らめく。

黄昏国のこと記した巻物を横に避け、高天原国のことについた書かれた巻物を開く。ある程度の知識を持つておかなければ上手く立ち回れないことを、カガミはわかつていた。

蜘蛛の廻廊を渡つた者は、故郷を忘れる。

巻物に記された一文が目に止まる。

教えてはもらつていたものの、実際に高天原国へ来てから改めてそれを実感した。

蜘蛛の廻廊を抜けると、あちらのことが酷く曖昧になる。それは高天原国から他国へ移動した場合もそうなるらしい。記憶はあるが、どこに何があつたという地理的なことは思い出せない。

「まるで、夢幻^{むげん}のようだ」

ぽつりとカガミは呟いた。

再び戻れば記憶は戻るというが、移動する度、自らがいた国の地理を忘れてしまうなど、ただごとではない。

しかし、それが世の理であるなら仕方ないのだとも理解していた。

数刻後。

燭台の火が搔き消える。

力ガミはついつら頭を揺らす。強い睡魔が彼を夢路へ誘つた。

『…………は、どづつ 緒にい』

傍げに揺れたのは誰か。

『これは黄昏国^{たつと}の尊き犠牲なのだ』

そのような犠牲ならば、いらないと言えば良かつた。喉元が酷く熱くて、何も言えずに黙り込んだ自分。

力ガミは飛び起きた。膝の上に乗せていた眷物が跳ねる。びつしょりと寝汗をかいていた己に気付き、嘲笑を洩らす。波打つ胸に手を当てて、額の汗を拭う。

今から遠い過去に起こつた出来事。そうであるのに。つい最近起つた出来事であるように感じる。

ふと力ガミが目線を落とすと、床に^{じよつみよう}拯済の花が散つていた。

いつも、過去の夢を見る時は決まって拯済の花が現実と夢の境で散る。そして、現にその生々しい灰色の花弁を落とすのだ。

疎ましい。

力ガミは心の底からそう思つた。

灰色の花は、強い芳醇な香りで以て力ガミを惑わす。思い出したくもない記憶ばかり引きずり出す。

『ハルセあにうえ』

久々に目にした拯済の花を手に取つて見ていると、そう声がした。

力ガミは表情を強張らせ、拯済の花を投げ捨てる。

胡座^{あぐら}をかいだ足にひじをつくと、両手に顔を埋めた。

しなやかに流れる長い髪が、入念に作りこまれた飾り物の如き端整な顔の一切を隠す。

「拯済の花弁一片 散りぬれば 愛しき蝴蝶 虚空へ消ゆる」

弱々しく吐き出されたその古き歌は、カガミが発したとは思えないほどにか細いものだった。

「ハルセ」は、もういない

半月と数多の星々が、そんな彼に光を投げる。

姫巫といふものは、その親兄弟であつても氣安く相見えることが出来ないのが慣わしであつた。

そう言いながらも催事の度に姫巫が場に姿を見せるのは、台王の権力を民衆に見せつける意図があるのだとヤナギは解釈していた。

「面倒なこと」

軽く咳き、寝台に横たわる。何もする氣力が起きない。

神杷山には何百種類の薬草が生えている。ヤナギは暇な時はそれらを採集して様々な薬を作ることが趣味であったが、一月前にあつた宴以降、無氣力な日が続いていた。

「ヤナギ様」

凛とした聲音が響く。

氣だるげに上体を起こして見れば、戸口にチズコと大巫おおみが佇んでいた。

ヤナギは慌てて立ち上がると、ふかぶかと一礼した。大巫と会うのはいつ以来だろうか。大巫は巫みこたちを統括する者であり、その睿智えいちは誰よりも深いと云われている。

ヤナギも幼い頃より彼女に様々なことを教わり、今にいたつている。

大巫は手を腹の前で組み、礼を返した。

「久しゆうございます、姫巫」

「……ヤナギ様、本日は大巫様がお話をしたいとのこと。よろしいでしょうか」

チズコに問われ、ヤナギは頷く。すると、チズコは「ありがとうございます。さあ、大巫様 お入り下さいませ」と言って大巫をヤナギの寝所に入れ、自らは退席した。

沈黙が流れる。

それを破つたのは、ヤナギだつた。

「大巫様……お変わりないようで良かつたです」

「姫巫様も……いえ、貴女は変わりましたね」

寂しげに大巫が笑う。その瞳は不安定に揺れていた。

「……貴女の舌に姫巫の証を刻んだわたくしを、さぞ怨んでいることでしょうね」

意外な言葉にヤナギは目を丸くする。それを肯定と取つたのか、

大巫は顔を伏せた。

「守つてあげられず、ごめんなさいね」

「大巫様？」

「ああ……いけない。ずっと、それを悔いていたから……つい本来の用件を忘れてしまうところでした」

大巫は薄つすら浮かんでいた涙を拭うと、口許を引き締めた。

「姫巫よ。高天原国は姫巫がいなければ存在しない国と、昔教えたのを憶えていますか？」

「は、はい。よく憶えています」

そのことを巫たちに教える時、大巫の顔は鬼気迫るものがあつた。なので、ヤナギもそのことをよく憶えている。

「良かつた、貴女は憶えているとは思つていましたが少々不安で。もう何年も前に教えたことでしたからね」

大巫はふつと息を吐いた。

「高天原国が懷刀 姫巫。“神の口”を持つ戦神。高天原国の全ての秘密を継承する者」

大巫は真剣な表情をしていた。

「良いですか、此度この宮に来た者たちと馴れ合つてはいけません。あれらは禍まが 台王や王子の目はごまかせてもわたくしの目はごまかせない。黄昏国匂いを色濃く残している者たちでござります」

ヤナギは大巫の話を黙つて聞いていた。

大巫が言う“禍”とはカガミとヤサカニのことだろう。

ヤナギは「わかりました」と返事をした。

王宮へ戻つていく大巫を、ヤナギは斎庭より複雑な気持ちで見送つていた。

（あの二人がこの高天原国に害をもたらすところの）
薄暗くなつてきた空を見上げると、遠く山間に夕日が落ちるところだつた。

翌朝、ヤナギはいつも増して早く目覚めた。

窓の外を見てみれば、日も昇つていない。ふくろうや虫が鳴いている。まだ真夜中であるらしい。

ヤナギは音を立てないように寝台から起き上がり、机上に用意されている装束に着替えた。今日は桃色の着物に紅色の帯、そして雪色の羽織が用意されていた。

急いでそれらを着込むと、外に出る。

思ったとおり、まだチズコたち采女も起きていないようだつた。社殿には、姫巫の世話をする采女が常駐している。采女の朝は早いのだと、いつもチズコは眠そうな目でぼやく。

ヤナギは大巫に、黄昏国から来た者たちと馴れ合つたと言われ、もう少し地下の国々のことを知らなければならぬこと思つた。

先代より受け継いだ記憶の中にある、地下の国々の知識。それが今の現状と食い違つてゐる可能性もなきにしも非ずだ。

戦場で見えるものも、限られている。

朝になるまで待つても良かつたが、思い立つたら居ても立つてもいられなくなつた。

王宮内にある書簡保管室には守人が就いていたから、ムロに頼み込んで入れてもらおうと考えていた。

（ムロが起きていなかつたら……その時は、いやがよく諦めよう）

ムロが夜間の警備に当たつていることを祈りつつ、神杷山を下り

た。

西門軍

武官長であるムロが統括する軍

は交代で夜間の警

備も担つてることを、ヤナギはチズコより小耳に挟んでいた。

武官長であるムロは、日々の責務に忙殺されながらも自ら進んで、夜間の警備をしていくことも聞き及んでいた。

神杞山と梶子斎森を繋ぐ楠の木に触れる。

景色は一変し、薄暗い森がヤナギを出迎えた。

ヤナギは一旦散に王宮を手指して駆け出した。落ち葉が乾いた音を立てる。地面の湿気にぬかるんでいる箇所で幾度か転びそうになりながらも、彼女は王宮に続く北門を手指す。

「…………姫巫…………」

闇を這う声がした。

ヤナギは立ち止まる。聞いたことがないはずの声であるのに、どこかで聞いたことがあるような声。

常闇洞泉のある右手の闇の方を、手を凝らすと薄つすら光る鬼火と共に、一人の男が現れた。

左目に眼帯を当てた黒髪の青年　　ヤサカ二は、険しい表情でヤナギを見る。

「高天原国の秘宝が何故、このような時刻に、この場所にいるのですか」

「そなたこそどうして、夜分遅くここにこる」

問い合わせ返すと、ヤサカ二は答える。

「…………チズコから、梶子斎森には数多の黄眉国の民が埋葬されていると聞きました。だから、せめて供養だけでもと思い」

「昼間にこのよつな場所に立ち入るのは得策でないから、この時分に来た、と」

ああ、とヤサカ二はたいそう不服げに肯定した。

偶然だらうが、ヤサカ二が花を手向けた常闇洞泉の近くにある墓石の下にはサコが眠つている。痛む胸を押さえてヤナギは氣丈にも会話を続ける。

「そなたは、チズコを知つてゐるのか」

「昔なじみだ」

端的にヤサカニは言葉を返す。

これにはヤナギも驚いた。チズコとヤサカニが昔なじみだという話は初耳だった。

彼は、ゆっくりと常闇洞泉を振り返る。

「あの洞穴の中に、魂が流れ込んでいくのを見ていたら数刻も経つてしまつた」

「常闇洞泉の奥に何があるかは誰も知らない。行つて帰つて来た者がいないの。でも、私は……あの奥には常世があるのだと信じている」

「……常世……か」

感傷的にヤサカニが笑んだ。鬼火が青白く彼の右横顔を照らす。
「高天原国が“地下”と呼ぶ我々の国では、この高天原国こそ常世と、そう呼ばれていた」

ヤサカニはヤナギを今にも殺しそうな目で睨みつける。

「だが、断言できる。この国は、常世などではない。幻想だ」

ヤナギは、何故こんなにもヤサカニが怒っているのかわからなかつた。まるでヤナギに対して激怒しているようにも思える。

ヤサカニは燃える瞳にヤナギを映し、一瞬の隙をついてヤナギの首もとを両手で掴んだ。

しまつた、と思つた時にはもう手遅れだった。ヤサカニの指にじわりと力が入つた。

「九年前、あの邑を焼いたのはあなたか」

「な……にを……？」

しらばつくれるな、と怒声がどぞろく。夜の静寂にヤサカニの声が波紋となつて響く。

「高天原国でも有名なはず。沢良宜の一角にあつた邑が、仇隠しの罪の名目で殲滅させられたこと」

よもや姫巫であるあなたが知らないはずがありますまい、とヤサ

カ二は付け加えた。

ヤナギは息もつけぬ状況で必死に記憶を辿つてみるが、そのような話、覚えていなかつた。

「……チズコの邑です」「はつとした。

「私たち家族をかくまつたが故に、邑は焼かれた。そして、私の左目左耳も」

ヤサカ二は左手だけヤナギの首より離し、肩に零れる髪と左目的眼帯を搔き上げた。そこには見るも無惨な左耳があつた。いや、耳とも呼べない。耳の残骸と云おうか。引きつり痕だけがある。そして、左眼があるべきところにあるのは、ただ空虚な穴。

ヤナギは目を背ける。息が苦しい。

ヤサカ二は誤解しているのだ。その邑焼きは先代姫巫の仕業だ。どうにかして真実を伝えなければ、と口を開く。

「それ……は、私じゃない。先代……せん……だいが……」

ヤサカ二は口角を上げた。

「私は覚えている。あなたがその場にいたことを。燃え盛る生きた炎の中、あなたはいた」

それは有り得ない話だ。姫巫でなかつたヤナギに、口にしたことを見現化出来る真象の力があるはずもない。

「まだ……わ……たしは、ひめみ……こじやなかつ……た……」

「嘘を吐くな！」

鬼の形相がヤナギの視界一面に迫る。

呼吸するのも難しくなつてきた。ヤサカ二は指の力を強める。

真象の力はおろか、助けも呼べない。視界が薄らぐ。ふつと意識が遠のいた。

「……殺して」

「何？」

ヤサカ二の眉がいぶかしげに上がる。彼の手の力が弱まつた。どつと酸素がヤナギを満たす。

「殺して、神に逆らつて、私を輪廻へ戻して」

虚ろな瞳で言い放つ。それは、自分でない誰かが言つているかの
ような感覚がした。浮遊感にヤナギはまじろむ。

「…………」

「ヤサカ二は困惑したのか、瞬く。

「姫巫は、いぬ方がいいのです」

ヤナギは静かな瞳で言い切つた。

ヤサカ二はそんな彼女を不審げに見つめる。瞳の奥に、^{いちる}一縷の躊躇いの色があつた。

鬼火は一人の周囲をゆっくりと回転している。

「散れ」

清廉な声が大気を切つた。

その瞬間、鬼火が搔き消える。

それと同時に、ヤナギの首からヤサカ二の手が外れた。いや、正確に言うと外れたのではない。何者かの出現によつて外さざるを得ない状況になつてしまつたのだ。

ヤナギは咳き込んで、その場に座り込んだ。ようやく普段通り息ができる。

ヤサカ二の体が強張つてゐるのが視界の端で見て取れた。

「ヤサカ二」

声はヤサカ二を呼ぶ。ヤサカ二は声もなく地面に片膝をつき、頭を垂れた。

声は次第に一人に近づいてくる。鬼火の灯りがなくなつた今、木々の隙間より地表を照らす月明かりだけが、唯一の光である。

誰なのかなど、姿かたちを確認する前からわかつていた。

声の主は、風によつて舞う己の髪を鬱陶しげに払うと、ヤナギたちの前に姿を見せた。

「カガミ様……申し訳ありません」

鎮痛な面持ちでヤサカ二は彼に謝罪する。それに答えるでもなく、

カガミは冷えた視線をヤナギへ送つた。

ヤナギの肩がびくりと震える。圧倒的な威圧感は以前助けてもらった時の安心感など一瞬にして霧散むせんしてしまつほどに強く、恐怖心をあおる。

力ガミは腰をかがめてヤナギの顔を覗き込み、嗤わいつた。それは心が凍りつくような笑みで。

彼は唇を動かす。月光を背に浴びた力ガミは、どいまでも大きな存在に思えた。

「このことは他言無用にしてほしい。でなければ、今ここで 前を斬る」

優しい手つきでヤナギの頭を撫でながら、口では恐れ戦くことを言う力ガミを前にして、ヤナギは何も言えなかつた。

姫巫の力を使えば何とかこの場をしのげるかもしれないなかつたが、込み上げてくる悲愴感と恐怖感で喉がひりついていた。

ヤサカニに首を絞められていた時よりも、格段に今の方が怖かつた。

力ガミの目が怖い。そして、彼の言葉が刃のように心臓を突き刺す。

射抜くような瞳はヤナギの全てを見通しているかの」とく妖しく煌めいている。

「……言わないわ」

下唇を噛みしめながら言ったヤナギを、力ガミは「いい子だ」とさらに頭を軽く撫ぜた。

何故か、力ガミを無碍むがいにできな」と思う。どうしてなのかは自身にもわからない。

(力ガミ……いえ、ハルセ。私の命の恩人)

言葉なく、ヤナギは力ガミを見据える。

力ガミは、ぐいとヤナギの腕を掴んで彼女を立ち上がらせた。

「送ろつ」

「大丈夫、一人で行ける」

「だが……」

カガミの申し出を楊はきつぱりと断つた。

「大丈夫」

私は姫巫だから、とヤナギはつけ加え、踵を返した。
宵闇が、ヤナギの姿を隠してくれた。

四季折々に色を変える美しい王宮の庭で、春告げ鳥が桜の枝で軽やかな歌声を響かせる。

常ならば蒼いはずの空も、桃色に霞んで見えるほど満開の桜や桃の花弁。

ヤナギは清らかな白い衣を身にまとい、浅く息を吸い込んだ。心にある想いを全て霧散させる。

瞳に映るのはただただ紅く彩られた舞台のみ。

数刻の後、その舞台でヤナギは春を迎えるための舞を踊らねばならない。

祝いの舞台。そつであるはずなのだが、ヤナギにとって紅い舞台はサコの処刑を思い起こせるものでしかない。

「……………ヤナギ様」

気づかわしげにチズコが声をかけてきた。

ヤナギは敢えて彼女の方を向かずに首を横に振る。

「集中したい。悪いけど、話しかけないで」

チズコは黙つて一步後ろに下がる。

祝福の舞を踊るのは、一体いつぶりだろうか。

長い間、戦場で季節の節目を過ごしていたため、舞自体覚えていないかも知れないと嫌な予感もある。

自然、金銀細工の扇を持つ右手に力がこもる。

高らかな足音を立てて、武官達十数人が近付いてきた。舞奉納の準備が整つたのだ。

彼らは先頭にいる少年を筆頭に片膝をつき、頭を垂れた。

「ムロ、そんなに畏まらなくていいのに」

ヤナギの声に、ムロは顔を上げる。彼は瞳を輝かせていた。

「畏まつてなどおりません。ムロは、ヤナギ様の護衛を任せられた

のが嬉しいだけです」

その言葉に嘘偽りは感じられない。ムロの声は弾んでいる。

ヤナギは幾分緊張の糸が緩んだ。

それに、とムロは立ち上がり舞台を眺めた。

「ムロは、ヤナギ様が舞われるのを拝見するのが初めてなので。楽しみです」

「武官長… 実は某も初めてで」^{それがし}「…」

「わたしもです」

「実は私も…」

武官たちは次々と声を上げる。

彼らが自分の舞を楽しみにしていることを知り、ヤナギは嬉しく思った。

長い冬の終わりと春を告げる舞。形式ばつていて舞ではない。ただ、喜びを表現すればいいだけだ。

「ヤナギ様、民に、この国に喜びを運んでください」
チズロはさう言つて微笑んだ。皮肉屋である彼女の、精一杯の笑顔だ。

「采女に同感でござります。戦が起こらない春なんて珍しい。姫巫様が舞を踊ればますますいい方向に物事が進むに決まっています」

「

武官の言つとおりだ。

例年と違い、黄眉国の動きが鈍くなつていて今だからこそ、こうして巡る季節を楽しめる。

ふと、ムロたちの後ろに、ぼんやりと周囲にある桜を眺めるヤサカ二の姿が見えた。

ヤナギの視線にいち早く気が付いたムロは、忌々しげに下唇を噛む。

「ヤサカ二… 余所見をしている暇がおまえにあるのか。仮にも台王よりヤナギ様の護衛の任、賜つただろうつ」

ヤサカ二はムロの鋭い瞳に目を丸くさせながらも頭を垂れた。

「申し訳ございません。不遜な態度を」
「私はそういう意味でそなたを見たわけでは。……顔を上げて」
「そろりと頭を上げたヤサカ二へ、ヤナギは艶やかに笑みを浮かべた。

「一月と少し前、ヤサカ二に首を絞められたことを忘れたわけではないが、どうしてもヤサカ二やカガミを悪者とは思えなかつた。

「黄昏国に桜はないと聞く。珍しかつたんでしょう?」

「……はい。久しぶりに桜を見たので、少し懐かしくなつてしましました」

「ほら、ムロ。いいじゃなし、桜は美しい。魅入つてしまつ気持ち、ムロにもわかるでしよう」

ヤナギがヤサカ二を庇つことに、どうしても納得出来ないのだろう。ムロは頷かず、腕を組んで小さく呻うめいた。

「……それにしても、カガミはどうした。ヤサカ二

チズコの言葉にヤサカ二は肩を竦すくめた。

「いつちが知りたい。カガミ様も姫巫の護衛の任を受けていたのだが」

「大方、さぼつているんだろ?。あいつは鍛錬もさぼる」

ムロは眉間に皺を寄せて毒づいた。

ヤサカ二は明後日の方を向く。カガミのさぼり癖は事実なのだろう。

（折角の春の宴なのに。あの人は来ないつもりなのかしら）

ヤナギの脳裏に、口端を上げて酷薄な笑顔を見せるカガミが浮かぶ。

冷たい美貌。笑つているのに、笑つていらない氷細工の心。きゅつと胸が軋んだ。

薄紅色が王宮全体を飾つてゐる。

台王直々に姫巫護衛の任を命じられた時、正直、カガミは勘づかれていたと思つた。ヤナギが台王にカガミたちのことを喋つたのかと案じた。

だが、どうもそれにしては台王のカガミやヤサカニに対する信頼には揺るぎないものがある。

『かの王は、身内を信じていないです』

ヤサカニはそう言つた。台王は高天原国の者を信じていない、と。『だから、外から来た者をすぐに王宮へ入れる。常に内部を入れ替えている。裏で散々怨まれるようなことをしてきたのでしょうか。俺たちへの信頼もやがては新しい者に移ろつていくはず』

カガミには台王の気持ちはわからない。わかりたくもない。

それにもうこれ以上、カガミはヤナギに近づきたくなかった。

「また任務を放り出しているのですか？」

カガミが与えられている室に、一言も断りもなく瘦せた少年は入ってきた。

質のいい衣装を着ているにも関わらず、それが厭味にならないのはその少年の人柄もあるのだろう。もともと体が弱く、最近になってようやくこの王宮に戻ってきたと聞いている。

カガミはその少年を横目見ると、ふいと立ち上がる。

「いいえ、クルヌイ王子。そのような恐れ多いことするわけがないではありませんか」

「カガミ」

クルヌイの声に、微かに咎めの色が含まれている。

「僕は君やヤサカニが他の武官たちから悪し様に言われて欲しくないんだ。折角、素晴らしい武才を持っているんだから」

「…………光榮です」

カガミはそつけなく答える。

クルヌイは一瞬言いよどんだが、拳を握つてカガミに言った。

「ねえ、カガミ。君には姫巫をちゃんと見て欲しい」

意外な言葉に驚き、カガミはクルヌイを凝視した。

「地下の国々を苦しめている元凶である姫巫。君は彼女が憎い？」
カガミは答えられなかつた。

答えないカガミを責めるでもなく、クルヌイは室の奥へ歩を進めた。陽射しを遮るためにかけられた御簾にそつと触れる。

「全ての災厄は、姫巫が運んでくる。そう、誰かが言つていた。でも、本当は、彼女はこの国に縛りつけられている哀しき人形でしかない。己の思考を敢えて踏みにじつて、戦場を駆ける」

ふとクルヌイの表情がかげつた。

初めて市井でクルヌイに会つた時、ただの貴族のぼんくらに見えた。なのに、今自分の前で質問をしてくる少年の聰明さはなんなんだ。

カガミは表情を引き締める。

「彼女は頑張つている。必死で僕の父や国のために頑張つているんだ。自らの身に血化粧をまとつて。本当は姫巫になんてなりたくないつたはずなのに」

「姫巫に、なりたくないつた…………？」

ようやくカガミは声を取り戻した。

クルヌイは頷く。

「どういう、ことだ」

驚愕の事実を前に、カガミは柄にもなく動搖していた。思わず敬語を忘れるほどに。カガミはクルヌイの細い肩を掴んだ。

「姫巫は……自ら志願し、巫力の強い巫がなるのではないか」

「常ならばそうだった。けれど、今代は違う。先代が選定したんだよ、ヤナギを。僕はその時まだこの王宮にいなかつたから人伝てにしか聞き及んでいなければ、先代姫巫は真名で彼女を縛つたらし

い

「馬鹿なつ。真名如きで人を縛れるわけがない」

吐き捨てるように吼えたカガミに、クルヌイは沈んだ表情を向けた。

「カガミ、姫巫は“神の口”から生まれてきたと云われている。故

に言葉を具現化出来る力を持つて いるんだ

「…………」

「あと、ヤナギが姫巫にならざる得なかつた理由はもう一つある」

一度、クルヌイは言葉を切つた。

そして、彼は呼吸を整え一気に吐露した。

「ヤナギが姫巫になることに反対した付き童が処刑された。もし、姫巫になることを拒めば、もっと多くの者が殺されるとヤナギは思つたんだろう」

力ガミの顔色が見る見るうちに蒼白となつていぐ。唇も血の氣を失い、白く変色している。

どんな時にも余裕を崩さない力ガミはなりをひそめている。

クルヌイは自分の肩に置かれた力ガミの手を優しく握つた。

「ほら、姫巫の護衛ついでにヤナギの舞を僕の代わりに見てきてよ。そして、彼女がどんな風に舞つていたか教えてね」

力ガミは何も云わずに足早に室を出て行く。頭の中では様々な思ひが竜巻の如く渦巻いていた。

上手く考えがまとまらない。

そうこうしているうちに、宴がある舞台に到着した。大勢の人だかりが出来て いる。

こういった大きな催し物の際、台王は王宮を開け放すらしい。

貴族を始めとして農民や商人、貧困層の者まで我が我がと舞台に近づこうと押し合つて いる。

「姫巫様、早くお姿拝ませて下さいませ」

「救いの神よ！」

「ええい、下級貴族のくせに我が物顔で陣取るんじゃねえよ」

「何と……下衆が！」

皆口々に姫巫の名を呼ぶ。

だが、それは“ヤナギ”ではなく“姫巫”を呼ぶ声である。

内心複雑な気持ちでそれを遠巻きに眺めていると、突如一人の少年が走つてきた。彼は怒りに顔を真つ赤にし、力ガミを殴ろうとし

た。

しかし、カガミはそれを条件反射的で素早く避ける。

「カガミー、貴様……今更来たのか！ もうそと民の整備に当たれ！」

ムロは相当頭に血が上っているようだつた。

カガミがいなかつた分、余分な労力を使わねばならなかつたのだろ。怒声を飛ばすと、彼はすぐに舞台の方へ戻つて行つた。

「カガミ様……つ。皆が舞台に近づかないよう押さえて下さい」必死に民の暴走を食い止めようとしているヤサカ一が、カガミを見つけて助けを乞つてきた。

カガミは取りあえずヤサカ一を助けようと一步踏み出す。

しかし次の瞬間、動くことが出来なくなつてしまつた。

民も兵も、皆より高い御輿みこしの上で状勢を見物していた台王も息を止めた。

しゃらりと鈴の音が鳴る。

鶯うぐいすも鳴くことを止め、ヤナギの登場を待つ。彼女はゆっくりとした動作で舞台に上がつた。

白魚の肌は太陽に照らされて今にも反射しそうだ。瑪瑙めのうを嵌めこんだような美しい色の瞳を縁取る睫毛は長い。唇に薄つすら引かれた紅は桜色で、彼女の体で唯一鮮やかだつた。

全てを包む漆黒の腰まである髪は一寸の癖もない。赤い舞台と白い装束の対比がより一層、薄紅の景色を引き立てる。誰も動けない。

ヤナギのまとう空気は俗世のものとは思えない程に澄んでいる。戦神と恐れられる姫巫はここには存在しなかつた。ただただ清い乙女がそこにはいた。

「…………姫巫様じや」

カガミの横で、杖をついた老人が涙声で呟いた。老人は泣きなが

ら手をすり合わせた。

「ばあさんや、きっと、今代の姫巫様は先代様の後を継いで、この国を守つて下さる」

カガミはそれを見て目を細める。

“姫巫”。

それは高天原国にとつての神そのものなのだと、ようやく認識できた。

可憐な少女は金銀の糸で纖細に作り込まれた扇を顔の前に構え、優美な舞を踊り始めた。

世に喜びが満ちてくる。まるで風や花の化身のような美しさである。

だが、中盤に差し掛かった頃、急に彼女は舞うのをやめた。辺りがざわめく。

「姫巫や、どうしたのだ」と台王が呼びかける。

しかし、ヤナギは黙つたままだ。

彼女の手から扇が滑り落ちた。

ヤナギの手足が小刻みに震え出したのが、カガミにはわかつた。段々顔色も白くなつていく。しまいには、その場に座り込んでしまつた。

意識する間もなく、カガミの足が動いた。

そうすることが当然であるかの如く、群がつた人々を搔き分けて舞台へ上がつた。

人々の声は遠い。

まるでヤナギと自分だけ空間が切り離されているように感じる。

「どうして……？」

潤んだ瞳でヤナギはカガミに訊いた。そんな彼女に手を差し伸べる。

ふつと微笑が洩れる。思いのほか優しい気分になつた。

「来い、ヤナギ」

ヤナギは我慢していた涙をぽろぽろ零しながらカガミの手を取り、立ち上がった。

朽葉色の髪が、瞳が、柔らかな衣のようにヤナギを包んでくれる。意外なほど優しい微笑。

サコの処刑を思い出し、抜け殻同然になつた心に明かりが灯る。カガミは腰帯に差した剣を抜く。何をするかと思えば、ヤナギが取り落とした扇をその剣で拾い上げ、涙で濡れた顔を上手く隠してくれる。

すっと扇の陰で、彼はヤナギの涙を拭ってくれた。
「一緒に舞つてやるから。泣くな」

ヤナギは言葉に詰まる。

カガミは高らかに剣を掲げた。

初めて見た時と同じだ。彼は凜とした面持ちで舞う。その上、ヤナギが入つてきやすいように大振りな動きをしている。ヤナギは扇を胸元に当て、すいと彼の剣に合わせた。扇についた鈴の音と、剣についた玉が擦れる音がした。夢中で舞つた。一人孤独に舞つていた先ほどとは違つ感覺。胸が弾んだ。

カガミの剣舞に遅れを取るまいと必死で舞つた。まるで風の中で舞う花になつた氣分だ。

ヤナギは最後の一足を運び終え、瞼を閉じた。

あつと皆がどよめいた。

何事だらうと目を開け、ヤナギも驚きの声を上げた。
桜吹雪だ。

ただの桜吹雪ではない。風も何も吹いていない中、花が舞つてい
る。そして、桜のほかに灰色の花　拯済の花も混じついていた。
「絶景だな」

ヤナギの横で、力ガミが呟いた。

ヤナギは声もなく微笑んだ。世の生全てが春の訪れに歓喜している。戦のない春を喜んでいる。

そうヤナギは感じた。

拍手喝采が巻き起こる。

ヤナギと力ガミに、はち切れんばかりの人々の喜びが向けられている。

台王も、ヤサカニも、ムロも。目に入る誰もが手を叩いていた。

「ありがとうございます」

感謝の言葉はするりと唇から滑り落ちた。

力ガミはヤナギを見下ろす。

その瞳は際限なく奥深く、ともすれば吸い込まれてしまいそうなほど深い色を湛えていた。

出会った時と変わらない、鮮やかな輝き
る者にとつては恐怖ともなる輝きを宿した、玲瓏な瞳がそこにはあつた。

一章 月水鏡剣《つきみずかがみのみつるせ》

翳^{かげ}は段々陰影を増していき、何かを飲み込んでしまおうと大口を開ける。

夜に咲く真白き月華を見上げ、ムロは挑むようにそれを睨みつけた。

「あげない」

秘めた決意の言葉は誰に向けたものか、彼自身しかわからない。さらりと抜かれた剣が、月光を浴びて鈍色に輝く。彼は悲しみのこもった眼差しでそれを見つめ、相貌を歪めた。

「師範、ムロは必ずやり遂げてみせます」
自らを戒めるための呟き。

最近王宮内は騒がしい。何かが起こる前兆である。乱れに乱れたこの高天原国に、また何かが蠢^{つぶら}こうとしている。彼はもうこれ以上、何かが起こることが嫌だつた。かりそめの平和、豊かな大地、知人らの笑顔。これでいいじゃないか、とムロは思う。

たとえかりそめの平和であるとしても、ここには笑顔がある。このかりそめの平和さえなくなつてしまつたら、世は混沌と化すだろう。

一時の休息もなく、人々は争い続ける。

やがてかりそめの平和は潰えるだろう。しかし、その時期をわざわざ早める権利は誰にもないはずだと彼は拳を握つた。

ムロは静かに市井に降り注ぐ星月の優しげな煌めきに、かの姫巫を重ねた。

自らの幸せや笑顔を犠牲にしてまで国を守りつとしている、高天原国が懷刀である姫巫、ヤナギ。

ムロの目に彼女はたいそう美しく見えた。潔いまでのその凜とした眼差しは、戦に赴く者たちの心を慰める。

ヤナギが必死に護りつとしている国を、おこそれと崩れさせるわけにはいかない。

ふと、一陣の風が吹いた。

生温いそれは、無数の枯葉をさらり、空に向かつて舞い上がった。

いくつの季節^{じき}が巡ったのだろう。

木枯らしが乱暴に女の頬を^{なぶ}騒ぐ。鼻先がつんとする寒さが辺り一帯を包んでいた。

焼けつく喉を鳴らし、ヤナギは戦場にいた。

「引きましょう」「うん」

牟田の緊縛した声に答える。

ヤナギは随分伸びた髪をなびかせて、馬に飛び乗った。砂埃にまみれてはいるものの、彼女の清廉さがかけることはない。

今回の戦の舞台は、高天原国^{たかまのはらこく}から南西部にある蜘蛛の廻廊を抜けた先、磨那櫂国^{まなかいこく}であった。

古くより高天原国と親交深い国^{はんき}だが、此度叛旗^{はんき}をひるがえし、滂沱^{ぼうだ}の兵を高天原国へと送り込もうとしていると隠密が知られてくられた。

壊滅状態となつた小さな砂丘の上にある国。

いつもの夜明けを迎えるはずだった国は、ヤナギたちの奇襲によつて粉々に打ち碎かれた。

朝陽が哀しく灰と化した国を照らし出す。崖上より迎える朝は、まるで傷痕を隠すかのように全てを黄金色に覆い尽くしていた。罪なき人々を殺し続ける自分は、きっと常世には行けないだろう。だが、それを憐む余裕などヤナギにはない。

次から次へ、戦の狼煙^{のひ}は上がる。

ヤナギは胸元で拳を握る。

年頃の乙女が身に着けるようなものでない防具を身にまとい、切り傷を身体中につけている。「もうこれ以上、高天原国に逆らわないで」

ヤナギの小さな咳きを聞きつけたのは、誰もいなかつた。

いつもどおりの討伐軍の凱旋。

がいせん

高天原国の紋である蓮と海原を描いた旗が高々と揺れている。民は彼らを歓迎していた。

台王より選定されし精銳揃いの討伐軍は、高天原国の民衆の誇りだった。

その最中、その光景を何の感慨もなさげに見やる女がいた。彼女はすっとした鼻筋と小さな唇、少々厄介そうに見えるつり目を持っている。あまり化粧は濃くなく、艶女つやめではないのは明白だった。しかし、平民とは思えぬ雰囲気をかもし出している。

「チズコ」

女の名を気安く呼ぶ声がする。

千鶴子は表情を変えずに声の主に顔を向ける。

左目に眼帯をしたその男は、長く伸ばした黒髪を鬱陶しげに手で払う。

「どうした、ヤサカ一。きみが市井に出てくるなんて珍しい」
ヤサカ一と呼ばれたその男は、「まあな」と言いつつ討伐軍を見て目を細める。その隻眼に映っているのは、紛れもなくヤナギだった。

た。

「我らが大将のお帰りだからな」

チズコは噴出した。

「ヤサカ一の口からそんな言葉が飛び出そうとはね。月日の流れを感じるよ」

「黙れ」

ヤサカ一はチズコを睨みつける。

しかし、彼女はそしらぬ顔で微笑を浮かべる。

「三年、か」

「…………」

「きみとカガミ様がこの国にやって来て来て三年経つ。そろそろ、行動

を起こす時だらう？』

『なあ、チズコ。お前は一体、何を考えているんだ』
ヤサカ一は低い声でチズコを威嚇した。

さあ、とチズコは笑う。

『わたくしが視た未来を崩壊してくれれば、どうなるがいい。た
とえ国が滅んだとしても』
暗き水底から浮き出た泡のよつた、寒氣を感じる声で彼女は言つ
た。

夜の帳を落とした如き闇色の髪はビームでも直線的で、彼女自身
の意志の固さを物語つてい。

強い光を含んだ双眸は、黒曜石を嵌めこんだかのように濡れてお
り、見る者全てを惹き込む。

一級品の彫刻品も霞ませるほど雅やかな容姿を持つ彼女は、台王
が座す謁見の間で今回の戦の報告を行なつた。完璧な形での勝利報
告に、台王は顔を綻ばせる。

『やはり、そなたを姫巫に、と言つた先代の田は正しかつたな』
満足げに薄ら笑う台王の顔を無表情に見やり、ヤナギは瞼を閉じ
て降頭した。

存分に羽を休めるがいい、と台王は労いの言葉を口にして玉座を
立ち、退室した。

彼が謁見の間より退室してから、ようやくヤナギは頭を上げた。
その場にいたその他の者たちも、彼女にならつて顔を上げる。
『姫巫、たいそう疲れているでしょう。しばらくは戦もないし、ゆ
っくりして下さい』

人懐こい笑顔で、高天原国王位継承第一位に身を置くクルヌイは
ヤナギに話しかけてきた。

ヤナギは表情を変えずに礼を述べて踵を返す。後ろに控えていた
ムロも同様に後に続いた。

豪奢な觀音扉を開き、謁見の間より出る。空気が幾分軽くなつた。大股で渡殿を闊歩しながら、彼女は肩で溜め息を吐いた。

宮殿内はとても広く、様々な人と擦れ違う。

誰しもヤナギとムロを見るや否や、深く腰を曲げる。

ヤナギは立ち止まらずに、目線だけ投げかける。

官や女房、付き童、巫。実に幅広い者たちが彼女に頭を下げる。謁見の間は宮殿の中でも南門に近い場所にあるのだが、ヤナギたちが目指す西門軍 台王の直轄下にはない軍。宮殿の西門に寝所がある の寝所からは微妙に距離があつた。

しんと静まり返つた宮殿内。これほど広いことは、台王の威厳を主張するためだけの場所に見える。

黒い柱一つ一つに彫り込まれた鳥や女人の絵柄もただ虚しい。天井に連なる玉飾りも意味のないもの。

「 馬鹿馬鹿しい。毎回毎回同じような報告を口上する」とが、どれほどつまらぬことか

ヤナギは軽薄な笑みを浮かべた。

ムロは何も云わない。

西門へと続く渡廊わたらうこうで楊と牟呂は立ち止まつた。

縁側となつてゐるそこに脱ぎ捨てた草鞋わらじをつつかける。

眩しい新緑の陽光が、視覚を刺激する。瑞々しい土の香りが少しだけ心を癒してくれた。

ヤナギ様、とムロが呼びかけてくる。

「死んでいった者たちの弔いをする。遺体は全て夕櫨峠せきひつとうげへ運んで」

「わかりました」

命令を受けたムロの行動は素早かつた。すぐさま西門軍の寝所に駆けて行く。

ヤナギはその後ろ姿を見ながら、歯を食い縛つた。

寝所の前には夥しい数の麻布に包まれた遺体があつた。

今回の戦のために徵兵した民だ。

磨那櫂国の軍師は切れ者だつた。

戦慣れしていない、徵兵された寄せ集めの者たちを次々に捕縛して人質とした。

見捨てたくなどなかつた。だが、あの過酷な状況下で彼らを救い出せず、奇襲という強行突破に踏み切つたのだ。

磨那櫂国の兵は最後まで降伏しなかつた。降伏したら命は取らないというヤナギの言葉を信じる者など誰もいなかつた。

『自國の民衆を犠牲にしてまで……あなたは戦に勝ちたいのですか』命の灯火が切れる寸前、磨那櫂国の軍師はそう口にした。人質がいる状態での奇襲など、彼は予期していなかつたのだろう。真つ直ぐな眼まなこは、戦の汚さをまだ知らない、青臭く幼いものだつた。

ヤナギは言葉に詰まつた。

追い討ちをかけるかのように、軍師は息も絶え絶えの中、嘲笑を洩らした。

『姫巫。あなたは哀しい人形ですね』

思わずヤナギは彼の喉を、手にしていた剣で突き破つた。自らの鼓動の速さに恐怖を覚えた。

絶命した軍師の死に顔は、安らかだつた。

ヤナギはふと自分の両手を見た。今は既に血みどろではないにも関わらず、血で汚れている気がした。

(……私は、守る)

何を？

心の奥で、誰かが訊く。

(国を)

何のために？ この国は、命を賭けて守る価値のある国なのか。

(わからない)

誰かは晒わらつた。それは楊に向けて、磨那櫂国の軍師が洩らした嘲笑に似ていた。

馬鹿な娘。だからこそ、愛おしい。意志を持たぬ人形になれば苦惱せずに済むものを。

「黙れ」

「黙れ、と言われてもな。まだ声もかけていない」

ヤナギははつとして前を向いた。

庭に佇んでいたのは、力ガミだった。この三年で、朽葉色の髪田をした彼はますます見目麗しくなった。

高天原国台王の寵愛を一身に受け、それに見合う武力も持つ彼は王宮内に溶け込んでいた。外の戦では参加させてもらえないものの、都の警備などを任されるまでに信を置かれる存在になつている。

ヤナギは眉根を寄せて顔を背ける。

その時、自分が多量の脂汗をかいていることに気がついた。先ほどの声は、真昼に起こったただの幻聴だと自身に言い聞かせる。

そして、その場を離れようとした。だが、それを力ガミが阻んだ。彼はヤナギの腕を掴む。

「…………力ガミ、私は忙しい。放して」

「戦で死者が出たそうだな」

無遠慮に力ガミは口火を切つた。

ヤナギは頭に血が上るのを感じた。頬が熱い。

「それが、どうした」

「いや、皆が騒いでいたから気になつてな。お前が出向いた戦で死者が出るなんて珍しい、と」

「今回の戦は、徵兵された民衆がいた。戦慣れしていない彼らを敵が狙うのは必然でしょ」

「…………そうだな」

「大きな戦だつた。敵も切れ者揃いで、徵兵を底う暇などなかつた。仕方がなかつた。死者が出て当然の難を極めた戦でした」

言葉の端々に棘が生じる。

言い訳じみた自分の弁が情けなく感じる。

「もう結構」

低い声色にヤナギの肩が震えた。

力ガミは緩やかに目を吊り上げる。

「それを食い止めるのが、姫巫であるお前に課された使命ではないのか」

心臓部を抉られたような鈍い痛みが身体中を駆け巡る。

「わかつてゐる、そのようなこと。そなたに言われるまでもない」

「では問おう。何人の死者を出した」

ヤナギはその答えを持ち得なかつた。

何人。

そんな生温い数ではない。何十　いや、何百の死者を出した。

力ガミは怒りを滾^{たぎ}らせた形相でヤナギに一矢加えた。

「答えがない」とは、お前はそれだけの命を蔑^{ないがし}ろにしたとい

うことだ」

「私は

「国を守りたいのか。台王を守りたいのか」

ヤナギは閉口する。一の句が紡げない。目頭が熱い。

「そこまでにしろ」

声の主はヤナギと力ガミの間に割つて入つた。

「ムロ」

苛立ちを隠せない様子で力ガミは妨害者の名を呼んだ。

「今、俺はヤナギと話しているんだ」

「黙れ。武官長である俺に楯突く氣か。大体、平兵士如きがヤナギ様に意見するなど言語道断」

力ガミはムロを真剣な顔で見た。

「人の命の扱い方の話だ。意見して何が悪い」

「命の扱い方など、ヤナギ様も百も承知だつ。貴様が口出ししなくてもいい」

力ガミとムロは睨み合つた。両者とも一歩たりとも譲らない。

先に引いたのは力ガミだつた。彼は目線を地面へ落とすと、一言

呟いた。

「戦は、人々を守るためにするものではないのか」

その言葉に、ヤナギの中の何かが弾けた。

小気味いい音が響いた。

ヤナギは泣きそうになるのを必死で堪え、自分より背丈がある力ガミを睨み上げる。

力ガミは思いきり叩かれた自らの左頬に手を触れ、ヤナギを見つめる。

ヤナギは全速力でその場を駆け出した。

「ヤナギ！」

力ガミの微かに上擦つた呼び声にも聞く耳を持たず、彼女は一目散に梶子斎森の方へ去つた。

力ガミはヤナギを追つて森に向かつた。

ムロは一人取り残され、手持ち無沙汰に周囲を見回す。西門軍の稽古場を見やれば、荷車が所狭しと置かれている。

戦場から持ち帰ることが出来た遺体の数はおよそ三十。

総勢六百で挑んだ戦の犠牲は二百余名。あまりにも多い犠牲だった。

火攻め、水攻め、雷落とし。様々な攻め方をした。

だから、味方の死体も敵の死体も人型を保つてているものは非常に少なかつた。

「戦場に出向けない者が、いけしゃあしゃあと……」

力ガミの言い様を思い出し、いきり立つ。

だが、彼の言が正論なのは、ムロにもよくわかつていた。わかっているだけに、一番耳を塞ぎたいものでもあった。

「あのお……」

恐る恐る、と言つた形容詞が正しいだらう。

小太りの男がムロに声をかけてきた。

「何だ、お前は」

じりりと一瞥すると、小男は、自分は商人で門番にも許しを得て

ここまで入つて来たと述べた。

その証拠に、赤い字で宮殿通行許可証と書かれた木簡がその手に握られている。

大方台王にお納め品をどこかの国が託したのかと思い、謁見の間に通そうとすると小男は大慌てで首を横に振った。

「いいえ、台王様にお品を持ってきたわけではござりません。カガミ様へお品をお持ち致しました」

「カガミ宛でだと？」

疑いの眼差しで小男を見ると、小男はいそと肩にかけた麻袋の中から、縄で出来た浅葱色の巾着袋を取り出す。

「門番の方にもお見せ致しました。中身を改めても結構でござります」

門番の検閲で引っかかるなかつたのであれば、危険物ではないことは確かだ。門番には目利きの者が選ばれている。毒薬、爆薬、その他危険物は瞬時に彼らが見破るはずだ。

巾着袋の中には、虹色の玉であった。

掌の大きさのそれは、宝玉ではないようだったが見事なまでの美しさだった。これを造つた者の技量が想像できる。素晴らしい才を持つた物造りだ。

「ただの玉、か」

「さようでござります。沢良宜にいるわたくしの知り合いが前にカガミ様に世話になつたらしく、どうしてもその玉を渡して欲しいと言われまして」

頭を搔いてそう言つ小男に、嘘を吐いている素振りは微塵もない。ようやく口は了承の頷きを返した。

「わかつた、生憎だがカガミは今ここにいない。これは私から彼に渡そう」

「はい、お願ひ致します。カガミ様には何卒、沢良宜のマクがよろ

しくと言つていたとお伝え下さい」

小男は深くお辞儀をして、足取り軽く南門へと去つて行つた。
ムロは掌に握りしめた玉を再び見つめる。照りつける太陽にそれを翳す。

虹色のそれは華やかなる色合いでしてゐる。

「サワラギ マク ハヤリヤマイ シキヨ」

ムロは光を受けた玉が映す文字を断片的に読み上げる。彼は口角を引き上げた。

「武官長、こんなところで何をしているんですか」

ムロはすぐさま玉を巾着袋に入れ、怪訝そうに自分を見るヤサカ一方を向いた。

三年の月日が経つても全く変わらない黒髪の長髪と左耳の眼帯を持つ青年は、射抜くような眼つきでムロを見てくる。

煌びやかに周囲を惹きつける力ガミニとは違つ種類の雰囲気を持つヤサカ二がムロは苦手だった。

真つ向から勝負しようとしても、この男は上手くそれを搔いぐぐるに違ひない。

虹色の玉は、彼らの仲間からの火急の知らせだつたのだろう。沢良宜にいたマクという者が、流行病によつて死んだのだ。

「荷車に全ての遺体を乗せ終わりました。皆、あなたの指示を待つています」

「ああ、今行こう」

そう言つて、ムロは鞘から剣を抜いた。

ヤサカ二はさつと顔色を変えて飛び退る。

ムロは巾着袋を宙に投げ、それを斬つた。巾着袋と一緒に中に入つた玉も真つ一つに割れた。

ヤサカ二はその瞬間、息を止めた。砂利と玉がぶつかつて小さな音を立てた。他の兵たちは何事かとこちらを見ている。

ヤサカ二は食い入るように一心に玉を見つめていた。この玉が仲間から届いたものだとヤサカ二が気付いているのかは定かでない。

ムロは鞘に剣を収めながらヤサカニに言った。

「ヤナギ様を悲しませるようなことだけはするなよ」

ムロが出来る最大の譲歩だった。

出来るなら、今この場でヤサカニを斬り、カガミを相討ち覚悟で討ち取りたい。

だが、もしそれをしてしまったとヤナギを守ることが出来る者がいなくなってしまう。それだけは避けたかった。

采女であるチズコは精神的に彼女を支えられるだろうが、戦場で彼女を支えることは出来ない。

それに。

「ヤナギ様はお前たちを信じているのだから

ヤナギは彼らを純粋に信用していた。

いつだつたか、ムロが彼らを悪し様に言つた時、彼女は哀しい目をした。

『ムロ、そなたは知らないのでしょう。私はあの夜、台王の怒りに触れたあの夜、カガミによって助けられた。だからね、私はカガミもヤサカニも信じてる。彼らは悪い人ではない』

言つて微笑む彼女の顔はたいそう安らかで、ムロは衝撃を受けたものだ。

ヤナギの無邪気な顔を、彼はその時初めて見た。近頃は、相次ぐ戦によつて彼女の純粋さは失われようとしているけれど。それでも、あの時の温かな信頼の言葉はヤナギの真実だろうから。

ムロもそれを信じてみようと思った。

黙り込んだヤサカニを置いて、ムロは稽古場にひしめく荷車の方へ足を向けた。

風にさらわれていない水面の如き静寂。^{しじま}息を吸い、吐き出すという動作でさえもためらつてしまふ格式高い空気。

鳥たちのさえずりがまた、澄んだ森の香りを有する。

力ガミは、やぶの中を搔きわけて走り続けるヤナギを懸命に追つた。だが、幼い頃よりこの梶子齋森^{くわなしそいのもり}で暮らしてきたヤナギと違つて、力ガミは森の構造などわからない。ついにヤナギの姿を見失い、途方に暮れて樹木にもたれかかった。酷く息が上がつてゐる。

ヤナギは足が早い。身軽なのだ。風をきつて走る彼女の姿は、まるで森の童神のようにも感じられる。

瞑目^{まぶた}すると、目蓋^{まぶた}に木々の合間から射し込む木漏れ日が映り込む。遠くの方から、水のせせらぎが聽こえた。

力ガミは目を開けると、水音がする方へ歩を進める。進むに連れて木々は密集し、複雑に絡み合つていく。森の奥へ進んでいる証拠だ。あまり人が立ち入らない場所に、樹木は根を張る。獸道のところどころに燈台が見受けられた。現世で惑つ魂を導くためにあるのだろう。

(常闇洞泉^{じょうやみどうせん}……)

間違いない、と力ガミは小声で呟いた。

チズコから、ちらりと話を聞いたことがある。梶子齋森が神聖さと同時に禍々しさを内包している理由。それは一重に、死者が黄泉路へ下る道 常闇洞泉があるからだ。

この道を行けば、常闇洞泉が姿を現わす。そして、ヤナギはそこにいる。

力ガミは確信めいた予感がした。

昼であるはずなのに、夜のように辺りが暗い。深緑が力ガミの体に影を落とす。

とうとうと滝の水が泉に流れ込んでいる。悲しい声のよくな風の

音。滝の後ろ側に、洞穴があるのだろうとすぐに察しがついた。

その岸辺にヤナギはいた。

カガミは息を殺して近づく。だが、すんでのところでヤナギは彼の気配に気付き、身をひるがえそうとした。

カガミはそんな彼女の腕を掴んだ。

「待て、ヤナギ」

「……離して」

ヤナギは俯き、カガミの手を懸命に払おうとする。彼女の頭はうつすら濡れていた。

「……夕櫛峠せきひつとうげへ死者を弔うのではなかつたのか。指揮官である姫巫ひむがいないと、ムロたちも困るだろ？」

カガミが真つ当な意見を言つと、ヤナギの抵抗は幾分和らいだ。

「戻るぞ。責務は果たせ」

ヤナギの手を解放し、常闇洞泉から視線を逸らした。常闇洞泉は、そこはかとなく死をかもし出している。

ヤナギはぼそりと呟いた。

「こんな森の奥まで追つてきて。ヤサカ一といい、カガミといい、恐怖心はないのか」

カガミは目を見開いた。まさか、このような疑問がヤナギの口から飛び出そうとは露ほども考へていなかつたのだ。

「誰がこの森に恐怖を感じるものか。清らかすぎる空氣は少々息苦しいと感じるが、恐ろしくなどない」

思つたまま答えると、ヤナギは目を丸くした。信じられない、と言いたげなその瞳はいたいけな少女のものだった。

いくら姫巫と言つても、まだあどけない少女なのだ。

カガミはヤナギに背を向ける。

その背は、ついてこいと無言で言つていた。無性に追いかけたくなる。まるで、追いかけなくては彼がいなくなつてしまつ気がして。

ヤナギは小走りでカガミの後に続いた。

風が身を切り、頬を刺す。鼻先が冷たくなる。春を迎えたと言つても、まだ寒さが強い。

一人は沈黙したまま、王宮へ戻る獸道を辿つていた。途中、神杷^{じんぱ}山^{やま}へ続く楠の木を通つた時、ヤナギは社殿へ戻りたいという思いに駈られたが、ぐつとそれを堪えた。

死者の嘆きを聞きたくなかった。死者の恨みを聞きたくなかった。今だけいい。ただ、少しだけ。人でありたいと思つた。

「どうした」

随分遠くからカガミの声がした。いつの間にか歩が緩んでいたらしい。

ヤナギは不安定な足元に注意しつつ、カガミのもとへ向かう。そして、口火を切つた。

「そなたにも、私は高天原国に縛られた傀儡^{かいらい}に見える？」

「何を

カガミはヤナギの問いに片眉を上げる。彼の反応は最もだつた。しかし、ヤナギの言葉は途切れない。

ずっと内に込めていた、幾年経つても消えない恐怖、不安、悲愴。何故か、カガミに聞いてほしいと思つた。

「姫巫^{ひみ}、と。戦場で呼ばれる度に感情が抜け落ちてゆく。まるで何かの入れ物にでもなつたよう」

カガミはヤナギの右肩へ左手を置き、力を込めた。痛みが走る。ヤナギは彼を直向きに見つめた。カガミの双眸は微かに怒りを含んでいる。それは間違つたことをした子供を叱る親の目に似ていた。「傀儡、入れ物？ 馬鹿なことを。ヤナギ、俺は本当に傀儡となつた者を知つている。眞の傀儡は、自分が傀儡かと恐怖することさえしない」

ヤナギは頷く。

「そう。私はまだ成長が止まつていない。だから、完全な意味の傀儡ではない」

木々のざわめきが一人を包む。一陣の風がヤナギとカガミの長い髪をなびかせた。木々の隙間より降り注ぐまろやかな陽射しは足元をちらちらと輝かせる。

「姫巫は皆、儀式が終わると成長しなくなる。でも、私は成長している。それだけが安寧」

「儀式？」

囁くように訊く彼の顔は固く強張っている。

姫巫の儀式を知らないカガミにヤナギは舌に刻まれた紋様を見せた。

カガミの喉が鳴る。

「舌を、焼かれたのか」

彼は擦れた声で問う。そして、ゆっくりとヤナギの輪郭を指でなぞり、瞳に剣呑な光を浮かべた。

「酷いことをするのだな、高天原国は」

「舌に紋様を刻むことで、神を降ろす。それが姫巫の伝統。でも

」
ヤナギは一瞬、言つことを躊躇つたが意を決して、先代姫巫と自分以外は誰も知らない秘密を口にする。

「私に神は降りなかつた。きっと、巫力が足りなかつたせいだと思う。……嬉しかつた。確かに、先代のような強い力は使えないけれど。私はまだ、？人？である」

カガミはヤナギの告白を黙つて聞いていた。左手は右肩に乗つたままだ。

「……そなたに、こんな話、するものではないとわかつているのだけれど」

再び零れる涙。自分でも戸惑つていて。カガミは高天原国の大巫であるかもしれない。大巫にもムロにも忠告された。それでも、彼に受け入れてほしいと思つてしまつ。

「怖い。このまま戦場を駆け続ければ、いつか何も感じなくなりそうで。いつか、神がこの身に降りてきそうで」

「？姫巫？なんてモノ、この世には存在しない」「え？」

カガミは微笑を洩らした。柔らかなそれは、大丈夫だという言葉よりもヤナギの胸に浸透する。

「在るのは、？ヤナギ？という女子であつて、姫巫であることに固執しているのは、ヤナギ自身だ」

懸命にカガミの言葉の真意を考えたがわからず、ヤナギは口を尖らせた。

「……カガミの言葉は、難しそぎて理解できない」

カガミは快活に笑つた。

「よく言われる」

ヤナギが頬を膨らませるとカガミは優しく微笑み、頭を撫でてくれる。

「出すぎたことを言つてしまつて、すまなかつたな」

ヤナギはゆつたりと首を振つて微笑んだ。

それを見て彼は目を細める。たうそう愛しげなものを見る目は全てを惹き込む。

「俺は、お前が笑つていてさえくれれば」

カガミは無意識に言葉を吐いていたらしく、ふと我に返つたのを口をつぐんだ。

そして話を変えた。

「さあ、夕櫓峠へ行こうか。今頃、ムロたちが追悼の準備をしているだろ？」「うう」「はい

カガミはヤナギの歩幅に合わせてくれた。
ほほほ

微かに触れる彼の手と自分の手を繋ぎたいと思つた。

夕陽が辺り一帯を茜色に染める。東門より出て少し行つたところに、夕櫓峠はあつた。古来より、夕櫓峠の真下に流れる渓へ死者の灰を流せば、死者は輪廻を巡り、再びこの世へ戻つてくると云われ

ている。

ヤナギとカガミが夕櫻峠に到着する頃には、追悼の煙が立ち上つていた。遺体を灰にしているのだ。

峠には武官たちのほかにも、追悼の儀を執り行うために大巫や巫、采女、死者の血縁の者たちがいる。

立ち昇る煙には数多の魂が混ざり合つてゐる。

「御魂が」

カガミの呟きに、ヤナギは弾かれたように彼を見やる。

「見えるの？」

彼は曖昧に首を横に振つた。

「いや、感じる程度だ」

言葉を濁すカガミにヤナギは首を傾げる。

「ヤナギ様！ 良かつた……今ちょうど祈りを捧げてゐるといひです」

ムロはヤナギが来てくれて心底安心したという顔で状況を説明してくれた。どうやらヤナギが来るまでの間、大巫や巫たちが魂鎮めの詞を行なつてくれていたらしい。

追悼の煙が上がつてゐる近くにいた大巫とヤナギの視線が交錯する。大巫はヤナギの横にカガミがいるのを見るやいなや、険しい表情をした。他の巫たちはカガミの姿を見て嬉しそうに頬を染めた。ヤナギはムロに頭を下げる。

「ムロ、心配かけてごめんね」

ムロは慌てた様子で両手を左右に振る。

「いいえ、先ほどの件はカガミが全面的に悪い。ヤナギ様がムロに謝ることなど露ほどもない」

むしろお前が謝れ、といった口を彼はカガミに向ける。それをカガミは綺麗に無視する。

弔いの煙を見上げるカガミの目は寂しそうだつた。

『そなたたちの前には、常世との世の境目があるだろ？。恐れず、その向こう側へ足を踏み出せ。そなたたちの黄泉路が明るくあ

らんことを

木綿の衣に身を包み、鏡月池の水で身を清めたヤナギの詞に、美しい魂の火はもつれ合いながら、遙か天へ昇つていく。

それを見守つてから、ヤナギは煙を見つめる者たちに向き直つた。「死んでいった者の分まで生きよとは言わない。死者はそなたたちに己の命を託したわけではないのだから。けれど、自らのために、生き長らえよ」

皆一様に目を閉じて、膝をついて額のところで手を合わせた。

ふと、カガミに目が止まる。彼は歯を食い縛つて追悼の煙を見据えていた。左手で腰帯に差した剣の柄を握りしめ、右手は右膝へ。そして静かに顔を伏せる。黄昏国流の追悼だとすぐに察しがついた。彼の隣にいるハ榮爾も同じような体勢で祈つている。

（カガミは、何か背負つている。とてつもなく大きなものを）

ヤナギはそう思いながら、祈りをささげるカガミを眺めていた。自分と同じ匂いがする。

追悼の儀式は無事終了した。皆、それぞれの帰路へ着く。

ヤナギはチズコと共に神杷山へ戻つた。社殿へ入ると、美味しそうな食事の支度が整つていた。ヤナギはチズコを見やる。

チズコは自分が作ったのだと少々自慢げに言つた。握り飯が二つに魚の塩焼き、梅の実を干した物に根野菜や薬草が入つたすまし汁。「帰つてきて早々、追悼の儀式。お疲れさまでした」

「ありがとう、チズコ。それにしてもそなたが膳を作るなんて……一体どうしたの」

ヤナギが疑問に思うのも無理はない。社殿にはチズコの他にも五人の采女がいるのだが、個々に役割がある。チズコの役割は采女の統括と姫巫の身の回りの世話だ。食事は別の采女が請け負つていて、ちなみに、ヤナギの寝所に無断で立ち入れるのはチズコだけだ。それだけ、ヤナギはチズコに信を置いている。

チズコは手をついて頭を下げる。

「此度の戦、付き添えませんで大変申し訳ありませんでした。食事

はその謝罪の意を込めて作らせて頂きました

「いいのよ、具合が優れなかつたんでしょう。もう大丈夫?」

「はい、おかげさま」

「それなら、いいの」

チズコが月物だったのは知つてゐる。そんな時に戦場へは行けないだらう。

二人は格子越しに月を見上げながら無言になる。導の光は、幾重にも線を伸ばしている。

「美しいですね」

チズコの声にヤナギは頷く。

「……月には未来が映ると聞きます。ヤナギ様はどんな未来が欲しいですか」

ヤナギは即答した。

「姫巫が要らない、幸せな世」

そうなつたら私も要らなくなるだらうとヤナギは思い、皮肉な口の考えに口許を歪めた。

「わたくしは、絶対にヤナギ様がお一人にならない未来が欲しい」チズコは真剣な面持ちで言い切つた。固い決意が垣間見える彼女は、ヤナギよりも年下とは思えないほどの意志を窺わせた。

「さあさ、食事にしましょ。山菜の茹で物もあるんです。取つてきますから先に米でも召し上がりついてください」

ぱんぱんと手を叩いてチズコは立ち上がり、部屋を出た。口にした米はじわりと甘かつた。

「そなたたちに、我が息子の近衛兵となることを命じる」

台王だいおおきみの言葉にカガミとヤサカニは頭を下げた。

謁見の間にて、台王の声が響いた。

ムロは物言いたげに腕を組んだ。

各重要階級に位置する者たち総出の寄り合い。皆は袖を口元に寄せ、隣同士で囁き合ひ。

現職の王子近衛兵のうちの一人を台王は扇で指し、「いやつらは今日まで役から外す」と言い放つ。彼らは寝耳に水な話に飛び上がつて仰天した。

カガミとヤサカニは頭を下げたまま沈黙を守り、肅々と場をしのいだ。

王子の近衛兵に他国の者が就くなど、前代未聞だった。しかも、西門兵から近衛兵が選抜されること自体、異常だった。

通常であれば東門兵、もしくは南門兵が命じられる。

西門兵は台王の膝元にいない兵 つまりは大事にされていない兵である。

西門には忌み部屋 捷問部屋 があり、皆近づく」とを嫌つている。そんな部屋の少し先に西門兵たちの寝所はある。武官の中には忌み部屋から漂う腐敗臭で不眠に陥る者もいた。

東門や南門は台王の執務室に近く、口おちたりもいい。西門にある簡素な鍛錬場とは違い、東門や南門にあるものは綺麗に整備されている。

そこには台王に氣に入られた武官や出自の良い武官が置かれている。他国籍の一般兵たちは西門へ振り分けられ、実力があつたとしても東門止まり。台王や王子の近衛兵という役職は与えられないのが今までの習わしだった。

また、東門兵や南門兵には武官長の役職と同じ意味を持つ、同官

長という役職が置かれている。

ムロが武官長をしているといつても、それは西門兵の長という意味であり、全ての兵を動かす権限は与えられていない。例外的に戦の時のみ、ムロが軍を動かす権限をもらっていた。

かたや司官長は戦へ赴いたことがない。彼ら東門司官長、南門司官長は？武官長？ではない。ただのお飾り役職だ。

そのため、台王や武官たち以外は武官長が軍の最高司令官であると思い違いをしていることもある。

ムロは此度の人事を良しと思わなかつた。たしかに、台王が任を解いた者たちは、任に對して怠惰な面もあつたかもしれない。

しかし長い間、王子に牙を向くことなく従順に仕えていたのだ。

カガミたちを台王や王子に近づけてはいけない。

そうムロは常より思つていた。彼らに重きを置けば、必ずあとあと痛い目を見るのは必定だ。

二人の雰囲気は、三年前より変化がない。この国に馴染まない異国の雰囲気。

人は何かをやり遂げようとしている時、決して他の色に染まらないものだ。それほどの意志を彼らは持つていて。

ムロはこの人事を決定する前の寄り合いで、猛抗議したが、台王はさらりとそれをかわした。

ムロは奥歯を強く噛んだ。

「よろしく頼む」

クルヌイはわざわざ立ち上がり、カガミたちの前に進み出で、ひどく嬉しそうに顔を綻ばせて声をかけた。

一人は王子の言葉に笑む。

「こちらこそ、どうぞよろしくお願い致します」

そう言って礼をしたカガミに倣つて、ヤサカニも礼をする。

この場にいた他の近衛兵も戸惑いながらも一人に祝いの言を述べる。

カガミたちはそのどれもに礼を返した。

王子の近衛兵は総勢十名。

どの者も？王子の護衛？を名乗るに相応しい力自慢の大柄な男たちばかりだったので、カガミたちはいささか浮いていた。

台王の側近たちや女官、采女たちも日々に喜びの言葉を述べていた。

謁見の間は異様な熱気に包まれていた。場にいるの者たちの中でも一人に声をかけなかつたのは、ムロと役職御免となつた元近衛兵たちだけだつた。

ひたとカガミたちを睨み据え、自分の席から動かないでいるムロの横へ、顎ひげをたくわえた東門司官長が漆塗りの杯片手に腰を下ろした。

「武官長殿、何を撫然としておる。台王と王子の御前であるが。それ、酒を呑まんか」

ムロが手をつけていなかつた盆に置かれていた杯に、司官長はとくとくと酒を注ぎ足した。

それはあふれて盆の上に零れた。

ムロは何も言わずに席を立つた。

「おうおひ、せつかく酒を注いでやつたといつのこと。これだから黄昏国の者は好かんのだ」

司官長の厭味は耳に入りもしなかつた。

ムロは執務室を横切り、庭に出た。庭師がよく整えた庭の砂利の模様は、渓谷の景色をしている。

気が急いた。自分が戻らなければ、西門兵たちは鍛錬をさぼるだらう。

「王子に媚売りよつて。地下の汚らわしい国出身の分際で」
忌み部屋の前まで来た時、不穏な声が聞こえた。

ムロは思わず忌み部屋の影に身を隠した。

「口をつづしめ。もはや、貴様はただの一般武官でしかない」
迷いない言い様。

ムロはその声の主をよく知つていて。

(ヤサカニ……?)

まだ謁見の間では宴が行なわれているはずだ。騒ぎに乘じて室を抜け出したのだろう。

そつと声のする方を覗き見た。

すると、ヤサカニだけでなく、そこにはカガミの姿もあった。彼らの前に立ち塞がっているのは飲んだくれの爺だつた。宮内でも随分古参者である彼は、皆から煙たがれていた。その爺はつい先程、王子の近衛兵の役目を下ろされた。

大かた腹が立つてカガミたちに罵声を浴びせているのだろう。ムロが武官長になつた時もそつだつた。

実力も人望も全て劣るにも関わらず、前武官長はムロに食つてかかつてきた。散々叩きのめしてやると、彼は恥辱ちじょくに耐えかねたのか谷へ身を投げた。安否はいまだわかつていない。

人は皆、そうなのだ。自分より格下だと思つていた者から自分の居場所を取られると、その者を激しく非難する。

爺は、なお喚わめいている。

「何を……。わしは先代姫巫の血縁ぞ!」

「血縁だから、何を誇ることがある」

カガミの冷静な問いかけに、更に爺は怒鳴つた。

「血統はこの世で一番重要視されなければならんものじゃ! それ

を、あの台王は……いとも容易く蔑ないがしろにしある」

爺の目は座つていた。彼は手にしていた酒瓶を口に当て、一気に煽る。

酒の臭いがムロのもとまで届く。

「台王の判断は正しいだろう」

ヤサカニが眉根を寄せて爺ににじみ寄る。

「何だとつ」

爺は若干腰を引きながらも果敢に食つてかかつた。

「このような真昼間より、酒を飲む貴様などに護衛が務まるものか」

そう言ってヤサカニは素早く爺の酒瓶を取り上げ、爺の腕を後ろ

へ回した。そして、足払いをし転ばせる。

地面につづくまつた彼の背中をヤサカ一は蹴った。

「くつ」

「どうした。？地下の汚らわしい国？の者に負けるなど。貴様は弱いな」

ぎりぎりとかかとで爺の背中を痛めつけるヤサカ一は笑っていたが、目は全く笑っていなかつた。

爺の顔が屈辱と痛みに歪む。ムロの脳裏に前武官長の顔が浮かぶ。これ以上は駄目だとムロは瞬間に判断を下した。ヤサカ一と爺の間に躍り出ようとする。

しかし、ムロの行動は不発に終わった。

今まで傍観していたカガミが止めに入つたのだ。

刹那、ムロとカガミの目が交錯した。カガミはムロが立ち聞きしていることに気付いていたのだ。

カガミはヤサカ一の肩を引き、爺を立ち上がらせる。

「よせ、ヤサカ一」

「カガミ様、しかし……」の者……」

「いい。言わせておけ。どうせ、吠えることしか出来ないのだから」カガミはふつと笑つた。底冷えする怜俐な笑み。

「爺、残念だつたな。お前が宮を牛耳つっていた時代は、終わつたんだ。これからは、日蔭より世を見るがいい」

「……」

ムロは音を立てないよう注意しながらその場を立ち去る。回り道にはなるが、中庭を通り、鍛錬場へ行くことにした。

今はカガミたちと喋る気分ではない。

カガミたちのやり取りを見て、ムロは自分にもああいつた差別があつたことを思い出した。

高天原国は閉鎖的な国だ。自分たち高天原国人以外に心を開く者など、そう多くない。

台玉だつてそうだ。

しかし、カガミたちは最高の礼を以て迎え入れられた。それには何かわけがありそうで、ムロは一抹の不安を覚える。

(あいつらは、？禍？だ)

大巫もそう言っていた。ムロもそう思つていて。

彼らがいることによつて、何かが動いている。

微弱ながら、水面が揺れているような感覚。得体の知れない恐怖が背筋を伝う。

(ムロが止める)

何かあつてからでは遅い。

ムロはヤナギという光に救われた。だから、絶対にヤナギを守り通すことを決めていた。

『どうしたの？』

『ひつぐ……』

『あら、あなた、サコと一緒に宮へ来た子じゃない。私はヤナギといつの。よろしくね』

『ヤ、ナギ様？』

命からがら逃げ込んだ高天原国で見た、最初の笑顔。彼女の微笑みは純粹で、ムロの心をほぐした。

彼女自身は覚えていないだろう、記憶。

いいのだ。

ヤナギの記憶から自分が消えた理由はサコから聞いている。だからこそ、カガミたちにこれ以上、ヤナギを揺さぶつてほしくなかつた。

ムロはようやく当初の目的地である鍛錬場に辿り着いた。

「やはりお前たち、鍛錬をさぼつていたな！ これから見回りの任務がない者は、追加で槍突き百回！」

思い思いに羽を伸ばしている武官たちの姿が目に入った瞬間、ムロの怒声が飛んだ。

初夏の香りは國中を清々しく駆け巡り、陽の光は農作物を成長させる。

高天原國の都を行き交う人々は皆、額に浮かぶ汗をぬぐっている。カガミとヤサカニはそんな都の大通りを歩いていた。ところせましと露店が立ち並び、人呼びが店の前で大声を張り上げている。

二人は夏風邪をこじらせた王子に代わって都の見回りをしていた。熱が高いというのに、どうしても視察に行くと駄々をこねた王子に自分たちが代わりに見てくると言った手前、適當にはできない。カガミたちが見ててくれるなら、と渋々室で横になつておくことを承諾した王子のことは他の護衛が見張っている。

カガミとヤサカニはなるべく目立たないように、麻で織られた生地の装束を着込み、袈裟を口深に被つていた。街道へ続く門前にある市場や一般の民が住まう区域を一通り視察し、都の南東にある貧困層の住まう区域へと足を向けた。

水の腐つた臭いと大量の蠅はエが貧困区域には充満していた。夏の日差しにやられた人々は軒下に座り込み、顔を伏せている。ぴくりとも動かない彼らは死んでいるかのようにも見えた。

「相も変わらず、凄惨な状況だな」

カガミは初めてこの区域を訪れた時から変わらない死の臭いに辟易しながら言つた。

「ええ、王子に報告申し上げねばなりませんね」

貧困区域の有り様を木簡に書き記しながらヤサカニは答えた。

希望の光が消えた目。昼だというのにいつこうに活気がない区域。骨と皮だけとなつて汚れた川の水を飲む子供たち。

全てを静かに見回し、カガミは袈裟をふかぶかと被り直した。

「ヤサカニ、都の中だけでもこんなにも落差が激しい。時は満ちた

な

「……」

答えないヤサカニを見据え、カガミは嘲笑を洩らす。

「どうした。情でも移ったか」

「そのようなことはないです。俺がどれだけこの国を憎んでいるか反論したヤサカニの表情に一片の惑いを感じ、カガミは常々思つていたことを口に出した。

「お前の場合、高天原国を憎んでいるというよりは姫巫への怨恨と見受けられるがな」

ヤサカニはぐっと声を詰まらせる。

畳みかけるようにカガミは言つ。

「三年前は訊かなかつた理由を訊ひつけ。何故、あの時ヤナギを殺そうとした」

一瞬の間の後、ヤサカニはカガミから視線を剥がした。

「……………彼女が、俺の左目と左耳を奪つた姫巫だからです」俯き加減でヤサカニは言い切つた。両の手の拳は固く握られている。

カガミは目を見開く。

「父上より、お前がその目と耳を失つたのは十一年前のことだと伺つてゐる。その時、ヤナギは六つ。まだ、あいつは姫巫ではなかつたはずだ」

「いいえ、ヤナギ様です」

強い口調でヤサカニは断言した。静かな川べりで二人は睨み合つ。ふと、ヤサカニが瞳を曇らせる。

「彼女自身に聞いたら、違うと彼女は答えました。その目が嘘ぶいているようにはみえませんでしたが

「だつたら」

「あの、目」

ヤサカニの手が震える。その手で彼は自分の顔を覆つた。

「あの空虚な宝玉のような眼。^{まなこ}間違いない」

力ガミは腕を組んで訊く。

「先代姫巫ではないのか？」

その問いにヤサカニはゆるりと首を横に振った。

「先代姫巫を模した彫り物を拝見しましたが、あの者ではなかつた。まだほんの幼子である女兒が、俺の未来を奪つた」

沈黙が下りる。ぼそりとヤサカニは呟く。

「力ガミ様の言つ通りかもしだれません。俺は、姫巫に私恨を抱いていり

「……ヤサカニ……」

生臭い風が一人の間を駆けた。

「それも、もしかしたら人違いかもしない憎しみを」

彼の顔は戸惑いと遣り切れぬ憎悪、そして哀傷に満ちていた。

ヤサカニはそれきり口を開かなかつた。

午後の日差しは突き刺すように肌に食い込んでくる。貧困区域を一回りした力ガミたちは再び市場を歩き出す。

二人は露店の一つで握り飯を買い、頬張りながら王宮へ足を向けた。

「ヤナギは」

力ガミが口火を切る。

横にいたヤサカニの肩がにわかに強張る。

しかし、力ガミは気にせず言葉を続けた。

「ただの少女だ。姫巫だなんだと祀り上げられているが、心根は純朴そのもの。タダビトだ」

ヤサカニは眉根を寄せて顔を歪めた。

「？姫巫？が、人だと。そういうのですか」

声をひそめて言うヤサカニに力ガミは頷く。

「ああ。ただ、この国のために道具として使われている哀れな者

怖い。

ヤナギが洟らした心の声を思い出し、力ガミは下唇を強く噛んだ。

「泣いていた」

「え？」

ヤサカニは予想外の言葉に呆ける。

一人とすれ違う人々はあまりの暑さに顔も上げたくないのか下を向き、足を引きずるようにして歩いている。

「このまま戦場を駆け続ければ、いつか何も感じないようになりそうで怖いと、泣いていた」

つい先日、ヤナギから聞いたことをそのまま伝えれば、ヤサカニは瞠目した。

カガミは慎重に言葉を選びながら唇を動かす。

「先代姫巫より真名で縛られ、あいつは姫巫になった」

「そのような、こと」

関係ないです、という声は小さく立ち消えた。

「ヤサカニ」

カガミは立ち止まる。ヤサカニの足も止まつた。彼は強すぎる感情を楊に持つてゐる。それはいつか、カガミにとつても黄昏国にとつても、ひいてはヤサカニ自身にとつてもよくない事態を呼ぶ気がしてならなかつた。

「憎しみを持てばそれだけ相手を意識してしまい、いつしか捻じれた感情を生む」

カガミは憂鬱げにヤサカニを見た。

「あまりヤナギに深入りするな」

都の視察から戻つたヤサカニたちは王子に報告をして部屋を辞す。カガミはその足で鍛錬場へ向かつた。彼の腕は確かだ。それは日頃からじつそり鍛錬を積んでいるからだとヤサカニは知つていた。ヤサカニはどちらかといえば知略を武器にしている。だから敢えてカガミの鍛錬につき添わず、書物庫に向かつた。

書物庫は寝殿のすぐ脇にあり、クルヌイの室からそう遠くないところにある。そこには国内外問わず貴重な文献や物が置かれており、

学の宝庫である。しかし、近年は知恵より武力を貴としている台王の意向もあり、貴族や豪族たちはこぞつて鍛錬に明け暮れて知識は一の次という風潮が強まっていた。

ヤサカニから言わせてもらえば、知力を上げずに武力だけ上げることとは馬鹿馬鹿しいことこの上ないことだ。

戦において、一瞬の判断が生死を分かつ。知識があれば瞬時に生存するにはどうすればいいか判断がつくだろつ。だが、なければ策は浮かばず死んでしまう。無駄死にだ。

カガミもそれは重々承知の上であり、夜にはよくヤサカニに文献や軍略の話を持ちかけてくる。そうしたことでも頭に入れず、ただ戦う者たちはただの捨て駒だ。

書物庫の戸を開けば、少しだけ湿つた匂いがした。ふと、扉の近くに座っていた司書官と田が合つ。ヤサカニと司書官はそれぞれ頭を下げた。

司書官は貴重な文献や木簡、物が盜難に合わないよう見張りも兼ねて置かれている。

ヤサカニはいつもどおり、軍略や戦に関する項目の文献が並ぶ棚を田指し、奥へと進んでいった。

(…………ヤナギ様。姫巫…………)

カガミの忠告は的を射ていた。

ヤサカニはヤナギを強く意識している。いつしていふ今でも、浮かぶのはヤナギのことだ。

この十一年。

田の田を、耳をもいだ者の顔を忘れたことはない。異常なくらいの意識は、カガミの言つよつに、捻じれを生みかねないことはヤサカニだつてわかっている。

(それでも)

姿を追つてしまつ。彼女がヤサカニに気づいていなくとも。彼はヤナギを常に田で追つていた。

「あ」

間の抜けた声がした。

ヤサカニは声がした方へ首を回す。

書物庫には先客がいた。

ヤナギが書物と書物の間に挟まっている。膝には分厚い文献を置いていた。椅子があるので、それに座ればいいのにと思つた。

ヤサカニは間の悪い気まずさを感じる。

ちらりと目を配れば彼女が何を読んでいるか察しがついた。ヤナギが読んでいたのは、黄昏国のことが書いてある書物だつた。

ヤナギはわざわざ立ち上がりつて一礼する。

ヤサカニも小さく一礼し、積まれた書物を脇にどけてヤナギの横に腰を下ろす。

ヤサカニは久々にヤナギと口を聞いた。

「黄昏国のことを探りたいのですか」

「ああ、即座に彼女は首を縦に振つた。

「ええ、黄昏国や地下にある他国のことを探りたくて。……戦で何度も地下の国々へ赴いているけれど、ちゃんとした知識はあまりないから。まあ、どの文献にも書いてあることは一緒だつたけど」

そう言つてヤナギは書物のとある一行をヤサカニに示す。そこには蜘蛛の廻廊を出た途端、黄昏国や地下の国々の記憶の一切が消えたという記述があつた。

「……黄昏国のは、淀んでいる」

ヤサカニは自然と話し始めた。何故、自分がヤナギへ黄昏国的话题をしているのか、自分自身不思議に思つた。

「この国のように虹色に見えたりはしない」

「虹色や青色ではないの？」

心底驚いた瞳で見つめられ、内心困惑する。ヤナギの双眸には美しい光がある。

戸惑いを悟られぬよう、平静を装つてヤサカニは答えた。

「いや、青色をしている時はありますが、高天原国のように澄んだ色ではない。くすんでいます。絶えぬ戦の狼煙がそうさせているの

だと言つ者もこゝへりこゝで、哀しい色をしてこゝる

「へえ」

真剣にヤナギが話に聞き入つてゐる様子を見ていると、自分の心が和らいでいくのを感じた。

「しかし、だからこそ存在出来るものもある。それが拯済の花。ヤナギ様は見たことがありますか?」

ええ、とヤナギは頷いた。

「夢から覚めた時に、散らばつていたことが何度か」

ああ、と八榮爾は納得した。

「黄昏国の者と夢路が同じだと、そういう事象が起こることがある。……拯済の花は、黄泉路を迷う者たちを導く花として知られています」

「そうね。でも、この国では長くもたないし、育たないわ」

「拯済の花は、澄み渡りすぎた土地では呼吸することの出来ない花なのです。だから、我々の国だけでしかあの花は生きられない」

「……美しく、氣高い花。自分の望まない場所では、潔くその身を投げうる」

ヤナギは読んでいた書物を床へ置き、両膝を抱える。彼女の物言いには、どこか憧憬が感じられた。

氣を取り直してヤサカニは言葉を続けた。

「あとは、そうですね。高天原国と違つて大きな建造物はごくわずかです。王の住まいもさほど大きくないし、豪族たちの家も簡素だ」
ヤサカニは黄昏国の王宮を思い描こうとしてみたが目の奥が霞がかり、黄昏国の記憶を手繕ることはできなかつた。

「ヤサカニは蜘蛛の廻廊を通つてこの国へ來たのでしょうか?」

当たり前のことを訊いてくるヤナギに疑問を覚えながらも、ヤサカニは頷いた。するとヤナギは小首を傾げる。

「何故、そんなにも記憶を保有しているの?」

ヤサカニは、そんなことかと微笑を洩らす。

「それは、黄昏国を出奔する際に白国や他国のことと記した文献を

持参したからです」

ヤサカニは数多くの文献をこちらへ持つてきていった。高天原国に行つた者は来た国のことを見れる。逆もまたしかり。

ヤサカニが十一年前、高天原国から黄昏国へ戻つた時は高天原国の地理がすっかり抜け落ちた。

「たしかに蜘蛛の廻廊を抜けると、あちらの国のこととは忘れます。だが、こちらに来てから得た情報は消えない。高天原国に来た当初は本当に戸惑いました。あなたが見られていた書物が述べているように、記憶が全て抜け落ちたんです。でも、俺には持参した書物がありましたから」

ヤナギは感心しきつたように両手を握り合わせ、目を丸くした。

「すごい機転。普通ならそこまで頭が回らない」

そう。普通なら、高天原国へ行く者は逃亡者が兵のどちらかだから黄昏国の文献など持つていかない。

しかし、ヤサカニたちの場合は違つた。始めから、潜入するつもりだった。だから、そんな用意周到なことができたのだ。

「ありがとうございます、ヤサカニ。おかげでたくさん情報を探ることができた。それにしても、そなたとこんなに喋つたのは初めて」

礼を言つヤナギに思わずヤサカニは訊いた。

「あなたは、怖くないのですか」

きょとんとしてヤナギは瞬いた。

戸惑うのは当たり前だ。いきなり、怖くないのかと訊かれて戸惑わない者がいるだろうか。

左目があつた部分が、ちりちりと痛む。幼き少女の残像がちらつく。

「俺は、三年前にあなたを亡き者にしました。そんな俺が恐ろしくないのですか」

ヤサカニの問いに、ヤナギは目を吊り上げた。人形のよつた美しい瞳に一抹の炎が宿る。

その生きた瞳は誰かに似ていて、ヤサカニは息を詰まらせた。思

わず視線を彷徨わせた。

「恐ろしくなんてない」

彼女は真摯に答えた。迷いは微塵も見受けられない。

「その後、一度たりともそなたは私を傷つけようとした」

「それは、機会を見計らっていたからかもしませんよ。今のように

な

ヤサカニは緩くヤナギの首筋に手を当てる。彼女はその手をやんわりと外した。そして、言つ。

「殺意を感じない」

そう言われて、はつと我に返つた。ヤサカニは素早くヤナギから離れると、片膝をついて頭を垂れる。

「……申し訳ございません。恐れ多いことを」

「いいえ」

優しい声色。彼女はこつして自分を傷つける者全てを許すのだろうか。許すことは、自らの傷を抑え込むことでもある。

それを考えると、心臓に鋭く鈍い痛みが走つた。

それに、とヤナギは付け加える。

「あの時殺されていたら、私はその程度の役目だったといつこと」

「…………」

「では、私はこれで退室します。祈祷の刻限が来るので」
しなやかな動作で書物庫を後にするヤナギの姿が見えなくなるまでずつと見つめていた。

彼女の姿が見えなくなると同時に、ヤサカニはその場にうずくまつた。

（まるで操り人形のようだ）

笑わないからくり人形。手足にくぐりつけられた糸で好き勝手に動かされる哀しい人形。

『あの時殺されていたら、私はその程度の役目だったということです』

ヤナギは死ぬことを恐れていない。

危うげなヤナギの思想が、ヤサカ一は気にかかった。

突きせざる視線を全身に感じながら、カガミは真っすぐ前を見据えて西門を指していた。

夕刻。もうすぐ飯時である。魚の焼ける香ばしい匂いが辺りに漂っている。

クルヌイ王子の室前で番をしていたカガミに、ようやく交代の声がかかった。カガミは早々にヤサカニと王子の見張りを交代し、西門に戻ってきた。

庭を通りてみると、池の周りにいた女官や台王お抱えの女たちから艶やかな目で見られる。

まるで、獲物を狙う女郎蜘蛛。

カガミはひつそりと口角を吊り上げて晒^{わら}つた。自分が目立つらいといふのをカガミは心得ていた。皆、毛色の違う動物を愛でる日をしている。カガミは解き放っていたざんばら髪を束ねる。この髪が陽にさらされて金色に見えるのも人の目を集める原因なのだろう、と思った。

(今はいい)

悪意を感じる視線は微々たるものだ。台王が大っぴらにカガミやヤサカニを信じているから、誰も悪意を表向きにできない。

この王宮へ来て三年。もうそろそろ、台王の気まぐれは翻るだろう。その時、今全身に突き刺さっている好意の視線さえ容易く悪意に傾くことをカガミは重々承知していた。

たとえ何年この地に住みつこうとも、この地の者にはなれないのだ。いや、なろうとも思わなかった。

(俺は、黄昏国の者。高天原国の者ではない)

強固な想いは決して折れることはない。

鍛錬場に着いてみると、人の影は一つもなかつた。皆、夕飯を食べに表通りにある店や飯所へ行つてゐるのだろう。

ふと、微かに動くものが目に入った。西門兵の屯所のすみに胡坐をかいているその人物の顔は、苦しげに歪んでいた。夕日が赤く全てを染め上げても、その人物が青白い顔をしているのは一目瞭然だつた。袖を托し上げて、しきりに両腕を強く擦る彼の異常な様子を見て、カガミは目を見開く。

「ムロ……お前」

カガミの気配に全く気づかなかつたのだろう、ムロは慌てて袖を下ろす。

しかし、時既に遅かつた。

カガミはムロの手首を握つた。そして、一気に袖を捲り上げた。

「…………」

ムロは無言でカガミを睨み据える。その頬には脂汗が伝つていた。呼吸も荒い。こうしている今にも、ムロは倒れてしまいそうだつた。

カガミの瞳が冷たくなる。

「まじな
呪い
か」

「黙れ」

鋭い拒絶の言葉を受けてもなお、カガミは言葉を止めなかつた。「常々、お前からは妙な気配を感じていた。まさか、呪いで成長を促進していようとはな」

「くつ

悔しげにムロは目をそむける。

ムロの両腕には黒い墨で描かれたような模様が入つていた。肩には大輪の禍々しくも見える花が咲き誇つている。墨が入つていない皮膚は壊死しているのか、赤紫色に変色していた。

「黒き拯済の花」

呪いだつた。黄昏国に古より伝わる己の身を犠牲にした呪いの一種。呪いには様々な種類があるが、黒き拯済の花柄は成長を促進させて強大な力を付与させるというものだとカガミは記憶していた。

しかし、呪いは禁忌中の禁忌。下手をすれば媒体を死に至らしめるもの。

その呪いの彫り方を知っている者も今や数人程度しかいないはずだった。

もともと、戦に子供らが駆り出される際に彫られたといいうわくつきのものである。無理な成長促進は大きな負荷になる。

こうして、ムロが生きていることさえ奇跡に近いことであった。古文書には、子供らは気が狂うか体に走る痛みに耐えきれず一年も経たないうちに命を絶つたと記されていた。

ムロはカガミが呪いのことを知っているのがわかつた刹那、苦虫を潰したような表情を垣間見せて脱力したように顔を伏せた。

「ヤナギは、知っているのか」

「言つな！」

悲鳴に似た怒鳴り声が上がる。

全てが朱に染め上がる刻限おおまがどき、大禍刻。静まり返つた辺りが空恐ろしさを増加させる。

ムロの体が小刻みに震える。

「ヤナギ様は、何も知らない。これは俺の独断でやつたこと」

「そこまで姫巫ひみが大事か」

カガミの問いに、ムロは怪訝な顔をしてカガミを見る。その顔は当たり前だらうという表情をしていた。

「お前は黄昏国けんのんの民だらう」

思わず口をついた言葉に、ムロの動きが止まった。

「黄昏国けんのんの、民……」

ムロは剣呑な光を目に宿した。その目は見る者全てを震撼させるものだった。

カガミはわずかばかりたじろいだ。

「その事実のおかげで俺がどれだけ泥水を飲んできたか、貴様にはわかるまい。その不遜な物言いに立ち振る舞い。カガミ、貴様は黄昏国の中でもさぞ温かで幸せな位置に身を置いていたのだろうな」カガミは困惑した。予想だにしていなかつた物言いに上手く言葉を取り繕つくえなかつた。

「そのようなことは、

「ないわけがない！ その朽葉色をした髪が艶やかなことで容易に想像がつく！」

返す言葉が見つからなかつた。何を言つても、今はムロに届かない。

「……凄惨だつた

ゆづくじと、噛み締めるよづこムロは語り出した。

「黄昏国での生活は、常に飢えと渴き、そして死との隣り合わせだつた。俺の村は小さな村で、蜘蛛の廻廊の近くにあるがために幾度も戦の舞台になつていた」

情景がまざまざと浮かんでいるのか、ムロはしきりに左肩を右手で強く押さえている。

「物心ついたとほぼ同時に母は黄昏国のおに殺された

「黄昏国のおにだと？」

まさか、とカガミは心中で吐き捨てた。

黄昏国のおにが同胞であるはずの民を殺したというのか。信じがたい話に、カガミは耳を塞ぎたい衝動を必死に堪えていた。

ムロは重々しく頷いた。

「娼婦にされたんだ。体の弱かつた母は、その屈辱と兵たちの欲望に命を落とした」

ムロは小さく嘆息した。

「……何度も戦だつたろう。俺とサコ ヤナギ様の元付き童だ
は運悪く高天原国のお陣へ迷い込んでしまつたんだ。そこで、サ
ブライ元武官長と出会つた。彼は俺たちが孤児だと知ると、優しい
眼差しと涙をくれた。それが、どれだけ温かつたことか。サブライ
元武官長は俺とサコを引き取つてくれた。飢えと渴きのない場所へ
連れてやると彼は言つた。まあ、俺もサコも信じていなかつたがな
ムロは固く祈るように指を組んだ。

「けれど、いつしか彼を師範と呼ぶよになつた。そして彼の言つたとおり、俺とサコはこの命を賭けても惜しくない者を見つけた

一旦、間を置いてムロは安らかな表情を見せた。

「それがヤナギ様」

「……」

カガミは言葉を紡ぐことができなかつた。

「……誰にも文句は言わせない。ヤナギ様の幸せはサゴへの弔いの光となり、俺の心の安息となる。この呪いはその誓いの印。誇りだまだ身体中、痛みがあるだろうにムロは果敢にも立ち上がる。二人の間を生温い風が吹き抜ける。

「俺は、黄昏国^{カツハク}の民などではない。立派な高天原国^{カミタケン}の民だ」燃える瞳を見つめるに耐えられず、カガミは思わず踵を返した。飯を食べ終えて満足げに屯所へ戻つてくる兵たちと入れ違いに、カガミはその場を去つた。

「近頃はとんと？神の腕^{かいな}？の噂、聞かなくなりましたね」

日照りが続いていたため催された雨乞いの儀を済ませ、神杷山^{シムハヤマ}へ帰ろうとしていたヤナギの耳に、そのひそひそ声は届いた。思わず振り返る。

いたのは一人の兵だつた。古ぼけたゆがけをしているところから推測するに、西門兵^{シムモン}であろう。

「ああ、？ハルセ？だろう。どうせ、油断を誘つているだけだ」

「地下の国々最後の救い、？神の腕？、でしたつけ。でもここ数年、噂も聞かないのはおかしな話だ」

地下の国々の最後の救い、？神の腕？。

？ハルセ？。

『俺は、ハルセといふ』

ヤナギは口許を押さえた。

いかに自分が無頓着に戦場にいたか今ならわかる。敵の名すら知らなかつたのだ。

ヤナギは動搖しつつも平静を装いその場を去る。

ヤナギがいることに気が付いた兵たちはふかぶかと礼をした。

脈が速くなつていく。

あの時 カガミが自らを？ ハルセ？ と名乗つたあの時、気が付いていたら。

ヤナギは自分の凡庸さにほとほと嫌気がさした。？ 神の腕？ の手腕は知つてはいる。彼のおかげで戦場にて何度も苦渋を呑んだ。それは先代姫巫も同様である。

「カガミを……カガミを知らない？」

王宮の中央部にある庭園で、燈の灯つた池回りを散歩しているクルヌイとヤサカニに、ヤナギは息も絶え絶え尋ねた。

その緊迫感が伝わつたのか、ヤサカニは早口で答える。

「カガミ様ですか？ 西門の修練場にいると思いますが……」

「ありがとう、と礼を言いヤナギは西門へ駆け出した。

砂利が草鞋わらじと足袋の間に入つてしまい、痛いと感じたが、立ち止まる気にはなれなかつた。

王宮は広い。どうしてこうも似た建造物が敷地内にあるのかと不満を洩らす者もいるくらい、様々なものが建つてはいる。

急いでいる時に限つて西門への近道である通路が見つからなかつたりする。ずっと、この宮内にいる者だつたら迷わないのかもしない。だが、年の大半を戦場か神杷山にある社殿で過ごすヤナギにとって、王宮の勝手はいまだにわからなかつた。

仕方なしに庭園からぐるりと東門へ出てから西門を目指した。

いざ訓練所に着いてみると、そこは夕飯を済ました兵たちでごつた返していた。カガミがいいか、せわしなく視線を動かしていると屯所のすみに積まれてはいる角材の上に腰を下ろしてはいるムロをつけた。

一目散に彼へ近付いていくと、相手もそれに気付き、立ち上がつ

た。

「ヤナギ様」

「ムロ、カガミを知らない?」

ムロの言葉を遮つて、開口一番ヤナギは訊いた。

ムロはそれに答えず、無言で背を向ける。

「ムロ……?」

様子がおかしいと思い、そっぽを向いたムロの前へ回り込む。

「……知りません」

彼は一言だけ告げると、ひどく思いつめた顔をして屯所の中へ入つていった。

どうにも様子がおかしいムロを気にしつつ、ヤナギは鏡月池の近くまで来ていた。カガミと話さず、このまま社殿へ戻るのもなんとなく気が引けたが、いのいものは仕方ない。池の水で手を洗い、口をゆすいでいると、山菜の入った籠を持ったチズコがひょっこり現れた。

「ヤナギ様、どうかされたのですか」

楊は安堵した。彼女ならば何か知つていてる気がした。

「チズコ、あの、カガミを見なかつた?」

「ああ」

心得たようにチズコは頷き、くちなしさいのもり 梶子^{くちなし}森^さを指差す。

「つい今しがた、梶子^{くちなし}森^さへ駆け込んでいたれました」

ようやく彼のいる方向を聞き出せた。ヤナギは胸に手を当てて小さく頭を下げた。走つたせいで頬が蒸氣している。

「ありがとう、チズコ」

まったく、森に入るなら体を清めると口を酸っぱくしていいるんですけど、と彼女は眉を撥ねた。

ヤナギは薄暗い森の中へと足を踏み入れた。

ヤナギはカガミの気配を探りながら森の中を歩く。梶子^{くちなし}森^さはヤ

ナギの神経をより研ぎ澄ましてくれる。過敏なほどに全ての息吹を感じる。

力ガミの気配は森の神聖な中で浮いていた。？強い生命力？や？体温？を感じようと試みれば、一本の糸が道を示してくれる。

どんどん進む。木の根が剥き出しになつていろといふでは足元に注意を払いながら進んだ。

まだ力ガミの姿は一向に見当たらない。

（これ以上進んだら……森を抜けてしまつ）

ヤナギの読みは当たつた。

黒い大地がヤナギの前に姿を現した。『こ』が宮殿のちょうど反対側に当たる場所だということはわかるが、この場所へ足を運んだのは初めてのことだった。

遙か昔、この地に蜘蛛の廻廊があつたといつ話は聞いたことがある。そのため戦が起つて、都は一時壊滅状態まで陥つたことも教えられた。

ヤナギは頭を押さえて座り込んだ。立ちくらみと共に、まぞまぞと戦の情景が浮かび上がる。

赤々とした炎。悶え苦しむ人々。咽び泣く女子供。懸命に戦う兵たち。

『いやよ、やめて。もうこれ以上、この国を痛めつけないで！　あなた達の国に、あたしたちが何をしたというの！』

悲痛な叫びが脳内に木靈す。姫巫に代々受け継がれる、記憶。

ヤナギはそれを振り切るために頭を左右に振つた。そして、立ち上がる。

左右に広がる青々とした竹林は赤い夕陽に照らされて美しく黄金色に照り輝いている。

わずかな力ガミの気配を手繰りながら、竹林の藪へ分け入る。鋭い葉がヤナギの頬や腕に細い赤線を作つたが、それに怯むことなく彼女は先へと進んだ。

やがて、拯済の花が咲き誇る焼けた竹林の一角に出た。驚くべき

しおみょう

ことに、拯済の花は水々しく艶めいており、枯れているものはない。奥手にある蜘蛛の廻廊より漂う地下の国々の匂いが、拯済の花を育てているのだろうとヤナギは思った。

見るも無惨に岩戸に覆われた蜘蛛の廻廊は蒼むしており、長い時を経て、ただの過去の遺物となつたことを窺わせた。

その蜘蛛の廻廊の前に佇む人影を見つけたヤナギは声を上げる。

「カガミ」

名を呼んでも、カガミは目をやるだけで答えない。

この前と逆だとヤナギはふと思つ。

ヤナギとカガミの間にある拯済の花々が、一陣の強風に吹かれて灰色の花弁を散らす。

ヤナギの長い髪も天へ煽られる。彼女は髪を押された。

「先ほど、兵たちの話に？ハルセ？という者の話題が上つていた。

……そなたのことでしょう？」

問いただすヤナギにカガミは何も言わない。

「黄眉国の一の希望、神の腕」

ふつとカガミは微笑を洩らした。彼にしては儂げな笑みにヤナギは内心ひやりとした。

「お前のことは前々から戦場で見知つていた」

「え？」

ヤナギは吃驚した顔でカガミを見る。

「直接会つてはいない。お前はいつも高見にいたからな」

カガミは後ろにそびえる蜘蛛の廻廊を塞ぐ岩戸へ手を添える。

「高天原国が生んだ戦女神、姫巫の代替わり。俺は先代姫巫と直接剣を合わせているから、お前の力が先代に劣つてることなどすぐ見抜けた。だから好機だと思ったんだ。力なき姫巫の守る高天原国を内から碎こうと」

カガミは目を細める。

「…………俺を殺すか

彼は問うた。

ヤナギは即座に首を横に振った。しばしの沈黙の後、ヤナギは再び質問した。

「いずれ、私がその事実に辿り着くことはわかつていたはずです。なのに何故、名を教えたの？」

「さあな」

力ガミはヤナギに背中を向ける。彼の淡い色をした髪が揺れた。それは大層寂しげに見えた。

「……ムロに怒鳴られた」

唐突な言葉にヤナギは首を傾げる。

「自分は黄昏国^{こうこんこく}の民ではない、高天原国^{たかまつらこく}の民だとまで言われた」

力ガミは振り向き様、哀しげに微笑んだ。

「俺は高天原国に抗うことが民のためだと思つていたんだ。けれど、それは違つた。戦はどちらにも強い禍根^{かじん}を残す」

「はい」

「……黄昏国^{こうこんこく}が崩壊した時のことを、俺は昨日のことのよう覚えている」

「崩壊」

ヤナギは復唱した。華鷺彌^{けいり}が言わんとしていることは、代々の姫巫の記憶の中にもあつた。

ふと力ガミの表情が曇る。

「十五年前、まず始めに旱魃^{かんばつ}が起つた。それが飢饉^{ききん}を引き起こした。その時の荒廃具合は田も当てられぬほどだつたさ。そして」

言葉が途切れる。そして、力ガミは息を吐き出す。

「そして、十一年前。突如津波が黄昏国全土を津波が襲つた。全土だぞ。逃げ場なんてなかつた。ようやく津波が去つたと思ったら、王宮にどこからともなく火の手が上がつた。悲鳴と泣き声だけが聞こえていた」

掠れた声で、なおも力ガミは続けた。

「神の逆鱗に触れたのだ、と識者たちは口を揃えて言つていた。当初は姫巫の力によるものだと思っていたが、よもやこれほどの気象

を操ることなど不可能だと皆結論づけた」

力ガミは何も言わないヤナギに目をやる。力ガミの目は深い哀傷を浮かべていた。ヤナギの胸が引きちぎれるかの如く痛みを訴える。

「……笑いたいなら、笑え。黄昏国が亡国同然になつたのは、姫巫との戦が理由ではない。神のせいだ」

「そなたは、怖いの？」

震える声でヤナギは尋ねた。

「何？」

力ガミの片眉が上がる。突拍子もない言葉に驚いているのだろう。ヤナギは恐る恐る思つたことを口にする。

「そなたの心が惑つてゐる。穏やかな日常を壊す権利は誰にもないのではないか。黄昏国は神事によつて滅びたのだから、人事によつて高天原国を沈めるはまた、神の怒りを買つのではないか。そう、思つてゐるのではない」

力ガミの中に芽生えているかもしぬない怯えを暴く。

力ガミは、ふと晒^{わら}づ。

「そうだ、と言えば何か変わるのか」

変わるはずがない、と力ガミは一刀両断した。

当たり前だ。本心を明かして高天原国と黄昏国が戦をしなくてよくなるならば、誰も傷ついていなはずだ。

皆、苦しんでゐる。

「力ガミ、黄昏国が滅びたのは……」

ヤナギは全て知つてゐる。姫巫の記憶は代々受け継がれていく。黄昏国は姫巫によつて滅ぼされたのだ。

旱魃、飢饉、津波。先代は神に愛されていた。神は先代を愛で、先代の頼みならばと森羅万象を操つた。

しかし、それを詳細に伝えることはヤナギにはできない。？姫巫？という縛りが声を閉ざす。

『わたくしの亡き後、高天原国を守れ』

先代から真名で縛られてから早幾年。これほど真実を告げられな

いことに悔しいと思つたことはない。

ヤナギの頬を涙が伝つた。

力ガミは拯済の花を搔き分けてヤナギの前に立つ。彼はヤナギの頬を親指の腹で拭つた。

「全く、お前はすぐ泣く」

声を押し殺して泣くヤナギを力ガミは自分の胸元へ引き寄せた。温かな腕の中に包まれると、酷く安心感を覚える。

睫毛から一滴の涙が零れ落ちた。

夕暮れはいつの間にか夜にすり変わつていた。

「送ります」

「いや、大丈夫だ」

「いいえ、せめて北門まで送ります」

かたくなに言い張るヤナギについに力ガミが折れた。

ヤナギは梶子齋森を力ガミ一人で帰らせたくなかつた。

心が弱つている時に森へ立ち入れば、惑う。常闇洞泉は大きな口を開けて人々を引き寄せる。神杷山へ続く神域へ立ち入つてしまえば森を守つている主神おもねのねが黙つてはいなかつた。

常人にとって、梶子齋森はあまり好ましい森ではないのだ。神聖過ぎる。修行を積んだ巫でさえ惑う時もある。

それなのに、力ガミやヤサカニは気安くつこくの森へ踏み込んできた。恐れなど抱かずに。

今まで何事もなかつたことの方が奇跡だつた。

「お前は」

夜らしく鬼火が森を彩る中を無言で歩いていた力ガミが、先を行くヤナギに言つ。

「俺が高天原国を滅亡させようとくろんでいることに気がついていたはずだ。何故、それを台王たちに言わないんだ」

「わかりません」

素直に答えた。

何故かなど、ヤナギ自身にもわからない。でもどうしてか、カガミの死を見たくないと思つてしまつ。

ヤナギの後ろを着いてきていたカガミだったが、剥き出しの木の根を飛び越えてヤナギの前に着地した。細い糸のような纖細な髪が宙に舞い、月明りに仄かに照らされる。

彼は手を差し出した。

「……今にも転びそうだ」

ヤナギはそつと手を伸ばした。それをカガミは力強く、しかし優しく握りしめる。まるで、消えて壊れることを恐れるかのように。自分の手を引くカガミの背を見ていると、ヤナギの心は柔らかくなつた。

そんな二人を鬼火が導いていた。

「……」今まででいい。ありがとう

鏡月池の前に着き、ようやくカガミはヤナギの手を解放した。少しだけ汗ばんだ右手を左手で包み、ヤナギは頷いた。

手をひらひらと振り、踵を返そうとするカガミだったが、ふと池の方を見た。橘の木で囲まれてはいるものの、池が淡く発光していははすぐにわかつた。

橘の木の隙間より池を覗き見るカガミにヤナギも倣う。

「……剣？」

水面下に剣の姿があつた。白く耀くその刃は月を思わせる。

ヤナギは思わず後ずさつた。

剣が、まるで主に巡り合つたかのように、高い音で啼いた。

ヤナギはぐつと表情を引き締めて橘の木の間より中へ滑り込んだ。そして池に手を入れる。小さな漣が起き、薄く湯気が立つ。

お止め。

制止の声がヤナギの全身を駆け巡り冷や汗がこめかみを伝つたが、

彼女は勢いよく剣を引き抜いた。

「ヤナギ、それは……？」

カガミは驚いた様子でヤナギと剣を交互に見ている。

ヤナギはひたと自分が握っている剣を見た。柄に刻まれた花と竹の絵。端には見事な玉が嵌め込まれている。その青い玉がまた啼いた。ヤナギはすぐさま池へまた手を入れて鞘を引き抜く。そして、黒々とした鞘にその剣を収めた。

「これは、月水鏡剣」

ぐいとヤナギは剣をカガミに押しつけた。

「もし、これから先。行く手を阻む……どうしても斬れないものがあつたらそれで斬つて」

カガミは手渡された剣を慎重に吟味し、何も問題ないと判断したのだろう。

「俺に斬れないものはないが、とても美しい剣だ。ありがたく頂戴しよう」

と快活に笑い放った。

彼の表情と一転し、ヤナギの面持ちは暗かつた。

西門の屯所前で待ち構えていたムロはカガミの前に仁王立つた。ようやくの帰還に苛立ちは募る。

呪いによる体の不調もさっぱり治まっていた。

「ヤナギ様にあまり近づくな」

チズコからヤナギがカガミを追つて梶子齋森へ入ったことを聞き及び、いても立つてもいられずに夕飯を素早く焼き込んで、カガミの帰りを今か今かと待っていた。

「指図される覚えはない」

「俗世の者がおいそれと近寄つていいお方ではないんだつ。お前は気さく過ぎる」

ムロは憤る。その言葉にカガミは皮肉げに笑つた。

「ヤナギはそれで幸せなのか」

「何だと」

からかうでもなく、カガミは真剣な面差しを見せる。

「お前は、姫巫としてのヤナギを守りたいのか」

「そんなことは」

「だが、お前の言を聞いていると、そつとしか捉えられない。神聖な存在だから近寄るな、と」

「それは……」

違う、と言い切れなかつた。

カガミはムロに手厳しく言う。

「あいつが心を許している数少ない者の一人であるお前がそんな考えだと知つたら、さぞ悲しむだらうな。姫巫、姫巫と。縋る者たちとお前も一緒なのか」

「言葉が過ぎるぞ！」

ムロは叫んだ。もうこれ以上追い込んで欲しくなかつた。

カガミは拳を握り、下を向くムロにすれ違いながら言つ。

「今、ヤナギは幸せなのか

「……え？」

「戦の間隔がどんどん狭まつてゐる。国を守るために戦へ赴き、怨^えの血潮を体中に受け。そんな最中で、あいつは幸せなのか

「それは」

そのようなこと、考えたこともなかつた。

先刻の戸惑いはどこに行つたのやら、カガミはいつもの余裕を取り戻していた。彼の瞳に搖らぎは見当たらない。

「ヤナギのことを守りたいのなら、ヤナギがお前の希望ならば、全力を賭してヤナギの想いを考えるんだな

「……ひ。貴様に説教される覚えはないわ！」

屯所内に戻るひとするカガミの胸ぐらを掴んだ。必死に言い返そうと言葉を練つたが、良い切り返しが出てこない。

胸ぐらを掴まれても平然とした面持ちでカガミは言葉を紡ぐ。

「最近、とんとあいつは笑っていない」

今度こそ本当にムロは絶句した。

カガミは乱雑にムロの手を払い、左腕に抱えていた剣を抱え直すと屯所の妻戸を開けた。

微かな灯火が今、掲げられようとしている。

わずかな希望の光が暗鬱なる大地を黄金色に染め上げる日を、ヤ

サカニは待ち望んできた。

己の左目左耳が失われてから早幾年。

ヤサカニは冴え渡る高天原国の空を見上げ、嘆息する。

祖国である黄昏国ではついぞ見ることの出来ない蒼天。それは美しそうにやるせない気分にさせる。

「戦はまた、全てを無に還すだろ？」

人知れず彼は呟いた。

戦いの向こう側にあると信じてきた未来。それは非常に曖昧で、頼りなものもある。

ヤサカニの心は揺れていた。

かの忌まわしき姫巫は言った。

「私を殺して」と。

殺してしまえば良かつたものを、と今更ながらヤサカニは後悔していた。

たとえ力ガミから怒りを受けたとしても、殺されたとしても、やうすることが最善だったように思えてならない。

彼女は死を望んでいた。最も神に近く、世を意のままに操ることが可能であるはずの彼女は、暗い暗い深淵の海に一人佇んでいるようだつた。

いつそのこと、殺してやつた方が姫巫のためだつたのだろうか。

近頃、ヤサカニはよく考える。

今となつてはもう彼女を手にかけることは難しいだろ。何も彼女のこと知らない今まであつたなら殺せただろうが、彼女のことを知りすぎた今、刃に躊躇いが生まれるのは間違いなかつた。

姫巫はいつも言った。姫巫などいの方が幸せなのだ、と。

「幸せ、か」

憎悪と憤怒の中で生きてきたヤサカニには、まだわからない平和とこゝり幸せ。

それは田に見えなくとも、確実に凍りついた心を和すものだと父は常常言っていた。

ヤサカニも、心の安寧を望んでいた。

いつか穏やかな世で、皆と笑い合いたいと思つていい。だが、？皆？とは誰のことだろう、と一抹の疑問が胸に過ぎる。

その問いは解いてはいけない。彼にもそれはわかつていた。

いつまでもこの高天原国での生活は続かない。終焉はやつて来るのだ。

ヤサカニは瞑田し、風の音に耳を澄ました。

どこからか子供達の笑い声がする。

後に、躊躇つてでも彼女を殺しておぐべきであったと彼が悔やむことにならうとは、誰が予測できたであろうか。

海が見える。

虚の果てにある暗き海。そこには生命の息吹は感じられず、ただ
厳かな静寂が横たわっている。

ヤナギは飛び起きた。

こめかみに大粒の汗が伝う。それを拭つて、彼女は膝を抱えた。
麻で織られた薄い掛け布を握りしめる。

体が小刻みに震える。

このところ、夜毎魘される回数が増えていた。

原因はわかつていて。

(月水鏡剣を手放したからだ)

頭に直接響いてくる声たけは、どれもがヤナギを咎め立てるもの
である。

どうしてあの剣を、あやつにやつた。

そなたに姫巫である資格はない。

何のためにお前が在ると思つていて。

ヤナギは胸を押さえながら歎を弓形に歪めた。

「後悔など、してないわ……」

抉りとるような痛みが脳に走る。

木戸を叩く小さな音がした。ヤナギは震む目で木戸の方を見やる。
しずしずと戸が開いた。

「ヤナギ様、気が乱れておいでです」

「……チズコ」

チズコは神妙な面持ちでヤナギの肩を押した。

「取りあえず、目を閉じて下さい」

言われたとおりにヤナギは瞑目した。闇が心地よい。

聴こえるはチズコの息づかいと自然の囁き、それだけ。

神経が緩まる。チズコが言靈を発して空氣を和したのだ。

ヤナギの前髪をチズコが搔き上げる。彼女の口より細い溜め息が洩れた。そして、静かに采女の部屋へ戻つて行く。

人のぬくもりが遠ざかる。

完全にチズコの氣配が室近くより消え去ると同時に、のぞりとヤナギは起き上がる。

「…………海が…………」

呼んでいる。手招きしている。

その海に行かなければならぬ。？あの場所？は自分を待つている。

ヤナギは両の掌を合わせ、視線を手と手の間の一点に集中させた。髪が浮き上がる。ふと体内の循環が止まる。大気にヤナギの姿が溶け出す。

忽然と、ヤナギは寝室より姿をくらました。

ヤナギは記憶の中に鮮烈な印象を残している海を捜し求め、ヤナギのもり齋森さいのもりを徘徊していた。

やがて、とうとうと流れる水音が近くから聞こえてきた。人形の目さながらの感情がない瞳で、ヤナギは目の前に広がる常闇洞泉とこやみどうせんを見つめる。泉には数多の蓮が咲き乱れている。

ヤナギは誰かに引っ張られているかのように泉の中へ体を滑らせた。腰の辺りまである水がヤナギの体に反発して波立つ。

ぬかるむ水底みなかいを気に止めるでもなく、彼女は滝壺の方へ歩いていく。

「…………く。」

決死の形相でヤナギに向かって叫んだのはカガミであった。

ヤナギの鼓膜や網膜はふやけてしまったのか、上手く彼を認識できない。ヤナギは止めていた足を再び動かし、常闇洞泉の滝裏へ入つて行つた。

自分の呼び声はヤナギに届かない。
まさか、と思つた。つい先ほど見た悪夢と同じ光景に戦慄を覚える。

カガミは嫌な夢を見た。ヤナギが真っ暗い穴に包まれ、自我を喪失する夢を。常ならば夢など氣にも止めないのだが、不気味なほどに生々しさを感じて梶子齋森へ踏みいった。

すると、このざまだ。

カガミは黒き泉を注視した。惑う者を誘う常闇洞泉は大きく口を開いている。

カガミは舌打ちし、勢いよく水の中に入った。

じんとした冷たさが体の芯を震わせる。だが、立ち止まっている暇はなかつた。ヤナギは常闇洞泉の向こう側へ行こうとしている。滝の隙間からわずかにヤナギの後ろ姿が垣間見える。

「待てと言つているだろう！ 止まれ、ヤナギ！」

懸命に叫ぶが、ヤナギは振り返りもしない。

滝壺の裏側へ辿り着いた。一気に岸に上がり、水を吸つて重量を増した衣類の端を絞る。

光はない。

洞窟内に響くのは、カガミの荒い呼吸音と滝の落ちる轟音のみだ。少しだけ奥へ進むことをためらつたカガミだが、拳をぐつと握つて走り出した。

鍾乳洞内部は長い時を経て両脇に水晶を形成しており、うすらと発光している。

「ヤナギっ」

名を呼ぶ。何度も、何度も。

かりそめの名を。

全力で追いかけ、洞窟を抜けた数歩先でヤナギの肩を掴んだ。

そして、驚きに言葉を失った。

ヤナギの肩越しに見えた景色は深い闇と暗い海だった。浮世離れしたその風景に息が詰まる。

風の啼き声がする。海の唸り声がする。

沈黙し、じつと佇んでいたヤナギが手を伸ばした。すると、どこからともなく薄い白に色づいた、たくさんの手が現れた。それはヤナギに向かって一直線に襲いかかってきた。

「くそつ」

力ガミは、白い手たちがヤナギに襲いかかるのを見て、彼女の手を反射的に引いた。ヤナギは力ガミに倒れかかる。はつと、ヤナギの両目に光が戻る。我に返ったのだろう。ヤナギは恐々と顔を上げた。

「力、ガミ。ここは」

「答えている暇はない。早々に立ち去るぞ」身を翻して来た道を戻ろうとする一人に、なおも白い手は追いすがってくる。ヤナギは小さく悲鳴を上げる。力ガミの眼が怒りを灯した。

「還れ」

魔を破る矢の「ごとき」一声によつて、白い手はゆるゆると力を失い、次第に海へ消えていった。

ヤナギの鼻先に水滴が落ちた。

二人は無言で洞窟を戻る。その途中で、ヤナギはようやく「こが常闇洞泉の中だと気がついた。

段々と状況が鮮明になってきた。自分は夢遊病の「ごとく、」ここまで来たのだ。自身の行動に恐れが湧いた。

それと同時に、このような忌み場所とも言える場所へわざわざ足を運んだ力ガミに疑問を持つた。

ヤナギの手を握り、先を行くカガミが声を発する。

「一度と、ここへは近づくな」

「……何故?」

「常闇洞泉は、危険だ」

立ち止まつたカガミはヤナギの方に向き直り、神妙に眉根を寄せる。

「ヤナギ、お前も見ただろう。間違いない。あれは亜空間だ。大気も次元も何もかも捻じ曲がつていた。……紛れもない、あれこそ眞の神域、常世^{とじよ}だ」

言い捨てる彼は前を向く。真っ直ぐに、浮世に向かつて。

滝は轟音を立てて水面へ落ちる。飛沫^{しぶき}は無数の泡^{あふ}を生み出し、辺りの空気を冷やす。

カガミは躊躇いもせず泉の中に飛び込んだ。瞬く間に彼の全身が濡れしていく。

ヤナギは躊躇つていた。行きは本能のままこの滝を抜けたのだ。理性があると、どうしても人は躊躇いを覚えてしまう。

カガミは振り向きざまに、強い力でヤナギの腕を引いた。均衡を崩してヤナギは足を滑らせる。水に落ちると思つて目を瞑つたが、それは杞憂に終わった。

一瞬の間に、ヤナギはカガミの腕に包まれていた。彼はヤナギを抱き上げていたのだ。

自分のものでない体温と鼓動に、当惑する。

「何を……！」

恥ずかしさに足をばたつかせるヤナギと打つて変わつて、カガミは澄まし顔でヤナギを見下ろす。

「濡れるのが嫌なんだろう」

頬が熱い。ヤナギは顔を両手で覆う。

「恥ずかしい」

「何も恥ずかしくなどないだろ?」

カガミは大股で泉に分け入る。カガミが動く度に水が撥ねてヤナ

ギの装束の裾を濡らした。

常闇洞泉は意外にも大きい。

到底、数歩では岸辺に辿り着けなかつた。

「……どうして私がここにいるのがわかつたのですか？」

もうすぐ岸辺に着くという時、ヤナギはカガミへ言葉を投げた。

彼は足を止める。

カガミはヤナギを抱え直す。

泉を取り囲むあまたの鬼火がカガミの顔を照らし出した。下から仰ぐように見た彼の顔は美しかつた。

「夢を、見た。お前がこの洞泉の中を抜ける夢を。それがあまりに鮮明だつたから、まさかとは思つたが一応ここへ来てみた」

さきみ
先見だ。

カガミは右手の血を引いているのだろうか。だが、そんなこと訊いたこともない。

「不思議な人」

首を傾げて、ヤナギは呟いた。

カガミが現れてから、何故か心が揺れる。不快な揺れではなく、感情の揺れのようだ。

「……響くは始まりと終わりを告げる、宿運が鬨の声」
ざわり、と肌が粟立つた。頭の芯がくらくらする。

ヤナギの異変に気づいているのか気づいていないのかはわからな
いが、カガミは微笑んだ。

「古代史に残る、有名な一節だ。決して報われぬことのない焦がれ
んばかりの想いを宿した者が詠んだ歌」

カガミの顔がヤナギの目と鼻の先に迫る。視線を剥がせない。

カガミの長い睫毛が伏せられてヤナギの頬に一つ、口づけが落と
される。

ゆつくりとカガミは唇を外した。

「俺たちの間にあるは、宿命のみだな」

少し寂しげにカガミは呟く。

「あ……」

口づけに驚いて、ヤナギは一の句を繋げなかつた。一閃の記憶が脳裏を掠める。

何か、大切なことを思い出しそうになる。だが、どこからか思い出してはいけないといつ声も聞こえる。

「ヤナギ、お前は」

カガミが言いかけたことは、草木を搔き分ける大きな音によつて立ち消えた。

カガミの腕に力がこもる。真夜中に樅子齋森へ来る者は少ない。緊張が走る。

「ヤナギ様！ ヤナギ様！ お返事を……！」

血相を変えて目の前に躍り出たのは、チズコだつた。突如姿を消したヤナギを探して彼女は樅子齋森を駆けずり回つていたのだ。

カガミは安堵の溜め息を吐き、足早に岸に上がる。

ヤナギは慌ててカガミの腕から滑りおりる。

「チズコ、『めんなさい』。勝手に抜け出してしまつて」

「あ、ああ……」

チズコは半ば泣き出しそうな顔をして、ヤナギの装束の裾に顔を埋めた。

「夢であなたが何者かに攫われるとこらを見ました」

彼女もまた、カガミと同じように不吉な夢を見たのだった。

チズコの乱れようにヤナギは慌てふためき、カガミは苦笑した。

「さすが占手の血を引く娘だな」

賞賛の言葉を贈るカガミに向かつて、チズコは深々と頭を下げた。「カガミ様。貴方様がヤナギ様を救つて下さつたのですね。本当に、本当にありがとうございます。本来ならば、それはわたくしの役目だつたにも関わらず、貴方様はその役目を担つてくれた。ヤナギ様に対する常世かみの誘いを退けてくれた。何とお礼を申し上げたらいいか

「よせ、礼など要らない。取り敢えず、寝所にヤナギを連れて行つ

か」

てやつてくれ。俺は一人で帰れるから

「はい。では、お気をつけて」

再び深く礼をしてチズコはヤナギの手を引く。
カガミを一人で帰したくなかったが、ヤナギに見つからぬよう
こつそり涙を拭うチズコに向かって、「カガミを送つてから帰りた
い」という我が儘は言えなかつた。

ヤナギは振り返り、カガミに小さく「ありがとう」と呟いた。
ヤナギとチズコは手を繋いで神杷山しんぱやまへ戻る。

一人の姿が見えなくなるまで待つてから、カガミは横にある木の
裏をひよいと覗き込んだ。

そこにはヤサカニと仏頂面をしたムロが座り込んでいた。

「……お気づきだつたのですか」

ヤサカニのばつの悪そうな顔を見てカガミは頷いた。

「気づいていたならば、さっさと声をかければいいものを」

そう言い、忌々しげにムロは舌打ちした。

「すべて、見ていたのか」

慎重にカガミは訊いた。どこからどこまで彼らが見聞きしていた
のか、正確なことが知りたかつた。

「はい」

ヤサカニは歯切れ悪く答え、話し始めた。

「常闍洞泉に魂が流れ込むのを見ていたら、突然ヤナギ様が現れた
ので動搖してしまつて。反射的に木の陰に隠れました。そうしたら、
間髪いれずカガミが来られて、ヤナギ様と一緒に中へお入りになつ
てしまつたので。お一人とも常闍洞泉に入つてしばらく出てこなか
つた。だから、急いでムロを呼んできて突入しようとしていたら

「俺たちが出てきたというわけか」

言葉を引き継いだカガミに向かつてヤサカニは、あいまいに笑む。

「出て行く瞬間を逃してしまいました」

ヤサカニは頭を搔いた。カガミは、そうか、とだけ言ひ。

「……ヤナギ様を泣かせて、驚かせて、助ける」

ムロはカガミを睨んだ。

「お前が一番わからないし、不愉快だ」

殴り殺さんばかりの目をカガミに向けるムロを、カガミは一蹴した。

「子供じみた嫉妬だな」

「馬鹿なことを！」

ムロはむきになつて喰つてかかった。

ヤサカニはそんなカガミのからかいに肩を竦める。

三人は帰り道、ずっと軽く言い合いをしていた。しかし、常闇洞

泉の奥に何があつたかはついぞ話題にのぼらなかつた。

玉のよつな兵たちの汗が飛び散る。

西門兵は朝夕二回、武官長であるムロの指揮のもと修練を行なう。怠る者は誰であれ、それなりの追加訓練を受けさせられるので誰もが一心不乱に槍や剣を振っていた。

日頃の訓練時の団結具合が実際の戦で的確に動けるかに直結する。西門兵たちは肉体的な訓練以外にも戦略や軍略も学んでいる。

それはムロの強い意向だつた。彼が武官長となつてから、着々と西門兵は力をつけてきた。戦での武功は西門兵に注がれる。

ムロは兵たちの力不足によつてヤナギを傷つけたくなかつた。

ムロは剣を打ち合つ兵たち油断なくを見ていた。

「武官長」

ふいに、寄りかかつていた木材の横手より、門番の男が顔を覗かせた。

「どうした」

「いえ、いつもの商人の男が武官長に、と」

男は馴れた調子で小さな皮袋をムロへ差し出す。

「そうか。ありがとう」

ムロは男が去ると、いったん訓練場より離れて忌み部屋の裏側に足を運んだ。そして、門番の男より渡された玉を太陽の光に透かし見る。彼は皮肉げに笑つた。

「終いだ」

格子越しにも、外が人で賑わつてゐるのがわかつた。

「やけに外が騒がしいね。ヤサカニ、ちょっと様子を見てきて、
クルヌイの頼みにヤサカニはすぐさま頷き、外へ出る。

「一体何があつたんだろ?」

「大方、武宣同士のいざこざを皆が見物しているのでしょ?」

「はは、そうですな。有り得る話だ」

部屋に残つた王子の近衛兵たちは談笑する。

「……」

カガミの胸に、嫌な予感が過る。

しばらくして、大きな音を立てハ榮爾が戸を開く。顔が真つ青だつた。

「どうだつた」

問うクルヌイに、ヤサカニは絞り出すような声で言つた。

「沢良宜の東方にある邑の男が引つ立てられてきました。その男は先ほど兵が目を離した隙に自害を図り、絶命したようです」

ヤサカニの言葉にクルヌイは顔をしかめる。

「それはまた物騒な。その男、何をしたの」

ヤサカニの唇はかさついていた。

「男は、黄臣^{たそがれい}國の者で……高天原國の内情を密かに探り、内から碎くことを画策していたとのことです」

どよめきが起きる。

素早くカガミとヤサカニは視線を交わす。ヤサカニは頷く。

カガミたちの仲間が捕まつたのだ。

カガミは目を細め、眉根を寄せた。

おかしい。

もとよりこうなるかもしないことは予想していた。だが、何の前触れもなしというのがカガミは気にかかつた。

「可哀想に」

クルヌイは沈痛な面持ちで言つた。

「まだ何も咎^{とが}はしておらぬのに。策を練つたというだけでこれほど大げさになるとは」

誰も頷かなかつた。

「詳細は」

西門にある寝所に向かいながら、カガミはヤサカニに聞いた。
「は。沢良宜の邑に潜入していたサクサが妻を娶つていたらしく、
その妻に計画を吐露してしまったようです。彼は先ほど何も吐かず
に自害したと聞き及んでいます」

計画が露見した理由はあえないものだつた。潜入した邑の女に惚
れて結婚した男が、女に寝所で計画を漏らしてしまったから。具合
の悪いことに、女は邑の長の娘だったという。

「そのような事態を防ぐために一人一組として送り込んだというの
に、マクは何をしていたんだ。大体、その報告が届いていないんだ」
「それは私にもさっぱりわかりません。マクの計報を知らせる密書
は届いてない……」

あ、とヤサカニは言葉を止めた。カガミは怪訝げにヤサカニの顔
を見る。

「どうした。何か思い当たる節もあるのか」

「……数ヶ月前、ムロ武官長が私の目前で玉を割られたことがあり
ました。その後は密書がきちんと届いていたので多分ムロ武官長は
それが何か知らずに牽制してきたのかと思い、頭の片隅にとどめて
置いたのですが」

「何だと、ムロが？」

その時、一人の少年が一人の前に現れた。

カガミとヤサカニ相手に気配を消せる者などたかがしれている。
二人は厳しい眼差しで少年を見た。

少年 ムロは唇を動かす。

「マクははやり病で死んだ」
はつとカガミは息を呑んだ。

「バシヨウは危険を察して、カガミたちだけでもすぐさま黄雀園へ
帰還するよう玉に込めた」

ヤサカニも目を見開いた。

ムロはおもむろに麻袋を突き出し、それを下に向けた。ぱうぱらと幾つかの玉が零れ落ちる。

「黄眉国に伝わる古代文字。それを俺が読めたことが運のつきだつたな」

カガミたちは何かしらの動きがあつた時、高天原国の者に悟られぬよう玉に古代文字で密書を込めてやりとりする取り決めを交わしていた。

「報告が来ないと思つていたら、やはり握りつぶされていたか」重要な知らせは全てムロが握り潰していたのだ。カガミは脣の片端を上げた。

「さすが、この国のはずを守る者だ。だが、それならどうして俺たちを捕らえない。台王や王子の危機が迫つてゐるやもしれんぞ」カガミの挑発にムロは憂鬱な顔をして、何も言わずに去りつとする。

ヤサカ二がムロの喉元に短剣を突きつける。

「答えるつ」

ムロは冷めた目線をヤサカ二へ送る。

「隻眼の男など、赤子のようなもの」

ムロは素早くヤサカ二の右ひざを蹴つた。激痛に襲われたヤサカ二はうずくまる。

ムロは何も言わずに去る。その後ろ姿は近寄りがたさを感じさせた。

カガミは目を細めた。

ヤサカ二は蹴られた右ひざをかばいながら立ち上がる。

「あいつ……何か策を練つてゐるのでしょうか」

「いや」

ムロの中にあるためらいをカガミは見抜いていた。

「ムロの中に、迷いが生じてゐる。あいつは俺たちのこと誰にも教えないはずだ」

ヤナギを傷つけない限り、と最後に小さくつけ加えた。ムロの行

動の全てはヤナギを起因としている。

「カガミ様、お言葉ですが。それは考えにくいかと」
ヤサカニの反論に、カガミは片眉を上げる。

「何故だ?」

「ムロは高天原國の武官長。私だつたら、もしもこのよつた事態になればすぐにでも首謀者を引っ立てます」

「…………鍵はヤナギが握つていい」

カガミは断定した。

「ヤナギが俺たちを信じたからこそ、ムロは手出しをしてこれなかつた。ヤナギのおかげで三年も命拾いしたな」

「本当に、あなたは飄々《ひょうひょう》とおつしゃる」

青ざめてヤサカニは天を仰ぐ。夕闇に紛れて満月が顔を出す。

「明日から拷問が始まります。我々の名を同胞が口にすれば、我々は磔の刑にされて確實に黄昏國は滅ぼされてしまつ」

「ヤサカニ。何を今更」

カガミは不敵に笑つた。

「いづなるやも知れぬことは、この國へ辿り着いた当初から予期していただろう」

押し黙るヤサカニにカガミは背を向けた。

見上げた空にはいつの間にか満天の星が広がつてゐる。それにカガミは手を伸ばし、拳を握つた。

田を背けたくなる光景、とはこのよつた光景のことをいつのだらう。

地獄だつた。

阿鼻叫喚の叫びが上がる。

ぞくぞくと、カガミの同胞たちが恥み部屋へと引っ立てられてきた。一つの綻びは、全てを壊す。おののの村に台王は兵を派遣し、出血の怪しい者を厳しく洗い出した。その中でも今回の騒動に関わ

りがある可能性が非常に濃厚な者たちは有無を言わざず都へと連行された。

内部崩壊を企む者たちの存在に台王はたいそう立腹しており、早く首謀者の名を吐かせて火にくべると言つて聞かなかつた。

それを涙を浮かべて諫めるのはクルヌイだけで、他の者は台王の意向に賛同していた。

こうして、拷問が始まつた。

東門兵は太い棍棒で男の背中をあらん力で殴打した。男は小さなうめき声を上げて血を吐く。

背中には無数の傷と血が滲んでおり、肉が見えていた。

「言えつ。首謀者の名を言えば、貴様たちは黄昏国に送還してやると台王が仰つていたぞ。意識がなくなる前に、さつさと吐くんだ」「は……。そう言って、わたし達を皆殺しにするのだ」

なお抗おうとする男に、東門兵はさらに一発を加える。

「バシヨウ！ やめろ、やめてくれえ！」

「あたしが代わるから！ お願ひ、バシヨウが死んじまつ……」

忌み部屋のすみに縛られた他の罪人たちが声を枯らして泣き叫ぶ。拷問の役目を授かつた総勢五名の兵たちはそれを面白がつて笑う。東門兵や南門兵らは、忌み部屋にいる者を人と見ていなかつた。力ガミは忌み部屋の入り口付近で、じつとそれを見ていた。ちらりと横目でヤサカニを見やると、彼は手足を竦ませている。

力ガミとヤサカニの二人も拷問の役目を授かつていた。クルヌイはそのような穢れた役目を一人に課すことには反対だと拒否したが、台王と側近は強引にそれを取り決めた。高天原国を裏切れば明日は我が身だと思い知らせたかったのだろう。

「ほら、お前らもぼうつと突つ立つてないで、叩け
兵たちが力ガミたちに棍棒を渡す。

「……あ……俺は……」

ヤサカニは身を震わせて棍棒を取り落とした。そして、戸口を開けると走り去つた。

「ちつ。やはり黄昏国出身の者は駄目だな。血が腐っている」
言いながら、兵たちはバショウを打ち続ける。悲痛な叫び声が響く。

兵たちは田は尋常のものでなかつた。狂氣の瞳。それをカガミは腕を組み、壁にもたれかかつて冷めた目で見つめていた。

「ムロ武官長も、このありがたい役目を辞退されたと聞いた。それに触発されたかは知らんが、西門兵は誰もが頑なに役目を拒否したらしいじゃないか。首謀者の名を吐かせた者には、たんと褒美を与えると台王¹が仰せであるのに」

一人の兵は笑いながら入り口に佇んだままのカガミに声をかけた。
「カガミ、おまえもまさか、棒立ちのままいる気が」

そう言われ、床に這いつくばつて必死に息をしている男の目の前にカガミは立つた。

顔を赤黒く腫らしたバショウの縋る田^{すが}がカガミとから合つ。
カガミは顔色を変えずに彼を打つ。

「言え」

冷淡に命令し、更に打つ。

嘲笑が上がる。東門兵や南門兵たちは黄昏国²の者同士が対峙するのを面白がっているのだ。

バショウは息も絶え絶えにカガミを見据え、言つた。

「……われらは、誓つて、同志を……売りませぬ」

再び嘲笑が起こる。

「馬鹿め！ 貴様らの仲間は今頃我先に逃げ出しているだろ？！」

そのような者をかばうなど、さすがは黄昏国²の者だな」

そう言つと、兵たちはバショウを取り囲み、いっせいに打ち据えた。

「…………つ」

拷問は何時間にも及んだ。

それでも彼はカガミとヤサカニの名を吐かなかつた。

「明日はその太つたおまえの番だからな」

そう言い残して兵たちは忌み部屋を出ていく。一人ずつ折檻する
ことによって、恐怖を植えつけようとしているのだ。
カガミたちが忌み部屋から去る際、バショウの目から一筋の涙が
伝った。

ヤナギは一ヶ月の間、沢良宜の豊穰祭へ駆り出されていた。神聖な儀式を執り行うために、姫巫は戦以外にもよく駆り出される。祭のために、姫巫の補助として巫数人と采女も駆り出された。

豊作を願う儀式は一ヶ月かけて無事に終わった。

ようやく戻ってきた街中には、不穏な噂が充満していた。黄昏国たそがれごくの者たちが捕らえられたという噂だ。

（もしかして、力ガミたちが……？）

ヤナギは急ぎ王宮へ馬を走らせた。側に控えていたチズコも慌てて馬を急がせる。

台王への報告もほどほどに、ヤナギは忌み部屋の近くまで行く。力ガミたちが捕らえられているわけではないことはわかつたが、気がかりなことに変わりなかった。

「ヤナギ様、これ以上はお近づきになりませんよ」

そう言つて、忌み部屋の見張り兵たちはヤナギを部屋へと近づかせようとしない。どんなに懇願しても追い返されてしまう。

「何故？」

切迫した声で訊くヤナギを、兵たちも困惑した様子で諫める。

「穢れが移つてしまします。血の穢れは最も強く、残りやすうございます。戦場で受ける穢れは仕方ないにしても、自らすすんで穢れを受けに行つてはいけません」

なおも、引き下がろうとしないヤナギの肩をチズコが押さえた。

不承不承、社殿へ戻ろうとしたちょうどその時、クルヌイと力ガミが通りかかった。都の視察帰りなのだらう。簡素な衣服を身に付けている。

ヤナギはふかぶかと礼をする力ガミに詰め寄つた。クルヌイもチズコも、その様子に驚いたようだつた。

「誰も息絶えたりしていないでしようね」

忌み部屋。その部屋に入れられた者が生きて部屋から出られる可能性はほぼない。

それでも、聞かずにはいられなかつた。

一ヶ月ぶりに会つた力ガミは少しあつれていた。うつすらと田元が暗い。

「……ああ。だが」

「力ガミ、それ以上は言つてはいけない」

クルヌイはヤナギの質問に答えようとする力ガミを制した。

ヤナギはクルヌイを睨めつける。

「クルヌイ王子。私はこの国の姫巫です。たとえ王子であつても、私に隠し事をするなど許されませんよ」

普段とは打つて変わつて強い口調でヤナギは言つ。クルヌイも力ガミも生唾を呞む。しかし、王子は頑として何も教えなかつた。嫌なものを察知したのだろう、チズコはヤナギの袖をひっぱり社殿へ帰らせようとする。

しかし、ヤナギはそのまま皆の制止を振り切つて忌み部屋へ向かい出した。

鼓動が速まる。

妻戸に手をかけ、一気に開け放つ。

「いけない、姫巫！ 今中では拷問が行われて……」

クルヌイの声が遠い。

ヤナギの目に飛び込んできたのは一人の女だつた。

その女はだらしなく男にしなだれかかつてゐる。彼女は虫の息だつた。

「ひ、姫巫様……！？」

戸口横にいた数人の兵たちが慌てた様子でどよめく。

ヤナギは懐に入れていた短剣を握りしめ、思いきり兵に向かつて振り下ろした。悲鳴が上がる。

兵の耳のすぐ横に短剣を突き立てた。ヤナギは言い様のない怒り

に歯軋りする。

「高天原国の恥めつ。……今すぐ出でいけ！」

這つよつに我先にと兵たちは忌み部屋から逃げ出でていった。

「ヤナギ様！」

「ヤナギつ？」

「近寄らないで！」

異変に気づいて忌み部屋に入つてこよつとするチズコやカガミたちを一喝する。

ヤナギは巫力を使って忌み部屋の周囲に結界を張つた。

女の様子はすさまじかつた。衣服は破れ、艶めかしい肌があらわになつてゐる。何度も何度も凌辱りょうじょくされたと一目でわかる。抵抗した際につけられたのか、額から鼻先にかけて切り傷があつた。傷は浅くもなく、深くもない。しかし、確實に跡が残る傷だつた。兵たちはそれを楽しんでつけたのかと思うと怒りに身が引きちぎれそうになる。

女が閉じていた瞼を開けた。その目は焦点が合つていない。彼女は細い指で男の頬をなぞつた。安堵の笑みを浮かべる。

「ハ……ルセ……さま」

「喋るなつ」

男 ヤサカニは女を仰向けに寝かせて、必死に薬草を胸元につけている。

「くそつ。血が止まらない」

「ヤサカニ……。その、人は」

「……出て行つてください」

震える声でヤサカニは言つた。

「でも……」

「出でいけ！ 穢れが貴女にまで移つてしまつ

こんな時にヤナギの身を案じてくれるヤサカニに胸がしめつけられる。

忌み部屋の奥に目を轉じれば、縄で縛られた男たちが声を押し殺

してないでいる。彼らは一様にヤナギを睨んでいた。

ヤナギは少しだけたじろいだが踏みどまり、ヤサカ二が持つてきたと見られる薬草箱を漁る。田当てのものはすぐにつかつた。ヤサカ二が女に押し当てるものとよく似た形状をした薬草。

ヤナギはヤサカ二の横に座ると、血が流れ出でている女の腹に薬草をあてがつた。

「止血の薬草はこちらよりよ」

「ヤナギ様……」

救いの神を見る目でヤサカ二はヤナギを見た。ヤナギは頷くと、女の状態を見る。

「……肋骨が折れている。添え木を……」

「こちらに」

ヤサカ二のものではない声に振り仰ぐと、そこにはチズコがいた。ヤナギは驚きつつも添え木を受け取る。

「そなたには私の力、効かなかつたの？」

ヤナギは女に応急処置を施しながらチズコに訊いた。チズコはにっこりと笑つた。

「わたくしも、こう見えて巫修行は積んだのです。術の抜け道も知つております」

自分の術が破られたことに少々むつとし、ヤナギは「そう」とだけ呟いた。

手早く処置をすませ、女を端にあつた藁の上に寝かせる。女の青ざめた顔色に幾分か色が戻つた。

ほつと息を吐き、立ち上がるつとするヤナギをヤサカ二の手が止めた。彼の右目は潤み、揺れている。

「二人とも、すまない」

か細く吐き出された言葉にヤナギは思わずヤサカ二を抱きしめた。彼の体は冷たい。今にも凍えて消えてしまいそうな彼が、幼子のように感じた。

「大丈夫、大丈夫よ、ヤサカ二」

そう言つて、ヤナギはヤサカニの頭を撫でる。

ヤサカニは顔を伏せる。ヤナギの肩にヤサカニの熱い涙が滲む。ようやく落ち着いたヤサカニはヤナギに非礼を詫び、立ち上がった。

ヤナギとチズコの知識と力で女は一命を取り留めた。

ほつとして忌み部屋を出るヤナギに怒りの形相をしたカガミが近寄つてきて、彼女の手を取つた。

「ヤナギに禊みそぎを。鏡月池の一帯の人払いを」

「ではわたくしが連れて行きます」

申し出たチズコにカガミは首を横に振る。

「いや、俺が行く。お前も忌み部屋に入つたから血の穢れが染みついている。さあ、早く」

半ば引きずられるよひうに、ヤナギはカガミと共に鏡月池へ向かつた。

そして、カガミは池に着くなりすぐりに用意してあつた木綿の衣を手渡してくれる。

「早く身を清めるんだ」

切迫した表情で自分を見るカガミにヤナギは戸惑つた。このぐらいの血、戦場では常に浴びているのだ。それを彼が知らないとは思えない。

「平氣よ、あれくらいの血」

「平氣な物のか！」

カガミは怒鳴つた。その声にヤナギは身をすくませる。

「……血は呪詛じゆその種となる。いいから、さつさと洗い清めろ」

ヤナギはしぶしぶ橘の木の隙間より体を滑り込ませた。池のふちで素早く衣に着替える。

カガミは離れたところで鏡月池に背を向けていた。

「……そなたはどうして、こんなによくしてくれるので」

「さあな」

カガミが何を考えてヤナギに近づいているのか、さっぱりわから

ない。だが、一つだけ言わなければいけないことがある。

「ねえ、カガミ」

ヤナギは鏡月池に身を沈ませながら、カガミへ声をかけた。

「なんだ」

「あの人たち、助けてあげて」

「ヤナギ、それは

……」

カガミは声を詰まらせた。やはり、あの者たちはカガミの仲間なのだ。

ヤナギは確信した。

「仲間なんでしょう?」

返答はない。

ヤナギは背を向けたままのカガミを橋の木々の合間より見据えた。「見捨てては駄目。皆でこの国へ来たのなら、皆で黄昏国へ帰つて」

「しかし」

カガミは口ごもつた。

ヤナギにはわかつっていた。

カガミは頭が切れる者だ。彼は無謀なことをしない。このままでは、仲間を見捨てて自分とヤサカニだけで密かに黄昏国へ帰ろうとする。仲間を見捨ててでも己の志を遂げようとする。

カガミの背が少しだけ小さく見える。彼は色々なものを背負つているのだ。その重圧が彼を苦しめている。

ヤナギに乗しかかる宿命と同種の重圧。それは決して抗えないものなのだろう。

「お願い」

ヤナギは肯定も否定もしないカガミに頼んだ。

遠くで鳥の鳴く声が聴こえる。沈んでいく夕陽が楊の肌を赤く照らす。

「…………わかつた」

微かに耳に届いた了承の言葉に、ヤナギは目を閉じた。

その日の夜。日が沈み、夕食が済んで各自部屋へ戻る。

カガミとヤサカニは呑み部屋での一件もあり、クルヌイの計らいで休暇をもらっていた。

カガミは水浴びを済ませて部屋に戻ると開口一番、ヤサカニへきつく言い放つ。

「余計なことをしてくれたな、ヤサカニ」

「ヤサカニは頭を深々と下げた。

「……まさかヤナギ様が来ようとは露とも知らず」

「放つておけば良かつたんだ」

カガミは窓辺近くにある燈台に明々と灯る火に切れ木をくべる。炎は激しく燃え盛る。

「カガミ様、それはあんまりです。ルイは呪詛の使い手です。このようなどころで命を落とさせるなど、もつたいたい」

ヤサカニの言葉に苛立ちを覚える。ルイが黄眉国でも稀有な呪詛を扱える者なのはカガミだつて知っている。

「ヤサカニ、あいつらは何故あのような状況に陥っていると思つている」

「それは……」

「俺たちの名を兵に明かさないからだ」

ヤサカニは皿を見開き、息を呑んだ。

「お前が行なつたことは、俺たちが首謀者だと宮中の者に触れ回るような行為だ。そのような情け、俺だったら間違いなく迷惑だ。守るうとしている者に皿う名乗りを上げられるなど、たまつたもんじやない」

カガミは冷たい目でヤサカニを見た。ヤサカニは口許を手で押さえ、顔面蒼白となる。

「つ。申し訳ありません」

彼は情け深すぎるのだ。その情が時として悪い方へ作用することもある。

ルイを凌辱した兵たちは、いったんヤナギやカガミたちに謝つてきたものの、彼らの目にはあきらかに不審の色合いが見てとれた。きっと、噂は広まる。それが台王へ伝われば自分たちは断罪される。

「ヤサカニ、決行するぞ」

決意を胸に秘め、カガミは口にした。

「……え？」

唐突なカガミの物言いにヤサカニは呆けた声を洩らす。

「高天原国を出る」

簡潔にカガミは言った。

「騒ぎを起こす。……心配するな、皆で脱出する」

仲間を切り捨て脱出するのだと解釈して表情を曇らせたヤサカニのために、最後の言葉をつけ加える。

「はい」

ヤサカニは少し歯切れ悪く答えた。

カガミは窓の外に覗く月を挑み見た。空高くある半月はカガミたちを嘲笑っているかのように見える。

朽葉色の双眸を細める。

「黄眉国の復興は、誰にも邪魔させない」
神にだつてな、と呴いてカガミは嗤つた。

夜陰に紛れて影が一つ動いた。

高天原國の都をおおつ夜は静かだ。厳かな静けさは、眠れぬ者を更に眠れなくさせる。

ヤナギは神杷山にある社殿の渡殿で欄干に身を預けていた。空を見れば、星々がところ狭しと輝き誇っている。

今日は朔の夜。太陰が太陽に隠れる日。

ヤナギは顔を伏せた。

「ヤナギ様……？」

自分の名を呼ぶ声に顔を上げる。

驚いた顔をしたチズコが近寄ってきた。まさか、このよつな夜深けにヤナギが起きていよとは思わなかつたのだろう。チズコの手には短刀と勾玉が握られている。どうやら、侵入者が来たと思つたようだつた。

笑みが零れる。

「侵入者はいない」

そう言つと、あからさまにチズコは肩を落とした。

「まつたく、夜中に渡殿で星見なんて……心臓に悪いのでやめてください」

チズコは文句を垂れながらもヤナギの横に腰を下ろす。

渡殿からは斎庭が眺望できる。

池に泳ぐ魚が跳ねた。水面には満天の星が映つており、幻想的な雰囲気をかもし出している。

「見て、チズコ」

ヤナギは池に映り込む星空を指差した。

「星が動いている。……全ては今日、明るみになる」

弾けたようにチズコがヤナギを見た。チズコの表情は、暗がりの中でも強ばっているのが見てとれる。

渡殿の端に置かれた燈台の灯が風に揺らめく。

ヤナギは更に言葉を重ねた。

「わかつていたの、こうなること」

「さわさわと木がそよぐ。」

「気づいていたの、こうなること」

チズコは何も言わない。

ヤナギは痛々しく微笑んだ。

「それでも、あの人たちを信じたいと思つた」

言葉の意味に勘づいたチズコは、鬼気迫る表情でヤナギの小袖を掴んだ。

「いけません……行つてはなりません。あなたは今宵、絶対に神杷山を離れては……」

チズコが言い終わる前に、ヤナギはするりと身をかわした。

「今から起ることは、姫巫であるヤナギ一人が計画したもの。そなたや他の采女たちは無関係。ねえ、チズコ」

ヤナギの真白い装束が風にはためく。無数の鬼火たちが、ヤナギの行く道を示すかのように神杷山を下る山道に列をなしている。

「赦してほしい」

そう言い残し、ヤナギは山を駆け降りた。

それと同時に、悲鳴のようなチズコの声が辺りに木霊した。

闇はとても暗く、深かった。

庭の要所要所に備え付けられている灯かりでさえ、全てを照らし出すことはできない。

だが、星の弱々しい光を受けて、忌み部屋の前で番をしていた者たちが倒れているのがわかる。

カガミとヤサカニは息を殺して忌み部屋の中に入り込んだ。

忌み部屋にいた者たちは目を白黒させる。

「力……ガミさま……ヤサ……力一様……」

「出国する。高天原国の内情は掴んだ。……あとは、戦に入るだけだ」

カガミはそう口にする。

「皆、己の足で走れるか」

カガミが訊くと、皆すぐに頷く。それを確認してから、カガミは部屋から駆け出した。

忌み部屋に入れられていた仲間を助けたカガミとヤサカ一だったが、それは自殺行為に等しかった。

松明の炎が遠くから近づいてくる。

カガミたちは近くの叢に身をひそめた。

兵たちは開け放された忌み部屋に入つて行く。

「なんてことだ、あのならず者たちがいないぞ！」

「くそが、誰かが手引きしたのか……っ」

「おい、お前。襲つてきた奴の顔を見ていのいのか」

「へ、へい。いきなり後ろからやられたもので。見ていやせん」

どうやら、顔は見られていなかつたようだ。

囚人が脱走したのがわかり、兵たちは殺氣立つてゐる。今、迂闊^{うかつ}に動けば捕らえられるかもしれない。

「とりあえず、ムロ武官長を呼んでこい。その人なきつと、奴らを見つけ出せる」

「はっ」

カガミのこめかみに冷や汗が伝つた。深手を負つた者を四人も抱えている。分が悪い。ひとたび見つかってしまえば、無傷で御殿を抜けることは不可能に近い。

「カガミ様、ここは俺が囮となつて……」

ヤサカ二の案に、カガミは首を横に振つた。

「いや、そうするとお前が捕らえられる可能性が高い。囮は使わな

い

「では、わたくしが……。元より、ハルセ様へ捧げた身でござりますゆえ」

顔に大きな傷を負つたルイが申し出る。しかし、それにもカガミは首を縦に振らなかつた。

「馬鹿をいうな。國に親を残して来たんだろ？」「ですが」

「何かいい案を捻り出す。だから、氣を逸くなせ」

こうして小声で話している間にも、兵たちの数は増してきている。乱闘を起こさず、一人も欠けることなく、ここから脱出できる案を必死で模索するが、気が焦つてうまい案が出てこない。

（强行突破しか道はないのか？）

一人の兵士がカガミたちのひそんでいる叢へ足を伸ばした。

思わず、拳を握る。

ちょうどその時、わッと大きなよめきが起こつた。叢に足を進めていた兵士も慌てた様子で踵を返す。

危機一髪とはこのことだろう。カガミは急いでその場を移動した。何があつたかはわからないが、無駄な戦闘を回避できたのだ。ありがたいことだった。

急ぎ、渓谷へ続く東門前に向かう。木々の隙間より真つ赤な炎が見えた。カガミは驚き、目を見張る。誰かが宮殿に火を放つたのだ。何とも運がいい、とカガミは口角を吊り上げた。この騒ぎのおかげでカガミたちの脱走は幾分か楽になる。

「カガミ様！ あれを……っ」

ふいに仲間の一人が声を上げた。

それにつられて仲間が指差す方向を見た。渡殿が見える。逃げ惑う人々の中で、彼女だけが凜とした佇まいに立つていた。

「…………っ」

少女の唇が動く。それに合わせて忌み部屋からも炎が上がつた。
「真象の力。紛れもない、神の力。」

「ヤナギ」

「

カガミの囁きに、ヤナギがこちらを見た気がした。

戦に備えて兵たちへ稽古をつけているところにチズコがやつて来た時、ムロは内心、動搖した。

チズコは、夜深けが訪れたら社殿へ来るようになると残してその場を去つた。

約束の刻限となり、ムロは重い足取りで鏡月池きょうげついけで禊みそぎを行ない、簡素な装束の上からゆがけを着た。いつなんどき、非常事態が起きたも限らない。

なので、本来ならば戦を連想させるものを神杷山に持ち込んではいけない決まりがあるのだが、武官だけは特別に武装を許可されていた。

木々がムロを拒むかの如く、鬱蒼うつそうと生い茂つてゐる。

ムロは右腕をさすり、薄く笑つた。

「……俺を拒むか」

三年前、初めてこの梶子くわなしざいのもり森のもりへ踏み入つた時も感じた疎外感。そしてこの前、ヤサカニに半ば強引に連れて来られた時にも感じた拒絕。

その理由はただ一つ。ムロに宿つた呪いのせいだった。

（かまわない。たとえ、神に忌まれようど。人々に忌まれようど）
鬼火さえもムロを神杷山へ導こうとしない。

（ヤナギ様さえ、救えるならば）

ムロは勘を頼りに神杷山への道を進んだ。神杷山の入り口に当たる楠には太いしめ縄がある。常は閉まつてゐるその神域を今夜、チズコは開放してくれていた。それを見つけることくらい、鬼火の案内などなくとも容易いことだった。

ほどなくして、しめ縄が巻かれた巨大な楠の木のもとへ辿り着いた。ムロは老木に触れて目を閉じた。

結界のゆるむ音がする。

再び目を開けると、夢幻さながらの景色が広がっていた。

四季など、この神杷山にとつては関係ないものである。椿に橘、もみじに桜。本来なら並び立たない植物が主張し合っている。

夜半過ぎであるといふのに、神杷山は淡く照り輝いていた。自ら発光しているのか、ヒムロは圧巻の眺めを双眸に刻み込んだ。

山と言つても小さな山だ。数刻もしないうちにムロは頂上へ辿り着いた。

星々を映す池にかかる天弓^{てんきゅう}の橋を渡り、社殿へ近づく。

美しく砂利をならした斎庭に面する廊に、一つの影が見える。

「……チズコ……？」

風に搔き消されそうな声で呟く。一つの影が動いた。

一つの影 チズコは、廊で顔をおおつてすすり泣いている。訳がわからず、ムロは困惑氣味にチズコへ尋ねる。

「どうした？」

答えは返つてこない。

よういつつそう、チズコのすすり泣きがひどくなつた。

「具合でも悪いのか？」

心配になつてきて、ムロは廊に近寄つた。すると、弾けるようにチズコが飛びすさつた。彼女の顔からみるみるうちに血の氣が引いていく。

「ムロ……あんたは必ずヤナギ様の頼みを聞いて。お願ひだから」チズコがムロに頼つたことなど、ほとんどない。その彼女が薄暗い中でもわかるくらい腫れた目をして懇願している。自然、ムロの顔が引きしまつた。

「何があつたのか」

チズコは視線を落とす。彼女は下唇を力いっぱい噛みしめた。

「……わたくしでは役不足。宿運を担う資格もない。でも ムロ、あんたなら……」

言葉を切つてチズコが頭を上げる。彼女の目とムロの目が交錯した。

「あんたなら、きっと。ヤナギ様の御心も高天原国も救えるから、意趣がわからず、聞き返そうとした矢先、チズコが都の方を指差す。

「ほら、定めが回り出した」

ムロの顔が強張る。

「まさか……っ」

「ムロ、カガミ様たちは今夜逃走するつもりだ。それを助けるために、ヤナギ様も山を降りられた」

ムロはヤナギと行き違いになつた己を呪つた。もしかしたら、止められたかもしれないのだ。悔やまずにはいられない。

「くそつ！」

黒く長い髪を振り乱し、来た道をムロは引き返した。

「ヤナギ様」

チズコは咳き、涙をぬぐつ。その双眸は危険な色を含んで輝いた。

梶子齋森は常人の立ち入らない森である。それはすなわち、太古のままの姿で自然が存在しているということだ。

ヤナギは飛ぶように森の中をひた走つた。剥き出しになつてている木の根に何度もつまずきながらも宮殿へ急いだ。

ようやく北門へ辿り着く。いつたん立ち止まり、乱れた呼吸を整えてから、一気に忌み部屋のある西門へ駆け出した。

しかし、そんなヤナギの腕を誰かが掴んだ。はつとしてヤナギは振り向いた。

ムロだ。彼は眉根に皺を寄せ、険しい表情を象つてゐる。

肩で息をしているところを見るかぎり、よほど急いで來たことが見てとれる。

「あいつらを助ける気ですか？」

「……離せつ。いくらそなたでも邪魔立ては許さない」

必死なヤナギの様子にムロは微かに動搖を見せた。その隙をつい

て、ヤナギはムロの手から逃げる。

「ヤナギ様つ。ムロは……ムロは、あいつらが逃げ出そうが捕まろうがどちらでも構わない。ただ、ただ、あなたが皆に忌まれることはあつてほしくないのです」

ムロの顔が泣きそうに歪む。

ヤナギは目をそらした。

「私が助けなければ彼らは深手を負つてしまつ。はたまた捕まつてしまふかもしれない。それでは、意味がない」

「意味が、ない？」

「ムロ、そなたは覚えている？ いつか、そなたは私に訊いたでしょう。『戦の焰は、いつになれば鎮火するのか』と。私は答えた。

『姫巫を継ぐ者がこの世から消えた時』と」

「…………あいつらが、？姫巫？を滅ぼせる者だと？」

ムロの声が震えている。

ヤナギは深く頷いた。

「『救つて。神などいらない。姫巫の呪から私を解放して』と。

何度も何度も、私は願つてきた。……」めんなさい、ムロ

自然と涙があふれてくる。呆然と佇むムロを置いてヤナギは西門へ走り出した。

走りながら、ヤナギは唇を動かした。

『渡殿の端にある燈台が風に揺られて倒れて炎を床にともします』

じつとりと汗が背中を伝う。神経が研ぎ澄まされていく。

『それは次第に燃え広がつて御殿を包む』

胸の奥に痛みが走つた。清浄さを必要とする真象の力はヤナギの体を圧迫する。気を抜けば、力は爆発する。

（長くはもたない。炎があまり燃え広がらないよう抑制しておけるうちに……どうか、早く脱出して）

ヤナギは中庭を横切り、忌み部屋が見える板の間に上がつた。ふと、木々の合間よりカガミの姿が見えた。驚いた顔をしている彼を一瞥し、顔をそむけた。

目がくらんだ。

清められていない御殿内で姫巫ひめみこの力を使う愚かさは重々承知の上でのことだったが、さすがに巫力を使いすぎた。

ついに御殿を燃やす炎の支配権はヤナギの手から離れた。自在に勢力を伸ばしていく猛る炎。ヤナギのいる場所も段々と煙に巻かれしていく。

呼吸が苦しくなる。

そんなヤナギを何かが包み込んだ。

目を見張り、霞む視界にそのものの正体を映す。それはヤナギを炎や煙から守るように抱き込んだ。

「ヤナギ様、お気をたしかに」

ヤナギは信じられなかつた。ヤサカ二が自分を守ろうとしている。どうして、と問う暇など今はない。ヤナギはヤサカ二の腕を強引に払つた。ぼやけた思考を覚醒させるためにゆるく頭を振る。

「情けなどいらない。早く逃げなさい」

「そんなわけには……」

なおも差し伸べてくるヤサカ二の手を、ヤナギは拒否する。その間にも炎の被害は広がつていく。

ヤサカ二は頑ななヤナギの様子を傍らで見ていたが、やがて深く息を吸い込んだ。

「シユマ」

彼はそう口にした。

ヤナギは眉を寄せた。

「俺の真名です。姫巫は真名で人を縛れると聞きました。さあ、俺を縛るといい

かつとヤナギの頬に朱が差す。

ヤサカ二は覚悟を決めた様子でヤナギに頭を垂れている。その姿は先代姫巫に皆がかしづいていたさまに酷似していた。

「私は……っ。私は、人を縛ったことなどない！」

真名など口にすることさえおぞましく、背筋に悪寒が走る。

ヤサカ二は聞き分けのない子供に言つようになにヤナギに目線を合わせてきた。

「ヤナギ様、縛られた人間は主の言つことを絶対に反故にできない。主を守るためなら実力以上の力でも發揮出来ると聞いた。それなら、この火の海だつて無傷で抜けられるかも知れない」

「嫌よ、絶対に嫌」

絶対しなければならない、とヤナギの心が叫ぶ。自身が先代姫巫に真名で縛られているからこそわかる。傀儡くぐつほどつらいものはない。柱の軋む音がする。それと同時に、後ろから鋭い殺氣を感じた。

「姫巫、覚悟！」

剣を振りかざした兵は、まっすぐにヤナギの方へ向かつてきだ。ヤナギは応戦しようと懐に隠し持つていた小刀を握るが、それを使うよりヤサカ二の動きが俊敏だつた。彼は足下に落ちていた木片を手に取り、兵の剣をはばむ。

「何をする！」

ヤサカ二の怒号に怯むことなく、兵士はヤサカ二にかばわれ座り込んでいるヤナギに冷たい視線を送つた。

「やはり、裏切つたな。どうせ、高天原國の懐刀という地位にあきあきしていたのだろう」「うう」

紅い布を腰に巻いているところを見るかぎり、南門兵なのは間違いない。西門は蒼、南門は緋、東門は翠と色で分けられている。兵の後ろから幾人かの兵がやつて来て、ヤナギたちの様子を見て目を細めた。その瞳には疑心がみなみとあふれている。

「貴様が地下の国々の者に同情していたことは知つていたが、まさか結託していようとはな」

「違う！ お前たちは何か勘違いをしている」

兵たちの弁を必死に否定するヤサカ一だったが、そのまままるでそれが事実だと告げているように聞こえた。

「今更弁解など誰が聞くものか。覚悟！」

ヤナギは何とか壁を支えにして立ち上がったが、己の体と精神の限界を感じた。

ヤナギの目の前で、ヤサカ一は木片を手に戦つている。何故、彼が自分のためにここまでしてくれるかわからなかつた。

（私を……姫巫を憎んでいたのではなかつたの？）

疑問が胸に浮かんでは消える。

兵の強固な剣がついにヤサカ一が使つていた木片を折つた。ヤサカ一は片手をつき、素早くヤナギを小脇に抱えて兵たちの剣から逃れようと後ずさる。しかし炎の壁にはばまれ、もう下がれないところまで追い詰められてしまつた。ヤサカ一の「めかみに汗が伝うのをヤナギは見た。

ヤナギは力を使おうと唇を震わせてみるが、出るのはか細く洩れる息だけだった。

もはやこれまでとヤナギもヤサカ一も覚悟を決めた瞬間、ヤナギたちの前に白い装束の女が立ちはだかつた。

ヤナギの顔が恐怖に満ちる。

「チズコ！ 何を……早く逃げなさい！」

女 チズコはちらりとヤナギを見、すぐに兵たちの方へ向き直る。か細い彼女から今は多大な闘志を感じる。

「わたくしはヤナギ様の采女。どうして貴女を置いて逃げられましょうか」

そう言つてチズコは果敢にも小刀を手に兵たちの前に進み出た。

「お願ひ、やめて……お願ひ……」

ヤナギの瞳から涙が零れた。いくら巫の修行を積んだチズコであつても、容赦なく攻撃されれば言靈を編むことができない。彼女は重い一太刀をどうにか受け止め、苦痛に顔を歪ませた。多勢に無勢とはこのことだ。

刃と刃がぶつかるかん高い音が何度も響いた。

驚きたじろいでいた兵たちもようやく平静を取り戻したのか、チズコの手首を叩いて小刀を放った。それに気をとられてチズコの注意力が微かにぶれる。

「チズコ、後ろだつ」

ヤサカニの注意は一歩遅かった。

ヤナギの視界が赤一色と化す。

チズコの背を切り裂いた兵が悪鬼に見えた。悪鬼は舌なめずりしながら笑つた。

ヤナギの喉がひくつく。

チズコは倒れ伏した。

「チズコ つ！」

もう一度と見たくなかった。できるならば、絶対に視界に映さなくなつた。

大切なひとが殺される瞬間。

ヤナギは自分がチズコの名を絶叫していることを自覚していなかつた。ただ、サコを喪つた時と同じ無力感に囚われていた。双眸から色彩が消える。

「うつ
「がつ」

次々に兵たちが倒れた。兵たちは転げ回つて悶え苦しみ、やがて動かなくなつた。

すかさずヤサカニは彼らに近寄り、首筋に手を添えて脈拍をとる。

「……死んでいます。チズコの、呪いです」

チズコは自分の血に呪いをかけていたのだ。事前に巫力を編んでいたのだろう。身を犠牲にした、呪い。

ヤナギは呆然としたまま、チズコのそばまで這い寄る。

チズコはうつすらと目を開け、淡く微笑んだ。そして、ヤナギに向かつて血に濡れた手を伸ばす。その手を取った刹那、彼女は息絶えた。

「いや、いや」

言葉がうまく発音できない。

ヤナギの絶叫を聞き及んだのだろう。兵たちが集まり出す。それはいずれも緋の布を身につけていた。

ヤサカ二は瞬きもせずにチズコを見つめるヤナギの肩に手をかけ、自分の方へ無理矢理顔を向かせる。

「ヤナギ様、兵たちが集まってきた。さあ、早く」

もう、サコがいなくなつてからずっとヤナギを守つてきたチズコはいない。

返事をしないヤナギにヤサカ二は語氣を強めて言った。

「俺を真名で縛れ！ チズコを無駄死にさせる氣か！」

ヤサカ二はヤナギに自分を縛れと命じる。ヤナギは、涙ながらに唇を動かした。

「シユーマ」

と、縛りの言葉はヤナギの心をえぐる。遠く、先代の喧わいう声が聞こえた。

その瞬間、ヤサカ二の目の色が変わった。

しばしの間、身動き一つしなかつたムロであつたが、人々の大声や足音に意識を覚醒させる。

彼は、瞑目して胸の前で拳を握った。

「ヤナギ様の、願い」

「ムロ武官長、ちょうどいいといひに……つ。忌み部屋に入れてい
た者たちが脱走しました！」

駆け寄つてくる西門兵の声が遠い。

ムロは、決意を固めて双眸を開けた。彼は集まつてくる西門兵ら
をすり抜け、力ガミたちが逃げ出すつもりであるう渓谷に続く東門
へと駆け出した。

火の海はしぶきをあげて御殿を包み込んでいる。その光景に息を
呑みながら、いつたん南門前を通りて東門前へ急ぐ。

途中、皆ムロの名を呼んだが田もくれなかつた。ようやく東門へ
辿り着く。

東門は不^{あかず}開の門という別称も持つてゐる。それほど守りは強固で、
厚かつた。死者の弔いをするために石櫃^{せきひつとう}峠へ行く時だけが東門の開
錠が許される時。その他では決して開かない門。

いつもは静寂に沈んでいる東門は数多の兵で蒸せ返つてゐた。そ
の中央に目をやれば、幾人かが取り囮まれてゐるのが見てとれる。
力ガミたちだ、と牟呂は即座に判断を下した。

ムロは背負つていた槍を構え、一気に集団へなだれ込んだ。

予期せぬムロの参戦に兵たちは一人、また一人と崩れ落ちる。し
たたる血で田が霞む。ムロは乱雑に腕で血を拭うと、また槍を振る
う。

そのたまは風のようで、のちにそれを讃えた歌が詠まれたほどだ
つた。

屍^{かばね}と怪我人で鉄の臭いが辺りに立ち込める。

「ムロ……」

田を丸くして自分を見てくる力ガミをムロは睨みつけた。

「誤解するな。これは、ヤナギ様のためであつて牟呂の意思ではな
い」

「ムロ武官長……つ。あなたが、裏切るか……」

「姫巫様がどれほどお嘆きになることか」

息も絶え絶えの兵たちの咎め立てにムロは敏感に反応した。

「黙れ！ 台王の袖に隠れて蜜をする愚官共に言われる筋合いはないわ！」

ムロにはわかつていた。東門前にいる者たちは誰しも兵の役割をきちんと果たしている者ではなかつた。鍛錬を怠り、遊びに興じる。そんな者たちばかりだつた。だからこそ、大人数であるにも関わらず、ムロ一人にここまで圧倒されたのだ。

ムロはなおも群がつてくる兵たちを打ち倒しながら、カガミたちの方を見やる。今なら兵たちの注意がカガミたちからそがれでいる。ムロの合図に気づいたカガミは皆を連れて不開の門戸の門かんぬきを外す。それを見届けて、ムロは一気に兵たちを薙ぎ払つた。

つかの間の静寂。

カガミたちが逃げるのを見ていたムロに、カガミは「来い」と声をかけた。

ムロは目をみはつた。

カガミは皆を先に門より脱出させ、ムロが来るのを待つてゐる。

彼は余計なことは一切言わずに寛んでいる。

ほんの数秒。その間にさまざまがムロの脳裏をかすめていつた。

『救つて、神などいらないの。姫巫の呪から私を解放して』と。そう私は願つてゐた。

あれこそヤナギの魂の叫びだと、カガミならその願いを叶えられるのだと、自身に言い聞かせてムロは首を縦に振つた。そして、腰に差していた高天原國の護り手の証である宝剣を、そつと積み上がつた屍の横に置いた。

「わかつた、行こう」

ムロの言葉とほぼ同時に追つ手が矢を放つた。それをムロとカガ

ミはかわし、仲間とともに峡谷の道を駆けた。

ムロには彼らがどこへ行こうとしているのか大方見当がついていた。

蜘蛛の廻廊だ。

峡谷を抜けたあと、山を一つ抜けると蜘蛛の廻廊がある。そこにある廻廊は特殊で、一見御神体の奉られた祠にしか見えない。

三日かけて蜘蛛の廻廊まで辿り着いた一行は、誰一人欠けずにここまで辿り着いたことを喜びあつた。

誰もヤサカニの話をしないところを見る限り、話題を出さない方がいいと思ったムロは少し皆から距離を置いた岩の上で糒を食いちぎつた。

近くを流れる小川から汲んだ水でのどを潤す。
自分たちがここにいると追つ手に気づかせないよう、この三日間いつさい火を焚いていない。

高天原国^{あんじや}の追つ手や闇^{あん}者は甘すぎる。ムロが追つ手の役目をもらつたら、きっと一日でこの手負い集団など引っ捕らえただろう。
怪我人を抱えている者たちが街道に出るわけがないのだ。それならば、山道を隠れながら進むと容易に考えられるはずだ。

（まあ、そこまで頭の回る者がいなかつたのを幸いと思うか）

そう思いながら水をあおるよつに飲み干すムロの横にカガミが腰かけた。

彼は黙つたまま、高天原国^{あんじや}の都を眺める。それにならつてムロも都を眺望した。

「お前は、一体何者なんだ」

ムロは最大の疑問をカガミへぶつける。この数日で、他の者たちがカガミへ示す態度は、打倒高天原国^{あんじや}の？同志？といつ一言でくくれないことにムロは気づいていた。皆、カガミを様づけて呼んでいる。思えば、ヤサカニもカガミを様づけて呼んでいたなと思った。

カガミは皮肉げに笑んだ。

「……我が名はハルセ。黄昏国^{ゆふ}が王位継承権第一位を有する者」

そう言い切つた彼の雰囲気は、誰も寄せつけないものがあった。
明け初める空が彼の横顔を照らす。
ムロは言葉を失つた。

微睡みの中、男は彷徨つていた。

自分が自分である意味を必死に探していた。

心などなくなつてしまえばいいものを。

半ば投げ遣りに、彼はそう吐いた。

答える声はない。

それはそうだろう。この夢の中には彼しかいないのだから。

『ハルセ』

『第一王子』

『救いの王子』

『?神の腕?』

「」を呼ぶどの声も胸に響かない。言靈は耳を滑り、希薄な空気にしかならない。

真に自分を必要としている者など、最初から「」にもいのないのだと改めて感じる。

いや、正確に云つならば、かつてはいた。

?ハルセ?といつ人間を必要だと、慕つてくれていた者が。

『兄上』

今だ脳裏に焼きついている幼い舌足らずなその声を思い出す度、胸の芯がじんとする。

火傷にも似たその熱さは、おさまることを知らずに心を侵蝕していく。

もつ、戻ることはない日々。取り戻せない過去の幸せ。

これでいいのだ、と男は自嘲的に笑つた。

心の片隅にぞんざいに放つた記憶は化膿し、生々しい痛みを彼に刻み続ける。

たすけて。

伸ばされた小さな手を、
掴む手はなかつた。

蜘蛛の廻廊。それは高天原国と他の国々を繋ぐ唯一の洞窟である。中は大蛇が這つた跡のようになつてゐる。

力ガミたちは蜘蛛の廻廊を隠している祠を力いつぱい横に押した。踏ん張る足もとの地面がえぐれる。額に汗が浮かんだ。少しづつ、祠が軋む音を立てながら動き出した。やがて、蜘蛛の廻廊の入り口が現れた。それは人の泣き声に似た風の音を吐き出している。生ぬるい風が力ガミの頬を撫でる。

「入るぞ」

力ガミはそう言つて真っ先に蜘蛛の廻廊へ入つて行つた。あとにムロ、バショウらと続く。

湿氣を含んだ洞窟内は自ら発光している植物たちによつてほのかに明るい。二年前、この蜘蛛の廻廊を訪れた時のことと朧げながら思い出す。高天原国内にいた時はさっぱり忘れていた風景だ。

「……いきなり記憶がよみがえつてくるだらう。忌々しいことだ」力ガミの横を仏頂面で歩きながらムロは口を開いた。彼は顔にかかる髪を鬱陶しげに払う。

「蜘蛛の廻廊は何度通つても心を苛立たせる」

「……そうか。お前は戦で何度も蜘蛛の廻廊を通つたんだな」力ガミの言葉にムロは頷く。彼はちらりと力ガミを横目見た。

「お前は、二年前が初めてだつたのか？」

「ああ。各国を高天原国から守るために遠征は行なつていたが、実際に高天原国へ足を踏み入れたのは初めてだつた」

「……意外だな」

ムロは目を丸くした。いつもは大人びて見える切れ長の目が少年の色を垣間見せる。

そんなムロに力ガミは苦笑する。

「黄昏国は今や亡國寸前。高天原国へ攻め込むほど の余力は残つて いない」

「なるほど」

ふと、ムロは後ろを振り向いた。つられてカガミも振り返る。

「……ムロ、休憩を取る」

「ああ」

一人の後ろで、バショウたちが息も絶え絶えに座り込んでいた。

洞窟内で火を起こすわけにはいかない。狭い空間で火を焚けば、空気が薄まってしまう。

幸いなことに蜘蛛の廻廊内は微風が吹いているだけで寒さはない。カガミたちは洞窟内でも少し開けた場所で休むことにした。おの おの常備食を頬張つたり、好きなことをしている。

岩肌を伝う水を調べたマチは、飲んでも全く問題ないとカガミに 報告する。マチは自然界のありとあらゆるものに精通している。彼 が言つなら間違いない。

カガミは少し離れたところからぐるりと仲間たちに目をやつた。 こうしてあらためて見てみると、そうそつたる者たちが生き残つた なと思わずにはいられない。

ムロ、ルイ、バショウ、マチ、そしてユウラク。

この中でただ一人女であるルイは、自ら志願して今回の任務を引 き受けた。彼女は己の血や持ち物を使った毒使いである。昔は数多 いたという毒使いは減少傾向にあるため、ルイはたいへん貴重な存 在だった。自分自身で染めたのだろう、黒と薄茶色のまだらになつた髪は短い。それは少々跳ねており、本人の奔放な性格を如実に物 語つて いる。彼女は蜜色をした瞳を輝かせて意気揚々と喋り、皆の 中心で豪快に笑う。額に残つた裂傷が痛々しい。

黙々と弓の手入れをしているバショウは、黄昏国一の弓使いであ る。遠く揺らぐ炎でさえ打ち抜くと言われる彼の腕前はカガミも認

めている。常人外れた視力を持つバショウを早見にやつた戦は、必ず先に仕かけることができた。そんな彼の左目は今、包帯で覆われている。視力が戻らないのだ。連日の拷問で目を中心にはぐられたせいで、バショウは栗毛の柔らかい肩まである髪を垂らしている。たしかようやく齡十五を超えたばかりだと記憶している。成長過程にある小柄な体つき。まだ幼さの残る面差しは何も語らない。

マチは緊迫感のない笑顔で竹筒に入れた湧き水を飲んでいる。ルイの話に合わせながら、坊主頭の彼は身ぶりでぶりで調子を取る。もとは鎮守の森に住まう民であったマチを今回の大作戦にひきいれたのはヤサカニだった。森の民は多くの観察えいち知を有しており、それは役立つはずだとヤサカニは言つた。はたして、彼の言つたとおりマチはカガミたちに道を示してくれた。蜘蛛の廻廊内で迷うカガミたちをマチは導いた。彼には森羅万象を読み取る力があった。俗世に馴染んでいないからこそその力だ。屈強な大男のマチは剛腕の持ち主である。接近戦で彼に敵う者はあまりいないだろう。忌み部屋へマチが入れられた時も、最も大がかりな兵を編成してようやく捕らえたらしいことを兵たちがぼやいているのをカガミは耳にしていた。

仲間の中で最年長のユウラクはゆつたりと胡座あぐらをかいて酒をあおつていてる。何故酒を持っているのかといつのは愚問だろう。彼は醉拳の使い手だと聞き及ぶ。ユウラクに関してはカガミでさえあまり情報を持ち得ない。わかっているのは、カガミに武術を教えてくれた者の師であることぐらいだ。ユウラクは骨と皮だけと形容できるくらいに痩せており猫背で、口ひげをたくわえているため老人に見られがちだが、まだ三十八なのだと前にルイから聞かされた時は仰天したものだ。

「……馬鹿なつ」

「あら、あんた黄昏国出身のくせに知らないの？」

何やらムロとルイが言い争いをしている。

「どうしたんだ？」

すみの方にある小さな岩に腰かけていたバショウに訊くと、彼は

困ったように首をかしげる。

「ルイの奴がムロにつつかかつたようです」
すい、とルイがカガミたちの方に目を向けた。彼女は腕を組んで胸を張る。

「あら、つつかかつたなんて人聞きの悪い。ただ、何も知らない高天原国の大官長様に知識を分けてあげていただけよ。高天原国以外は地上にあるんだってね」

ああ、とカガミはようやく命懸がいった。ルイは黄昏国やその他の国々で云われていることをそのままムロへ伝えたのだ。

高天原国は天上にあるまやかしの国だと。

それが、高天原国　いや、ヤナギに心酔しているムロの逆鱗に触れるのは至極当然である。

「たわけが……っ」

ムロの双眸に危険な色が灯る。彼は背負つている槍に手をかける。ルイは鼻を鳴らした。

「ルイ、よせ。ムロ、お前もだ。そう易々と挑発に乗つてどうする」カガミの諫言に両者は黙り込んだ。一人は互いに睨み合い、やがて顔を背けた。

「カガミ、休憩はもう十分だろつ……。ここにいる奴らと違つて俺にはゆつくりしていられる暇はない」

「あたしらを侮辱する気？ 小生意気な坊やだこと。あんたみたいな子供が武官長になれるなんて、高天原国も兵力不足だね」

「やかましいわっ」

どうやら、ムロとルイはそりが合わないらしい。彼らは言い合いながら先へ先へ進んで行く。道筋を知っているのはマチだけである。マチはムロとルイが間違つた方角へ行かないように慌てて後を追う。カガミは嘆息した。

「やれやれ、これだから血氣盛んな若いもんは」

そう言って、ひょっこりとユウラクがカガミの右横に並ぶ。ユウラクは柔軟な顔を綻ばせて左端を歩くバショウに目をやる。その視

線を受けてバショウは戸惑つたのか瞬きをした。

「そなたは冷静だな」

「 いえ。わたしは、あまり喋らないだけです」

カガミはそんなバショウの様子に目を細める。

「ヤサカニのことを気にしているんだろう」

バショウが息を呑むのがわかつた。

ユウラクの表情も曇る。

ここ数日、高天原国の都から逃げ出して以来、誰もが頑なにヤサカニの話題を避けていた。

ヤサカニはヤナギが炎の中に倒れ込んだのを見た瞬間、剣も何もかもその場にかなぐり捨てて彼女のもとへ駆けて行つたのだ。

『いけない、ヤサカニ様！』

バショウが手を伸ばしたが、ヤサカニには届かなかつた。あの時、ヤサカニを連れ戻しに行く時間は彼らには残されていなかつた。

ヤサカニの行動は許されることではない。しかし、誰も彼のことを責めなかつた。それはひとえに、彼の人望が厚かつたからに他ならない。ヤサカニを悪く言う者など黄昏国軍にはいない。彼がひねり出した策のどれもが黄昏国軍を守つてきた。常に最善な布陣を敷き、地の利を活かした戦い方を考え出すヤサカニに一目置いている者は少なくなかつた。

バショウは特にヤサカニから可愛がられていたから、気を揉むのは仕方ないことだつた。頭が回り腕も立つバショウを一般兵から見いだしたのはヤサカニだつた。バショウを見つけた時にヤサカニは意気揚々とカガミに言つた。

『バショウは絶対に俺のあとを継げます いえ、俺などすぐに超えてしまつに違ひない』

と。

ヤサカニがそこまで手放しで讃め称えたのは後にも先にもバショウ一人だつた。

力ガミは立ち止まって俯いてしまったバショウの頭を軽く叩く。
「大丈夫だ、ヤサカニは無事帰つてくる。きっと」

「力ガミ様。…………はい」

小さく蚊の鳴くような声でバショウが返事をする。少しだけバシヨウの顔が明るくなる。

力ガミは彼から目をそらした。同様にコウラクも視線を前に向けた。
力ガミは見てしまった。コウラクもさつと、見てしまったに違いない。

ヤサカニのあの瞳。

命を賭けて誰かを守ろうとする者だけが見せる、瞳の色。
(だから忠告してやつたのに。お前が聞き分けないからだ)
心の中でヤサカニに毒づく。

ヤサカニは戻つてこない。高天原国がムロを喪つたように、力ガミたち黄昏国もヤサカニを喪つたのだ。

一ヶ月かけてろくに眠りもせずに歩き続けた先に広がっていたのは、南卯国なんばくであった。西の大國でヤサカニの生まれ故郷でもある。そこからの道中がまた長かつた。仲間たちが負つた傷も癒える頃三ヶ月かけて、ようやく黄昏国に到着する。

「これは…………」

ムロは、あまりの様子に絶句した。

ムロが言葉をなくすのも無理はない。

都だというのに王宮がない。それどころか、何もない。ただ焼けた大地が広がっている。自然の囁きさえ息を潜め、渴いた砂を含んだ風が頬をかすめる。

緑のない大地。濶んだ空。疲弊した人々。

ムロは愕然とした顔でそれらを見つめていた。

「荒廃が進んでいる」

顎ひげを撫でながら、陰しの口調でマチは呟いた。

マチの呟きに一同は頷く。

もう後戻りは出来なかつた。これ以上、黄昏国を腐らせないためにも。必ず高天原国との戦の火蓋を切つて落とす。そうカガミは重く心に刻んだ。

「ああ、ようやく…………！ お帰りなさいませ！」

「ああ、こんなに汚れてしまつて……すぐに着替えをお持ち致します」

カガミたちの帰りを女官たちが慌ただしく出迎えてくれた。地下へ潜つていた大勢の家臣たちは顔を含わす度に傳ぐ。

戦火を逃れるために黄昏国^{かほ}のとつた苦肉の策が、この地下だつた。地下に居住地を造るのには膨大な人と時間を要したが、何とか完成了^{かしき}したようだ。土を削り、石で固めて間を粘土で埋める。官吏たちは国を守るために必死でこの居住地を造り上げた。もともとヤサカ二が考案したものだつたが、ほぼ完成しているのにはカガミも驚きを隠せなかつた。

「カガミ様、見てくださいませ。皆で力を含わせて造りあげたのでござります。カガミ様とヤサカ二様が帰還された^{あかつき}曉には成果をご報告しようと思い、懸命に土壙りに励みました。……ヤサカ二様は、ご一緒ではないのですか？」

真つ直ぐな官吏に対してカガミは返事に窮した。

「ヤサカ二様はとある事情で高天原国に残つておられる。しかし、おまえたちの努力をヤサカ二様は喜んでくれるはずだ」

カガミの代わりにバショウが答えてくれた。

ムロは冷ややかな眼差しでそのやり取りを聞いていた。

カガミたちは広間に通された。そこには大勢の官吏や下働きたちが集まつていた。皆、カガミたちの帰還を祝して酒をあおつている。ざつくばらんな雰囲^{くい}気の宴は久方ぶりだとカガミは笑みをこぼす。

高天原国では形式ばつた宴が多かつたのでなおさら懐かしく感じた。

「お帰りなさいませ、カガミ様」

誰しも？カガミ？と呼んでいた。

「……？ハルセ？と誰も呼ばないのは何故だ」

ムロの疑問にカガミは答える。

「？ハルセ？では国を救えない」

ハルセは王子の名。高天原国から国々を救う兵の名は、カガミ。カガミは口許を歪めた。

「王子であつたが故に、諦めなければならなかつた大切なものがつた」

そう、かけがえのないものをカガミは？ハルセ？であつたがために諦めた。

「もう後悔などしたくない」

一語一句を噛みしめるように言うカガミを、ムロは強い光を宿した瞳で見据える。

「俺がお前たちについて来たのは、ヤナギ様がため」

彼はそう言い切つた。

「ヤナギ様を縛っている高天原国を滅ぼせるのはお前だけだとは俺は判断した。だから俺は、お前に 高天原国を滅ぼす者、カガミに力を貸そう」

「ムロ……」

計り知れない痛みを内包して、ムロは力強く頷く。高天原国を裏切ると決断した時、どれだけムロが苦しかつたかをカガミに知る術はない。

いつ何時も誇りを失わない氣高き眼光がカガミを後押しした。

カガミは拳を握りしめ、広間の中央部に進み出た。空気が一本の線を張つたように研ぎ澄まされる。

華鷺彌は中央に揺れる松明の炎の前にヤナギから渡された月水鏡つきみずかがみのみ剣つるぎをかざした。そしてその剣をつしろ髪に当てて勢いよく断髪し、その髪を火にくべる。

臣下たちが、あつと声を洩らす。広間のすみに控えていたムロもバショウもルイも、誰もが固唾を呑んでカガミの髪が灰と化す様を見守っていた。上座にいた父王さえ椅子から立ち上がってよろめく。断髪の儀。黄昏国でそれは悲願成就の意味合いを持ち、志折れば自らの死を以つて贖うあがなという意味が込められている。

「高天原国の存在におびえ、うずくまる。そのような生ぬるい日々はもう終わりだ」

明朗な声が広間に木靈す。

「高天原国内の内情は掴めた。我らが同胞の死を、無駄にするなよ」
その言葉に皆は深く頭を垂れて、腹の底より大音声だいおんじょうの返事を上げた。

こうして、黄昏国は高天原国に反旗を翻した。

厚い雲間から覗く微かな陽光が黄昏国たそがれこくを照らし出す。決して大きいとは言えない国。遙か昔、高天原国たかまのはらこくと勢力を一分した国だと史実は伝えるが、今やその面影はない。

実りの秋だというのに資源乏しく、人々は絶え間ないひもじさに膝を抱えている有り様だった。

高天原国から襲撃があるかもしないと、地下にある黄昏国王の御所は、ここ数日慌ただしかつた。

しかし、術者 高天原国で言うところの巫みは、巫力を有する者が蜘蛛の廻廊を渡る気配は感じないと断言した。

攻める暇もないのだろう、とムロは鼻を鳴らした。

高天原国の総括とも言える武官長ぶかんちやうだった彼にはわかる。近年、高天原国は敵ばかりを増やしている。そんな中、大切な武器である巫たちをおいそれと他国へやることは自殺行為である。それこそ今が好機と攻め込まれてしまふに違いない。

姫巫ひみであるヤナギもまだ回復していないだろ。

ムロはあれほどの真象の力を使うヤナギなど、戦場であつても見たことがなかつた。猛る炎は意思を持つて御殿を包んでいた。並大抵の巫力では操れないはずだ。

ムロは地上へ続く石段を登り、青空市場におもむく。

青空市場は日々の暮らしのが苦しい人々が少ない食料や衣類を交換したり、分け与えたりする場所だ。月に一回、国庫からも食物を出しているらしかつた。助け合い暮らす黄昏国たそがれこくの民。だが、そうは言つても黄昏国たそがれこくの都より離れた地にあるムロの村では決して見ることなかつた光景だった。

豊かさは王の膝へもとより広がる。遠い僻地へきちにある村よりも都の方が潤つているのは当たり前だ。

行き交う人々の間を縫うように歩き、軒を連ねる市場の端にあつた大きな石に腰かけた。どつと冷や汗が出る。頭の中心に鋭い痛みが走つた。激痛に顔を歪め、膝を抱える。

「大丈夫けえ？」

行商人風の男がムロの肩を叩く。心配そうに顔を覗いてくる男からムロは視線をそらし、手を振る。

「ただの立ちくらみだ。気にするな」

「だけんじ、おめえさん……えらく顔色が悪いぞ。土氣色じや。田

「N-89」の「15」は「15」

山口は、あらためて男に目を向けた。男が手に持っている荷物か

「薬師か

ムロの言葉に男は大きく頷いた。

人た
とれ
薬草を煎じてやるへ

「失礼な事で、お詫びします。」

無理は禁物じゃ。心配しねえで、金なんてとりやせん。たた、

野の笑顔にバロは胸撫でる。心地よい。

お前は、無償で薬草を与えているのか？」

「そうじゃ。わしは人の笑顔をみたい一心で薬師をしとる。だけん、

おめえさんも

ムロは薬草が詰まつた麻袋に手を伸はす男の腕を取つた。そして、

力なく首を横に振る

セガタ・煎り・千葉・一子・無黙・に・が・る・作・の・さ・の・頭・病・

地上に広がる市場の雑踏の中。

ムロの唇が動く。男の瞳孔が開いた。

ムロはふらつく足を奮い立たせてその場から去る。男はそれ以上、

何も言つてこなかつた。

力ガミは高天原国潜入中にヤサカニが作成した地図と、バショウたちが作成した地図を照らし合わせて高天原国の盲点を探していた。「力ガミ様、やはりここはこの前使った蜘蛛の廻廊を使うのが一番かと思います」

ルイの意見にバショウが渋い顔をする。

「あの廻廊を使うのは賛成しかねる」

「でも、あまり目立たないように入国しないと。ただでさえ兵力が削がれたらたまらないでしょう?」

反論するルイにバショウは言葉を返す。

「行きのようなことがまた起こらないとも言えない。帰りは運が良かつただけかもしれない」

皆、その可能性に閉口した。

三年前、力ガミたちがあの蜘蛛の廻廊に入つてからしばらく進んだ時のことだ。急に激流が力ガミたちを襲つた。油断していたわけではないが、逃げ道などない洞窟内。死に物狂いで逃げる他なかつた。その際、多くの仲間が死んだ。逃げおおせることができたのは、今この場にいるバショウたちだけだつた。

『高天原国へ続く一本道。……力ガミ様、途中に森羅万象の悲しみと怒りを感じます。激しく、深い』

マチがそう言つていたにも関わらず力ガミは弛まず進めと指示を出した。結果、出さなくて良かつた犠牲を出してしまつたのだ。

力ガミは早く高天原国へ行かなければと気が急いでいた。だが、それを言い訳にしたくなかった。今も夢に見る。悪夢のようなあの出来事を。

(森羅万象……神の力、か)

力ガミは短く切つた自分の後ろ髪をもてあそんだ。(いつも、神などいなくなつてしまえばいいものを)

心の深部にある思いを浮かべた。

ふと、側近や女官たちが観音扉のところで何やら騒いでいるのが

目に入った。何事かと思えば、側近たちを押し退けてムロが姿を現す。

「何を話し合っているんだ」

ムロは威風堂々と協議の間へ入ってきた。板で覆われた床は彼が歩く度に鳴る。ムロは無遠慮に力ガミの横に腰を下ろした。慌てて女官たちが駆けてきた。彼女たちは平伏して謝罪の言葉を口にする。

「たいへん申し訳ございません。大切な話し合いだとお止めしたのですが、聞き入れてもらいました」

「かまいません。ムロにも意見を聞きたいと思っていたところだから、ちょうど良かつた。あなたがたは下がつていて下され」

「は、はい」

コウラクの優しげな言い方に女官たちはあからさまに安堵の表情を見せた。彼女たちは深く一礼をし、場を下がつた。

「高天原国を攻め落としたいのならば、駿嶺門を攻め落として南門から御殿へ入れ」

ムロは開口一番に言つた。何の話し合いをしているのか、彼は広げられた高天原国地図を見てすぐに理解してくれたらしい。

「要は真正面から行けということか」

コウラクは面白そうに顎ひげをたする。

ムロは指先でぐるりと都を囲んだ。

「北にある梶子齋森^{くわなしげいのもり}は守りが手薄だ。難点は森の主神^{おもだね}がいること。敵意を持つて森へ立ち入ればただじゃ済まない。東にはお前たちが逃げ出した不開^{あかず}の門がある。今回の件で警護が更に強化されていることは必定。西から攻め込むのはやめておいた方が身のためだ」

「何で西は駄目なのよ」

食つてかかつてくるルイをムロは軽くいなす。

「俺が育てた兵たちだ。並大抵の武力では太刀打ちできない。できる限り、戦闘は回避した方がいいだろ?」

ルイは不服そうに顔を歪めたが、力ガミはムロの考えに同調を覚

えた。西門兵は強い。いくらカガミでも、多勢に無勢であれば命を落とすかもしれないほどの実力を西門兵たちは持っている。

「しかし、高天原国は圧倒的に力と数が勝っている。正面からぶつかれば、弾き返されるんじゃないかな？」

カガミの言葉にムロは口を一文字に引き結ぶ。

「……ヤサカ二様を……」

ヤサカ二の名を出したバショウに皆の視線がいつぺんに集まる。「ヤサカ二様を頼つてはいかがでしょうか。あの方ならば、何か良い策を練つてくれるかと。高天原国にいることですしきつと、入り込むための手引きをしてくれるはずです」

バショウの瞳が揺れる。本人も危険な賭けだと気づいているのだ。

「駄目だ」

ばつさりとバショウの考えを否定したのは、カガミでもムロでもない。マチだつた。

マチが否定するとは思つていなかつたのか、バショウは怪訝な顔をする。

マチは目を瞑つた。

「ヤサカ二の心は今、稻穂の如くたおやかに揺れ動いている。忌み部屋で姫巫にすがり泣いたヤサカ二を見た瞬間、わたしには彼の心が痛いほど伝わつた。ヤサカ二は迷つてている。迷いある者を仲間に引き入れると、必ず内部の分裂を生む」

「……ああ、そのとおりだ。二重間者となる可能性も捨て切れない」ムロがマチに同意を示す。

バショウが悲しげに目を伏せ、膝の上に置いた両手をかたく握りしめたのを、カガミは見逃さなかつた。

「迷い霧晴れれば、ヤサカ二もこちらへ戻つてくる。そう落ち込むな」

カガミは穢やかにバショウへ言葉を紡いだ。バショウは小さく、

「はい、と返事をした。

「ところで、どの蜘蛛の廻廊を使うかなんですが……」

ルイは後ろから黄昏国周辺の地図を取り出して皆に提示した。
「この際、精銳部隊を全ての回廊へ分散させるというのはどうじ
ょうか」「

皆、ルイの作戦に興味を持つた。

彼女の言いたいことはこうだった。一つの蜘蛛の回廊に兵を集中
させると、いつぞやのように全滅寸前まで追い込まれる確率が高く
なる。ならば、兵を分散させた方が良い。ルイはそう考えたようだ
った。この方法であればほぼ同時に蜘蛛の回廊を守る衛兵を叩け
るので帰りが楽だ。そのかわり、これを実行するためにはどの部隊
にも必ず最低一人、腕の立つ者がいることが必須条件となる。

蜘蛛の回廊は全部で五つ。カガミたちの使った、衛兵がついてい
ない回廊を除くと四つである。昔はもつとあつたというが、戦火や
歳月によって風化してしまったらしい。

四つであれば、カガミたちが別々に行動すれば何とかなるとの結
論に達した。

「あとは、敵に不幸が起ることを祈るばかりじゃ」

笑顔で言うコウラクにカガミたちは苦笑を洩らした。

「やけに楽しそうだな」

暗鬱げな声が広間に響いた。皆の視線が声の主へ向く。

初老に近い年齢の男は、豪奢な装束を身にまとい、カガミたちが
いる場所まで近寄ってきた。カガミに似た容貌をしている彼は、朽
葉色のうつろな瞳にカガミたちを映す。

カガミとムロを除く全員が素早く身を伏す。

「……誰だ？」

ムロは小声でカガミに耳打ちした。

「俺の父だ」

言葉少なに答えを呈す。ムロの目が丸くなる。

大方、作戦内容を聞こうとふらりと立ち寄ったのだろう。

カガミの父親 黄昏国王の田が、ひたとムロに止まる。ムロの
肩が微かに震えた。

黄昏国王の瞳に驚きが走る。

「マコ」

「何故、母の名を……」

戦慄^{せんりつ}を覚えた表情で、ムロが呟く。

「そなた、マコの息子か?」

ムロは強張った顔で深く頷く。

黄昏国王の表情が和らいだ。

「無事で何よりだ……」

黄昏国王が一步ムロに近づく。ムロはそれに合わせて半歩下がった。

ムロの顔色が白くなつていぐ。こめかみには冷や汗が伝つてゐる。異様なムロの様子にカガミは声をかけようとしたが、それは黄昏国王がムロを抱きしめたことにより阻まれた。

場にいる者全てが凍りついた。

王の目に涙が光つてゐる。

「マコには、そなたは死んだと聞いていた。きっと、今までつらい思いをしたことだらう。許してくれとは言わない。恨んでいてくれて構わない。ただ……そなたが生きていてくれてよかつた」

深い愛情を感じる言葉。カガミには向けられたことのない温かさ。カガミは思わず声をなくした。

ムロも思いもよらない展開に呆けてゐる。

「……父上、ムロを知つてีるのですか」

波立つ心を無理矢理押さえつけて尋ねた。

黄昏国王はようやくムロを解放すると、彼に穏やかな笑みを向けた。ムロは顔をそらす。

「ムロと言つのか。マコはいい名をつけたな」

黄昏国王はあらためてカガミに向き直つた。

「カガミ、ムロはそなたの異母弟だ」

「嘘をつくな……」

耳をつんざくよつた悲痛な叫びが上がつた。

ムロは、ふらふらと後退して壁にもたれかかる。肩で息をしながら力強い視線を黄昏国王とカガミへ向ける。

「嘘ではない」

静かに、しかし威厳ある口調で黄昏国王は言い切った。

「…………。では何故、母さんは……兵たちの娼婦に……」

ムロが衝撃に打ちひしがれているのは一目瞭然だった。彼は力なく座り込んだ。ムロの顔は有り得ないほどに青白くなっている。

カガミはムロを立ち上がらせようと肩を持とうとするが、弾かれた。

「触るな！…………」

言つた瞬間、ムロの体が傾いた。そのまま、彼は動くことをやめた。

「ムロ　　おい、しつかりしり」

呼びかけても返事はない。カガミはムロの体を強く揺さぶる。反応は返つてこない。

異常を察したバショウたちは頭を上げて急ぎムロを取り囲んだ。ムロの口もとに指を当てたマチは扉の前に控えていた女官たちへ指示を飛ばす。

「まだ息はある！　早く医師と薬師を！」

「ムロ、ムロ。しつかりしり。田を開けておくれ」

黄昏国王が涙目でムロを抱きしめる。

カガミは床に散るムロの長い髪を見ながら、しばし呆然としていた。

広い部屋の中央に置かれた寝台の上、ムロは多くの人々に囲まれていた。

カガミはもちろん、バショウやルイたちも集まっている。皆一様に心配そうにムロの顔を眺めていた。

医師や薬師がかわるがわるムロの体や目、口内を診ている。協議の間で昏倒したムロは、丸一日経つた現在も目を覚まさない。

「……ヤナギ様……」

うなされながら、ムロはかの姫巫の名を呼ぶ。カガミの右眉がはねる。

「状況は？」

カガミの問いに、医師や薬師たちは顔を見合させて首を横に振つた。

「昨日もお伝えしたとおり、ムロ様が倒れた原因はわかりません。ですが、だんだん脈拍も弱くなつてきており、命の危険が大きいことは確かにございます」

医師の一人がそう言つと、カガミはじつとムロを見た。

カガミはムロの手足におぞましい紋様が浮き出ているのに気づき、瞳孔を開いた。黒と藍を混ぜ合わせた不吉な色合いは、ムロの首もとにまで達している。

（呪いが進行している……）

直感的にそう思つ。成長を促進する呪いの代償は大きい。それが今、彼を襲つてている。

「王子 これはわしの私見なんじやけど」

薬師の一人が緊張した面持ちで口を開いた。

「ムロ様は、疫病や疲労によつて倒れたのではなく……祟られてい
るかもしけん」

「祟りだつ？ 滅多なことを口にあらはんじやない」

「バシヨウ」

強い口調で言い募るバシヨウを手で制し、カガミは薬師に笑んだ。

「興味深い意見だ。話を聞け」

薬師はぼつりぼつりと話し始めた。青空市場でムロと会った際、彼自身がそう口にしていたこと。ムロの体が、呪いをはね除けようと拒絶反応を起こしていること。

「……もともと、呪いとは人を神に供物として差し出すためにあるものじやけえ。わしらじやあムロ様の容態を良くも悪くもできはせん」

「助ける方法はない、と。そういうことか？」

カガミの疑問に、薬師の顔が歪む。その表情は、知りつることを言つか言つまいか迷つていてる者のものだつた。

薬師は深く長い息をつき、頭を垂れた。

「もしかすると、もしかするとムロ様を助けられるかもしれん者をわしは知つてゐる。必ず治る、と断言はできんけど。……黄昏国(せんとうくに)の最果て、善灯村(せんとうむら)に住んで、呪いや薬草に精通しとる奴(やつ)があるき」場にいた医師や薬師らがいつせいにその薬師を見た。

「名を、サブライと」

ざわり、とカガミの肌が粟立つた。その名をカガミは何度も聞いたことがある。

”激昂(げつこう)の大蛇(おおへび)”。高天原国(たかまのはらいこく)の元武官長(たがまのはらうじょう)。ムロの育て親。

脳内を様々なことが駆け巡る。

一人の医師がカガミの前に進み出で、薬師と同様に頭を垂れた。

「カガミ様。サブライはこの都にも名が通るほどの名医でございます。ありとあらゆる道に通じており、奇病も和らげる薬を煎じる事ができるとか。ただ、昔、高天原国で武官だつたと聞いております。そのため、あまり皆彼のもとへ近寄らないらしいですが」

カガミは視線をムロに向けた。

何者にも屈しないムロの瞳は固く閉ざされてゐる。苦しげに浅い

呼吸を繰り返す異母弟。

「……早馬を出し、サプライをここへ連れて参ります」

ルイは早口にそう言い、踵を返した。しかし、そんな彼女の肩を

カガミは引き戻して首を横に振った。

カガミはムロの掛布を剥ぎ取った。そして、ムロの片腕を自らの肩に担ぎ上げる。

呆然とするバショウたちを尻目にカガミは扉に手をかけた。

「呼んでいる暇はない。国一番の駿馬の準備をしろ。そのサプライとやらにムロを見せに行く」

黄昏国たそがねは広大な領土を有している。亡国寸前と囁かれて久しいが、今はまだ圧倒的な存在感を以つて諸国を寄せつけない。

長き戦を傍観し続ける識者たちは言つ。高天原国に対抗し得るは黄昏国だけだと。

カガミは馬上より、明け染める荒野を眺めた。手綱を引き、馬の速度を落とす。自分の前に乗せたムロは浅い呼吸を繰り返している。いつもなら一つに結つている彼の長い髪が風に揺れる。

決して澄み渡ることのない、灰色が混じつた空。高天原国との戦が熾烈しれつさを増すにつれて黄昏国たそがねの空は灰色になつていったのだと昔、師より教えてもらつたことがあつた。

カガミはふところより地図地図を取り出した。黄昏国の中でも最果てにある善灯村。東の大國である炎來国えんらいこくとの境目にある村。

地図上では、この辺りのはずだと田を凝らして村の存在を探す。国と国との境目にある村は戦の火の粉を浴びやすいため、人目につかぬようにひつそりと息を殺している場合が多い。

「……あれか……」

鬱蒼うつそうと生い茂る森の向こう側から細い煙がいくつか立ち昇つている。朝餉あさげの支度をしているのだろう。

カガミは馬から降りると、手綱を握つて自ら先導を切つた。馬は

足元がおぼついていない。いくら黄畠国一の駿馬だと言つても一昼夜駆け続ければそうなる。

「よく耐えてくれた。村に着いたら十分な休息を取らせよう」カガミはそう言って馬のたてがみを撫でる。馬は「わかった」とでも答えるように一声啼いた。

意外にも広い村だというのは馬や荷車が通るための道が森の中にあることから推測できた。水のにおいがする。

かさついた喉が水を欲する。出奔した時に持つてきた水はほとんど全てムロに飲ませた。ムロの命は風前の灯だ。カガミは、彼を差し置いて水を飲むことなどできなかつた。

数刻のうち、村の入り口へ辿り着いた。のどかな風景は殺伐としたこの国の状態に似つかわしくない。ゆっくりと善灯村の中を歩く。簡素な造りの木でできた家々はどれも葦や藁で入り口を隠している。女たちは家の前で火を焚いて朝餉の支度をしていた。粟やヒエを煮込んだにおいはカガミの腹をよじつた。

ふと、一人の女と目が合つた。彼女は早朝の訪問者に警戒を示し、眉根を寄せた。

「こんな朝早くから、この村に何のよつだい」「サブライという者を捜している」

女は馬にかつがれたムロを見ると、合点がいったのか一人頷く。「ああ、その子をサブライに診せにきたのか。すまないね、近頃よく炎來国の奴らが来るもんだから気が張っちゃつてねえ」さつとカガミの目の色が変わつた。

「炎來国の奴らが……どうしてこの村に？」

問うと、女は首を捻つた。

「わかんないけど、いつもサブライのところに行つてゐみたいだよ」

「そうか、ありがと」

足早に立ち去ろうとするカガミに向かつて女は声をかけた。

「サブライの家はこのまま真つすぐ行つたらある社殿を右に曲がつ

たところにある水辺のほとりだよ！ 他の家とはちょっと離れてるからすぐわかるはずさ」

親切に教えてくれた女に対してカガミは一礼した。

女の言つたとおりに歩いていくと、サブライは既に起きているらしく、家の前では火が焚かれている。しかし、サブライはそこにいなかつた。火に煽られている器の中には水しか入っていない。

入り口に垂れているムシロが揺れた。その隙間より、浅黒い肌をした屈強な男が姿を現した。顔に刻まれた大小さまざまな裂傷だけが白く浮いている。数々の激戦を潜り抜けてきた兵に相応しく、広い肩幅と巨大な体つきをしている。

サブライはカガミを見て固まつた。そして、馬に背負われているムロを見ると表情を和らげた。

「こうも立て続けに客人が来る日など、久しぶりだ」

サブライは食事の用意をすると言つて一旦家の中に戻り、しばらくするとムシロからひょっこり顔を覗かせてあたたかくカガミたちを家中へ迎え入れてくれた。馬は家のすぐ脇に流れる川べりに繋ぎ、たくさん穀物と水を与えてくれた。カガミには雑穀と木の実を漬して煮詰めたものをよそつてくれた。それを口にした瞬間、身が震える。張り詰めていた糸が切れて、どつと疲れが体中を回つた。

「ハルセ王子……で間違いないか」

名乗つていなかつたにも関わらず、サブライはカガミの正体を当てて見せた。カガミは飯を食べる手を休めて頷く。

「よく、知つているな」

「わしは、もともと高天原国の武官だ。王子の顔は一度戦場で拝見したことがある。……たしか、王子の初陣の時だつたと記憶している」

カガミは息を呑んだ。ぴんと張り詰めた空気が流れれる。

「……まあ、昔のことはいい。今はムロのことだな」

そう言つて、サブライは荒く肩を震わせて呼吸するムロのそばに寄つた。ムロの睫毛が微かに動く。呪の紋様は彼の右頬まで侵蝕し

ている。

「ムロを助けられるか」

「こればかりはわからない」

「あなたは名医だと都の者から聞いた。なんとかならないのか」
身を乗り出すカガミの肩をサブライは押し戻す。

「ムロは今、戦っている。己を乗つ取ろうとしている神 地祇と
な」

衝撃がカガミを襲つた。呼吸することも忘れた。

「地祇？」とムロは戦っている。そうサブライは言った。
言葉をなくしたカガミにサブライは非情にも告げる。

「この子はそれを覚悟の上で呪を受けた。……王子、ムロに呪を刻
んだのはわしだ」

カガミは思わずサブライの胸倉を掴んだ。

「ふざけるなつ。禁忌の術を 何故つ」

視界が霞んだ。動搖に肌が粟立つ。

サブライはいたつて静かな瞳でカガミを見据えた。その目はムロ
によく似ていて、カガミは視線を逸らす。

「あなたが動搖しているのはわしがムロに禁忌の術を施したからか。
それとも 」

「言つな！」

カガミの声が上擦る。カガミは耳を塞いでうずくまつた。

「？地祇？が関わっているからか」

弾かれたようにカガミはサブライを振り仰いだ。

つり上がつたサブライの眼からは何の感情も窺えない。

「伝承がある。神々はこの世を造った際に己の血脈を受け継ぐ一族
たちも造つた。

中でも巨大な神の血脈

天を支配する天神の一族は？神の
あまつかみ

目？、地を支配する地祇の一族は？神の腕？、海を支配する海若の
一族は？神の口？と呼ばれた。神の血脈を受け継ぐ一族たちにはそ
れぞれの呼び名どおりさまざまな能力を有していた。彼らは長き年

月を経て血を薄めた。

しかし、まれに神が与えた太古の力を持つて生まれてくる者もいる。その者たちは神の申し子と呼ばれる。

……ムロが地祇の一族の正統な血を引いているのは会つた時からわかつっていた。申し子ではないものの、地祇を体に宿す資格があり、素質があつた。だからこそ、わしも賭けたのだ。大切なものを守りたいのだとひたむきな目で訴えてきたムロなら、と

サブライは空を見つめて言葉を重ねる。

「わしは伝承を語る一族の末裔。母よりもいつも聞かされていた。古くより、ヒトに宿る神の力は混沌とする世を統治するために使われてきた。常に歴史の霸者は？神の腕？だつた、と母はいつも言つていた」

真摯な瞳でサブライはカガミを見つめる。

その視線が更にカガミを追い詰めた。手が小刻みに震える。

カガミは、すつと立ち上がつた。

「俺は…………神など信用しない。神は、人間を青草としか見ていないのだから」

頑ななカガミに向かつてサブライは厳しい表情を送つた。

「何を恐れことがある。地祇は王子の守り神。そうだろう、？神の腕？……いや、？地祇？の申し子よ」

ムシロをぞんざいに払いのけてカガミは外へ飛び出した。残されたサブライはムロの額に手を置いた。

父譲りの朽葉色をした髪を頭のてっぺんで一つに結わく。ハルセは王宮の庭で目付役とともに剣の稽古をしていた。彼の確実な剣さばきは天賦の才と讃めそやされ、鮮やかな身のこなしは神の申し子に相応しいと噂されている。

端麗な相貌はあまり多くの感情を見せない。それが都中の女たちの心を射止めた。冷たい美しさはまるで纖細な輝きを宿す宝玉だと、女たちはうつとりと声を揃えて言つ。

「剣の稽古はこれまでです」

「ああ。ありがとう」

ハルセは淡々と礼を述べると剣を鞘に納める。ハルセに剣術を教える目付役の男は、ふと微笑を洩らした。

「王子も大変ですね。次は老師より、史実の教えを受けるんでしたつけ」

ねぎらいの言葉をかける男にハルセは眉ひとつ動かさずに頷いた。「ああ。それが終われば、軍師から軍略の教えを請うことになつている」

「……あまり無理をされないよう」

男に背を向け、まだハつになつたばかりの王子は呟いた。

「大丈夫だ。高天原国を打倒するためならばこの身一つ、火にくべることも厭いはしない」

幼子に似つかわしくない口調と言葉に男は声を詰まらせる。ハルセは男を一瞥する。

「俺は、この地上唯一の希望なのだから」
極めて冷淡に言い放つた。

打倒高天原国。

それがハルセの全てと言えた。

生まれ落ちた際に占者たちから、地祇の血脉を受け継ぐ？神の腕？という称号を貰い受けた時、ハルセの行く末は決まつたも同然だつた。

高天原国に苦しめられている地上唯一の希望。何度もそう囁かれてきた。また、彼の持つて生まれた武才に周囲の評価はたかまつていく一方だつた。

ハルセは当然の「ごとく父王や官たちの期待に一心に応える。

ハルセ王子は國の傀儡だ！ その瞳には何の希望も映つていらない！

心ない言葉を浴びたことは一度や二度のことではない。たしかに、ハルセはその言葉を肯定していた。自分は傀儡かと恐怖する心も嘆く心も浮かんでこない。

ハルセには高天原国を滅ぼすことだけが心の拠り所だつたのだ。目標に向かつてまい進すれば、周囲はハルセを認めてくれる。自分の存在理由ができる。

高天原国を憎んでいたわけではない。ただ、幼い彼は？神の腕？と呼ばれることで自らの居場所を保つていた。

父はハルセを腫れ物を触るかのように扱う。母はどこかよそよそしい。だが、そんな彼らもハルセの優れた能力を目の当たりにすれば笑顔になる。

ハルセはいつしか己の感情を殺し、文武を極めることに心血を注ぐようになった。

（何も感じない。何も見えてこない。黄昏国^{たそがれこく}の未来 高天原国^{たそがれこく}の滅亡。その先に、何があるというんだ）

虚ろな両目に映るのは、これまた虚ろな灰色の空だつた。

深く大きな闇が広がつていた。

一寸の光も射さないそこに、ハルセは佇んでいた。

いつもと変わらない夢だとハルセは無感情にその場に座り込んだ。

寒い、と咳く。その声は闇に紛れて消え失せる。

ハルセは両膝に額を乗せて目を瞑つた。夢の中で目を瞑るといつのもおかしな話だが、目を開いていても閉じていても映る景色は変わらないのだから構わないだろうと思つた。

『 申し子よ』

ふいに、厳かな声が頭上より降り注いだ。

驚愕して目を丸くし、ハルセは瞬時に身構える。

辺りを見回しても誰もいる気配はない。だが、たしかに声が聞こえたのだ。ハルセの喉が鳴る。

声は低く笑い声を洩らした。

『 ようやく捜し当てた。愛しき申し子、何を恐れることがある。わらわの大切な寄りしるとなる子供』

心底愛おしむような聲音で言葉を紡いでいるにも関わらず、その声にハルセは警戒を解くことができなかつた。

「貴様は、何者だ」

返つてくる答えに見当はついていたが、訊かずにはいられなかつた。

くつくつと声は笑みを深くする。声はハルセの心奥まで響き、背筋を凍らせる。

『 そちは聰い子じや。だが、わらわは地祇ではない。海若じや』

『 ！』

予想外の返答にハルセは困惑を隠せなかつた。海若と言えれば？神の口？を操る姫巫ひめみこを加護する神だ。

暗がりから細く白い手が何本も伸びてくる。ハルセは後ずさつた。「来るな……つ。俺は地祇の申し子だ。俺に手を出せばかの神だつて黙つていない」

『 ……申し子よ、そちは何も知らぬ無垢な赤子じやな』

幾本もの白い腕はハルセの首に手をかけた。圧迫感はない。ただ、手をかけているだけ。氷のように冷たいそれに触れられた瞬間、嫌悪が体中を駆け巡つた。

「触るな」

強い口調で言つと、白い手はやるとハルセから距離を持つた。

声 海若は歌うように言を紡ぐ。

『可哀想に。選ぶ道があることすら知らわれておらぬのじやな』

海若に惑わされでは駄目だとハルセは身を固くした。神は残酷だ。気を緩めれば魂を引きずられてしまい可能性だつてある。

『? 申し子? とは』

白い手は四方に散らばり、ハルセの逃げ場をなくす。

『ただの神をおろす器のこと。わらわたちが自在に力をふるうための寄りしろに過ぎない。神の加護など、ないのじや』

『そんな、馬鹿なことが……』

『神はヒトなど愛さない。わらわが姫巫に力を貸しているのも、ただの気まぐれ 暫つぶし』

『それにね、そちは一神だけのものではない。わらわのための器である』

『何を言つていい。俺はれつと黄帝國^が王子。黄帝國は古くより地祇の一族が治めてきた土地だ。海若の血脉など入り込んでいはざがないつ』

宙に浮かぶ白い手がハルセの方へ寄つてきて、頬を撫で上げる。

『そちの母君は、わらわの国である高天原国出身じや。しかも、あやつは姫巫の娘。色濃くわらわの血脉を受け継いでおるわ』

初めて聞く驚愕の真実に、ハルセの額からは多量の汗が噴き出る。

母の出身地など気にしたこともなかつた。

白い手がハルセの体を抱きしめる。それを払いのけるにはハルセが受けた衝撃は大きすぎた。

『申し子よ、そちは地祇の恩恵もわらわの恩恵も受けられる稀なる器。そして、その何も映さない傀儡の瞳はわらわが降り立つに相応しい。さあ、その体を明け渡せ。さすれば、もう何も考えなくてよい。ただまどろみの中でそちの望む世を夢見ていればよいのじや』

「何も考えなくていい、と？」

『ああ。わらわにはわかる。そちの感情がこそげ落ちている様が。そのような状態で浮世を生きるのは辛からう』

白い手は無抵抗のハルセを締めつける。骨が軋む音がする。

その時、暗闇に金色の光が射した。白い手がそれに反応してハルセから離れた。稲穂のごとく美しい光は暗闇を瞬く間に照らし出す。

『海若よ、我の領土に勝手に入り込むな』

身の凍るような冷たい声が光のかなたより聞こえてくる。

『…………はて、わらわは申し子に惹かれてここに来ただけのこと。この空間は黄昏国(ひぐんこく)の領土ではないはず。そちこそ、わらわの邪魔をするなど、無粋な奴じやな』

『この御子は、黄昏国(ひぐんこく)の青草だ。我の青草に手出しさは許さん』

緊迫した空氣の中、ハルセは俯き、笑みを零した。

『何がおかしい、申し子よ』

地祇の声に、ハルセの笑みはますます濃くなる。

ハルセは光が射し込んでくる方に真っすぐに両を向けて皮肉げに顔を歪めた。

「お前たちはただ、人々が争い合つて死んでゆくさまを眺めているだけ。救つてなどくれない」

『我らはもともと青草たちを救おうとこゝう氣持(きもち)りなど持ち合わせていない』

硬質な声音で地祇が言った。

ハルセは双眸を細める。

「そのくせ、気まぐれに力を^もえては世を混沌ふんとさせ。しまいには、自ら申し子の体を乗つ取り好き勝手に力を揮おうとする」

神々は何も言わなかつた。それが肯定だと受け取つたハルセの瞳に、鋭利な光が宿る。刃の切つ先を思わせる光を宿した両目は、先程までのハルセと今のハルセを別人に見せる。

ハルセの根本より、何かがにじみ出す。

海若や地祇が戸惑つているのが感じ取れる。空間が歪む。

怒りや憎悪を超越した熱い感情がハルセからあふれ出した。唇を震わせて、彼は言った。

「そなたちの力など、借りない」

言靈。森羅万象の力を借りて人が行使する力。

一瞬のうちに空間は崩れ去った。目覚める間際、海のにおいと稻穂のにおいが鼻孔をくすぐった。

ハルセは夢から醒めると、視線をずらして格子ごしに外を見た。明け方の薄い水色をした空に、桜の花が舞っていた。

抜け殻だったハルセは、その時初めて確固たる己の意思を持って起き上がった。

昔の記憶は今も胸に重くのしかかっている。

朝露に濡れた青い稻が顔をのぞかせる太陽によって煌めいている。カガミは感慨深く溜め息を吐いた。久方ぶりに聞いた神々の名に動搖を抑えられず、サブライの家を飛び出したカガミは闇雲に走つた末、田園が広がる一角に辿り着いた。

小路の脇にあつた大きな石に腰かけ、たわいない朝の風景を眺め見る。

（あまり過去に浸るのはよくないな）

過去を思い出せばその時感じた想いに引き込まれてしまう。

カガミの後ろにある背の高い草むらが揺れる音で我に返った。息を殺してそちらを見ていると、現われたのは、サブライだった。

「やれ、随分捜してみれば……あまり遠くへ行つてなかつたのだな」彼は落ち着いた口調でそう言つと、カガミが座っている石の隣にある木に体を凭れかけた。

「取り乱してしまい、すまなかつた」

謝罪の言を口にするカガミに、サブライは緩く首を振つて「気にするな」と答える。

「王子、もしよければ家に戻つて少し話をしないか」

サブライの突然の申し出に少し驚きながらもカガミは静かに頷いた。

朝の光は善灯村全体を橙に染める。朝餉あさげを食べ終わった子供たちは元気よく森へ駆けていく。大人だけでなく、子供たちもまた村のために食料や水の採取をおこなっているのだ。

ハルセとサブライは言葉少なに家路を辿った。

「サブライ様、おはよう」

「この前は弟の熱を下してくれてありがとう」

道すがら、屈託たがまのせうじない笑顔で子供たちはサブライに声をかける。大人たちは高天原國の武官長であつた彼を恐れているのか遠巻きに一礼するだけだが、子供たちはそのようなことなど歯牙にもかけず、サブライの腕へ足にまとわりついてきた。サブライは柔和な表情で子供たちの頭を撫でる。

「また何かあつたらすぐに言いなさい」

大地にしつかりと根ざした大樹のよつな優しい眼差しは慈愛に満ちている。

子供たちは手を振つて森へ向かつていく。

「随分と懐かれているな」

「ああ。わしの薬湯が人々の役に立つのは嬉しいことだ」

「……あなたの人柄もある。？激昂おのおの大蛇？殿」

ハルセの皮肉にサブライは口の端を上げた。

「おや、あんた無事にサブライに会えたんだね。良かつた良かつたサブライの家へ着く直前、一人の女が気安く声をかけてきた。カガミにサブライの居場所を教えてくれた女だ。

「先ほどは助かつた。ありがとう」

女に向かつてカガミが笑つて見せると、女は顔を赤くした。

「いいよ、そんくらい。それにしたつてサブライ。炎來國の奴ら…

…どうにかしてくれないかい」

「うむ。迷惑をかけているのならすまぬな」

「迷惑つてほどじやないけど、みんな怖がつてるよ。またこの村が戦禍に巻き込まれるかもつて」

サブライは髭を撫でた。俯き加減の彼の表情は読み取れない。

「ま、早くあいつらが来ないようにしておくれよ」

そう言つと女はサブライの肩を叩き、その場を去つた。

力ガミとサブライが家に帰ると、ムロは幾分か落ち着いて眠つていた。唸ることもなく、眉間に皺も刻んでいない。サブライはムロの横に腰を下ろすと、脇にあつた器を取り、それをムロの口へと薬湯を流し込んだ。ムロは無意識下で薬湯を飲む。

「穢れに効能がある薬湯を煎じた。神に抗うのには清浄さも必要だからな。……わたしにできるのはこれぐらいだ」

しばらくの間、力ガミもサブライも何も話そうとしなかつた。ただ、子供たちの笑い声や鳥たちの歌声に耳を傾けていた。

「わしのところに炎來国の使者が何度も足を運んでいる」

石の器に何種類かの薬草を入れてすり潰していた手を止め、ぽつりとサブライは口火を切つた。

聞けば、サブライは炎來国に拳銃を促されていた。炎來国は黄昏と合流して高天原国にきばを？ こうとしていたが、きつかけが掴めずについたのだ。

黄昏国と炎來国はもともと壊滅的に仲が悪い。黄昏国の支配下にぐだるのを炎來国王はよしとしなかつたらしい。

「なるほど、それであなたに白羽の矢が立つたわけか」

戦場を駆ける兵の中でサブライの名を知らない者はあまりいない。戦場での地位が上にあればあるほど、サブライの名は重きを持つ。彼の出陣した戦はどれも高天原国側が勝利をおさめていた。

そんな彼が高天原国を離れ、黄昏国で細々と暮らしている。

炎來国の人たちは、サブライの名を聞いた瞬間に？ 激昂の大蛇？ であるサブライを思い浮かべたらしく、もともとは？ 高天原国の大蛇？

嵯武禮？と同一人物かを探るためにこの村に来たと正々堂々本人に告げたという。

サブライを味方につければ、黄昏国と同等の交渉ができると炎來国は踏んだのだ。黄昏国が腕の立つ兵に困窮しているのを知つてゐる隣国だからこそ考へることのできる策。

「あなたが炎來国と手を組むのならば、俺はかの国と同盟を結ぼう」「王子……」

「恥ずかしながら、我が国は傾いている。武に長けた者のほとんどは他国に流れ出でていつてしまつた。だから、より強き者が加担してくれるのならば 同盟だつて組んでみせる。サブライ、俺はこの戦に全てを捧げる所存だ。王子の地位だつていらない。ただ、絶対に負けるわけにはいかない」

サブライは黙つて聞いていたが、やがて一つ溜め息をついた。

た。

「それほどまで、戦に勝ちたいのならば、神をその身に降ろせ。神を制すには同等の力がある神が必要となる」

「神は、人に手を貸したりしない。自らの傀儡を望んでいるだけ」「申し子であれば、強い氣力と想いがあれば体を乗つ取られたりしないものだ」

カガミはサブライの言葉に了承しかねた。人の手で最後を飾りたいという矜持もある。

だがそれ以上に、幼い頃の出来事が神の介入を拒む。

「わしが参戦したところで、勝敗は見えている。高天原国には海若がついているのだ。神の前では人など塵芥ちじょあくたと同じ」

「それでも！」

カガミの語氣が荒くなる。

「それでも、勝たなければならぬんだ！」 海若かいじょくに縛られ続けて苦しんでいる者のためにも！

カガミの脳裏にヤナギの泣き顔が浮かんだ。声を上げずに涙を流

す姫巫は、いつも心で助けを呼んでいた。はっと我に返り、カガミは口を閉ざす。

(俺は 何を)

求めているのは黄昏国^{あたみくに}の復興である。間違つても敵国の大将である姫巫の解放ではない。

カガミは軽く首を振る。

「何も持ち得ない手で守れるものなど、たかが知れている」
深い声色が響く。

「王子、貴殿ならわかるはず。身分や金、全てをかなぐり捨てたところで何も守れないことを。わしは、サコやムロを守りきるだけのものを持つていなかつた。だが、王子は違う。貴殿が望めば地祇ちぎは必ず応えてくれるだろう。その力はいくら望んでもいる者がいようと、貴殿しか持ちはないもの。みすみす拒絶されるは、愚行かと」
サブライの言葉の端々から感じ取れたのは、悔みと羨望だった。

「……神降ろしの代償は？」

「そなたの未来。神の力に体が耐えられなければ死ぬ。よしんば耐えられたとしても、神を長く体内にとどめた者は体の老化が止まる。老いるという未来を神は奪う。永劫、生き続ける苦節が訪れる」

答えを聞いたカガミは何も言わなかつた。

神だけが知つてゐる、この戦の行く末を。

これから先、数多の魂が関わることとなる始まりの宿命さだめを。

想いの濁流は宿命の本流へ雪崩れ込む。

高天原国、黄昏国。古代史に残る二大国の最大にして最後の戦が始まろうとしていた。

五章 曙光射す

曙あけぼのがやつてくる。

兆あかしは日に日にはつきりと見えてくる。

「嗚呼、わかつていたよ」

己の憎惡や憤怒のために、ちはやぶる神へ傾倒した母を見つめて
彼女は育つた。

その母が生きている間中危惧していたことが現実になりつつある
のだと、彼女には察しがついた。

神の申し子達がこの浮世に降り立つた。

自分や母のような代役者とは違つ。

非常に強い光。

黎明れいめいの刻。

彼女は血塗られた唇を舌なめずりする。その動作は緩慢かんまんでいて、
妖艶ようえんだ。

「神の力、か」

ふふ、と嗤う彼女はどこまでも浮世離れしておひ、不気味であつ
た。

「申し子が神の力を受け継いだ時、人の世はどうなるのだろうね」

申し子 神を受け入れるに相應しい器。

それがかの神が渴望してやまぬものであるなど、見え透いたこと
だ。

彼女

姫巫みくしはたおやかな御髪を右側に寄せて、樅の木でこ
しらえた座椅子に腰を下ろした。

彼女は頬杖をつき、社殿の格子越しに見える天を眺めた。

蒼く滲むそれは、まるで涙の如く透き通っている。

姫巫が母から姫巫の座を譲り受けたより、早数百年が経とうとし
ていた。

「誰がおいそれと、ここまで守ってきた世を壊させようが、
空に向かつて投げた彼女の言葉は、強い意志を含んでいた。
力強い眼光は、はつきりと叛旗の色を浮かべている。

「戦、反抗、大いに結構。それが人なのだから、
だからこそ、と姫巫は口を一文字に引き結ぶ。
彼女の両手に力が入る。

「わたくしは抗いましょうぞ。守るべきものためなら、手段は厭
わない」

ねえ、
。

彼女は地上に生まれ落ちたばかりの、一人の赤ん坊の名を呼んだ。

力ガミたちの脱走劇から五日後、今代姫巫が重用していた采女チズコの葬儀が行なわれた。

その時、立ち昇る煙を前に不覚にもヤサカニは少しだけ泣いてしまった。幼少時代、ともに高天原國の邑で過ごした記憶は喪った左目と左耳に生々しく刻んでいる。チズコが重傷を負ったヤサカニを担いで近隣の邑へ助けを求めるべく、自分は死んでいたに違ない。

（なのに、俺はチズコを助けられなかつた）

彼女は最期までヤサカニの窮地を救つてくれたのに。

悔やみきれぬ想いがそのまま涙となつて目頭に浮かんだ。

葬儀が終わるとその足で梶子斎森へ向かつた。梶子斎森の入り口である北門前には女官たちが群れをなしている。彼女たちは森に向かつて一様に祈りをささげている。姫巫の回復を願つているのだ。

「失礼」

女官たちはヤサカニの声に気色ばんだ。ある者は横の者を小突き、ある者は髪を手ぐしで整える。

ヤサカニはそんな彼女たちに留意せず、橘の木で覆われた鏡月池へ近寄る。薄く湯気立つ池の水を掬いあげて口をゆすぐ。その後、丁寧に手を洗つた。せめてこれくらいの清めはしろと口をすっぱくして言つていたチズコが思い出され、胸が痛んだ。

神杷山の入り口は、何度も通つうちに把握できた。黄昏國の民である自分を神杷山の主神は拒むだらうと思つていたヤサカニは、初めて姫巫の社殿へ続くこの楠の木に触れた時、ある程度の覚悟をしていた。しかし、主神は沈黙を貫いた。ヤサカニが山を登ることを容認したのだ。それが果たして何故かは人の身空ではわかりかねる。

「お待ち申しあげておりました、ヤサカニ殿」

「ああ。……采女殿、姫巫の……ヤナギ様のご容態は？」

采女たちは力なく俯く。何も変わつていないので。

ヤサカニは社殿の奥間へ通された。代々姫巫が住まう部屋は簡素で、余分なものが何一つない。ただ、橘の枝とゆずりはだけが中央に置かれている。

采女たちは、ヤサカニ様も安静になさつてくださいませ、と気遣わしげに言つて部屋を出していく。

ヤサカニは寝台に寝そべつて、ヤナギの顔を覗き込む。彼女の傍らに置いてあつた桶の水に浸した木綿布を固く絞り、ヤナギの額に乗せた。

微かに睫毛を震わせながら眠り続けるヤナギを見て、ヤサカニは溜め息を吐いた。

真象の力をふるい、炎を操つた姫巫はいまだ深い眠りから醒めない。ヤサカニは火傷を負つた自らの左肩に手をやる。少し血が滲んでいたため、上衣を脱ぎ捨て巻いていた布を剥いだ。赤黒く変色した肌はいまだじくじくと痛むが、ヤナギの痛みに比べればと自らを奮い立たせていた。

しずしずと扉が開かれる。采女たちはヤサカニが上半身を露わにしているのを見て、さつと頬に朱をさしたが、すぐに立ち直つて用件を述べた。

「ヤサカニ様のお傷に当てる布と塗り薬をお持ち致しました。どうぞ、お使いになつて下さいませ」

「すまないな」

いいえ、と軽く頭を下げて采女たちは退室した。彼女たちはよく気が回る。これも采女筆頭を務めていたチズコの教育の賜物なのだろう。采女たちの動きに無駄は一切ない。

ヤサカニは壺に入つた塗り薬を手に取り、患部に塗布する。少しだけ痛みが和らいだ。濃厚な薬草の匂いが鼻孔に迫る。それを封じ込めるように手早く布をきつく巻きつけた。

火の手が一番大きかつた場所にいたことをかんがみれば、ヤサカ

二はだいぶ軽傷と言える。火柱からヤナギを守る際に左肩を痛めた以外に大きな外傷はなかつた。

(ヤナギ様の傷も、内側でなく俺のよう外側であれば)

「まだ目覚めないヤナギを問診した医師は云つた。外傷はほほない、あるとすれば心に刻まれた傷だろう、と。

ヤサカ二は脇にあいた桶に自らの顔を映した。揺れる水面に映る右目は淡く青みがかつていて、もとは赤茶色だつた瞳が変色した理由はただ一つ。

真名を縛られたからである。

真名縛りは姫巫だけが行なえる秘術であり、それを施行された者は体のどこか一か所の色が変わるという。ヤサカ二の場合、赤茶だつた瞳の色が青茶になつただけなので、さほど気になる変化ではなかつた。

しかし、とヤサカ二はヤナギを見つめた。ヤナギはヤサカ二の瞳を見るたびに、自分が真名縛りをしたのだと心を痛めるのだろう。それをヤサカ二は危惧していた。ヤサカ二自身が真名を教え、縛れと懇願したのだ。ヤナギが気に病む必要はない。

あの状況下で、何もせずに火の海を脱出できたとは到底思えない。真名を縛られたことにより、ヤサカ二はヤナギを守るために「」の限界点を越えた能力を發揮できたのだ。

ヤサカ二はヤナギが自分の真名を口にした時のことを思い出して胸を震わせる。

『シユマ』

甘く、のうすい脳髄を侵蝕していくような声。この方を守り抜きたいと思わせるほどに心地よい響きだった。

真名を呼ばれること自体、滅多にないことだ。大半の者は家族以外に真名を明かさず生涯を終える。

まさか、自分が敵である姫巫に名を明かそつとはな、とヤサカ二は苦笑した。

あの瞬間　　火の渦の中でヤナギが倒れ込んだ瞬間、ヤサカ二は

呼吸を忘れた。今もあまりその時の行動を思い出せない。とにかく助けなければと体が動いた。

カガミの背後からヤサカニは呆然とヤナギが真象の力を振るうさまを見ていた。すると、急にヤナギが胸元を押されてうずくまつたのだ。

反射的にヤサカニの体はカガミの横を横切っていた。

『いけない、ヤサカニ様！』

バシヨウが手を伸ばしてきたが、ヤサカニには届かなかつた。剣も荷物も何もかもなげうつて、ヤサカニはヤナギのもとへ駆けた。ヤサカニがヤナギの傍らに膝まづくと同時に炎の勢いが更に強まつた。ああ、もう自分は引き返せないとその時ヤサカニは覚悟を決めたのだ。

「…………何故、だろう。今だつてこんなに憎いのに」

一人ごちてヤナギの頬にかかる髪をすくい、己の口元に当てる。黒く艶のある髪からは部屋に焚きしめられた香の匂いがした。

「笑うか、チズコ。幼いあの日、姫巫など絶対に殺すと言つてお前と訣別したのに」

格子から洩れる夕刻の赤みを帯びた光がヤサカニの纖細な造りをした相貌を照らす。あまり表情を和らげることのないヤサカニが、ふと痛みを含んだ微笑を浮かべる。

「俺は自ら姫巫を選び取つた」

高天原国の上空には、薄い雲が立ち込めていた。風情ある宮だと他国の使者たちから称される王宮は、今や目も当てられない状態だつた。

西門にある忌み部屋は跡形もなく焼け焦げ、台王の寝所にかかる格子も黒い炭となつていて。

十日前に起きた黄昏国の者たちの脱走劇は、すぐ人々の耳に伝わつた。

『ああ、さつとこれは凶事の前触れ。神が怒つておられるのじや。台王の治世では国が潤わんと』

『さうかもしれないね。黄昏国の奴らもこんな中途半端な火事じやなくて、富殿』と全部燃やしてしまえばよかつたのに』

『ムロ武官長が黄昏国に加担するとなると、この国も終わりかもな』市井からはそのような声も上がる。

今年は日照りが続いていたため、穀物の実りが芳しくなかつた。しかし、台王は民に例年と変わらぬ税を納めさせた。守れない者は容赦なく引っ立てられて打ち据えられ、罵倒される。しまいには殺された者もいる。そのような現状に人々からは今回の件は台王のせいだとたまう声が少くない。

慌てたのは台王や側近たちだ。呪詛のよだな噂を断ち切ろうと躍起になるが、広まつてしまつたものは取り返せない。

『大体、他国を制圧して何がしたいんだか』

『美姫の集団でも作りたいんじゃないの。台王様は好色だから綻びは富中にも広がる。

反逆罪だと台王は憤然とし、家臣たちに噂を聞いたらその者を御前に引つ立てよと命をだすが、その家臣たちさえ台王を嘲つているのだからどうしようもない。

耐えよのない怒りの矛先を、逃亡した黄昏国の人たちに台王が向けるのに、そうそう時間はかからなかつた。

寝殿の奥にある樂屋で口がな酒に樂に興じていた台王は、集つた者たちに目を向けた。

「ヤサカニを……ヤサカニをここへ！」

皆、互いに目を合わす。台王はヤサカニを処断しようとしているのだ、と台王の様子から容易く見破れた。

「し……しかし、ヤサカニ殿は深手を負つておいでで……。その上、寝ずに姫巫様の介抱までされておられて……」

一人の采女が震える足で進み出て、口を濁す。それが更に台王の怒りを煽つた。

台王が持っていた杯を女官に叩きつける。杯に入っていた発酵酒が零れて采女の衣服を濡らした。

「貴様は高天原國の民であらうー。わしの言つことが聞けないのだつたら、奴婢の身分に落としても良いのだぞ！」

意見した采女は今にも泣きだしそうな面持ちで席を辞した。

台王の傍にはべつている美姫たちもその様子に声を失っている。

「台王様、さきほどの采女は都でも有力な貴族の娘でござりますぞ。その物言いはいかがなものかと！」

非難の声を上げたのは、理知的な顔をした台王付きの近衛兵だつた。近衛兵は精悍な表情で台王を睨み据える。

「…………そちはこれより、西門兵に格下げじや」

稻妻が走つたごとく、樂屋は静まり返つた。

近衛兵は懲懃に頭を垂れて台王の近衛兵である証の虹色をした玉が填め込まれた剣を床に置き、「とんだ御無礼を致しました」とだけ口にして退出していった。こそこそと側近が台王に耳打ちする。

「…………あの者は、近衛兵の中でも腕利きの者でございましょう。身分も高く、教養も高い。どうぞ、ご恩情を」

「黙れ。誰であろうとわしに口出しあは許さぬ。そなたらも、腹の中では笑つてあるのだらう。わしを」

酷薄に笑う台王に意見出来る者はいなかつた。

台王はくつくつと喉を鳴らすと、隣にいる美姫へ「酒を」と促す。場の雰囲気に圧されていた美姫は慌てて杯に酒を注ぐ。それを煽り、台王は不穏げに舌舐めずりする。

「…………知らぬから、笑えるのだ。知らぬから、狂わざいれるのだ」小さく呟いた台王の言葉を拾つた者は数名いたが、誰もその真意を測り知ることなどできなかつた。

その日は雨だった。

謁見の間には武官や文官、女官たちがひしめいていた。皆、これから始まるヤサカニへの詮議せときを傍聴しに来ているのだ。

ヤサカニは死を覚悟した。彼は深く頭を下げたまま微動だにせず、ただひたすら正面に座にいる台王の言葉を待つた。

「ヤサカニ」

「は？」

台王の呼びかけにヤサカニはすぐさま返事をする。

「ムロとカガミの裏切り……そちも知つておるだらう。あまつ、あいつらはこの宮に火をつけた」

謁見の間の空気が凍つた。皆の視線を一身に背負い、ヤサカニは伏し目がちに口を開く。

「存じ上げております」

言つた瞬間、ヤサカニの右頬を何かがかすつた。杯だ。その中から少量の酒が零れ落ちる。

ゆるゆると双眸を台王に向けると、彼の顔は真つ赤に蒸氣していった。興奮しているのは一目瞭然だった。

台王の怒りは正当なものだつた。宮殿の半分はヤナギが起こした炎によつて焼け落ちてしまつた上、捕虜にまで逃げられてしまつたのだ。なお、火の件がヤナギの仕業だとは誰も気がついていないようだつた。

台王たちはヤナギが床に就いている原因を、心の病だと思つてゐらしかつた。

ヤサカニは手をついて頭を垂れる。陳謝の言葉は更に台王の琴線に触れてしまふだらうと判断し、あえて口にしなかつた。

台王は自分を殺すだらうとヤサカニは考えていた。

たとえここで殺されたとして、ヤサカニに未練はなかつた。黄昏國王より頼まれた力ガミの護衛は無事勤め上げたし、それに、ヤナギを窮地から救えた。

後悔がないと言つたら嘘になるが、この戦乱の世の散り際としては上出来だと思った。

「お待ちください、父上」

部屋のすみで黙つて聞いていたクルヌイが立ち上がり、台王のそばに寄る。

「この者はたしかにカガミと共に高天原國へやつて来ました。そして、共に黄昏國へ帰ろうとしていたかもしれません。だが……」

クルヌイは優しげな瞳をヤサカニに向ける。その目は深い慈愛が内包されていた。まるで、必ず救うから安心しようとでも言つよう。この者は、混乱した兵たちに姫巫が殺されようとしていたところを必死に阻止したというではないですか」

「しかし、クルヌイ王子。それは処刑を免れようとしただけやも」

側近の意見にクルヌイは目を細めた。

「あなたは、姫巫に真名を明かしてまで、自分の身を守りつとしますか？」

クルヌイの問いに入々はざわめく。台王も目を見張り、クルヌイに注目する。

ざわめきが収まるのを待つて、クルヌイは静かに唇を開いた。

「その場にいた者たちが口々に教えてくださいました。『ヤサカニは姫巫に真名を教え、それを姫巫が口にした』と。さて、この場にいる者たちの中に、傀儡となつてでも姫巫を守りつとする者がいるのですか」

場は水を打つたように静まり返つた。

「証拠はあるのか。姫巫の真名縛りを受けた証拠は」

ヤサカニは台王の問いに自らの右目を指差した。

「我が右目虹彩はもともと地下の国に住まつ者特有の、赤茶でございました。しかし、今は青みがかつております」

ふむ、と幾人かがヤサカニの瞳を覗き込んでくる。『いじやとばかに女官たちも間近でヤサカニの顔を観察してきた。台王も、しげしげとヤサカニの瞳の変化を見受けると、手に持っていた扇を開いて煽いた。

「…………今回だけはそちを赦そう。姫巫を救つてくれた件もある。そのかわり、次はないと思え。さらし首だと心得ろ」

「は。ご恩情ありがたく頂戴いたします」

「ああ、父上 ありがとうございます。良かつたね、ヤサカニ」まるで我がことのように手放しで喜ぶクルヌイにヤサカニはあいまいな笑みを返し、頭を垂れた。クルヌイの助け船がなかつたら、ヤサカニはきっと処刑されていたはずである。クルヌイは高天原國王子であるにもかかわらず、出会った当初からヤサカニやカガミに好意的に接してくれていた。頭が上がらない。

「さあ、詮議は終いじゃ。皆、解散」

台王が手を打ち鳴らすと皆すぐさま席を立つ。中には不服げにヤサカニを睨みつける者もいたが、ヤサカニをよく知る女官や護衛官、武官たちは笑顔を見せてくれた。

「ヤサカニ、これから何か用事はある？」

「いえ、特には」

本当はヤナギの様子を見に行きたいと思つていたが、クルヌイ王子にそれを率直に言つほどヤサカニは馬鹿ではない。

クルヌイは満足げに頷いた。

「じゃあ、わたしの部屋へ行こう。他国からの献上品の中でおいしい菓子があつたんだ。一緒に食べよう。よいですね、父上」念を押すように台王の方を見るクルヌイを、台王はうつとうじょに手で払つた。

「よし、じゃあ行こう。ほら、早く早く」

さつさと謁見の間より退室したいのかクルヌイはヤサカニの背を押す。

クルヌイの部屋へ着いた途端、ヤサカニは待ち構えていたらしい

クルヌイの護衛兵たちから囲まれた。彼らは皆、顔をくしゃくしゃにしてヤサカニの肩を何度も叩いた。

「あんたが殺されるんじやないかってみんな気が気じやなかつた」

「最初は黄昏国の奴だし、警戒してたけど……お前はいつも職務に誠実だつたからさ。処刑されることになつたら反論しようつて決めたんだぜ」

「カガミのことは残念だが、ヤサカニは姫巫様を守つたんだ。誰かが悪し様に言つてきても堂々としてろよ」

口ぐちに護衛官たちは言つた。思いやりに富んだ言葉たちがヤサカニの胸を熱くした。

彼らはヤサカニのことを微塵も疑つていない。その事実に少しだけ罪悪感がうずいた。

クルヌイは苦笑して、部屋の戸口前に控える女官に合図を送る。それに応えて女官はすぐさま部屋より出て、菓子を持ってきた。

「さあ、ヤサカニ。さぞかし緊張しただらう。これでも食べて気分を休ませるといい。……大丈夫、皆の分もあるから。今日は特別だ。酒も持つてこさせよう。ヤサカニが無事に戻つた祝いだよ」

クルヌイの粋な計らいに護衛官たちは浮足立つた。

居心地悪そうに部屋のすみに移動したヤサカニは、女官から差し出された菓子を一つ手に取る。つぐいす色の皮にかじりつくと、ほのかに桜の芳香が漂う。桜が練り込まれているのだろうか。甘く、それでいて少しだけ塩辛い。

張り詰めていた気が緩まる。ふと他の者たちに目をやると、既に宴会が始まっていた。酒の飲み比べをしている。

「ヤサカニ、お前もまじれよ」

「あ、ああ」

護衛官たちに引つ張られて強引に中央へと引き立てられる。困惑してクルヌイを見ると、王子は柔らかな表情をして自らも杯を手に取つた。そして、ヤサカニの隣に座つて杯を高々と掲げた。

「わたしたちの仲間の釈放に」

「はいっ」

クルヌイの言葉を皮切りにして皆酒を飲み始めた。王子も味わうように酒を飲んでいる。ヤサカニは周囲の者たちに次から次へ杯に酒をつがれて辟易する。それでももらつた酒を残すというのは礼儀に反すると、一気に酒をあおる。そのヤサカニの様子に護衛官たちはいつそう盛り上がり自分で自分たちも飲むぞと、それこそ浴びるように酒を酌み交わす。

終には泥酔して眠りこける者も出る始末だった。

元来、酒に強いヤサカニはそうでもなかつたが、他の者たちは気分が悪いのかクルヌイに一言告げて部屋を出て行く。

「やれやれ、気分が悪くなるまで飲まずとも良いのにね」

上機嫌でクルヌイは立ち上がる。彼は格子近くによつて、杯を傾ける。王子はあまり速度を上げずに飲んでいたので悪酔いしていいようだつた。

「眠っている者たちは私が責任を持つて屯所までかついでいきます」

律儀に言うヤサカニにクルヌイは首を横に振つた。

「眠らせておいていい。僕は君に、訊きたいことがある」「はい、なんなりと」

クルヌイはヤサカニから視線を外し、雨が降りしきる庭を眺める。格子ごしの庭は雨のせいで色あせて見える。

「…………カガミは、黄昏国へ帰つたんだね」

クルヌイの呟きを聞いて、ヤサカニは心臓が破裂するかと思う程に動搖した。

しかし、クルヌイはそれを咎める様子もなく、じつと外の景色を見ている。

「…………？ 神の腕？ と呼ばれる黄昏国の王子、ハルセ」

ヤサカニは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「貴殿は、全て知つておおせか」

クルヌイは微笑んだ。

「いいんだ。僕は、全てわかっていて君たちをこの王宮へ入れたん

だから

「何故、とヤサカニは訊いた。何故だろうね、とクルヌイは受け答えた。

「多分、このままでは世が終わってしまうと思ったから、かな」「ああ、雨は美しいねと格子の外を見ているクルヌイの表情をヤサカニが窺い知ることはできない。

信じられないクルヌイの命令にヤサカニは己の耳を疑つた。クルヌイはいつもと変わらず笑みを湛えた顔でヤサカニの前に立つている。

ヤサカニと同じく王子の室にいた護衛兵たちの動きも止まる。

「クルヌイ王子、それは……台王が許さないのでは」

「大丈夫、僕がうまく取り繕つておくから」

室内は異様な雰囲気に包まれていた。

クルヌイは都の視察を行なつて戻ってきたばかりのヤサカニを、すぐさま室に呼び出した。急いで室に向かつてみると、ヤサカニだけでなく他の護衛兵たちも呼ばれていたらしく、皆困惑した表情でクルヌイの言葉を待つていた。

クルヌイはヤサカニが来た瞬間、外を見ていた目を室内に向けて言い放つた。

ヤサカニに自分の護衛と姫巫の護衛とを兼任させる、と。

護衛兵たちの動搖は凄まじかった。王子の護衛が他の者の護衛を兼任するなど今までに前例がない上、姫巫の護衛は誰も就いたことがない。

姫巫は戦女神。自分たちを遙かにしのぐ力を持つ者を守る必要などどこにもない、というのが皆一致の見解だったのだ。

「王子、姫巫に護衛など要りません。あのお方は我々以上の力を持たれています。それに武力はないかもしけれますが、そのかわり巫力を持つ采女が近くに控えているではありませんか」

「そうです、クルヌイ様」

反対意見を言つ護衛兵たちを一瞥し、クルヌイは溜め息を吐いた。「じゃあ何故、姫巫は兵たちに殺されそうになつた。何故、采女の一人が死んだ」

しん、と場が静まり返る。クルヌイから発せられたとは思えない冷たく硬質な声に護衛兵たちは目を丸くする。

「武力が巫力に負けるように、巫力だつて多くの武力に囲まれれば

……負ける

ヤサカニはチズコの最期を思い出し、眉根を寄せた。息も吐けぬ戦いの最中、巫力を使うのは至難の技だ。だから、戦場においても姫巫以外の巫たちは後方で術を練るのだ。前線に出れば、否応なしに剣に圧される。

「ヤサカニ、これは命令だ。背くことは許さないよ」

クルヌイの迫力を前にして、ヤサカニは頷くしかなかつた。

赤、黒、白。

原色がヤナギの脳裏に浮かんでは消えてゆく。体が無意識のうちに目覚めようとすると精神が拒絶する。それが何度も続いたかは定かでないが、今や何もかもがあやふやなまま夢にまどろんでいる。

『ヤナギ様』

呼ばれてもなんの縛りも持たないかりそめの名。誰かが何度もそれを呼ぶ。心配そうに、悲しげに、時には怒りを含んで。何度も何度も。

だが、その声はチズコではない。サコでもない。

（私が心を許した人は、皆死んでゆくのだ）

それならいっそ

ふと瞼を薄く開けば、何の変哲もない天井が視界に映つた。

上体を起こす。どこも痛くない。腕や足に傷を負つていなかいか確かめてみるが、傷一つついていなかつた。幾日眠つていたかは定かでないが、空腹は感じない。寝台の隣に備えつけられている卓の上に白湯と水があるところを見るに、誰かが定期的にヤナギへそれらを流し込んでくれていたのだろう。

ヤナギは牢の中でも目覚めることを覚悟していた。しかし、ここは

社殿である。あれほど大きな火事を起こした自分に台王が怒りを感じないはずがない。投獄されてしまふことをした自分がここにいることに首を傾げる。

「ヤナギ様」

低い声が寝室の入り口から聴こえた。ヤナギは声の主を見た瞬間、血相を変えて素早く寝台から跳ね起きた。寝着であることも忘れて声の主の胸倉を掴んだ。

「何故……何故、私を放つて逃げなかつた！」

目頭が熱くなる。たとえようのない感情がないまぜになつて声の主に牙をく。喉の奥から何かが込み上げてくる。

彼　　ヤサカ二の右目は静かにヤナギを見据えていた。赤茶色だつたはずの鋭い彼の瞳はヤナギが真名を縛つたために青みを帯びている。

「そなたちを逃がすために力を揮つたのに。何故　！」

久々に怒鳴り声を上げてしまつた自分にヤナギは困惑する。それでも感情は收まらない。行き場のない気持ちはやがて一筋の涙となつてヤナギの頬を伝う。はつとしてヤサカ二から手を離す。強引に頬を伝う涙を拭つた。それはとめどなく流れ落ちる。

ヤサカ二はそんなヤナギの様子を黙して見守つていた。ようやくヤナギが泣き止むと彼は困つたように微笑んだ。

「何故でしょうね。正直、その問い合わせを俺は持つていません。憎しみが消えたわけでもない。ただ、あなたの孤独と俺の孤独は似ています」

ヤナギは予想だにしていなかつた答えに虚をつかれた。

ヤサカ二はヤナギの頭を撫でる。冷たさを感じさせる外見には似合わず、ヤサカ二の手は温かかった。

「チズ！」は……やはり、死んだの？」

「はい」

「……何故、火事を起こした私は牢に押し込まれていないの？」

「それは、あなたが炎を起こすところを誰も見ていなつたからです。

逆にあなたを傷つけようとした兵たちの方が牢にいます

ヤナギの疑問にヤサカニは丁寧に答えてくれた。前に書庫であつた時も丁寧に黄昏国のこと教えてくれたことを思い出す。

「カガミたちは……」

「安心してください。いや、安心しるところは間違っているかもしだせんが。脱走しました」

その言葉にヤナギは安堵する。多くの犠牲を払つたのだ。これで逃げ出せなかつたということになれば、ヤナギのやつたことは意味を持たないものになる。

よくよく考えてみると、大それたことをしでかしたものだと思う。

その犠牲となつたのが、チズコ。

ヤナギは自嘲の笑みを象つた。

「私に関わると、皆ろくなことがない」

呴いた声にヤサカニが敏感に反応した。彼はヤナギの背中を押して寝台に座らせた。そして彼は片膝をついて真摯な瞳でヤナギを見つめる。

「今の言葉は取り消してください」

「え……？」

思いのほか強い視線にヤナギは目を泳がせた。

「今の言葉は、あなた自身に失礼だ」

ヤナギは息を呑んだ。

「あなたには価値がある。姫巫だけが持ち得る力、あなた自身の努力、そして皆を助けようとする精神」

ヤサカニはそこまで言つて彼は目を細める。

「あなたほど利他的な人物を俺は知りません。その人格が、あの偏屈なチズコさえ動かした。もう少しご自分の価値というものにお気づきになられた方がいい」

「それは、ほめているのか貶しているの」

問えば、ヤサカニは少しだけ笑つた。彼は答えなかつた。

「ねえ、ヤサカニ。少し不思議に思つたのだけれど、何故そなたが

ここにいるの」

社殿内に立ち入ることを許されているのは、采女や巫だけである。それだけ神聖視されている場所なのだ。社殿に しかもヤナギの寝所に男が立ち入るのは異例だ。

「ヤサカニは心得たように頷いた。

「クルヌイ王子からの命令です。姫巫の護衛も務めるようにと」

「ヤナギは驚いて肩をいからせた。

「私は護衛なんて」

「ヤナギ様がまた何かとんでもないことをしないように見張れという意味もあると思います」

からかうような口調で言つヤサカニにヤナギは頬を膨らませた。ヤサカニは優しい手つきでヤナギの肩を押し、寝台へ寝かせる。その動作はチズコに酷似しており、ヤナギの心がつきりと血を流した。

「ヤナギ様、眠つてください。今少し、朝は遠い」

格子の外は闇だった。室の四隅に煌々と明かりと放つ燈台が、ヤナギに今が朝方だと勘違いさせたらしい。

ヤサカニの大きな手がヤナギの目を覆う。ヤナギは従順に瞼を閉じた。しかし、睡魔は一向に襲つてこない。なので取り敢えず目を瞑つただけでいるとヤサカニが話しかけてきた。

「ヤナギ様、眠れないのでしたら何か話しましようか」

「 うん。ヤサカニがいいのなら」

遠慮がちにヤナギは答える。少しの間を置いて、ヤサカニは喋り出した。低く、穏やかな声は耳に心地よい。

「西の大国である南卯国に、森羅万象や小さき神々の声や姿を見る」とのできる少年がいました。

その少年の家系は代々国の王に仕える家系でした。少年の力を知つた王や家族はそれは喜び、少年を大切に慈しました。

しかし戦禍はその南卯国にも迫り、少年たち一家は地上の大国黃昏国へ移り住むことになったのです。

少年の父や兄は黄昏国の中宮に仕えました。天上にあるという高天原国を倒すのだと父や兄は少年に何度も語りました。

少年も國のためになりたいと學問や劍術を學び始めます。そんな少年を小さき神々は心配そうに見守っていました。時にはその力で突風を巻き起こして少年を助けようとしてくれていました

ヤナギはヤサカニの語る話に聞き入っていました。ヤサカニは瞳を伏せ、自らの左目にした眼帯へ手を当てる。

「ですが、高天原国と拮抗していた黄昏国さえも姫巫の力の前に敗れてしましました。少年の家族は年老いた父を除き、皆死んでしまいました。父と少年は、生き残ったごくわずかな村人たちとともに蜘蛛の廻廊を抜けて、命からがら高天原国のある村へ逃げ込みました。逃げ込んだ村の人々は初めこそ戸惑っていたものの、少年たちを助けようと手を差し伸べてくれたのです。少年の父は泣いていました。『ありがとう』と。

少年は村の子供たちと仲良くなり、毎日のように野山を駆け回っていました。そして、その仲間のうちに少年と同じく神々が見える少女がいたのです。少女は神々の声は聞こえないのですが、そのかわりに強い先見の力を持つていました。村の占手である者の娘である少女は少年にいつも先見の内容をこつそり教えてくれていました。そんなある日、少年も嫌な夢を見たのです。村が真っ赤な炎に焼かれる夢。それを少女に言つと、少女も同じ夢を見たというではありませんか。二人は大人たちにそのことを伝えましたが、誰も取り合ってくれません。少年の父さえも、今まで息子が先見の力を發揮したことはないため取り合わなかつたのです。

そして……ことは起こりました。

少年たちが野山で遊んでいると、村の方角から煙が上がっているのを仲間の一人が見つけました。少年たちは急いで村へ駆けだします。

近づくにつれて、村が真っ赤な炎に巻かれていることが浮き彫りになつてきました。

少年は必死に小さき神々たちに助けを求める。しかし、神々の力を遙かに凌ぐものが炎を操っているため、手出しできないと彼らは悲しげに言いました。

その時でした。少年の左耳がいきなり音をなくしたのです。少年の後ろからついてきていた少女の悲鳴が聞こえました。平衡感覚がなくなり、少年は膝をついて左耳にそっと手をやりました。そこにあるべき耳は地面に切り落とされていました。

彼の周囲に小さき神たちが集まつてきて必死に何か伝えようとしましたが、少年にはその声が届きません。

熱い風が吹きました。すると、小さき神々は塵となつて焼き消えました。いいえ、消えたのではありませんでした。少年はあまりの痛みに何が起こったかわかりませんでした。

ごろりと少年の左目が彼の手の中に転がり落ちました。少年は声も出せず、その凶行に及んだ人物を見ました。

炎の隙間より、黒い髪をした幼い少女と目が合いました。少女の目はがらんどうで、何も映していない空虚な瞳でした。少女を見れたのは一瞬でした。すぐに猛る炎が少年と少女の間を塞ぎました。

少年はいつの間にか意識を手放しました。

次に目を醒ました時、少年は所有していた？神の目？と？神の耳？左耳と左耳をなくしていました。それから先、彼は神の姿を見ることも、会話することもできなくなりました

ヤサカニはなおもヤナギの瞼の上に手を置いている。彼が今どんな表情でいるのか心配になつたヤナギはその手を外そとと匂ひの手を添えるが、ヤサカニはヤナギの瞼から手を外そとしない。

ヤナギは手に温かい水滴が落ちてくるのを感じた。

「ヤサカニ……今のは、そなたの……」

過去なのか、と訊く資格が自分にはないと思い至り、ヤナギは口をつぐむ。

数年前、出会つた頃にヤナギはヤサカニに殺されそうになつたことを思い出した。彼はその炎の中で見た少女をヤナギを思つてゐる

のだ。だが、ヤナギにはその村に行つた記憶もなかつた。

少なからず、ヤナギは困惑していた。ヤサカニもまた、神の力を持つていた者だつたのだ。今は違うにしても一度はその力を持つていたという事実に、どう言えばいいかわからなかつた。また、神の力を一瞬にしてもぎ取つた少女が誰なのかも気になつた。

「…………」これは、ただの物語です。神の愛しみを少しだけ注がれた少年の物語。もう、誰も知る者のいない物語

そつとヤサカニはヤナギの臉から手を離した。ヤナギは勢いよく目を開けてヤサカニを見る。白目の部分が血走つてゐる。

「私は、忘れない」

ヤナギは言つてヤサカニの眼帯に触れる。そして、前かがみになつてゐるために顔にまとわりついている彼の黒髪を梳いた。

「絶対に」

忘れられていくことへの恐怖。自らの苦しみを他者に話せない哀しみ。決して悟られたくない心の柔らかい部分。

ヤサカニの心はヤナギの心そのものだ。

ヤナギは再び目頭が熱くなるのを感じた。

黙つていたヤサカニの唇が微かに開く。彼の唇は震えている。

ヤサカニはヤナギの手を強く握りしめ、祈るようにその手を自らの額に寄せた。

藪の中をヤナギは進んだ。梶子斎森を抜けた竹林道。その脇道を行つた先に、遙か昔使用されていた蜘蛛の廻廊が存在する。前にカガミと話をした時から、そこにある廻廊がまだ息をしていることはわかつていた。

心身が回復するとすぐにヤナギはこゝそり高天原国を抜け出す準備を始めた。采女や大巫に気取られないよう細心の注意を払い、しばらく巫修行のため神杷山にこもる。誰も入ってくるなど前もって念を押した。彼女たちもチズコを亡くした衝撃にヤナギが精神を負傷していることに気づいていたからか、反対されなかつた。

大巫には「今は戦などしようとも台王も思つていらつしゃらないはずです。どうぞ、ゆつくりお過ごし下さい」とまで言われた。

ヤナギの言葉の不審に気づいたのはヤサカ二ただ一人だつた。彼は真正面からヤナギに問つた。どこへ行くつもりなのか、と。それに答えずはぐらかしながら、この場所までやつて來た。ヤサカ二は粘り強く、一向に諦める気配がない。彼に根負けしたヤナギはとうとう本来の目的を口にせざるを得なくなつた。

「サコのところへ行くの」

ヤサカ二は首を傾げた。

「サコ殿のところ……ですか」

こぐりとヤナギは頷く。

「サコの遺体は黄昏国最果てにある村にいるサブライのもとへ運ばれたとムロが言つていたから。一度行つてみたいと思つていた」「しかし、何故この場所へ……」

ヤサカ二は口ごもり、眉根を寄せた。彼の戸惑いはもつともだ。拯済の花が咲き誇つてはいるものの、肝心の蜘蛛の廻廊は苔むした岩戸に覆われている。そこへ人が入れる隙間はなかつた。

「ここはその昔、黄昏国 の最果てに続く道だった。ヤナギは廊口を撫でながら、呟いた。

「そなたの言いたいことはよくわかる。たしかに、昔は廻廊であつたこれも長い年月の間に虚ろな洞窟となり果てている。……でも、姫巫の力は真象の力。私が言の葉を紡げば、道が拓ける。もともとあつた道を繋ぐだけ」

意識を集中させて、ヤナギは唇に真象の力を乗せる。清浄な空気が充満しているこの地区で力を放つのは容易い。

岩戸が轟音を上げて開く。蜘蛛の廻廊が啼く。廻廊の中に向かって風が吸い込まれて行く。無事に道が拓けたことに安堵し、ヤナギは廻廊へ一步踏み出した。

「ヤナギ様、お待ち下さい」

「駄目っ。ヤサカニ、お願ひだから触れないでっ」

ヤナギの制止は一步遅かった。ヤサカニはヤナギの左手首を掴んでしまった。

しまった、とヤナギは反射的に首を竦ませる。チズコでさえ、真象の力を使つた直後のヤナギに触れようとはしなかつた。真象の力には念がこもつてゐる。ヤサカニはヤナギに触ることで、ヤナギが真象の力を揮う度に感じている魂の叫びを、呪いを、恨みを聞いてしまつた。

しかし、それでも彼はひるんだ表情を垣間見せることなく、ヤナギの手を引いた。

「洞窟内は暗い。俺が先導します」

ヤナギは胸が詰まる思いでヤサカニの背を見つめた。彼は何も言わない。今だつて怨詛の声が聞こえているだろうに、ただ黙々とヤサカニは歩いている。生ぬるい慰めの言葉を吐かない彼の心遣いがヤナギには嬉しかつた。

あまり口数の多くないヤサカニだが、蜘蛛の廻廊の途中途中でヤナギの知らない国の話をしてくれたり、知識を分けてくれたりした。蜘蛛の廻廊に入つてしまらくしてから黄昏国 の地理的記憶が

戻ったようで、これから行く土地の話も教えてくれた。ヤナギが行こうとしていた村は善灯村と言つ黄昏国と炎來国の中間にある村で、そこは度々戦禍に巻き込まれるらしい。

「サブライ元武官長は、我々の中でも有名でした。とても腕の立つ方だった。俺の策も何度読まれたことか」

「ヤサカニはサブライと戦で会ったことがあるの？」

「ええ。彼は？激昂の大蛇？の名を冠すに相応しい武人でした。何故、武官長の座を下りて黄昏国にいるかは存じ上げませんが」

むしろ、サブライが黄昏国に身を寄せているなど初耳です、とヤ

サカニは不服そうに言った。

ヤナギは、戦から帰還する度に柔軟な笑顔でヤナギを抱き上げてくれたサブライを脳裏に思い起こす。サブライは強く、そして優しかった。

「サブライは収賄の罪に問われたの」

ヤナギの言葉をヤサカニは一笑にふした。

「あの方に限つてそのような馬鹿な真似などされますまい」

「そう、誰も彼が収賄などするはずがないと信じなかつたらしい。でも、彼はそれを認めて都を出て行つた。その後いくつかの村を点々として、黄昏国へ腰を据えたとムロから聞いた」

意表を突く答えにヤサカニは振り向きざま、大きく肩を竦めて見せた。彼が手に持つている松明の炎がその動作によつて大きく揺れた。

「とても信じられません。戦で見かけただけの俺にでも、彼が己を律して実直に生きていることがわかつたのに」

「そう、ね。そうせざるを得ない、理由があつた」

その理由が何かはヤナギもおぼろげにしか覚えていないが、幼心に痛みを感じたことは覚えている。

「……そうせざるを得ない、理由」

復唱し、ヤナギの横を歩くヤサカニは物思いに耽つてゐるのか一

文字に口を引きしめる。

蜘蛛の廻廊は一本道だった。ヤナギもヤサカ一も、ここまで入り組んでいない簡素な廻廊を通つたのは初めてで若干拍子抜けした。何かあつた時のためにとヤナギは武装までしてきたのだ。

廻廊を抜けてすぐ目の前に善灯村は見えた。夕刻なので、夕餉の準備支度のために煙がそこかしこから上がっている。森の奥にひつそりと隠されていた蜘蛛の廻廊から村まではほんの数刻で辺り着けた。

村人は奇異な目でヤナギたちを見たが、彼らの視線はもっぱら隻眼のヤサカ二に集まつていた。ヤサカ二は慣れた様子でその視線を黙殺する。

ヤサカ二はヤナギから離れて、きょとんとした顔で遠巻き彼を見ていた少年にサブライの居場所を訊いた。少年は目を丸くしたもの、親切にクルヌイの住処を教えてくれた。ヤサカ二は微笑を湛え、厚く礼を言った。それを見た年頃の若い女たちは黄色い声を上げた。たとえ片目がなくても彼の端麗さは比類なきものだ。彼の主である力ガミが華やかで涼やかな美麗さら、ヤサカ二はしつとりとしたほの暗い美麗さだつた。黒に染め上げた髪がまた、彼の美しさを引き立てる。

神はこの麗しき容貌を目にじて、神の力を注いだのではなかろうかと、ヤナギは真剣に考えた。

ヤサカ二はヤナギのもとへ戻つてきて小さく溜め息を洩らす。

「このよだな扱いには慣れています。何かが欠けた者に対する処遇は、高天原国の方が寛大です。……俺のこの左目左耳を初めて見た時、台王は『そちは神に愛でられたのだ』と言つてくれました。この黄昏国で？神に見捨てられた？と散々なじられてきた身としては、随分驚きました」

「…………」

押し黙るヤナギに顔を向け、ヤサカ二は目を細めて笑つた。彼の

笑顔は冷たい雪がじわりと溶けた時の温かさを思い起させる。

「あなたがそんな顔しなくてもいい」

「そんな顔つて……」

「眉根が寄っています」

知らず知らず、厳しい顔をしていた自分に動搖する。ヤサカニの思考はヤナギに似ているため、共鳴してしまつ。

ヤナギたちはサブライの家へ到着した。クルヌイは軒先で新割りをしていた。ヤナギとヤサカニが声をかける機会を窺っていると、クルヌイは二人に向かつて快活に笑つた。武人の面影を色濃く残すクルヌイはヤナギの記憶よりも少しだけ痩せていた。

「お久しぶりです、クルヌイ。高天原国の巫だつたヤナギです」

「ああ、久方ぶりだなヤナギ殿。随分大きくなつた。……貴殿は……」

クルヌイはヤナギに向けていた優しい眼差しを一転させてヤサカニを見る。ヤサカニは緊迫した空気に臆することなく一礼した。

「戦場で何度か会い見えたことがあります。黄眉国の指揮官をしていたヤサカニです」

「？眼帯の氷獅子？か。貴殿も戦場で会つた時にはまだほんの子供であつたというのに、今や立派な大人だな」

「？激昂の大蛇？殿は、戦場でお会いした時より随分痩せておいでですね。もう武人を棄てたのですか？」

見えない火花が散つていてる気がしてヤナギは冷や汗をかく。鋭い大蛇の睨みに冷徹な視線で相対する獅子に挟まれたヤナギは所在なさげに二人を交互に見た。

軽く挨拶を交わし終えた三人は、家中へと入つた。クルヌイは蜘蛛の廻廊を歩き通したヤナギたちに夕餉をよそってくれる。雑談の中で、サブライが今薬師のようなことをしているとヤナギは知ることができた。薬の調合は昔から得意だったのだとサブライは得意げに言った。

「それにしても、よくわしがここにいるとおわかりになつたな」

「ムロに……聞いていたので」

「ほお、とサブライは嬉しそうに表情を崩した。

「ムロが武官長になつたのは彼が便りをくれたので存じている。ムロは役立つてゐるだらうか」

「は、はい」

ヤナギの声がうわざる。ヤナギとヤサカ一の目が合つた。

ムロが高天原国を出て行つたことをサブライは知らないのだ。

サブライは一人の様子に片眉を上げた。

「……ムロが、何かしたのか？」

どこまでも真つすぐなサブライの視線にヤサカ一は、ぐつと顎を引いて答えた。

「ムロ武官長は、黄昏国の人とともに高天原国を出奔された。現在どこで何をしているのかは俺たちにもわかりかねます」

ヤサカ一の言葉にサブライは声を詰まらせた。彼は難しい顔をして顎に手を当てた。

「まさか、あのムロに限つてヤナギ殿を裏切るはずが」

「私が、言つたんです。力ガミたち黄昏国の人を助けたいと。だからムロは」

必死に自分を止めようとしたムロに對して浴びせた言葉を思い出し、ヤナギは俯く。あの時、ムロは鈍器で頭を殴られたような顔をしていた。あの時の言葉は、ヤナギを懸命に守ろうとしてくれていた彼に対して言つていいものではなかつた。むしろ、絶対に秘めておかなくてはならない言葉だつた。

「そうか。しかし、それもまたムロ自身が決めた道。わしがとやかく言つことでもない」

「自身が、決めた道。ですか」

ヤサカ一は歯切れ悪く呟く。そんなヤサカ一へ目をやつてからサブライは瞑目した。

「どの未来を選び取つたとしても、後悔や苦惱は生じるもの。だが、自身が選んだ道ならば、最後まで進むことができると思つて

いる

サブライの厳かな言にヤサカニは何か考え込むように下を向いた。彼の瞳は憂いを帯びている。カガミを裏切ってしまった自分を責めているのだろうか、とヤナギは胸を痛めた。

サブライの家より北上し、小さな森を抜けたところには一面の葦原があった。そこにはいくつもの岩がある。一番手前の岩をよく見てみると、表面に何か文字が彫られているのがわかった。ヤサカニはその文字を指の腹でなぞる。そして、その横にあつた岩に刻まれた文字もなぞつた。

「この文字は黄昏園のものです。『Hイロ』ここに眠る』『マカ、ここに安らかに眠る』。……どうやら、ここにある岩全て墓石ですね」

サブライにサコの墓参りに来たのだと告げたヤナギたちは、サコは葦原にて眠っていると教えられた。

実際、葦原に着いてみると、多くの岩がそこにはあつた。

「たしか、サブライは黒い岩と言っていた」

ヤナギは一しきり周囲を見回した。背の高い葦の草原の中で、ただ一つの岩を探すのは容易でない。

一人は黒い岩を四方八方探し回り、ようやく皿当ての岩を見つけて。岩に丹念に彫られた文字を見て、ヤサカニは額に滲んだ汗をぬぐう。

「『サコ、安らかな夢を』。これだ」

ヤナギは、そつとその岩に触れた。冷たいはずの岩がほのかに暖かく感じる。み上げてくる涙は歯止めが効かず、ヤナギの両目から流れ出た。

「サコ……そなたに会いたかつた。遅くなつてごめん」

かなり前に、ムロからサコの遺体がここに運ばれていることは聞いていた。むろん、首から上は梶子森に埋葬されているものの、

せめて胴体は故郷である黄昏国に還してやうと王宮にいる黄昏国出身者たちが働きかけた努力の賜物だった。その働きかけがなければ、胴体は無惨に焼かれていただろう。

サコの墓石は葦原の最果てがかつた乳白色の空と紺碧の海。その二つの色合はどこまでも混ざり合うことなく彼方へと続いている。

ヤナギは泣きじやくつた。それを止めるでもなく、ヤサカ一はその隣で黙祷を捧げていた。

サコの墓参りに行つた翌朝、まだ明け方の早い時間。ヤナギはサブライに揺り起こされた。

田をこすつてぼんやりと瞬く。部屋のすみでヤサカ一が手早く浅黄色の腰帯を締めているのが視界に入った。

「……サブライ、どうしたの。まだ早い」

「重症の患者が来た。ヤナギ殿たちには悪いが、すぐここを発つてほしい」

「ええ、わかつた」

ヤナギは慌てて衝立の後ろにまわつて装束を着替える。手ぐいで髪を梳いてからさつさとサブライの前に顔を出した。

「……ずいぶん急かすのですね。その患者ははやり病なのですか」

ヤサカ一は心配そうにサブライに訊いた。サブライは首を横に振る。

「そうではない。だが、貴殿らと顔を合わせぬ方がいいとわしが勝手に判断を下した」

一瞬間を置いてサブライは言った。

「ムロだ」

そう言われた二人は息を詰まらせた。

真つ青になつて口を押さえるヤナギの肩をサブライは優しく叩く。

「大丈夫だ、大事ない。必ずムロなら乗り越えられる」

しかし、とサブライはヤサカニの方を向いて苦笑を洩らした。
「貴殿の主には恐れ入る。ムロを診せに黄昏国の都から単身乗り込
んできた」

「カガミ様がつ？」

思わずヤサカニは前のめりになる。彼の顔に喜色が浮かんだ。

「ああ。二人とも、あまり話ができなくて残念だが、来れる時で
いい、また顔を見せに来てくれ。わしは高天原国には出入りしたく
てもできないからな」

サブライはヤナギたちの背を押した。二人はサブライに深く頭を
下げて裏戸より抜け出した。サブライとカガミの声が家中から聞
こえてきたのを見計らって、ヤナギたちは物音立てずにそこから離
れた。

ヤナギは手に顔を埋める。

「良かつた……。生きていてくれて、良かつた……」

「はい」

「本当に、ほつとした……」

「……はい」

ヤナギが顔を上げてヤサカニに微笑むと、彼もおずおずと微笑み
返してくれた。

二人はまだ村人たちが朝餉の準備に追われている中、歩いて行く。

「これからどうしますか」

ヤサカニの問いにヤナギは腕を組んで唸つた。

「もう少しこの村を色々見てみたいけれど、宿がない。
まあ、いざとなれば野宿でも」

ヤナギが放つた最後の言葉をヤサカニは聞いていなかつた。彼は
近くにいた若者に話しかけている。最初は嫌そうな顔をしていた若
者だったが、次第に笑顔となり、隣にいた妻らしき女に何やら言つ
ている。女はヤサカニを見て頬を染めて控え目に頷いた。それを見
た若者は大きく頷いてヤサカニと握手している。

ヤサカニが何をしているかさっぱりわからないヤナギだったが、

彼がこちらを振り向いて手招きした瞬間、全てを悟った。ヤサカ一
は宿の交渉をしていったのだ。

彼のあまりの迅速なこと、ヤナギは脱帽した。

ヤサカニの機転により若者の家に泊めてもらえたことになったヤナギは、明朝まだ暗い中散策に出かけた。前もってヤサカニには散策へ行くことを告げた。ヤサカニはカガミたちに鉢合わせることを危惧して、一人で行きたいと言うヤナギに、サブライの家の付近には近づかないことと村の中心地には出向かないことを条件に散策を許可してくれた。

ヤナギは若者の家を出ると、真っすぐに水辺のほとりにある社殿へ向かう。サブライの家に行く途中にある場所ではあるが、総じて社殿というのは清浄な空気で満ちている。その中で清めを行なえば、ヤナギの巫力も満ち満ちるだろう。

巫力には限界がある。ヤサカニには言つていなかつたが、ヤナギはここに来るまでに力をほとんど使い切つていた。

帰り道を拓くため真象の力を揮うには、いささか巫力が不足していた。

社殿の周囲には拯溟の花しょうみょうが咲き誇つていた。それを数本手折ると、ヤナギは社殿内へと足を踏み入れた。

しんと静まり返つた社殿の中は、あまり手入れをされていないのか埃ほりをかぶつている。それでも儀式の間には瑞々しいゆずりはが飾られており、燭台もあつた。

ヤナギは火打ち石で火を起こすと燭台へ炎を灯した。

しばらくゆずりはを片手に祈祷けがをしていた。清浄な空気はヤナギの体内を駆け巡り、穢れを取り去る。

大きく息を吸い込み、吐き出した。

ヤナギは自分の掌を見つめた。確かな手ごたえを感じる。無事に力は満ちたと安堵の溜め息を洩らす。

ふと、脇に置いていた拯溟の花の香りが鼻孔をくすぐつた。拯溟

の花には強い鎮静効果がある。

瞼が次第に重くなる。懐かしく、温かな香りに包まれて、ヤナギは眠ってしまった。

噎^むせ返るほどの拯済の花の香り。その香りは村全体を覆っていた。

黄昏国の中でも、ここまで拯済が咲いている場所も珍しい。

あまり人の手が介入していない水辺や野などに集団で咲く美しい花。花の由来に似つかわしい氣高く凜と咲く薄灰色の花の香りは、カガミの心を安らかにしてくれる。

カガミはまだ目覚める気配のないサブライを尻目に家を出た。外はまだ薄つすらと太陽が照らすばかりで誰も起床している気配はなかつた。彼はゆっくりと朝靄^{あさもや}の中、足を踏み出した。

散策したかつたというよりは、拯済の花の香りに誘われたと言つた方がいいだろう。

サブライの家を出て右手にある水辺沿いに拯済の花がまばらに咲いている。それを見てカガミはようやく、自分が何故昨夜ぐっすり眠ることができたか理解できた。不眠に悩む兵たちは拯済の花を乾燥させたものを香袋に入れて持ち歩いている。それは拯済の香りが安眠効果を持つからに他ならない。カガミの眠りは常に浅い。しかし、昨夜は夢を見ないくらい深く眠つていた。

(……俺も、拯済の花を香袋に入れてみようか)

そう思いめぐらせながら、水辺を歩く。しばらく行くと、小さな社殿があつた。拯済の花々はそれを覆い隠すように密集している。社殿を見た瞬間にカガミの脳裏に浮かんだのは、神杷山^{じんぱやま}の頂にある社殿にいるだろうヤナギのことだった。

氣を引かれて社殿の戸に手をかけた。あまり出入りされていないのか、立てつけの悪い戸はにぶい音を立てる。

内部は外に比べて格段ひんやりとしていた。少しだけ汗ばんでいたカガミの肌もその冷氣に乾く。

奥へと進む。途中、何度か蜘蛛の巣が髪に絡まってしまい、それを取り払うのに随分時間を食つた。

最奥には觀音扉があつた。儀式を執り行う間だとすぐにわかる。

力ガミは躊躇いもなくそれを開け放つた。

力ガミは我が目を疑つた。

祈祷によく使われるゆずりはが床に置かれている。その横にはまだ芳醇^{ほうじゅん}な香りを漂わせる拯^ほ済^{すく}の花が散らばつていた。そして、間の中央には長い黒髪をした乙女が寝そべつていた。

乙女は入り口の方に顔を向けているため、力ガミはその顔をよくよく見ることができた。

抜けのよつな白さを持つ肌、長い睫毛に薄紅色の唇。世の美しいものを集めて造つたような乙女は、力ガミのよく知る者だつた。

力ガミは思わず後ずさる。その際、床が大きく軋んだ。

まずい、と思つて力ガミは踵を返す。

「…………力ガミ…………？」

ああ、と力ガミはその場に縫いつけられてしまつたよつに動くことをやめる。

何年も離れていたわけではない。だが、もう一度とにかくして会つことはないと思つていた。

高天原国で会い見え、言葉を交わす間柄になつたことさえ、力ガミにとつては誤算だつたのだ。彼女が泣きながら台王の御殿から逃げようとしたあの夜に出会つたことから間違つた。絶対に、近づいてはならなかつたのに。

力ガミは少女に向き直る。

少女は上体を起こし、しどろもどろで慌ててゐる。どうやら起きがけで頭がまだ働いていなつた。

力ガミは彼女に手を伸ばし、そつと頭を撫でてやつた。

「これは悪い夢だ。拯済の花が見せた幻に過ぎない」

自らにも言い聞かせる。これは夢なのだ、と。まさか、善灯村にヤナギがいるはずがない。

ヤナギの手がカガミの腕を掴んだ。彼女はすつと立ち上がる。

「……離せ」

少しだけ拒絶の言葉を吐くが、ヤナギは頑なに首を横に振る。

「嫌」

まるで幼子のように駄々をこねるヤナギにカガミは内心驚いた。いつも年齢以上の落ち着きと思慮深さを保っていたヤナギが、今はただの少女になっている。

ヤナギは、おずおずとカガミに抱きついた。

天地がひっくり返ったかとカガミは動搖した。まさか、ヤナギがこのような行動に出るなどカガミも予測できなかつた。

無碍に突き放すこともできず、かと言つて抱きしめ返すわけにもいかず、カガミの両腕は宙をさまう。

「お願い、今だけでいいから」

いつか、遠い昔に聞いたことのある言葉。か細いそれは、カガミが必死で守ろうとしている決意を弱くする。

ヤナギの口より嗚咽が漏れ出る。

カガミはたまらず目を閉じてヤナギの背に腕を回すと、きつく抱きしめた。

落ち着きを取り戻したヤナギは慌ててカガミから距離をとつた。寝起きで思考が朦朧としていたとはいえ、とんでもないことをしでかした自分に顔が火照る。

「ごめんなさい。その、動搖してしまつて」

「いや、気にするな」

気まずい沈黙が流れる。

カガミは所在なさげに腕を組んで格子近くにある柱に寄りかかっている。

ヤナギは床に散らばっていた拯済の花とゆずりはを丁寧に束ね合わせて部屋の中央にある台の上に置いた。燭台に灯した炎は少し力

を弱めている。ヤナギは近くにあつた細枝を火にくぐる。すると、炎は再び煌々と爆ぜ出した。

「どうして、この村に？」

「……サコの墓参りにきました」

ヤナギは少し声を詰まらせながら答えた。

ヤナギがこの村に来た本当の理由はヤサカニにも明かしていない。サコの墓参りに行きたかったのは少なからず理由の一つだったが、真の目的は違つた。

その目的はもうすぐ、遂行する。

「お前だけで？」

「いいえ、ヤサカニも一緒に」

カガミが目を丸くする。

「そうか。ヤサカニは、息災にしているか？」

「ええ。そなたは、ムロと一緒にでしょう？」

逆に言えば、カガミは「なんだ、知つていたのか」と苦笑して頷いた。

ヤナギはカガミたちが来る直前までサブライのところにいたことを明かす。それにはカガミも感心した様子だった。微塵も気がつかなつたらしい。

「ムロの容態はどうなの」

「一進一退といつたところだな。サブライも手をこまねいでいる」

「そう……。カガミ、ムロはあの時、深手を負つたの？ それで、重体に……」

ヤナギは、ぎゅっと拳を握りしめる。ムロは手放しでヤナギに全幅の信頼を寄せてくれていた。そんな彼の笑顔を思い出してもうを覚えた。

カガミは首を横に振つた。

「違う。あの時に深手を負つたわけじゃない。……極度の精神損傷、と言つたところだな。悪い、何と表現すればちゃんと伝えられるかわからない」

カガミは親指の爪を強く噛みしめた。ヤナギに上手く伝える」とのできない歯痒さをもどかしく思つてゐるに違ひない。

ヤナギはそんなカガミを見つめると、視線を下に落とした。

こうして普通に会話できていること自体が不思議だつた。ヤナギとカガミは敵同士なのだ。

カガミは地下の国々を指揮する者。

今この場で無防備な彼を真象の力を使って殺してしまえばいい。

なのに、できない。

思考の渦はヤナギを呑み込み、呼吸を苦しくさせる。

カガミはヤナギを横目見ると、溜め息を吐いた。

「お前はいつも悩んでばかりだ」

カガミはそう呟いて腰に手を当てた。堂々としたその姿からは、一片の迷いさえ垣間見ることができない。

「俺は高天原国へ攻め込む。そして、黄眉国に安寧あんねいを取り戻す」

きつぱりとカガミは言い切つた。彼はヤナギに厳しい表情を見せる。

「ヤナギ、悩むなとは言わない。だが、意思を持つ。激動の世、確固たる意思のない者はそのうねりに飲み込まれてしまうぞ。お前は人形じやない、ただそこにあるだけの飾りじやないのだから」

「何故……」

自分でも気づかぬうちに声が洩れていた。

「何故、そなたはそんなにも強い。巨大な力を前にして、恐れることもなく挑もうとできるの」

知れたことを、とカガミは口角を上げた。

「恐れもこの身のうちに宿つてゐる。だが、それを上回るほどに守りたいものがあるだけ」

音を立ててヤナギの中の何かが決壊していく。

「私には、そんなもの……ない」

ヤナギは自分が酷く頼りなく曖昧な者だとあらためてわかつた。

サ「やチズコを守りたいと思つていた気持ちも嘘ではない。だが、カガミのその強い意思の前にヤナギの脆弱な意思は震んでしまう。心のどこかが凍りついていた。そこにヤナギにとつて何か大切なものが隠されている。

昔から、それは感じていた。ヤナギ自身が本当に大切なものは、自分にさえわからないよう巧妙に隠されている気がしていた。

カガミといふと心が揺さぶられる。その揺さぶりは次第に振り幅を大きくして、いつもヤナギを困惑させるのだ。

「お前は俺と似ている」

はつとしてヤナギはカガミを見つめる。優しい朽葉色をした瞳は憐憫を含んでいた。

「昔、俺も今のお前と同じように何もなかつた。けれど

カガミは一旦言葉を切つた。カガミは苦渋に満ちた表情をして続

きを口にした。

「俺の前に妹姫が現れた。妹は天真爛漫そのもので、俺の凝り固まつた心を温めてくれた。妹姫がいたから、俺は……」

「妹姫が、そなたの守りたいものなの？」

カガミは笑つて頷いた。

「俺にとつて妹は唯一大切な者だから。妹との約束 黄昏国の復

興は果たさなければならぬ」

カガミはヤナギが束ねた拯済の花を一本手に取り、慈しむような顔でそれを見る。

「姫はこの花が一番好きだつたんだ」

「そう」

ヤナギは鋭い棘^{とげ}が胸に突き刺さるのを感じた。カガミのこんなにも愛しげな顔は見たことがなかつた。

カガミの妹。どんな人物なのだろうかと興味を持つた。

「妹姫はどんな方なの」

その瞬間、カガミの形相が変わつた。

「もう、いない」

ヤナギは、しまつたと青ざめた。

しかし、カガミは「気にするな」と優しく微笑んだ。そして、ヤナギの手に拯済の花を握らせた。彼の手は温かい。

「その花はきっと、お前を導いてくれる標となる。きっとお前なら最良の道を選べる。だから、逃げるな」

カガミはヤナギの両頬に手を添えた。自然、背丈のあるカガミをヤナギが見上げる形となる。

「死ぬな」

ヤナギは目を丸くした。カガミはヤナギが自害しようと思つていることを当てた。

「サコの墓参りをし、ヤサカニへ先に帰るよう告げて自害する。それくらいお前のその思い詰めた顔を見ればすぐわかった」

「だつて……私のせいでサコも、チズコも……」

鮮烈な二人の最期の光景を思い出してヤナギは双眸を潤ませた。
「私が死ねば、高天原国は守り神を喪う。そうすれば黄眉国だつて復興できるでしょ。何故、止めるの？」

「……俺は、お前に死んでほしくはない」

カガミはヤナギの両頬を包んだまま言葉を発した。彼はそつとヤナギの額に口づけを落とし、そのまま力強く抱きしめた。

「せめて、お前が生きていてくれれば、それだけでいい」

懇願にも似た呟きはヤナギを混乱させる。脳内は痺れる。それは呪縛よりも、深く強いカガミの言葉と鼓動。

ヤナギはおずおずとカガミの装束を握った。

ヤサカニは散策から戻ってきたヤナギの表情が晴れ晴れとしているのに気がつき、幾分か安心した。

この善灯村へ行くと言つた時、彼女は胡乱な目をしていた。なのに、そんなヤナギを一人で行かせられないと判断したヤサカニは自身もこの村まで着いてきたのだ。

「ヤサカ二、遅くなつてごめんなさい。私は高天原国へ帰る」「はい、かしこまりました」

二人は泊めてくれた若者とその妻に礼を言つと、昼前に村を出た。善灯村を出て蜘蛛の廻廊の入り口付近まで来た時にヤナギが告白した内容にヤサカ二は目を剥くこととなつた。

「村の社殿で、カガミにあつた」

「カガミ様と会つたのですか？」

あれほど注意しろと言つたのに、ヤナギはカガミと出会つてしまつたという。しかも、ヤサカ二も同行していることを教えたとヤナギは言つた。

ヤサカ二は頭痛を覚える。

ヤナギはカガミが自分自身を害すると思つていない。だが、ヤサカ二は彼の性格をよく知つてゐる。目的に辿り着くためならば、彼はどんなに非道なことでもやつてみせる。今回、カガミがヤナギを殺さなかつたのは奇跡にも似た事象だつた。

「私ね、本当はここへ自害しに来たの」

ぽつりとヤナギはとんでもないことを呟いた。ヤサカ二はぎょつとしてヤナギの手を取る。ヤナギはそんなヤサカ二には目もくれず、黄昏国の上に広がる空を仰ぐ。

「ヤナギ様、それは……」

「でも、やめた」

ヤナギは笑つた。空に向かつて笑う彼女が、手に持つた拯済の花とあいまつて花の化身の如く見える。

彼女は空からヤサカ二へと視線を移す。ヤサカ二の青茶色をした瞳を真つすぐに見据え、「シユマ」と口に出す。

途端、ヤサカ二の肩が一気に軽くなる。真名の縛りが解けたと気づくのに幾ばくも時間はかからなかつた。

「本当は、心にあるしがらみをなくしてしまえば真名縛りなんて簡単に解放できる。そんなことにも私は気がつかなかつた」

ヤナギは何度もヤサカ二に施した真名縛りを解こうとして失敗し

ていた。なのに彼女は今、いとも容易くそれを解いた。

「カガミのもとへ帰りなさい。そなたがカガミたちを 案じて いることに気がついていた。真名縛りも解けたから、これで何も心配することはない」

ヤサカニはただ茫然と笑顔を絶やさないヤナギを凝視していた。ヤナギやクルヌイつきの護衛官であるヤサカニは高天原国内部の機密情報もたくさん掴んでいた。それを手土産にして母国へ帰ることは可能だ。いや、むしろ歓迎されるだろう。

「俺がいなければ、誰がヤナギ様をお守りするのですか」

洩れ出した本音。儂げに微笑んだヤナギの表情がヤサカニの後ろ髪を引く。彼女は何も言わずに蜘蛛の廻廊の前に立ち、高天原国への道を拓く。そして、廻廊内へと滑り込む。その肩の線は、消えそうなくらい細かつた。

ヤサカニは唇を一文字に引き結んでその後に続いた。

波のあと 嵐のおとも
しづまりて
日かげ のどけき
大海の原

宿縁が一人を結んでいる。

ヤサカニは悲運を背負う彼らを想つた。

『ヤサカニ』

屈託なく自分の名を呼ぶ一人。

嬉々としてぶつかるうとしているわけではない。

このまま、均衡状態を保つてくれればいいのに、と彼らしくもな

いことを考えてしまつた。

わかつてゐる。

かりそめの平和は、かえつて傷口を膿むのだ。

それならばいっそ、一思いに刺してしまつた方がいいのかもしれない。

だが。

ヤサカニは迷つていた。

ヤナギは言つた。

カガミのもとへ帰りなさい、と。

彼女は真名の縛りさえも解いた。ヤナギはヤサカニがカガミたちがいる黄昏国を案じてゐることに気づいていたのだ。

聰い娘だ、とヤサカニは内心舌を巻かずにはいられなかつた。

全てを無に返すことが出来る姫巫が、わざわざ後押ししてくれているのだ。

高天原国内部の機密情報もたくさん掘んだ。それを手土産にして

母国へ帰ることは可能だ。いや、むしろ歓迎されるだろう。

『俺がいなれば、誰がヤナギ様をお守りするのですか』

ぼつりと洩れた本音に、儘げに微笑んだヤナギの表情がヤサカニの後ろ髪を引く。

彼女は何も答えなかつた。

悪はどひひだ、と問う。
わからない、と答える。

善悪では計れない戦の重み。

昔のヤサカ二だつたら、即答しただろつ。
悪いのは全て、黄昏国を 他国を屠つほふた姫巫ひみだ、と。
はたしてそういうのか。

今や、もうそれさえ答えられない。

高天原国には異様な暗雲が垂れ込めていた。
 ヤナギとヤサカニが秘密裏に黄昏国^{たそがれごく}の善灯村^{ぜんとうむら}より帰還してしばら
 くののち、ヤナギは神杷山^{しんぱやま}にある社殿へ人が立ち入るのを禁じた。
 采女^{うねめ}たちでさえもヤナギの傍に寄ることを禁じられ、北門前にある巫たちの寝所で寝起きしている。

ヤナギとヤサカニが修行のために一ヶ月間都を空けていた際に何
 かあつたに違いないと大巫^{おおみこ}や台王^{だいおおきみ}は、ヤサカニより事情を聞き出そ
 うとしたが、彼は終始沈黙を守つた。

皆、ヤナギたちが修行していたと疑いもしていない。

彼らは滅多に巫の修行場である梶子斎森^{くちなしさいのもり}へ入らない。死の臭いに
 満ちている森が恐ろしいのだ。

姫巫は大巫や巫も知らない森の奥部に通じる道を知っている。な
 ので、大巫たちも修行していたというヤナギの言葉を信じているよ
 うだった。

もし、ヤナギたちがいな間に高天原国に変事があつていたら、
 修行をするというのは嘘だと判明しただろ。何か異変があれば、
 大巫や巫はヤナギに念を飛ばす。しかし、高天原国にヤナギがいな
 い場合、彼女たちの念は届かない。

ヤナギは社殿の廊へ出て、欄干^{らんかん}にしなだれかかった。

神杷山の風景はいつもと変わらない。

狂い咲きする四季を無視した木々に花。血色をした紅葉^{てんきゅう}が天弓^{てんきゆう}の
 橋の下にある池へ舞い散る。

一枚の葉は、鏡のように平らだつた池の面に漣^{れん}を立てる。

都中、地下の国々の動きが急に活発化しているとの噂で持ち切り
 で、人々には不安が蔓延している。

高天原国^{たかまのはらこく}の結束は薄い。打倒高天原国^{たかまのはらこく}という一つの目標を見据え

て迫る地下の国々に比べて、この国の人々が見ている先はばらばらである。

「 つ

突然、ぴんと張り詰めた空気がヤナギを包んだ。ヤナギは耳をそばだてて隙なく辺りを見渡す。

神杷山に続く楠くすの木を誰かが触ったのだ。

ヤナギは意識を集中させて楠の木に目を向ける。神木に触れたのが誰かは、その者がまとう氣ですぐわかつた。クルヌイ王子だ。

「何故、クルヌイ王子が……」

訝しく思いながらも、神杷山へと続く道を閉じる結界を緩めた。仮にも一国の王子がわざわざ出向いてくれたのだ。おいそれと追い返すことはできない。

少しして、クルヌイは斎庭さいにわに姿を見せた。ヤナギは庭にある朱塗り橋の脇にある長椅子へ王子を案内する。

彼は乱れた息を落ちつけると、神杷山の美しさや庭の造形を褒め千切った。

「久方ぶりに來たけれど、やはり神の遊山場と言われるだけある。この世の至高と呼ぶに相応しい」

「ありがとうございます。して、クルヌイ王子。何故ここへ？」

「うん。君を誘いに來たんだ。姫巫、用事がないなら一緒に都を回ろう」

「私は……」

クルヌイはヤナギの戸惑いに氣づいているのかいなか、淡い微笑を浮かべる。

「大丈夫、君が來てくれるなら供はつけない」

暗に王子がヤサカニをつけないと言つてゐるのを察したヤナギは、目を見開いた。

クルヌイは何も知らないように見えて、案外鋭い。人の機微をよく読む。ヤナギはそんなクルヌイが苦手だった。

「何せ、姫巫はこの国きつての軍神だからね」

クルヌイは片目を瞑つておどけて見せる。場の空氣を和ませようと心を碎いてくれているのは一目瞭然である。

「ですが……」

「どうしても、君に今の都を見てほしいんだ」有無を言わせないクルヌイの瞳にヤナギは折れた。

「わかりました」

都には、かつてほどの活氣がなかつた。

貧困地区からはもちろん、裕福な者たちが住まう地区でも笑い声が聞こえない。不穏な空氣が人々の明るさを奪い去つてしまつたようだ。

「人の声がしないね」

「はい。自然の音も、おかしい」

「この兆候は、宮殿に火の手が上がる少し前からあつた。でも、ここまで早く軋みが来るとは思わなかつたよ」

「…………」

唄いながら流れていた川の水は濁んだ声で泣いている。

今季節には黄金色した瑞々しい葉をつけるはずの木々はくすんだ葉をつけている。

鳥たちは無言のまま空を舞う。

ヤナギとクルヌイは貧困街の角にある見張り台にかけられた繩梯なわはをよじ上つた。見張り台は老朽化しており、今は別の場所に新たな見張り台が建設されている。なので、その上には兵の姿はなかつた。

見晴らしの良い見張り台からは、都の様子がよく見える。

遠目からでも人々の眼に光がないのが見て取れる。皆、前かがみで歩いている。いつもなら大勢の人でにぎわつて砂埃が立つ市も閑散としていた。

気の持ちようかもしれないが、景色も若干くすんで見える。

「ひどい有り様だ。こうならぬよう前々から視察していたのに、僕

ではじうにも役不足だつたらしく、「

クルヌイは面白のようになつき、眉をひそめた。

「……最近、父上は部屋にこもつてゐるんだ。何かに怯えていふように寝台の上で丸まつてゐると父上の護衛兵から伝え聞いた。時々、狂つたように祈つてもいるらしい」

「台王が……」

クルヌイは悲しげにヤナギを見た。

「君も台王も、何か啓示を受けたんだろう。そうでないと、二人がほぼ同時に表舞台から姿をくらます理由が見つからない」

渴いた喉が潤いを欲す。ヤナギは唾を呑み込んだ。

「僕は、知つてゐるよ

木枯らしが吹き荒ぶ。乾いた風は舞い上がり、高い蒼穹へと搔き消える。

「「めんね、ヤナギ。辛かつたう。」んな、死国の守り神に祀り上げられて」

「王子……何故……」

血の氣が引いた。

代々、姫巫と台王にしか聞かされない話。それをどうやらクルヌイは知つてゐるようだつた。彼の瞳が全て知つてゐるのだとヤナギに訴えかけてくる。

「僕は都から離れた山奥で育つた。そこに住まう人々は、昔からの古き言い伝えや教えをたくさん持つていたんだ。彼らは僕に様々なことを教えてくれた。この国　高天原国は……」

「もうそれ以上言わないで！」

皆まで云あうとするクルヌイの声を遮り、ヤナギは後ずさつた。

力なく首を横に振る。

「それを知つてゐるところで、何になるといふの。万策はもつぬき果てている。もう、何もかも手遅れ」

「姫巫」

心配そうに呼びかけるクルヌイの声に惑わされないようになつき

は耳を塞いだ。

「そなたは全てを呪う声を聞いたことがないでしょ。死を、滅亡を渴望する声を聞いたことがないでしょ。私は、姫巫になつてから、それらをずっと聞き続けてきた。でも、それと同等に生を望む声も聞こえてくる。？姫巫？に縋る人々の声も聞こえてくる。……伝承は、私たちを救つてくれない」

クルヌイは何も言い返してこなかつた。ヤナギは棒立ちのままのクルヌイを置き去りにして一気に縄梯子を下ると、社殿へと逃げ帰つた。

光の中にムロはいた。一面の金色の光は、淡く波打つてゐる。

『我の力を望むか』

硬質な声がムロの鼓膜を震わせる。

「ああ」

淀みなくムロは前を向いたまま答えた。
やがて光はムロの真正面に集束してきた。

『そちは我の選びし申し子ではない。が、我の血脉に連なる者だ。
今まで呪いの苦痛も乗り越えてきた並外れた精神力は称賛に値する』
ふん、とムロは挑むように光を睨みつける。

「あれぐらいの苦痛、どうともないわ」

光が一様にさんざめく。四方八方白いこの空間は、常人ならば発狂してしまうほどに無機質だ。

『良かろう。そちに我の力の一部を貸そう。そのかわり』
いつそう光が眩しさを増す。

『我と呪いの誓約を交わせば、そちは現の死を享受できぬぞ』

「かまわない」

その話を、ムロはサブライに呪いを彌つてもうう際聞いていた。
遙か昔、拯済の呪いを彌られた子供たちは呪いによる苦痛に狂死するか、自害を選んだ。どうにか生き永らえた子供も、こうして神と誓約する段階で死を選んだ。よしんば受け入れたとしても、強大な神の力に体が耐えられずに引き裂かれるという。

ムロは黄昏国王族の血を受け継いでいることにこの時ばかりは感謝せざるを得なかつた。

『……良かろう。そちに我、地祇の加護を』
ほのかに呪いが刻まれてゐる部分が熱を持つ。

心臓が大きく一鳴りし、動くことをやめた。

ムロは不思議な気持ちで自分の掌を見つめる。湧き上がってきたのは、確かに力だった。

『さあ、誓約は交わした。我的血脉を受け継ぐ者よ、ビートなりとも行くといい』

空間は急速にムロから遠ざかつて行く。いや、ムロが遠ざかつているのかもしない。

すっと涙が頬を伝つた。

ムロは視界に映り込むカガミとサブライの顔を見て、盛大に顔をしかめた。

「何で師範とカガミが一緒にいる。ここは一体どこだ。常世か開口一番、不機嫌極まりないという表情で言い放つたムロを前にし、カガミとサブライは顔を見合させて肩を竦めた。

ムロは自分が倒れてから先の経緯をカガミから聞き、よつやく合点が行つた。

「それは……カガミ、すまない。迷惑をかけた。サブライ師範も、申し訳ございません」

頭を下げるムロに、カガミとクルヌイは笑顔で赦しをくれた。

「ムロ、受け入れたのか？」

サブライの言わんとしていることを察し、ムロは強い瞳で以つて答えた。

「はい」

「そうか……そうか」

サブライの顔が崩れる。サブライが泣きそうな顔をしているのか嬉しそうな顔をしているのかは、髭が彼の口許を隠しているため定かでない。だが、ムロに後悔は微塵もなかつた。呪いは首元まで広がつたままだつたが、苦しくもないし痛みもない。地祇が苦痛を取り去つてくれたのだろうかと思い至る。

「師範、ムロは自分が最良と思った道を行くまで。恐れも、戸惑いもない」

言い切つたムロに対してカガミが膝を打つた。

「さすがだな」

彼もまた、迷いが晴れたような顔をしていた。

「さてと。ムロも回復したことだし、都に帰る。サブライ、世話になつた」

力ガミは立ち上がり、サブライへと手を差し出した。その手をサブライは力強く握り返し、腰を上げる。

「……わしは黄昏国にも炎來国とも手を組まない。だが、この戦の行く末を必ず見守ることを約束しよう」

「ああ。しかとその目で見るがいい。黄昏国の復古を」

こうしてムロたちはサブライの家を後にした。

「力ガミ、サコの……姉として慕つていた者の墓参りだけさせてくれないか」

「構わない」

二人は二頭の馬を連れて葦原へと向かつた。一頭は力ガミが乗つてきた馬で、もう一頭はサブライからもらつた馬だ。サブライとともに戦場を駆けた栗毛の馬は、ムロに大人しく従つている。

金色の葦原は、何もかも覆い尽くす勢いで地表に根を張つていた。ムロはここに来たのは初めてではなかつた。サコの遺体 骨だけだが をこの善灯村へ運んだのは、他の誰でもないムロだつた。せめて首から下はサブライの傍で安置させてやりたかつたのだ。罪ひとたちの遺体を収容している部屋を管理している兵の一人と仲良くなり、拝み倒してサコの遺体を取り返した。

そして、この見晴らしの良い葦原の最果てに彼女の墓を立てたのだ。

ムロはサコの墓前で彼女の冥福を祈り、摘んできたしろつめ草を供えた。

「……サコは、ヤナギ様の付き童わいわをしていた」

後ろに控えている力ガミに聞こえるか聞こえないかくらい小さな声でムロは呟いた。

「付き童？」

「巫の世話をする童の^{わらべ}ことだ。姫巫に仕える采女のような者だな。サコはヤナギ様とたいそう仲が良かつた。　サコと俺は、ヤナギ様と同じ日に宮殿へ来たんだ。あのお方は俺たちにとてもよくしてくれた。よく、泣いていたら慰めてくれて。……カガミ、ヤナギ様は無事だらうか」

葦原^{いはら}が東風^{ひが}にしなる。

「これは、黙つておこうと思つていたんだが」
神妙にカガミは切り出した。

「ヤナギと会つた」

ムロは高く結い上げた黒髪をなびかせてカガミを振り返つた。ムロの芥子の実色をした目に驚色が宿る。

「ヤサカ二とともにサコの墓参りに来たと言つていた。束の間しか話せなかつたから、あれだが」

カガミは口を濁して視線をさ迷わせる。

ムロの唇が微かに震える。

「ヤナギ様は、どこも怪我などされていなかつたか」「ああ。少し瘦せていたが、見た限りはどこも怪我していなかつた」
「どうか、とムロは俯く。

「…………ムロ、ヤナギのところへ戻りたいなら戻れ」

カガミは優しさからぞう言つてゐるのでない」とくら、ムロにもわかつた。彼はヤナギのことを思つてムロが揺らぐことを危惧しているのだ。

ムロは波立つ心を平常に戻し、決然とした面持ちでカガミを見据えた。

「何を馬鹿なことを」

カガミは風にあおられる朽葉色の前髪を鬱陶しげに払いながら、「いつぞ、馬鹿正直に生きれたらいいのにな」と呴いた。

カガミとムロが黄昏国 の都へ帰つた後はたいへん慌ただしかつた。高天原国との決戦に備えて兵たちは士気を高め、軍師たちは地図を広げて軍略を練る。

日々はあつとこう間に過ぎ去り、季節は秋となつた。

カガミは鎧を着込むと、大きく息を吸い込んだ。カガミの周囲にいるムロやバショウたちもおののの戦装束に着替えを済ませている。

「ついに、この時がやつて来たのですね。高天原国との決戦の時が」バショウは緊張した声でそう言つた。彼の緊張をほぐさんとしてユウラクがあどけて見せる。

「なあに、いざとなつたら逃げ帰つて形成を立て直せばいい」

「ユウラク様、此度の戦はそう甘いものでは……」

「おうおう、バショウはわしがおまえのために軽口を叩いているのもわからんのか」

「そう、だつたのですか。申し訳ありません。つい」

バショウとユウラクが会話している横で、ルイは何も言わずに黙々と槍と剣を磨くムロを遠巻きに眺めていた。そして、彼女は意を決したのか拳を握りしめて、つかつかとムロの前に立つ。鷹揚なルイの態度にムロは不快感を露わにして睨み上げた。

「……ご武運を、指揮官様」

精一杯の皮肉を込めたルイの物言いに、ムロは切れ長の双眸を細めて口角を持ち上げた。

「お前もな、副指揮官」

ムロが黄昏国王族の者だと知つた当初、ルイは今後どう接すればいいか随分と思い悩んでいた。しかし、今回の戦でいつも任された指揮官 先陣を取り仕切る者 の座をムロに奪われたことで、何かが吹つ切れたらしい。ムロが王子だと知る前の尊大な態度でルイは彼に接していた。

ムロは己の正体に戸惑いながらも、カガミが指揮官に任じると拒絶することなくその役割を受けた。

黄昏国王は何度もムロを一日見ようと兵たちの訓練場に足を運んでいたが、ムロは訓練の邪魔だと言つて王を遠ざけていた。カガミはそれを横目見て、ほとほと王のムロに対する執着に感心していたのだった。カガミに対して黄昏国王がそれほどまでに興味を示したことほつぞなかつたのだ。

「カガミ様、最終確認の時間です」

マチが声をかけてきた。彼は筋肉隆々な体つきに見合つたゆがけをかけている。腰に差している剣が抜かれることは、ほほない。マチは鎧に仕込んだ暗器で相手を倒す。

「わかった。行くぞ」

カガミの号令に皆つき従つた。

険しい皺を刻んだ顔で、大巫おおみこはヤサカニの前に現れた。クルヌイの護衛を務めていたヤサカニは彼女の登場に若干身構える。

大巫は巫たちを育てる母のような役目を持つ者だ。彼女はとても位が高く、滅多なことでは表に出てこないことで有名である。

『わたくしの御心は高天原國が國つ神のもの。みだりやたらに殿方から姿を見られとうございませぬ』

台王が宴に顔を見せよと言つた時、大巫はその誘いを決然と断つたらしい。

そんな大巫が庭に出ていたヤサカニたちのもとへ来たのだ。身構えるなと言う方が無理な話である。

「お久しぶりでございます、王子」

「久しぶりです、大巫。あなたがこうして顔を見せるなんて珍しいですね」

「……本日は、そこの護衛に用がありまして参りました。少しの間でよろしいので、彼をお借りしてもよろしいですか」

有無を言わせぬ迫力で大巫はクルヌイを見る。

大巫の後ろに控えていた数人の巫たちが前に進み出た。

「ヤサカニ様、ご安心を。クルヌイ王子の護衛はわたくしたちが責を負います」

「なので、どうか大巫様とお話を」

「私たちは巫の中でも特に巫力が高いのでございます。王子の身に何かあることはございません」

矢継ぎ早に言い募る巫たちに、ヤサカニとクルヌイは顔を見合わせる。クルヌイは優しい眼差しを巫たちに向けて頷いた。

「君たちが優秀なのはよく知っている。わかりました。大巫、ヤサ

カ二」とゆつくりお話しされて下さい。僕は彼女たちと庭を回っていますから」「

「ありがとうございます。それではヤサカ二。来るがいい」

大巫は豪奢な装束を翻すと、見事な裾捌すそわけきで足早に庭を横切る。ヤサカ二はクルヌイと巫に頭を下げるが、急ぎ大巫を追つた。

大巫は北門にある鏡月池まで来て、

「ここら一帯の人払いは既に済ませております」

と足を止めた。

「大巫様が俺に何か御用でしそうか」

大巫は何も読み取れない表情でヤサカ二を上から下まで眺め見る。

「お前、まだ姫巫と接触できていないのですか」

「……はい」

ヤサカ二はヤナギが誰と会つのも拒否してからも、何度も神杷山しんばやまへ足を運んでいた。しかし、結界は緩まず、中に入ることも不可能な状態だった。この一月半、毎日のように通り詰めるヤサカ二をヤナギが受け入れる気配は全くない。

「采女も内側へ入れずに入る故、結界を緩めることのできるのは姫巫か、もしくは山の主神おもさねのみ。わたくし自身、神杷山しんばやまへ立ち入れぬ状態。ですが、ついこの間、クルヌイ王子が姫巫を神杷山より連れ出して都を散策したとか。…………その際、王子は何事か姫巫に言つたようです。姫巫の気が下位の巫さえも気がつくほどに乱れている。お前、王子より何か聞き及んだことは

「ないです」

大巫は盛大に嘆息した。

「……ヤサカ二、わたくしはお前とカガミかがみがここへ来た当初より常に見張り続けてきた」

大巫の告白にヤサカ二は顔を引きしめる。

「そして、最近になつてもお前の行動をつぶさに観察しております。結論として、お前は信用するに足る男だと私は判断した。だから、教えておこうと思います」

眉根を寄せるヤサカ一に対し、大巫は遠い目をして神杷山がある方角を向いた。

「あの子は六歳の時、自分が何者かも覚えていない状態でこの都へ連行されて来た。当初、何も喋らず口にしない彼女を先代姫巫はたいそう満足げに傍に置いていた。先代以外は、果たしてヤナギ様がどこから来たのか知らない。得体がしれないと思つたわたくしは何度も先代に、ヤナギ様が巫となることへの異議を申し立てたものです。……彼女は孤独です。自分の出自も、信頼する者も、全て高天原国に奪われている。ヤサカ一、お前も感じていたはずでしょう。ヤナギ様の脆さと自我のなさ。それらは全て、確固たる記憶を持つていなきことを起因としています」

「記憶を持つていなき？」

「そう。わたくしたちがこうして自分の感情で物を言えるのは、過去の記憶や経験をもとにしているから。ですが、それらをあの子は喪失している。だから、あんなにも高天原国に縛りつけられている。撥ね退ける意志さえあやふや。拠り所だつたサコもチズコも奪われ、手足をもがれた悲しき小鳥」

孤独。

それは唯一、ヤサカ一とヤナギを繋いでいる共通の想い。

ヤサカ一は確かにヤナギの孤独を感じていた。？姫巫？と？神の耳目を喪つた者？という理解されないものを抱えているからだとヤサカ一は思つていた。しかし、ヤナギの本当の孤独は、記憶を持ち得ない苦しみだつたのかもしれない。ヤナギ本人はその事実に気がついてもないだろう。喪つている状態から始まつているのだから。

ヤサカ一は眼帯をつけた左目を強く押した。闇の空洞が熱い。黒髪で覆つている左耳があつた部分が、ざわめく。

記憶がある。自分には記憶があつた。その記憶のおかげで今日まで這うよにに生きて来られた。憎悪でも悲哀でも、記憶があるからこそ胸に滾^{たき}_{（こき）}らせるこ^{（こ）}とができる強い想い。

「…………ヤナギ様のところへ行つてきます

「姫巫は誰も神杷山へ人を入れない。先ほどお前も接觸できていな
いと言つていたではないですか」

「何としても会います」

ヤサカニの涼しい面差しの下に隠した激しい感情を見透かした大
巫は、自らの懷に手を入れて小刀を取り出した。

「姫巫に頼らず山の入り口を開ける方法はただ一つ。主神の許可を得ること。主神は何よりも姫巫の意志を大切にしている故、簡単に結界を解いてはくれないでしょう。……この小刀には、わたくしの巫力が込めてある。何かあつたらそれを使いなさい」

しつかとヤサカニの手に小刀を握らせる大巫は少しだけ笑つてい
た。

「お前に託します」

大巫がヤナギを心から案じているのを感じ取つたヤサカニは、大きく頷いて見せた。

鏡月池にて手と口内を洗つたヤサカニは、くちなしさいのもり梶子斎森へ足を向けた。いつも立ち入つてはいるはずの森であるのに、常時とは違う気配がする。風がざわめいている。絡み合う密な木々の隙間より射す太陽の光がヤサカニの足許をちらちらと照らした。

森のところどころに垂れ込める深い闇の合間から鬼火が見え隠れする。

ヤサカニは弛むことなく神杷山の入り口部分に当たる楠の木まで歩き続けた。毎日のように来ているのだ。迷うことはなかつた。

太いしめ縄が巻かれた神木は、悠然とヤサカニを見下ろしている。ヤサカニはそれに手を触れた。結界が緩んだ時特有の、自分の体が空気に溶け込むような感じはない。

「…………」

おめおめと引き下がるわけにはいかなかつた。ヤサカニは自らの意識を集中させてなおも楠の木に触れ続ける。自分がいかにヤナギ

に会いたいと思っているか、この結界が緩むまで絶対に諦めないと
思っているかを強く心に描く。

自分の思いがヤナギに伝わっても構わなかった。
がさり、と數を搔き分ける音がした。

ヤサカニは右に広がる藪を見やる。

白い蛇がいた。ちろちろと真っ赤な舌を出し、その蛇はヤサカニ
を見ていた。

『兩者一步もその場から動こうとしなかった。

『汝、なんじはよう立ち去れ。今なら見逃してやる』

ヤサカニの脳に直接声が届く。

「…………主神か」

白き体を持つ動物へ、山の神は気まぐれに降りることがある。実
体を持たない神は動物に乗り移つて神域に侵入した人間を怖がらせ、
時には殺して自身の域一帯を守る。

白い蛇は湿つた落ち葉の上を這い、ヤサカニの足許でとぐろを巻
いた。

『さよう。姫巫が眠りについていた間は、汝のことを通してやつて
いたが……姫巫が意識を取り戻したならば話は別。私は姫巫の心を
優先させる』

「恐れながら主神よ。私は、どうしてもヤナギ様に会いたいのだ」
ヤサカニの強い口調を受けて、蛇は声を上げてヤサカニへ飛びか
かった。間一髪、白蛇の攻撃をかわしたヤサカニはある程度の距離
をとつて身構える。

『汝も他の者と同じだ。姫巫に高天原国を救え、と。この死国を救
えと言いに来たのだ』

「死国……？」

白蛇は空に向かつて奇声を上げる。晴れ渡っていた空に、どこか
らともなく黒雲が立ち込め出した。雨雲だ。

すぐに雨が降り始めた。その雨に当たると、白蛇は見る見るうちに体積を膨張させる。ぬめりがある白い鱗を持つた小さき蛇は、今

やヤサカニの数倍はあるであらう大きさになつていて。それはまさしく、**大蛇**であった。

赤い舌と赤い目はヤサカニを今にも殺さんばかりに波打つてゐる。

『我は代々神杷山に住まつ姫巫を愛し、守り続けるもの。姫巫がこの山にいる限り、高天原国國つ神にも手出しさせぬぞ』

ヤサカニの言葉が今の主神に届くとは思い難い。神は実に気まぐれで、一方的で荒々しい。一度、暴れ出したら手がつけられないものだ。

(覚悟の上だ)

ヤサカニは、腰帯に差していた双剣を構える。

白い大蛇おろちはちろちろと舌を出す。すると、空から雷いかずちがヤサカニ目がけて牙を剥いた。ヤサカニは雷を後退することで避け、とぐろを巻く大蛇に向かつて走り出した。

桶をひつくり返したように激しい横なぶりの雨に、眼帯が外れる。しかし、頓着していいる暇はなかつた。右目に入つて来る雨粒を払うために瞬きすれば、その隙を突いて主神は攻撃してくるに違いないと判断したヤサカニは、刹那でも目を閉じなかつた。

『汝汝……天神の……

ヤサカニの空虚な眼孔がんこうを見た主神が氣を削いだ。

ヤサカニは、なりふり構わず剣を振り上げて大蛇の懷に飛び込んだ。硬質な大蛇の鱗は剣を通さない。

「くそつ」

すぐにヤサカニは大巫よりもつた小刀を抜くと、深々と大蛇の腹へと突き刺した。醜い音と共に大蛇の腹の中に抉り込まれていく小刀を手放し、素早くその傷口から一気に剣で薙ぎ払う。渾身の力を込めたその一閃は、大蛇を真つ一つに切り裂いた。

絶叫が轟いた。

ヤサカニの体に生温かい肉片が落ちてくる。血と雨に濡れた黒髪を搔き上げ、ヤサカニは大蛇の屍を踏み越えて楠の木へ近寄つた。神聖な梶子斎森に血の穢れが充満する。しかし、それは降り頻る

雨が流してくれる。

白い大蛇の鱗は見事なまでに赤く染まつており、上等の反物のようだつた。

大蛇の血が木々の根元にある川より森を抜けて遠くへ運ばれたと思われる頃、ようやく雨は小降りとなつた。すぐに雲は引いて行く。その様を見守つていたヤサカニは、己が手を下した神の亡殻へ默祷を捧げる。大蛇はやがて収縮していき、小さな白蛇に戻つた。その屍は湿つた土に還つて行く。

ヤサカニは目を開けると、眼帯が落ちていなか辺りを見回す。しかし、眼帯らしきものはなかつた。激しい雨によつて流れてしまつたに違ひない。

嘆息する。

あの眼帯は、黄昏国から高天原国へ来る際にヤサカニたちの無事を祈つて幼子たちが贈つてくれたものだつた。

黄昏国とヤサカニを繋ぐただ一つの装飾品。それは予期せぬ形でこの手を離れた。

『何故、姫巫に謁見したいのだ』

この世に存在するためのより寄り代じぶを喪つた主神は、大気に混ざり合つてゐる。その姿を見ることは不可能だ。

「……あの方を一人きりにしないため」

ヤサカニは血濡れた手で、少し躊躇ちゆうしよいがちに楠の木へ触れた。

『我の寄り代を汝は殺した。そつまでして姫巫に会いたいか』

『はい』

『よからう』

楠の木に触れていた掌が熱を持つ。結界が緩む気配がする。

ヤサカニは目を瞑つた。

次に目を開けた先に広がつていたのは、豪奢に山の頂への小路を彩る花々だつた。

光がこそげ落ちた部屋の中にヤナギはいた。

格子から漏れ出す陽光だけがその部屋に明かりを灯す。通常ならば、燭台に火を明々と灯しているのだが、今のヤナギはそんな気分になれなかつた。

じつと寝台の横で膝を抱え、小さく丸まつたまま、彼女は何日も過ごしていた。喉が渴いたり腹が減つた時だけ室を出て、白湯を口にする。げつそりとこけた頬と隈くまをこしらえた目が異様にぎらつく。

「サコ……チズコ……ムロツ」

ヤナギは今この国にいな者の名を連ね、目を瞑つた。瞼の裏に焼きついて消えない三人の笑顔、泣き顔、最後に見た顔。社殿はヤナギしかいないことによつて、静寂じじまの中につつた。世から切り取られた神杷山の頂で、ヤナギは独りだつた。砂利を踏みしめる小さな音がした。

まさか、とヤナギは全身を硬くする。結界を緩めた覚えはない。この山を守る主神おもかねが無条件に人を神杷山へ入れるとも考えがたい。（きっと、主神が力比べに負けたのだ）

現実には有り得ないことが、可能性としてはそれしかない。

ヤナギは立ち上あがると、久しぶりに真象の力を揮ふるつた。

『この室の扉は強固な岩となり、決して人力では動かせぬ』

たちまち、室の出入り口が強固な岩と化す。侵入者がここへ来ても、人の力でその岩は動かせない。

床板が侵入者の足取りとともに鳴る。足音は社殿の最奥にあるヤナギの室前で止まつた。

「ヤナギ様」

低い声がヤナギの名を呼んだ。

「……ヤサカニ?」

「はい、『ご無沙汰しております。……少し来ない間に、ヤナギ様の

部屋の扉は『閉』となつたのですね」

「違ひ、これは侵入者を追い返すために……」

「そうですか。ならば、これはすぐさま解いて頂きたい。俺はあなたを害する気は毛頭ございません。ただ、ヤナギ様に会いたかつただけです」

「でも……」

ヤナギは自らの力でできた『扉』に触れる。冷たい感触が脳髄まで駆け昇つてくる。

「どうかお願ひ致します。あなたに会いたいがために主神と対峙したのです。一目でもいい。お姿を見たい」

王子と都の様子を見に行かれた時、俺はヤナギ様に会えなかつたですし、と溜め息まじりにヤサカニは呟いた。

やはり、ヤサカニは主神と戦つたのだ。そして、勝利した。

神と人。ヤサカニは果敢にも神に挑んだ。ヤナギに会いたい一心で彼は危うい橋を渡つたのだ。

ヤナギは岩をもとの観音扉に戻す。

扉はゆっくりと開き、黒髪の青年がヤナギの目前に佇んでいた。彼の姿を見た瞬間、ヤナギは口を手で押えた。どこもかしこもずぶ濡れの青年は、青白い顔をしている。せめてヤナギを安心させようと思つたのか、青年は、すっかり色をなくした唇で弧を描いた。どんな時でも決して外そとしない眼帯はつけておらず、落ちくぼんだ左の眼孔が剥き出しどなつてヤナギの目に飛び込んできた。髪がしたたか濡れていいるため、前髪で目を隠すこともできないのだ。装束もひどかつた。もとは萌黄色だったのがかるづじて見て取れるが、布地のほとんどが赤黒い血で埋まつている。

怖いとは感じなかつた。ただ、何が何だかわからずヤナギは混乱して声を発することができなかつた。

「……すみません。せめて着替えて来れば良かつたのでしょうか、今を逃すとまた結界が閉じてしまうと思ったので、このまま来

てしまいました

申し訳なさそうに手で左耳を隠しながらヤサカニは微笑んだ。

「そんなことに驚いているわけではない。ヤサカニ……この、血は触ろうとするヤナギの手を鋭くヤサカニが掴んだ。彼はとても厳しい顔をしている。

「触れてはいけない。寄り代の血だと言つても、神が流したものに変わりないのですから」

「ああ、そなたという人は」

ヤナギは呆れた顔でヤサカニを見た。彼はそんな視線を軽く受け流して水がしたたる己の髪を腕で拭う。

ヤナギはヤサカニの手を振りほどくと、寝台の下にある木箱を開けた。その中から木綿の布地を乱雑に掴んで、ヤサカニに差し出した。

「拭いて」

「いえ、ヤナギ様の持ち物を汚すわけには参りません」

「いいから。そのままにしておいたら、風邪を引いてしまう。着替えがあれば良かつたのだけれど、あいにくここには男物の装束がない」

拒むヤサカニを無視して、ヤナギは強引に彼の頭に木綿の布地をかぶせ、水に濡れた髪を拭う。

「わ、わかりました。自分でやりますから……。ヤナギ様はお座りになられていて下さい」

珍しく動搖を顔に出してヤサカニはヤナギの手を払いのけた。

ヤナギはヤサカニの言に従い、寝台へ腰を下ろした。室の入口で丹念に体を拭いているヤサカニを見つめる。細身な体つきではあるが、武の心得がある者らしい、しなやかな筋肉を持つているのは体の線から見て取れた。均整がとれた上体と下肢。ヤサカニは腰帯に携えた二つの剣を同時に扱うのだと、昔ムロがぼやいていた。双剣を扱うのには骨が折れる。二つの武器は剣と盾の役割を果たすが、それ故、甘い太刀筋になりやすい。決定打となる攻撃を放ちにくくい

のだ。よく見ると、ヤサカニの剣の柄^{つか}にも返り血が付着していた。

「……その双剣で主神の寄り代を殺したの？」

「はい。随分と手間取りました。……途中、主神は雨をも降らせて見せた。そのおかげでずぶ濡れです。まあ、神杷山には降らせなかつたと見受けましたが」

「そうなの。ここには全く雨が降つたりはしなかつた」

ヤナギは驚いてそう口にした。

神杷山はあまり天氣が変化しない。穏やかな春のような気候が四季を問わず流れている。

ヤナギは膝を立てて、膝小僧の上に顎^あを乗せた。

「主神が雨を……。この山の主神は、もともと水神なの。高天原国

国つ神とはあまり仲が良くないらしきけれど」

「神も人間のように好き嫌いがあるのでですね」

「好き嫌い、という生半可なものではない。いきなり稻光が落ちたり、天候が変化したりする時は、必ず神々のいざこざが関わっている」

ヤサカニは身繕い^{みづくろ}を終えて、一礼したあと部屋の中心部に置かれた祭壇に飾られたゆずりはで全身を軽く叩く。それは儀礼的なものであつたが、姫巫と会う際に不浄な気を払う行為であつた。

「そんなこと 私の御代となつてから行なう者などいない」

ヤナギの咳きにヤサカニは無表情でゆずりはを祭壇に置く。

「俺は、あなたに仕えると決めましたから。儀礼に則つて行動します」

不意打ちを食らつたヤナギは口を開けてヤサカニを凝視した。彼は固い決意を孕んだ右目で射るようにヤナギを見つめ返す。その目は青茶色ではなく赤茶色。ヤサカニ本来の色をした瞳。それは真名の縛りが解けたのを証明している。

「……真名の縛りを解いたのは、一重にそなたを自由にしたかったから。そなたには感謝している。姫巫を憎んでいるにも関わらずに私に仕えてくれようとする心意気は嬉しい。けれど……カガミたち

のもとに戻つた方がそなたにとつては幸せだと思

「お傍にいます」

ヤナギの言葉を遮つてヤサカニは言つた。

「……」

「ヤナギ様が真名の縛りを解こうが、関係ありません。俺は、俺の意思であなたに最期まで仕えたいと思つ」

ヤサカニはヤナギの足許に跪き^{ひざまづ}、ヤナギの右手を取つて甲に自分の額を寄せる。

ヤナギは胸の奥に去来するのが抑えきれず、口許を押さえる。しだいにそれは喉元に、眼の裏側へ込み上げてきた。

言葉が出なかつた。涙も出ない。ただ、うねりが体中を駆け巡り、温かくヤナギを包み込む。

気づけば、ヤナギはヤサカニの腕^{かいな}の中にいた。心音がする。ヤナギのものより少しだけゆっくりしたヤサカニの鼓動は、彼がここにあるのだと実感させてくれる。サコやチズコのように、動かないものでなく 生きている。

「孤独が支配するあなたと共にいたい」

ヤサカニの腕に力がこもる。それに応えてヤナギも彼の背中に回した腕に力をこめた。

「うん……うん……」

ヤナギはようやく一人ではなくなつた。

ヤナギが神杷山を下りて最初に行なつたことは、采女たちへの謝罪だつた。ヤナギのわがままによつて彼女たちは巫たちの住まう離れで肩身の狭い思いをしていたのだから。

「本当に、『ごめんなさい』。そなたたちが本当に心配してくれていたのはわかつていたの。けれど、私……本当に『ごめんなさい』

ヤナギの真剣な謝罪に、采女たちはさしも気に障つた様子もなく笑顔を見せた。

「ふふ、いいんです。わたくしたちだって一人になりたいこともありますし。それに、こうして姫巫様がお姿を見させてくれただけで十分です」

「そうですよ。私たちだって姫巫様の御心に気がつけなかつたのなもの。こちらこそ、申し訳ございません」

ヤナギは采女たちの度量の大きさに感服せざるを得なかつた。

そして、采女たちにまた自分の世話を頼んだあとにヤナギが向かつた先は、台王のところだつた。遅れて謁見の間に姿を現した台王は、黄味がかつた白目をしており、顔も黄土色をしていた。

ヤナギはヤサカニを連れて台王、並びに側近や近衛兵たちに謝罪と、今後の動向を伝えた。今後のことを考えたのは実質ヤサカニだつたのだが、自分はまだ信を得られていないと彼は言い張り、今回ヤナギが台王たちに代弁することにした。

「今後の動きとして、今この都を私が空けるわけにはいかないと思われます。武富長であつたムロもいないこの状況下、むやみやたらに地下の国へ出向いたとして、兵たちの統率が計れず敗走する可能性が非常に高い」

不穏なことを断言したヤナギに、側近たちは飛び上がって今の言葉を取り消すよう求めてきた。

ヤナギはそんな彼らに向かつて侮蔑の眼差しを送つた。

「？真象の力？は使っておりません。どうぞ」安心を

ヤナギの冷やかな視線に、台王とクルヌイ王子以外は若干たじろぎながら、時折目を剥きながら話を聞いていた。

全てを話し終え、謁見の間から出て行こうとするヤナギとヤサカニをクルヌイが止めた。

「その動向を考えたのは、姫巫？ それとも、そこにいる従者？」

ヤナギは王子に見つからぬようヤサカニへ目を配つた。ヤサカニは小さく頷く。

「私にございますが、何か問題でも」

「いいや、ただ気になつただけ。そこにいるヤサカニは黄昏国では

相当名の通つた軍師だつたらしいから
ざわめきが大きくなつた。ヤナギは舌打ちし、逃げるように謁見の間を去つた。

クルヌイは静かな眼差しで、ヤナギたちを見送つていた。
ヤサカニは驚くべき迅速さで、ムロがいなくなつた西門軍をまとめ上げた。それと同時に、何と彼は南門軍と東門軍までも手懐けてしまつたのだ。これにはヤナギも驚いた。今まで西門軍と他の軍が合同で稽古や作戦、また言葉を交わすことなど皆無だつたのに、ほんの十日前後で高天原国軍は一丸となつて鍛錬を行なつていた。

「こんなこと造作もない」

ヤサカニは、ただ驚くばかりのヤナギに向かつて不敵に笑つた。
「司官長をほんのちよつと懷柔してしまえば、後は簡単でした。『今は国的一大事。どうか、貴殿のお力添えが欲しいのです。きっと、今回都を守れた暁には台王よりたんと褒美がもらえるはずでござります。わたくしがきっと、貴殿の軍を最も強い軍に育ててお見せします』。そう言つたら、奴ら目の色を変えました。クルヌイ王子が謁見の間で俺が軍師をしていたと吹聴してくれたことも追い風となつた。ああ、ヤナギ様にも見せてやりたかつた。本当に、地位と保身しか脳にない者たちを転がすのは容易いことです」

「ヤサカニ……そなたは本当に……」

思わずヤナギも笑みを洩らす。

ヤサカニは長い前髪を搔き上げた。右側にいたヤナギには見えないが、彼は左目に眼帯をつけていない。眼帯をなくしたと言つたヤサカニにヤナギは新しい眼帯を用意したが、もういいのだと彼はそれを受け取ろうとしなかつた。

『醜い、と嘲笑されてもいい。全てを喪つたわけでないのに、悲嘆に暮れて欠けたものを隠すことはもうやめることにしました』

随分思い切つたことをしたヤサカニに対して、御殿内の人々の反應は総じて好ましいものが多くつた。

それには様々な理由があつた。

美意識の高い者たちは、ヤサカニの顔貌がすば抜けて優れていることもあって、彼の欠けた部分を、完璧でないからこそその美しさだと熱狂し、神も彼の美しさに嫉妬したのだと愛でた。

武に秀でた者たちは、ヤサカニの剣の腕や弓の腕に心底感服し、心酔している者が多くた。頭の切れる者たちも彼の導き出す軍略の数々に舌を巻き、師事を仰いでいた。

カガミがいる時は、影のように息をひそめることを第一にしていたのだろう。ヤサカニは、思う存分自らの存在を解き放つていた。彼は闇を壊す太陽でなく、闇に添う優しき太陰。高天原国を守ろうとしてくれる、全ての罪を赦そうとしてくれる、優しき光。

ヤサカニは軍を整えながら日に日に國軍全体の統率をはかつていた。兵たちがヤサカニを見る日は、ムロを見ていた西門軍に酷似している。誰しも、ヤサカニが指揮官となることを望んでいた。

やがて、間者たちが黄昏国に決起の動きありとの情報を仕入れて来た。もづ、ヤナギたちに残されている時間は少なかつた。

「ヤナギ様には最後の最後で動いて頂きます。あなたはこの国の懷刀。先陣を切る必要はございません」

「でも、地下の国々はきっと、？神の腕かいな？とムロを指揮官とする。

あの人たちの相手は生半可な兵では務まらない

「信じて下さい」

多くを語らないヤサカニは、ヤナギをひたと見据えた。その視線があまりに痛くて、ヤナギは押し黙つた。

突然、戦の狼煙は上がった。

地上へ続く蜘蛛の廻廊全てを一気に叩いた地下の国々は、驚くべき速さで都へ上がって来た。

「怯むことはない。お前たちはこいつなることを前提として、訓練を重ねたのだ。俺の指示に従えつ」

揺れる兵たちをヤサカニは大音声で以つて落ち着かせた。

「まず、必ず地下の者たちは都へ真正面から攻め込んでくる。だから、第一の守りは駿嶺門前に布く。そして、そこが突破されたら迷いなく御殿の南門を守れ」

「しかし、ヤサカニ殿。もしかすると、奴らは西門から攻めてくるかもしだせん」

「それは万が一にも有り得ない。ムロが、自ら指揮下に置いていた軍がいる門から攻略しようと考へるとは思えない。彼らがこの国を去つた時、西門兵たちと他の門兵の武力の差は歴然としていた。だが、今は違う。ここにいるのは高天原国軍だ。宮内で変に指揮系統を分けられた階級制の軍ではない。お前たちは、力ある守り手だ」

兵たちはおのれの顔を見合せ、唇を一文字に引き結ぶ。その顔は決意を持つて凜としている。

「都が落ちたとて、宮殿が落ちなければなんとかなる。いや、なんとかしてみせる。あちらは遠路遙々来ているんだ。兵糧も少ないはず。長期戦に持ち込めば、こちら側の勝算が上がる。持ちこたえる。お前たちなら、絶対に成し遂げられると信じている」

ヤサカニの鼓舞は兵たちの心を見事に捕らえていた。彼らは大きく拳を振り上げて勝利を誓う。それを見て、ヤサカニはほつとしたよつに口許を緩めた。

「では、皆自分の定位置についてくれ」

武具の擦り合う音を立て、意氣揚々と兵たちは持ち場に散つて行

く。

ヤサカ一は切り傷にまみれた自らの掌を空へとかざす。皮膚の薄い部分が、夕陽に照らし出されて赤く透けている。命の赤は、確実にヤサカ一の体内を巡っている。

(勝つ)

その意志を心に浮かべる。

何のために勝利を掴みたいのだと問われれば、ヤサカ一は迷いなく答えられる。

ヤナギ様の居場所を守るため。

それだけがヤサカ一を突き動かしていた。まだ、ヤナギは幸せを知らない。彼女が心の底から幸せを感じられるようになるまで、絶対に守つてみせる、とヤサカ一は自らに誓う。自分自身、？幸せ？とは何かわかっていないが、この戦に敗れれば考えることさえできなくなる。ヤナギもヤサカ一も、まだ何も掴めていない。

(……絶対に、勝つ)

夕陽を掴むよろに拳を握つた。

王宮内で巫たちと共に後方から援護をしていたヤナギの耳に飛び込んできた戦の趨勢は、非常に厳しいものだった。大きく穴の開いたゆがけをつけた兵は、転がり込むように巫たちがいる離れに駆けてきた。

「駿嶺門が突破された。地下の蛮族どもが王宮目がけて来ている。俺たちも南門まで後退してきたから、巫殿たちもより一層、強固な術を練つてくれ！」

「状況は思わしくないの？ ヤサカ一は？」

ヤナギの問いに兵は、「はつ」と頭を下げて答えた。蒼の腰帯を巻いているところを見ると、彼は西門兵に違ひなかった。

「ヤサカ一様はただ今最前線におられます。あのお方は敵方の動きを全て読んで的確に攻撃の指示を出しておいでですが、敵方へ攻撃

を仕掛ける度に何か奇妙な壁に弾き返されてしまうのです

「奇妙な壁？」

「はい。どう表現したらいいか、某にはわかりかねますが。何か…圧倒的な気を感じます。敵方の主軸はムロ武 いえ、裏切り者です。？神の腕？は我々の前に姿を見せておりません。前線は混戦しております。正直に申し上げますと、苦戦を強いられております。それでは、某も戦場に戻ります」

兵は口早に言うと、来た道を引き返した。

開け放された戸の外からは絶えず轟音や剣の音がしており、激しい攻防が繰り広げられていることがわかる。

巫たちは王宮へ敵を入れないよう、必死に巫力を練り、精度を上げて戦場へと飛ばす。それは見えぬ糸となり敵を縛るが、何故かその効力が格段に弱い。

額に玉のような汗を浮かべた大巫は手に持っていた橘の枝を床に叩きつける。大巫の乱暴な行ないにヤナギや巫は、ぎょっとして巫力を練るのをやめた。

「……わたくしたちの術は効かない」

きつぱりと大巫は言い切つた。そして、一つの部屋にすし詰め状態でいた巫たちを見渡す。

「敵方には神がついております。それも、辺境の地にいる小さき神々でない、大きな力を持った神が味方している。神力を前にして、わたくしたちが心血を削つて術を放つたところで跳ね返されてしまいます」

「ならば大巫様、私たちはどうすればよろしいのでしょうか。剣を持つて戦おうにも、私たちは護身程度しか剣術を習っておりません」真っ青な顔で巫の一人が言つた。それに呼応して他の者たちも騒ぎ出す。

「……そつよ、わたしたちにも神がついているではないですか」

はた、と巫がヤナギを見た。その目は血走っている。

巫たちはヤナギの装束の裾に縋りつく。

「姫巫様、あんな敵など貴女のお力で難いで下さい」

「戦場では常に圧倒的な力を揮つていらつしゃつたではありますぬ

か。どうか

「私の力も効かない」

巫たちの言葉をヤナギは皆まで聞かずに振り払つた。ヤナギの表情は強張つていた。

先ほどから何度も真象の力を揮つているのに、一向に戦の流れが変わらない。何か、姫巫の力を越えた何かがヤナギを阻んでいるのだ。

（まさか……神降ろし？）

ヤナギは奥歯を噛みしめる。黄昏国を守護する神 地祇ちぎ。地祇を何者かが身に宿しているのかもしれないと思い至る。

ヤナギの中に受け継がれている姫巫の記憶の中に、神降ろしの記憶がある。神降ろしは人でなくなってしまう代わりに、神を身に降ろすことを赦される。ヤナギのように神に力を借りて力を揮うのではなく、自ら神の力を揮うのだ。行使する方法によって、力には雲泥の差が生まれる。

巫たちのヤナギに対する罵声も、叩く行為も、ヤナギには止められなかつた。国を守る姫巫が無力と知つた巫たちの絶望は深い。それを受けることはできなかつた。

巫たちを止めたのは大巫だつた。彼女はヤナギを連れて、室内より出る。

「そなたはクルヌイ王子と台王のもとへお行きなさい。そして、いざとなつたらお二人を敵へ差し出すのです」

「大巫様……そのようなことをおつしやられるなんて！」

ヤナギは目に驚きの色を宿して大巫を非難した。

大巫は勾玉の連なる首飾りを外し、ヤナギの手にしつかと握らせる。

「そなたが生き残れば、この国はいつか再興できる。神の加護はひそかに受け継がれて行くでしょう。わたくしは、そう思っています」

「ち……違つ。私が生き残つたといひで、この国は再興などできません。大巫様、この国は」

言おうとしていたことは喉もとから搔き消えた。ヤナギは自分の喉を押さえて表情を歪めた。姫巫には守らなければならない秘密がある。秘密を言おうとすれば、呼吸することが難しくなる。

それがわかつていても、ヤナギは大巫に真実を伝えたかった。ヤナギに多くのことを教えてくれた偉大なる巫は、ヤナギに全てを託して死する覚悟だと感じ取つたからだ。

「わたくしの力など、微々たるものかもしれないけれど。わたくしは最期の刻限まで戦います。ヤナギ様、さあ、行きなさい」

大巫の目には涙が光つていた。彼女は突き放すようにヤナギの肩を押す。

ヤナギはその場から離れることができなかつた。

「大……みこ……様。貴女ほどの力を持つた巫を、敵もみすみす殺しはしない。約束して下さい。敵が離れに攻め込んできた際には敵方にくだつてでも生き延びると」

ヤナギの言葉に大巫は、ただ微笑を見せるだけだつた。

「台王や王子は寝所の奥の間になります。早く行きなさい」

ヤナギは大巫を降り返りつつも、台王やクルヌイ王子がいるもとへ走つた。

履物を脱ぎ、謁見の間を横切つて小走りに寝所へ急ぐ。すれ違う富人たちが慌てふためいており、ヤナギに氣を止める者は誰一人いなかつた。

「どいてくれ！ わしゃまだ死にとうない！」

「あたしだつてそうだわつ」

「こんな国、もっと早く捨てれば良かつた」

我先にと荷物をまとめた者たちが御殿から出て行こうと押し合っている。

ヤナギは悔しかつた。

大巫たちへ兵たちが命を賭けて国を守るうとしているといふのに、今まで台王の傍で蝶よ花よと何も考えず、扇で隠した口許に笑みを浮かべていた者たちが逃げ出そつとしている。その様はとても無様だった。

「……姫巫？」

寝所に続く廊の途中でヤナギはクルヌイと鉢合わせた。

「クルヌイ王子、ちょうどそなたたちのいる間へ行こうとしていたのです。台王は……」

クルヌイは首を振る。

「台王は床から動こうとしない。奥間にも行つてくれなくて、困つていたところだ」

「すぐそこまで敵が迫つております。お逃げになつて下さい」

「この事態を招いたのは、高天原国を守るべき立場にある台王や僕のせい。今更逃げることなどできないよ。……よしんば逃げたとして、どこに僕たちを匿つてくれるところがあるだらうか」

王子は落ち着いた様子で腕を組んだ。少々苛立つてゐる様にも見える。

「それは……っ」

返答に窮するヤナギの耳に入々の悲鳴が聞こえた。

「敵が入り込んだぞーっ」

「都全域に火が放たれた！ もうおしまいだ……っ」

クルヌイはヤナギの手を取り、素早く駆け出した。溢れ返つてゐる富人の合間を縫うようにして彼は寝所の奥間へと続く扉を開いた。クルヌイは間の飾り棚を押した。棚があつた部分には観音扉があつた。彼はそれ開け放つた。そこは隠し部屋のようで広さがあり、最奥には御簾が垂らしてある上座が存在した。部屋の四隅には燈台があり、真つ暗な室を僅く照らしている。

「クルヌイ王子……ここにお隠れになるのですね」

「いいや、ここに隠れるのはヤナギ、君だよ」

驚愕がヤナギの顔に走る。ヤナギは自分の手を掴んだままでいる

クルヌイの手を振りほどいた。

クルヌイは俗世から切り離されたように清い微笑みを浮かべた。

「君は、死ななくていい。贖うのは、わたしや父上だけでいい」

彼はそう言い残し、隠し部屋から出て行つた。すぐに扉を飾り棚で塞ぐ音がした。ヤナギは力任せに観音扉の取つ手を引いたが、扉は微動だにしなかつた。

『扉は御簾になり、私を通す』

真象の力を使ってみたが、戸には何の反応もない。清淨な気が薄い本殿内では、力も發揮できないのだ。

ヤナギは無駄だとわかっていてもなお、戸を叩き続けた。

「クルヌイ王子……どうか、戸を開けて下さい。私は護つてもらう価値などない。それは、貴方にもわかっているはずです」

ヤナギの目頭に涙が滲んだ。扉を叩き続けるヤナギの拳が痺れてくる。

どれほどの時間が経つただろつか。外界と部屋の内部は完璧に隔てられている。何の音もしない。

ヤナギは扉の前に座り込んでいた。

ことり、と北側にある燈台が揺れた。ヤナギは双眸をそちらへ向ける。

燈台の揺れは静まらない。

ヤナギは暗がりの中、燈台の下をじっと見据えた。影に隠れていた部分がぼんやりと浮かび上がつてくる。

『隠し通路……？』

ヤナギは一人呟き、懷に忍ばせた小刀の柄を握りしめる。

この室は、何か変事があつた際に台王が身を隠す場所。だが、もしもこの部屋が見つかった時のために、宮殿を造つた者は隠し通路も一緒に造つたのだろう。北側にある燈台の下には小さな木戸がある。それが不自然に振動しているのだ。立てつけが悪いのか、長く使われていなかつたためかはわかり兼ねる。

何者かは木戸を強引に外して中へ入つてきた。

燈台の微かな灯かりは侵入者の顔をヤナギに教えてくれない。その者は体全てを室へ引き入れると、立ち上がった。倒れそうになる燈台をその者が支えた時、ようやく姿形が露わとなる。

肩で息をし、こめかみより血を手の甲で拭う男は、高天原國軍の証である蓮と海原を描いた額当てをしていた。

「ヤサカー！」

ヤナギは勢いよく立ち上がり、ヤサカーのもとへと駆け寄った。ヤサカーは、胸に手を当てて息を吐いた。彼の鎧には血が飛び散っている。鎧にも膝当てにも、余すところなく深い傷が刻まれており、蒼の外套はとこうじこう焼けている。

ヤサカーは壁に身を委ね、ずるずると腰を落とした。彼は苦しげに浅い呼吸を繰り返し、瞑目する。

「良かつた……間に合つた」

「どうしてここが……」

「ここへ来る前、巫たちの部屋に行つたのです。そこで……大巫より、この部屋のことを聞きました。安全に行く抜け道まで教えてくれました」

「……無理をしてこんなところまで……。無謀にもほどがある」

ヤナギの声が震える。長い黒髪が顔にかかった。

ヤサカーは低くくぐもつた声で笑つた。

「必死にここまで後退してきたんだ。少しくらい、褒めて下さい」

言いつつ、ヤサカーは腕に刺さつた太い針を抜き取る。血飛沫が上がつた。

「ヤサカー、無理やり引き抜いては駄目！ 手当を……」

「……しつ。こちらへ」

ヤサカーは重傷の身で立ち上がり、ヤナギを抱き込むようにして御簾の裏側へ移動した。

扉の外から大きな音がする。

ヤナギは息を止める。

「…………隠し通路に逃げたとしても、追手は必ず来る。俺が

敵を斬ります。その間にヤナギ様は脱出を

「その怪我では無理よ」

「無理と言われようと何だろうと、やつて見せる。……来ます」

ヤナギとヤサカニは御簾の後ろでじつと扉の方を注視していた。やがて、扉が開く。

扉の向こうから光が射す。外界から遮断されていた部屋の中に現^{ひつ}る音が流れ込んでくる。

御簾を何者かが足蹴にして揺らす。

ヤサカニはヤナギをきつく抱きしめて息を殺し、逆光を受けて佇む人物を睨み据えた。

男は非常に鷹揚な仕草で動く。ようやく露となつたその人物の顔を把握した瞬間、ヤサカニは愕然とした。

「カガミ様……」

一人の前に佇んでいたのは、カガミであつた。ヤナギの喉が引き攣^つる。

カガミは何事か口にしようとしたが、背後から奇声を上げた人物の登場により押し黙つた。

カガミの後ろから現れたのは、台王だつた。手にはムロが高天原国を出る際に置いていった国の秘宝、八雲大蛇大剣を握つている。？神の腕？は台王の後ろを冷めた目で見やる。そこにはたくさんの屍があつた。地下の国々の兵たちも、高天原国^{アメノミコトノカミ}の兵たちも、どちらのものともわからない屍の山。

ヤナギは屍の発する嘆きに吐き気を覚える。

台王は血走つた目でカガミを見る。病的な黄土色の肌に飛び出た目。台王は狂つていた。

己を守ろうとしない刃は、理性ある者よりも強い。剣の腕はそれほど高くない台王が地下の国々の兵を倒せた勝因はそこだ。

台王はカガミの前に立ちはだかつた。

「姫巫は渡さぬ。この国神は渡さぬぞつ」

台王の叫びにカガミは怒鳴り返した。

「そいつは高天原国の中のものではない！」

激情を表に出し、周囲の空気を一瞬で冷やすほど威圧感を醸し出してカガミは台王へ刃を向けた。

台王はがむしゃらに剣を振るう。カガミは台王を段々と壁際に押しあつて行く。最初から勝負はついていた。カガミの剣は人を斬るためのもの。対する台王の剣は儀式のためのもの。

カガミの猛烈な一撃に台王は剣を取り落とす。躊躇することなく、カガミは台王の首を刎ねた。

それは同じように首切りで死んだサコの死に様とは似ても似つかないほど、醜い死に様だった。

「…………」

カガミは無言で刃を己の外套で拭うと、ヤナギとヤサカニへ目を向ける。

台王とカガミが戦つてゐる隙に脱出ししようとしていたヤナギたちだつたが、抜け目なくこちらに気を配つていていたカガミのおかげで逃げられなかつた。

カガミは情け容赦なく、月水鏡剣をひたとヤナギへ向ける。

「憶えているか、ヤナギ　いや、キヨウカ。昔、同じように俺があ前に剣を向けた日のことを」

ヤナギは嘔吐感を覚えて、口を押さえる。

何がが体の中を蠢いているのがわかる。

何故、ヤナギの真名をカガミが知り得るのかがわからない。

しかし、心の奥ではその答えを知つていて自分がいる。

己の記憶のあやふやな部分が振動し、嘔吐感は募る。

そんなヤナギに、カガミは優しく微笑んだ。彼が楊に見せた表情の中でも、安らかなるものだつた。

「…………響くは始まりと終わりを告げる、宿運が闘の声」

瞬間、怒涛の如く抜け落ちた記憶はヤナギを襲つた。

七章 焰〈ほむり〉の追想

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

幼子のように抵抗した。

思い出したくない、思い出したくない、思い出したくない。

精神が、赤く燃える煉獄の焰に包まれるのを感じた。

駄目だ、と本能的に思った。

必死にもがき、足搔く。

この記憶だけは封印しておかねばならない、と心奥にいる幼き頃の自分が忠告してくれる。

ヤナギは、悲鳴を上げた。

しつかとヤナギを抱きしめているヤサカニの腕に強さが増す。

「ヤナギ様、お気を確かに。ヤサカニがおります。必ず、あなたをお守り致します」

彼はヤナギ以上に必死な形相をして、呼びかけてくれる。

「ヤ、サカニ……？」

ヤサカニの呼び声もあり、ヤナギは記憶の焰から逃げあおせそうになる。

しかし、その時、ヤナギの視界に剣の切っ先が見える。

瞳孔が開く。

そのもとを連れは、紛い者ではないカガミがいた。

カガミは口を歪ませる。

その薄い唇から零れ落ちた名は、記憶の焰を煽る疾風となつた。

「キョウカ

怒涛の如く、抜け落ちていた記憶は、ヤナギを襲つた。

ヤナギは白い空間にいた。何もない場所。

ふと、花弁がヤナギの膝もとに落ちてきた。上を見上げると、辺りは全て灰色の花で覆われている。

「……拯溟の花……」

花々は段々空間を占める密度を濃くしていき、ヤナギを圧迫する。芳醇な香りを胸いっぱい吸い込んだ刹那、息苦しさはなくなった。かわりに、ヤナギの前にはただ広い野原が広がっていた。

兄上、兄上。

拯溟の花が吹雪く中、少女は慕うように兄を呼ぶ。

少年は後ろ一つに束ねた髪を揺らして、少女の方を振り返った。少女は兄の懐に勢いよく飛び込んだ。

「おかえりなさい、兄上。今回の戦はどうだった？ 怪我しなかつた？」

「ああ、勝ったよ。姫巫の軍勢は一旦引いた。怪我もない」

「そう！ 良かった」

ほっとした少女は花が綻ぶように笑う。兄はそんな妹を見て優しげな眼差しを送った。

「キヨウカ……必ず、この国を復古しよう。その時は」

少年は言葉を切つてキヨウカを抱き上げる。

「お前を、この世で一番幸せな姫にしてやるから」

兄の瞳に映る柔らかい色が心地良くて、キヨウカはにっこりと頷いた。

「キヨウカは、兄上と一緒に入れるだけで幸せ」

「参つたな」

兄ははにかんだ表情を見せる。

キヨウカは幸せだった。国の復興とか王族の威信とか、そんなものの幼いキヨウカにとつて見れば興味を持てないものであり、日々指南役から教わる黄昏国と高天原国の確執でさえどうでも良かつた。ただ、兄とこうして共にいられるだけで、幸せだった。

キヨウカよりも七つ年上の兄は幾度も戦へ赴いている。毎回擦り傷や打ち身をこしらえて帰還するのだから、キヨウカは気が気がしなかつた。いや、生きて帰つてくるだけでもいい。敵国との戦いは熾烈を極めている。荷車で物言わぬ死人となつた兵たちを囮い、その家族や友人が泣いているのをキヨウカは何度も見たことがある。（兄上は戦が怖くないのかしら）

キヨウカは幼いながら、懸命に思いを巡らせた。

敵国には神の加護を受けた術者がいると指南役は言つていた。

姫巫　　。かの国の術者の名。女の身でありながら戦場を駆ける彼女は、戦女神そのものだと指南役は苦虫を潰したような顔をして呟いていた。

その姫巫と兄は戦つている。兄だけではない。地上の国々は皆、断固として敵国へ下ろうとしなかつた。

姫巫は奇怪な術を操るらしい。その術のせいで黄昏国の中秀な兵たちが散つた。

「ほら、ぼうつとするな。もうすぐ夕餉ゆうげの時間だろう」

兄に手を引かれ、キヨウカは足取り軽く王宮へ歩き出した。

拯済の花がいっせいに風に吹かれて花弁を舞い散らす。二人の姿が搔き消えた。

再び、拯済の花が視界一面に広がり、新たな記憶をヤナギの前に示す。

キヨウカは目いっぱい開いた瞳に零れんばかりの涙を湛えて母を見た。

母は沈痛な面持ちでキヨウカから視線を外す。父もまた、頃垂れている。

救いを求めて謁見の間にいる者たちを見回すが、誰もキヨウカと目を合わせようとしてない。あれほど毎日軽口を叩き合っていた指南役も、いつもキヨウカを可愛がってくれていた目付役も。側近も、身の周りを世話してくれる女官も。誰もキヨウカを助けない。

「嫌……」

涙を零さないよう口をへの字に曲げてキヨウカは父母に反抗した。

「キヨウカ、赦して頂戴」

母がか細い手でキヨウカの頬に触れようとする。それをキヨウカは撥ね退けた。

「嫌と言つたら嫌！ 絶対に嫌！」

「キヨウカ……っ」

「母上は勝手だわ。私を犠牲にして自分たちだけ助かるうとしている……」

「おお、何ということ……」

おいおいと母は泣き出した。氣丈な母が泣いているところを見たことがなかつたキヨウカは驚きに言葉を忘れる。

父は泣き崩れる母の肩を優しく叩き、キヨウカを見据えた。

「高天原国の姫巫が、お前と引き換えに黄昏国を滅ぼさないでやると言つた。この提案を呑まねば、この国は滅亡してしまう。これは国を賭けた取り引きなんだ」

「いいえ、父上。姫巫は私を入れたところで引き下がるような者ではないわ。姫巫が関わる戦に赴いた兵たちが言つていた。命乞いしても姫巫は躊躇なく殺すのだと。そんな非情な人が、父上との約束を守るわけがない。きっと、また攻めてくる」

「……聰い娘だ。まだ六つだということが信じられん。だから、本当のこと教えよう」

キヨウカは父を強い力で睨み上げる。周囲にいた人々は固唾を呑んで王の言葉を待っている。

「…………お前は、姫巫の孫に当たる」

「え？」

全く考えていなかつた言葉にキヨウカは呆然とした。

「我の后は お前の母は、高天原国が姫巫の娘。その母の子であるお前は、姫巫の孫に当たる。姫巫は代々その血脉に連なる娘が継承するのがならわしだという。だから、お前を引き換えて

「なりません！」こをお通しするわけには……」

「黙れ」

扉の向こうから押し問答が聞こえてきた。扉はすぐに開け放たれた。

「……父上、何をなさつておられるのですか」

いつせいに皆の視線が謁見の間の入り口に向く。言葉を紡げないでいるキヨウカもまた、声の主を見やつた。

兄は朽葉色の双眸を部屋全体に素早く走らせる。彼の後ろには幾人の護衛兵があり、必死に兄を中へ入れまいと外套や肩を引っ張つていて。

「ハルセ様、いけません。王にはハルセ様を入れるなときつく言われております故」

「どうか、お引き取りを」

護衛の手を振り払い、ハルセはキヨウカたちのいる中央部へ近づいてくる。

父は母の肩から手を離し、キヨウカの肩に手を乗せた。ぐつと力を込められ、骨が悲鳴を上げる。

「わかつたか、キヨウカ。これはお前に託された使命だ」
険しい顔をして父はキヨウカを覗き込んだ。今まで父の恐ろしい表情を見たことがなかつたキヨウカは縮こまる。

「その手を離せ」

ぱんつと小気味いい音と共に父の手がキヨウカから滑り落ちる。

兄が弾いてくれたのだ。兄 ハルセはキョウカを守るよつに搔き抱き、父やその場にいる人々を睨みつける。

「先の姫巫からの提案の件ですか」

「そうだ」

「あれは、受けない方が良いと再三申し上げたではありますんか」
ハルセは声を荒げた。

父は壁際に控えていた兵たちに目を配る。兵たちはすぐにハルセとキョウカを取り囲んだ。嬉々としている者はいなかつた。兵たちは俯き加減にキョウカたちの周りを固める。

ハルセは舌打ちし、絶対に離さないとこいつよにキョウカをより一層強く抱きしめる。

「キョウカのことは、忘れる」

「何を言つているのですか！ 貴方はこの国の王だろつた。姫巫には絶対に屈しないと息巻いていた気迫はビビりへ行つたんだつ」

ハルセの叫びは悲鳴に近かつた。

「これより先、キョウカはこの国の者ではない。姫巫を継ぐ、我らの敵となる娘よ」

「馬鹿な……」

掠れた声でハルセは父を見る。その目には父に対する失望があつた。

キョウカは身を硬くした。父に聞かされた真実がキョウカの頭の中で渦巻いている。

父は、？神の腕？と占者たちに運命づけられたハルセの身代わりとして、自分を差し出すのだとキョウカは気づいていた。

今は姫巫の機嫌を取つて滅亡を防ぐためにキョウカを差し出す。そして、ゆくゆく万が一キョウカが姫巫になったとしても、ハルセがいるならば勝利できる。そういう思惑なのだ。

所詮、自分は捨て駒。

キョウカの目から一粒の涙が落ちた。

「…………俺が行く」

短く、ハルセは言った。

父は怪訝げにハルセを見た。

「俺が、キヨウカの代わりに高天原国へ行く。間者だつて何でもやつてのけるから……父上、どうかキヨウカはここに。こいつはまだ小さい」

「許せ、ハルセ。黄昏国そのため、必要な犠牲なのだ」

ハルセは言葉を失つた。

「……お前たち、キヨウカを連れて行け」

能面のようすに感情の見えない顔で父は兵たちに号令を飛ばした。

兵たちは迅速にハルセとキヨウカを引き離しにかかる。

キヨウカはハルセと離れたくなくて必死に兄の装束を握りしめていたが、大人の力に子供が勝てるわけもなく、兵に引きずられて謁見の間から遠ざかる。

「兄上！ 兄上！ 兄上！ ！」

唯一の味方であるハルセを、キヨウカは声が涸れるまで叫んだ。手を伸ばしているのが目に入る。

「キヨウカ！ くそつ、離せ……お願いだ、離してくれえっ」

絶叫が宮内に木霊した。

叫んだ。

謁見の間で、ハルセが兵たちに抑えつけられながらもキヨウカに手を伸ばしているのが目に入る。

「キヨウカ！ くそつ、離せ……お願いだ、離してくれえっ」

絶叫が宮内に木霊した。

キヨウカは一人、自室にこもつていた。入り口には兵が控えていたため、外に出ることもできない。キヨウカは赤く腫れた目をこすった。二日三晩、泣き通してわかつたのは絶対に姫巫のもとへ行かなくてはならないこと。キヨウカがこの役目を拒めば、間違えなく国は滅ぶかその寸前の状態まで陥る。

キヨウカは膝を立てて、顔をうずめた。

（兄上と敵同士になるなんて嫌だ）

涸れることを知らない涙は再びキヨウカの頬を濡らす。

ふと、大きな物音がした。戸の向こうからだ。だが、開かない戸に興味はないばかりにキヨウカは泣き続ける。

「…………キヨウカ」

聞きなれた大好きな声色がキヨウカの耳をくすぐった。キヨウカは恐る恐る伏せていた顔を上げる。戸を開けたのは、ハルセだった。

「兄上、どうして？ 兵がいたのに……」

部屋の外を覗くと、二人の兵が血を流して倒れていた。きやつとキヨウカは悲鳴を上げる。鼓動が速まる。致死量の血液は絶え間なく兵たちから流れ出ていた。

キヨウカはその時初めて、今のハルセはいつものハルセと違うことに気がついた。穏やかさも、優しさも、いたわりもない。あるのは深い悲しみを宿した心。キヨウカはハルセから後ずさった。

「もう、お前を守れない」

ハルセは、凧いた剣をひたとキヨウカへ向ける。彼は夜空に孤独に咲く月の如く、儂い笑みを浮かべた。

「願わくば、もう一度と今生でまみえることがないよう兄の声が震えている。

「さよならだ、キヨウカ」

視界は朱色に転じ、体を生温い何かが伝う。生温いものに手を当ててみると、それはがキヨウカの体より流れ出でた血だとわかった。すぐに睡魔がキヨウカを襲つた。

「…………響くは始まりと終わりを告げる、宿運が闇の声……」

古代史に残る有名な一節を謳んじるハルセを遠く感じじる。ばたばたと大きな足音を立てたくさんの人がキヨウカの部屋へ入ってきた。

「ハルセ、何をしておるー 医者を……誰か、早く医者を連れてまいれ！」

まどろみの中、キヨウカはハルセに手を伸ばす。伸ばされた小さな手を、掴む手はなかつた。

ヤナギは、無言で己の過去を眺め見ていた。

拯済の花は、たおやかに舞う。

ヤナギの目から一筋の涙が流れる。

少女が目を開いた時、目の前にいたのは一人の男だった。精悍な顔つきをした三十過ぎの男は、少女の目覚めに酷く狼狽したようで、周囲の者たちに少女が目覚めたことを告げ、何を言えばいいのか、としきりに訊いている。

周囲の者たちは笑いざざめき合い、

「？激昂の大蛇？ともあろう者がそんなに慌ててどうするのですか」「サブライ殿、取り敢えず、姫巫様のもとへお連れした方がよろしいのでは？」

と、言葉を返す。

サブライという名の男は、少女にぎこちなく笑顔を見せた。深い傷をこしらえた男の面に、少女は俯く。

自分が誰なのか、思い出せない。

「では、今からお前を姫巫様のところへお連れする。立てるか？」
気遣わしげにサブライは少女に手を差し伸べる。少女は、自分に差し伸べられた手をじっと見ていたが、そつと小さな手を重ねた。

サブライと少女は、黙したまま渡り廊を歩いた。サブライは、何度も少女の方を向いて、何事か喋ろうとしていたが、少女は頑なに男を見ようとしなかった。

（私は、誰。ここは、どこ。怖い、怖い）

少女は、下唇を噛みしめて溢れおちそうになる涙を必死に堪える。

男と少女は、大きな一室に入った。繋いでいた手をサブライは解

を、片膝をついて頭を垂れる。

少女は笑いもせずに棒のよう立っていた。
隣にいたサブライが頭を垂れると怒鳴つて初めて、呼吸することを思い出した。

上座にいる美しい女は、優雅な動作で立ち上がる。白粉を叩いた顔は、一片の曇りもなく、唇に引かれた紅は、彼女の真っ黒な長い御髪と対比している。

息を呑む美しさは、少女の胸に宿つていた恐怖を煽つた。
「ようやく来てくれた。わたくしはそなたを待つていた」

女は言い、少女の前に腰を落とした。

「わたくしは、姫巫と呼ばれる者。そなたは」

「私は、私は……わかりません。何も、わからない」

少女の目に涙が浮かび、それは頬を伝つた。思い出せない、自らの名。そして、過去。

姫巫は、口を弓形に歪めて笑つた。真白い歯が垣間見える。

「ああ、可哀想に。何も覚えていないのだね。……そなたは、ヤナギ。ヤナギという」

「私の名は、ヤナギ？」

「ヤナギ……良い名です」

呴く姫巫が、ヤナギには恐ろしくてたまらない。早く場を立ち去りたかった。

「戦場で倒れているところを、サブライが見つけたのです。そなたは、これからこの高天原国の富殿で、巫となるために修行を積み、拾つてやつた恩を返しなさい」

ヤナギは、ただ俯いた。

姫巫は、装束を少しだけ持ち上げ、その場を離れる。彼女はヤナギの右側へ歩を進めた。

「して、サブライ。この娘は？」

姫巫に問われ、ヤナギの左にいたサブライは、床に額を擦り付けそうな勢いで頭を低くする。

「はい。先の戦で親を亡くした子ひでじやむこます」

「………… そうか。名は？」

「はい、サコと申します。」こちらの男児は、ムロと

ヤナギとは違う、はきはきした声でサコとこう娘は姫巫に答える。ヤナギは、サコたちが右隣にいることに気がつかなかつた。それくらい、彼女たちが気配を消していたのか、ヤナギが混乱し過ぎて気づかなかつたかは、定かでない。

サコは雀斑そばかすの浮いた浅黒い肌をしており、挑むような眼差しを姫巫に向けている。サコの横にいるムロは、首を縮ませて事の成り行きを見守つていた。

姫巫は口の端を上げると、腰に手を当てて身を屈めた。サコと姫巫が顔を突き合わす。

「年は？」

「六つにいります」

「よろしい」

姫巫は身を翻して、座椅子に戻つた。彼女は扇を開き、緩慢な動作でそれをサブライに向ける。

「中々どうして、肝の据わつた娘じやないか。ヤナギとちょうど同じ年なことだし……お前、ヤナギの付き童わらわとなるが良い」
たいそう満足げに姫巫は笑んだ。

サブライは、

「ありがたいお言葉、もつたいのいります」
と幾分ほつとした声色で言つた。

ヤナギとサコの視線が交錯する。

サコは、慎ましく微笑んだ。その微笑は、恐怖が大半を占めていたヤナギの心に、温かな風を起こしてくれた。

高天原国の巫として離れに暮らし出して数ヶ月過ぎても、失つた記憶は、ヤナギを苛み続けた。

毎夜、知らない場所の夢を見る。夢の中で自分は、去つて行く背中を泣き叫んで追いかけるのだ。

毎回、あと一歩のところで、花吹雪が巻き起しつつ、背中の主に手が届かない。

涙を流して跳ね起きるひとは、日常茶飯事だつた。

ヤナギは、下級巫達が使う共同部屋で寝食しているのだが、他の巫達はヤナギが毎晩うなされているため、『ヤナギが五月蠅くてかないませぬ。部屋を別にして下さいまし』と大巫に嘆願していた。

彼女たちが怒るのも無理もない、とヤナギは思つ。

巫修行は骨の折れるものだ。疲れて床に就き、泥のように眠りたい時に、他の者がうなされているがために眠れないのでは、苛立ちもするだろう。

ヤナギは布団の中で丸くなつて、睫毛についた滴を弾く。

「ヤナギ様、ヤナギ様」

小さな声がヤナギを呼んだ。はつとして引き戸の方を見やると、そこには松明を手にしたサコが立つていた。

サコは、巫であるヤナギの付き童として身の回りの世話をしてくれている。明るく眞面目な彼女とは、ヤナギは気兼ねなく話すことができた。他の者は、どうもヤナギに近付いてくる真意が掴めず、距離を置いてしまう。

ヤナギは、ひしめく巫たちを起さぬよう注意を払いながら、彼女のもとへ向かった。

「サコ、そなたこんな夜深けに

「しつ」

サコは人差し指を唇に当て、ヤナギの手を引く。

「ちょっと、夜に抜け出したのが知れたら、大巫様からお叱りを受けるわよ。巫である私よりも、そなたの方が厳しい叱責を」

「わかつてます。でも、私……どうしてもヤナギ様に見せたいものがあるんです」

そう言って、サコはヤナギを先導する。いけない、と頭ではわか

つているのに、強く拒否できなかつた。サコの目は輝いてゐる。ヤナギの失つてしまつた感情が、彼女にはあつた。

二人は履物をつっかけ、姫巫の社殿があるという神杷^{じんぱ}山に続く森

くちなしのもり
梶子^{かじこ}斎森^{さい}の入口まで辿り着く。

神聖な森への入口を示す、鳥居をぐぐり抜け、サコは橋の木で囲まれた池のそばでようやく足を止めた。

汚れた身を浄化させる作用のある神の池、鏡月池からは薄く湯気が立つてゐる。

「ほらほら、見て！」

肌寒さに身を縮めたヤナギに、サコは手招きする。

「私は見ない。早く離れに戻りましょ」

ヤナギは言つたが、それを無視してサコは池の中を覗き込んでいる。手にした松明が、彼女の嬉々とした表情を照らす。

気になつた掛け句、少しだけならと自分に言い聞かせて、ヤナギは橋の木を搔き分け、池を覗いた。

「わあ

思わず感嘆の声が出た。

池の面^{おもて}に映つていたのは、満天の星を宿した空だつた。真ん中には白く丸い月が浮かんでいる。

風が吹く度、漣立つて空は揺れた。しかし、しばらくすると、また夜空を映し出す。

ヤナギは何も言わず、サコの隣にしゃがんで、それを見ていた。

「私、眠れない時これを見に来るんです

ぱつりとサコが口にした。

「あなたが夢にうなされてるつて噂に聞いて。いても立つてもいられない

れなくて」

「それで、ここに連れて来てくれたの？」

「はい。寝所を覗いて見て、ぐっすりお休みになられていたら、そのまま失礼しようと思つていたのですが、ひどくうなされていたか

ら。迷惑は承知でお誘い致しました」「照れたように、サコは頭を搔いた。

「気分転換も必要かな、と」

「サコ……」

自分のことなど、誰も気にかけていないと思つていた。何もわからず、寄る辺のなき場所に一人、放り込まれたと嘆いた。しかし、それは違つた。

少なくともサコは、ヤナギのことを察じてくれている。ヤナギは泣きそうになりながら、微笑んで見せた。

「ありがとう」

サコがヤナギに顔を向け、笑つた。飾り気のない、純粹な笑顔。八重歯の覗く彼女の口許は、みずみずしい生命の強さを感じさせる。サコは立ち上がり、空を仰ぐと、両手を広げた。

「月も星も、ヤナギ様が笑つてくれるんなら何でもあげたくなるなあ」

「まあ、サコつたら……」

二人は、顔を見合わせて笑い合つた。

『　　が笑つてくれるなら、月も星も、花も。俺の『えられるものならば全て、与えたくなる』

心をざわめかせる、誰かの声がする。

「こたびの戦には連れて行きましょうね。そなたがたくさんのこと
を学び、立派な巫になれるように」

あくる日、姫巫に追従することとなつたヤナギは、年配の巫たち
とともに高天原国の都より少し離れた邑を訪れていた。その集落へ
姫巫が出向いた理由は、いたつて単純だつた。黄昏国の者を匿つて
いるから。

姫巫は苛烈に邑を攻め立てた。事前に、邑へは視察に行くとだけ
伝えていたらし。丸腰の相手であるにも関わらず、高天原国が懷
刀は容赦なかつた。

「ああ……」

ヤナギは目の前で巻き起こる悲劇に、ただただ呆然と佇んでいた。
他の巫たちのように術を練ることもできない。炎に炙られて行く邑
には、悲鳴と泣き声、怒号が響く。

姫巫は口にした事象を全て具現化させる。彼女は逃げ惑う人々を
尻目に、ヤナギへ微笑んだ。

「ごらん、これがわたくしの力。人知を超えし、神力」

ヤナギは燃え盛る炎と逃げ惑う人々をじつと見つめていた。

（姫巫様は、恐ろしくないのだろうか）

散り散りになつていく人の命は、決して甦ることのないものだ。
それを彼女はいとも容易く散らして行く。決して、安らかな眠りは
訪れないだろう。人の怨念は強いものだ。ヤナギは赤い唇で真象の
力を揮う姫巫を案じた。

『嗚呼　　わたくしの後裔』

その時、ヤナギは生温い風を受けて目を瞑つた。まるで抱き込む
ように、風はヤナギを包む。

ふつと、何かがヤナギの中に入り込んでくる。

「だ、誰……。何、これ……」

『まさか、こんなにも無防備でいるとは 愚かしい。しかし、それすら……愛しい』

混乱する。

姿はないのに、声がする。脳内に直接響く霞みがかつたその声は、

哄笑した。

『海若つ。そなた、何を つ』

慌てたように姫巫がヤナギの手首を掴んで、呪いの詞を口にする。

体中が焼け付く。ヤナギは悲鳴を上げた。

姫巫の頬を、尖った風が切る。彼女はそれにはむことなく詞を続ける。ヤナギの中に入り込んだものは、その詞に動じず、ヤナギの意識を奪おうと牙を剥く。

「ヤナギ様?」

サコには一体何が起こっているのか、わからないようだった。幼い少女は、ヤナギと姫巫の顔を交互に見やり、おひおひしている。

『キヨウカ キヨウカ。わたくしに支配権を渡せ』

キヨウカ。その名を聞いた途端、ヤナギの抵抗する力が弱まつた。ヤナギの本当の名。

何故、声の主は自分の真名を知っているのだろう。疑問がヤナギの心全てを満たす。

一瞬の隙を、海若は見逃さなかつた。

かの神は、ヤナギの体の支配権を取つた。

姫巫の手が強い力によつて弾かれた。姫巫は月鏡剣を構え、ヤナギの首筋に据える。

ヤナギは口を『』形に歪めた。幼い子供が見せる表情ではない、嘲りの微笑。

『姫巫よ、わらわも少し、遊びたいのじゃ』

ヤナギの口より洩れ出た声は、彼女のものとは違つた。

姫巫の瞳に怒りが浮かぶ。

「馬鹿な……つ。まだ、その幼子はそなたの器として選ばれておらぬつ」

『この者は申し子。そちも知つてはいるだろう。生まれながらにして、わらわの器として選ばれた娘じや。兄の方は逃がしたが……この娘だけは決して逃がしえぬぞ』

言い終え、ヤナギの体を借りた海若は人差し指で民家を差す。すると、民家が跡形もなく消失した。

姫巫もサコも、絶句した。

後方に控えている巫たちは、それを姫巫がやつたと勘違いしてい るらしく、拍手が巻き起こる。

ヤナギは笑みを深くした。

『おお、姫巫や。そちに力を貸している時よりも強靭な力を操れる。やはり、申し子とは稀有な存在じや。……む』

ぴくりとヤナギは耳をそば立てる。そして、ゆつたりとした動作で邑の中を歩き出した。慌てた様子で姫巫とサコもその後に続いた。火柱の向こう側に、一人の少年が立つていた。整つた面差しをした少年は、自分の邑が燃えている様を脱力した顔で眺めている。ヤナギは、少年に向かつて手を伸ばす。

少年の耳が切り落とされる。彼は、その場に膝をつき、耳を押さえる。ヤナギは、にんまりと嗤つた。

ヤナギの唇が動く。熱い風が周囲に吹き荒れる。『じろり、と少年の目玉が彼の掌に転げ落ちた。

少年は、思考が止まつたような眼差しで、ヤナギを見た。猛る炎が、ヤナギと少年を遮つた。

『海若！ そなた……遊びが過ぎるぞー』

あまりに凄惨過ぎるその行為に、姫巫は止めに入る。

「わたくしに戻れ」と姫巫は言つ。

海若の体が傾ぐ。神は胸を押さえて荒い呼吸を繰り返し、姫巫を睨んだ。

『どうやら、まだこの娘はわらわを受け入れる力が備わっていないらしい……。良い、時を待つて……再び、わらわは申し子を貰い受けようぞ』

ヤナギの体力が限界に達した。熱い空気がヤナギから抜け出し、姫巫の中へ宿る。

姫巫は、自らの手を握りしめ、緩める。

どうぞ」という音とともに、サコは地面に腰を打ちつけた。魚さながら、口を開いたり閉じたりしている。腰を抜かしたのだ。

「…………サコ、このことに関して全てを秘めることができるか

「…………はい」

唾を呑み込んで、サコは頷いた。

姫巫は海若の力によって、より悲惨さを増した顔を見回し、苦笑を洩らす。

「場所を移そうか」

そう言って、姫巫は腰を抜かしたサコの手を取り、颯爽とその場を立ち去つた。

天幕内には、姫巫とサコの「人しかいない。姫巫が人払いをかけたためだ。意識を喪ったままのヤナギは、別の天幕で眠っている。彼女は、夜毎悲鳴を上げる。

「サコ、そなたはたしか、ヤナギの付き童をしていたね」

「ええ

「たいそう、ヤナギと仲が良いとか」

「は、はい。ヤナギ様はとても優しい方です。だから、私は、の方にずっとお仕えしたいと思っております」

頬を紅潮させ、サコは言つた。その顔に、言葉に、嘘は一切なかつた。

「ならば、頼みがある」と姫巫の瞳が真剣さを帯びる。

「…………人柱となつてくれないか」

突然の頼みに、サコの動きが止まる。

姫巫は視線を落とした。

「先程、海若 ヤナギに乗り移つたものが言つていたのを覚えて
いるか。時を待つ、と。かの神は、ヤナギの肉体が強くなり、自分
を受け入れることのできる時節が来たら、必ず、ヤナギの体を器に
し、自分の意のままに操る気だ」

「そんなこと、できるわけが

できるわけがない、と言い切れなかつた。サコは見てしまつた。
ヤナギの中に滑り込んだ何かは、ヤナギの意識を退けて民家を塵と
化し、少年の耳と目を抉つて見せた。背筋に寒気が走る。

「海若の思惑どおりにしてしまつと、全ての国は滅びてしまうだろ
う。それはとても不味いことだ。……何、人柱となると言つても、
そなたが死ぬわけではない。ただ、いつもヤナギのことを守る意思
を持つていればいいだけ」

「意思？」

ああ、と姫巫は天幕の天井を見やる。

「あいにく、わたくしは常にヤナギのことを念頭に置いて行動はで
きないのでね。そなたに頼みたい

サコは戸惑い気味に視線を彷徨わせ、小さく頷く。姫巫は目を細
めた。

「ありがとう。…………しかし、もしもそなたが、わたくしとの約束を
破り、意思を弱めたりしてヤナギが海若に乗つ取られるようなこと
があれば どうなるか、わかるね」

怜俐な姫巫の眼差しを受けてサコは肩を震わせたが、気丈にも「
はい」と歯切れよく返事をした。

姫巫は膝を打つて腰を上げた。

「それでは、わたくしはヤナギの記憶を塗り替えてくる。……決し
て、今日のことはヤナギにも言わぬよつこ。この戦場に来た記憶か
ら抹消するから」

「かしこまりました」

サコは平伏した。

ヤナギは声をなくし、口許を両手で覆つた。

「そんな……サコが……」

螺旋の花は揺らめき、何もない空間に舞う。一人だつたヤナギの前に影ができる。それは人型となり、幼い少女の姿となつた。彼女は何も言わずにヤナギを抱きしめた。

ヤナギは少女をきつく抱きしめた。涙が溢れる。

「サコ……そなたは、ずっと、私を……」

サコはすつと そう、死んでもなおヤナギを守つていたのだ。彼女にヤナギを守る意思がある限り、ヤナギは海若に支配されない。そして、ヤサカニの耳目を奪つたのはヤナギだつた。全ての真実は刃となつてヤナギの心中に深く突き刺さる。

場の空気が歪む。サコは、ヤナギから身を離した。ヤナギとサコの前に、先代姫巫が姿を見せる。

『わたくしは後悔なぞしておらぬ』

姫巫は、死の目前に見せた老婆の姿でなく、若々しい娘の姿をしていた。彼女は絹のように滑らかな黒髪を肩に零し、強い意志の射した双眸をヤナギへ向ける。

『そなたを姫巫に据えたことにも、危険だとわかつていながら海若という神に力を貸していたことも。そうしなければ、いけなかつた。何故だか、そなたは知つてはいるはず』

『……高天原国が、本来なら既に滅びた国だから』

ヤナギの言に、姫巫は目を伏せた。ヤナギは、拳を握りしめ、なおも言い募る。

「神に縛らなければ、この国は均衡を崩し、滅びてしまうからよつ。本当は、蜘蛛の廻廊だつて亞空間にある高天原国と、地上の国々を繋ぐ一種の黄泉路……。姫巫様、もう止めましょう。こんな愚か

な 縋るような生き方は……」

ヤナギは俯き、歯を食い縛つた。目の奥が熱く、今にも涙が零れ落ちそうだ。憎悪と怨念と、妄執。負の感情がヤナギを取り巻く。「高天原国は、死国。ふふつ、そうかもしれない。だが、守れ。ヤナギ、そなたにはわかるはずだ。どれだけわたくしたち、歴代の姫巫がこの国を愛し

「愛してなんかいない」

姫巫の言葉をヤナギは遮つた。

「先代や、先々代が愛していたのは、自分たちを守ってくれる、力を与えて他国を圧倒してくれる神 海若。この高天原国を愛していたのではない！」

「ヤナギ……そなた……」

怒鳴るヤナギを、姫巫もサコも呆然と見ていた。

「嘔吐き」

ヤナギは姫巫を潤んだ瞳で睨みつけた。

「皆、嘔吐きだ」

瞬間、サコが怯んだ。ヤナギの憎悪や悲哀に圧されたのだらう。守りが緩んだ。

姫巫はサコに手を伸ばす。

「いけない！ サコ、手を緩めるな！」

姫巫の叫びは一足遅かった。

場の空気が歪み、ぴしりと音がすると同時に熱い風が吹き込み、暗い海が流れ込んでくる。数多の白き手がヤナギを深海へ誘う。ヤナギの内側へ、海若が滑り込んだ。

甲高い金属音が響いた。

ヤサカニとカガミの剣がぶつかり合い、その度に高い音を立てて鳴る。

大剣操るカガミと、二つの中剣操るヤサカニとでは根本的に特性が違う。ヤサカニは小回りが利く点でカガミに勝っているが、一太刀の重さはカガミが勝っている。

ヤサカニは一本の得物を構え、腰を落とす。

体中が悲痛な叫びを上げていた。こめかみより流れ出でる血は止まる気配もない。段々、体温が冷えてくる。

「貴方がヤナギ様の兄……？ 御冗談を」

カガミは何も答えない。

ヤサカニは倒れるわけにはいかなかつた。

ちら、と後ろへ目を配る。カガミに斬られた御簾の脇に、一人の少女が倒れ込んでいる。少女　　ヤナギをカガミへ渡すわけにはいかない。ヤサカニは彼女のことを絶対に守ると決めたのだ。

たとえ、かつての主に叛こうとも。

血潮が熱く滾る感覚は、ただ憎しみに駆られて生きてきたヤサカニにとって初めて初めての経験だつた。

誰かを守るために自分は剣を持つている。そう思えば、不思議とカガミに対して臆する気持ちは霧散する。

ヤサカニは長い間、カガミと戦場をともにしていたため、カガミの実力が並大抵のものでないことは十分理解している。

だからといって、ヤサカニが彼に剣で劣るかと言えばそうでもない。カガミの剣の師は、ヤサカニの父なのだ。父の剣筋のくせとカガミのくせは良く似ている。打ち込んできたあと、半歩下がつて鋭く薙ぐ。そのくせは今も健在だった。

しかし、くせが分かっていると言つても、怪我を負つたヤサカニ

は分が悪い。

力ガミの剣捌きは濶みなくヤサカニを追い詰めて行く。

戦場でルイの毒針にやられた左腕がじくじくと痛む。それでも、ヤサカニは苦悶の表情などおくびにも出さず戦っていた。

一方的な戦いになつていいのは、一重に力ガミが生身の人間であつたからだ。

ヤサカニは戦場で見たムロの異様とも言える雰囲気を思い出し、身震とする。

何者も近寄ることを許さない空気を纏つた少年が手をかざすと、途端に稲光が高天原国軍へと落ちた。木造の家屋に雷が落ちたことで火の手が上がり、それは生きているかの如くヤサカニたちを包んだ。

前線にいた者で命があるのは、ヤサカニを含めてほんの数人だった。

せめて、富だけは守らねばと思つて奮戦したが、圧倒的な力の前に、人間であるヤサカニたちは無力だった。

ムロが神の力を使つているのは間違いなかった。幼い頃、ヤサカニにあつた力と少しだけ空気が似ていた。最も、自分にあつた力は非常に微々たるものであつたが。

ヤサカニは、ひゅつと息を吸い込んで力ガミに突撃した。

力ガミはそれを難なく流す。黄昏国の王子は、容赦なく剣をふるう。その様は鬼神のようだつた。

疲労や怪我があつたせいで負けた、というのは言い訳にもならない。

ヤサカニは双剣で一閃を受け止め、後ろへ飛んだ。

焰が轟音を上げて一人のいる部屋の前まで迫つている。早く片をつけなければ、ヤサカニも力ガミも、そしてヤナギも死んでしまう。一瞬の油断も見せない力ガミの態度を崩すためには何が一番有効か、ヤサカニは血の気が引いていく頭で必死に思案した。

そんなヤサカニを力ガミは酷く冷淡な眼差しで見つめる。

「お前の目と耳をもいだのは、キヨウカだ。それでも、底うのが
ヤサカニは迷いなく頷く。

「俺は最初から、彼女がそうだと知っていました。今更、何を躊躇
うことがありましょうか」

刹那、力ガミの双眸が揺らいだ。

ヤサカニは、ヤナギが自分の左目と左耳を持つて行つた者だらう
と何だろうと構わなかつた。

憎悪と愛情は常に紙一重だ。

深い絶望を舐めたのはヤサカニだけではない。同じように、ヤナ
ギも孤独とともに生きていた。

そんな彼女を救いたい。それしか頭にはなかつた。

以前のヤサカニが今の自分を見たら、一笑にふしただらう。

娘一人に自國を裏切るなど馬鹿な男だ、と。

ヤサカニは挑むように力ガミを睨みつけ、剣を構え直す。死ぬ氣
でからなければ力ガミに隙は生まれない。

ヤナギ様をこの王宮から逃がすまで命があればいい。

空の左目が熱い。何かが込み上げてくる。哀しく猛る感情の渦。
もう二度と戻れない、力ガミや仲間と声を上げて笑い合つた日々
が脳裏に浮かんでは消える。

力ガミは自嘲するように笑つた。

「ヤサカニ、俺はお前が心底羨ましい。それ故……」

一旦、言葉を切つて力ガミは全身から殺氣を放出させた。

「疎ましい」

力ガミは床を思い切り蹴つてヤサカニに斬りかかってきた。大剣
を振り上げた時、一瞬上半身が無防備になる。その隙をヤサカニは
見逃さなかつた。決死の覚悟で懷に飛び込み、心臓を狙う。力ガミ
は舌打ちして身を翻し、間合いを取つた。

ヤサカニの穴目の奥に宿つた熱が暴れ出す。少しだけ目がくらん
だ。

「もうじき、この宮は墜ちるぞ。生き延びたいのならば、ヤナギを

俺に渡せ

「断る」

にべもなくヤサカニはカガミの言を一刀両断した。

「ヤナギを……俺の妹を返せ!」

カガミの目に危険な色が浮かぶ。

隠し部屋全体が蒸し風呂のように温度が上昇していく。

炎は轟音を上げて目前に迫り来ていた。

一向に引く気配を見せないヤサカニと斬り結びながら、カガミは歯軋りした。

ヤナギがお前の耳目を奪つたのだ、と言えばヤサカニが簡単に迷いを見せるだろうと踏んでいたカガミは、予想外のヤサカニの行動に内心肝を冷やした。

ここまで強い口調でヤサカニがカガミを拒絶したことなどなかつた。

いつも、軍議の折や命令の決定などの意見が食い違つた時も、彼は『しようがないですね、カガミ様は』と苦笑しながらも譲つてくれていた。

そのヤサカニが、カガミの前に立ちはだかっている。

まさか、と思つた。

ムロたちやカガミとは違う方面から高天原国へ侵入したバショウが、涙で顔を濡らしながら語つたことは、到底カガミに受け入れられることではなかつた。

『ヤサカニ様が前線で高天原国軍を率いて采配を揮つている』

そうバショウから伝達を受けた時、カガミは声をなくした。

甘かつたと言わればそれまでのことだが、心のどこかで彼は決して黄昏国を裏切つたりしないと考えていた。最後はきっと黄昏国軍へ帰つてくると、信じていたのだ。

わずかな希望は潰え、失望の中、カガミは剣を揮つてここまで辿り着いた。

悲願であった高天原国殲滅の刻限は近い。

ムロは都の外で地祇の力を借りて自然を操つていて。いくら、高天原国が海若に守られていると言つても、現に人の器に乗り移つてない海若よりも地祇の力を借りたムロの方に分がある。

ヤサカニの白刃が煌めき、カガミに鋭い一閃を与える。

ゆがけの紐が取れた。カガミはそれを素早く拾うと、部屋のすみに体を寄せる。

じりじりと、警戒色を宿した黒髪の青年はカガミを追い込む。カガミの剣の師をしていた者の子供でもあるヤサカニに、一瞬でも隙を見せるのは命取りだ。

軍師だとしても、彼はれっきとした剣士として育て上げられている。ただ、常人より軍の采配が巧みだつたために軍師となつたに過ぎない。

ヤサカニと初めて会つた時から、カガミはこの三つ年下の青年に信を置いていた。いつ何時も、冷静さを見失わずに彼は正道を行く。彼はいつもカガミの影となり、付き従つてくれていた。それをどうだけ頼もしいと思っていたか、感謝の念を常に感じていたか、もうヤサカニには伝えられない。

地祇が海若に護られた高天原国^{タケミカツチノクニ}の都に雷を落とす。遠く響く雷鳴が、この国の終焉を示している。

「……ヤサカニ、戻れ」

これが最後の誘いだと思い、カガミはヤサカニの双剣を受け止めて呟いた。

「もう、無理ですよ。黄昏国^{カツラノクニ}が王子」

悲しげにヤサカニは目を細めた。眼帯をしていない彼の剥き出しになつた左眼孔の奥にある暗闇が、赤く蠢いて見える。

カガミは思わず不快感を露わに剣を弾き返した。

ヤサカニは不規則な呼吸を繰り返している。手を合わせてすぐに気がついたが、彼の左腕はほとんど機能していない。

どす黒い血が滴り落ちているところを見る限り、戦闘中に矢でも穿たれたのだろう。これ幸いとカガミは目を光らせる。

弱点を突けば、人間は誰しもそれを庇おうとする。そこで一気に片をつけてしまえばいい。

冷酷に、迷いなく結論を出したカガミは執拗にヤサカニの左腕を

狙う。案の定、彼は左腕を庇うために体を引く。

力ガミの目はヤサカニの首筋に向いていた。

せめて一瞬で終わらせることが、元主である力ガミにできる精一杯の情けだ。動脈を一薙ぎすれば、安穏とした死がヤサカニへ舞い降りる。

「終わりだつ」

大剣を思い切り横へ払う。ヤサカニの体がふつと消えた。

力ガミは足の脛に激痛が走るのを感じる。思わず苦痛の声を洩らすと、床に寝転がつた隻眼の青年と目が合つた。その口許には薄つすらと微笑が浮かんでいる。

眼帯の氷獅子。その名に相応しい、冷静な判断力。

獅子は決して逃げない。不利だと知りながら樂に死のうなどと考えない。

ヤサカニは己の体から力を抜くことで、力ガミの渾身の一撃を避けたのだ。

力を抜く。それは常であれば戦の上で最もしてはならないことである。しかし、先程の状況下では一番正しい判断だった。床に倒れ込むことで力ガミの剣から逃れたのだから。

力ガミは怒りに身を戦慄させた。

ともに戦場を駆けていた頃は気がつかなかつた。この青年が、ここまで自らと対等に渡り合えるということを。

いつも、訓練の合間や遊び半分で手合わせする時、ヤサカニは勝ちに行こうとしていた。

今思えば、力ガミの剣がもつと磨かれるようにと心を碎いてくれていたのだろう。彼と手合わせする度に力ガミは新たな剣法を学べたし、太刀筋も整つていった。

力ガミの大剣が宙を舞つた。乾いた音とともに剣がヤサカニの後ろ側へ滑つて行く。

ヤサカニは無表情で力ガミの前に立ち塞がる。だらりと下げた左腕が痛々しい。彼はこめかみから溢れる血を拭いもせずに右手に握

つた中剣を力ガミへ突きつける。

（俺は、こいつに負けるのか）

生まれて初めて、力ガミは心から負けたくないといつ思いに駆られた。

両手を握りしめ、爪を掌に食い込ませる。強い力に皮膚が破けて血が滴る。

何とか状況を打破できないか考えていると、ヤサカニの殺気が緩んだ。力ガミはいきなりのヤサカニの変化を怪訝に思いながらも、好機だとばかりに前転して己の剣を手に取つた。柄の部分についた玉が揺れる。

屈辱を果たさんと力ガミは大剣を振り上げるが、呆然と一点を見据えるヤサカニを不審に感じ、その方向を見た。そして、力ガミもまたヤサカニと同じように目を丸くする。

けたけたと、手を叩いてヤナギが笑っていた。幼子のように明るい笑顔。紅を引いた唇だけが彼女を大人びて見せる。きやらきやらと口許に手を当てて、腹を捩つてヤナギは笑い続ける。

繫縛した霧囲気の中、よろよろとヤナギが立ち上がる。

力ガミはじつとヤナギを見つめる。

力ガミもヤサカニも、彼女の霧囲気がいつもと違つことに気付いていた。

何か禍々しい。

力ガミはヤナギの異常な行動と顔つきに思い当たるふしがあり、舌打ちする。

神降ろしだ。ヤナギの行動や笑い声は、遠い昔聞いた海若のものと非常に酷似していた。あの時の記憶を、力ガミは忘れることなどできなかつた。身の毛も竦立つ、恐怖と怒り。神々を呪い、初めて自らが傀儡でなくなつたあの日。

しかし、まさかヤナギが神降ろしをするとは思わなかつた。いや、海若が無理矢理ヤナギの中へと滑り込んだのだろう。

「……ハルセ、兄上……」

ヤナギはカガミを見つめて、滂沱^{ぼうとう}の涙を流した。

カガミの心が波打つ。純粋な涙を零す娘は、ヤナギの顔をしている。カガミは向けたくない剣をヤナギへ向ける。彼女の目に喪失が浮かんだ。兄とわかつた青年から刃を向けられた悲運の少女。そうとしか思えない青ざめた顔をしたヤナギは、俯く。

ヤサカ一は、カガミの前に立ちはだかる。彼はヤナギを守る気なのだ。

きっと、神に操られているのを気がついていない。

ヤナギの顔つきが変わる。いたいけな少女のものから、魔性の女の顔へ変化する様は、見ていて背筋が凍る。

八章 沙漠くびょうぼうの大地

涙はもう枯れた。

カガミは、己の目の前にいる者たちを見据えた。

ともに苦難の道を歩む覚悟を誓い合った隻眼の従者は、カガミに對して双剣を構えている。

全てを思い出した最愛の妹は、従者の後ろで虚ろな目をしている。

「……殺させません」

「ヤサカニ」

名を呼べば、従者の肩がびくりと震えた。

カガミは自分の声が酷く冷えているのに気付きながらも言葉を続けた。

「姫巫は、いてはいけない」

ヤサカニは、カガミの発言に果敢にも立ち向かってきた。

「わかつています、わかつていますとも」

意外なヤサカニの返答にカガミは心底驚いた。ヤサカニはきつく瞼まなじりを上げて叫んだ。

「そんなこと、貴方に言われなくともわかつてている！ だが、畏まりましたと言えるほど、俺は出来た人間ではありません！」

ヤサカニの頬に一筋の涙が走る。

カガミの構えが一瞬解ける。

隻眼の従者は震える声で言った。

「俺は、姫巫を愛してしまった

炎が空高く舞い上がった。

「だから、貴方を殺します

そう決然と言い放った彼は、カガミが今まで見てきた誰よりも覇氣を宿していた。

火の手が幾分か緩む。

ヤナギが目を開けた瞬間、まるで外部から部屋一面が切り離されたような不安定さを、ヤサカニは感じた。熱風が髪を煽っていたはずなのに、今はぎんやりとした冷気が垂れ込めていた。

（とにかく、ヤナギ様をお守りしなければ）

従順にヤサカニはヤナギを背に庇い、殺氣の籠もつた目をした力ガミの前に勇み立つ。

力ガミの眼孔はヤナギへ向いている。ヤサカニは双剣を握り直し、床を蹴つた。はつとして力ガミはヤサカニの刃を受け止める。余裕の感じられない力ガミの守りに転じた剣はとても脆い。ヤサカニは力を込めた。力ガミの顔が歪む。

力ガミは舌打ちして横へずれた。

金属音が何度もぶつかり合う。ぎりぎりと身を絞るような音を立てて一人の剣は交叉する。

「キヨウカ……！ 意識をしつかり持て！」

力ガミは打ち合いながらも、必死にヤナギを正気に戻そうとする。ヤサカニはヤナギを垣間見た。

自らの兄である力ガミの言葉も届いていないのか、ヤナギの目は虚ろなままだ。

何がが 神が彼女に乗り移ったのかかもしれない。有り得る話だ。姫巫という戦女神を加護している神ならば、ヒト一人の体を乗つ取ることなど容易いだろう。しかし、それを案じてヤナギへ駆け寄ることはできない。力ガミからヤナギを守ることが先決である。

力ガミは、ヤナギを殺す気だ。間違いない。ヤサカニは、かつて力ガミが仲間をも見捨てようとしていたことを思い浮かべ、唾を嚥下した。目的達成のためには、小さな犠牲を厭わない。そのことを

彼に教え込んだのは、戦死するまで筆頭軍師を務め上げたヤサカ二の父親だった。

ヤサカ二は、よく思想の相違から父親と口論した。ヤサカ二は小さな犠牲を払えば、のちのちそれが大きな火種になると思っていたし、その考えを曲げるつもりは毛頭なかつた。

王位に値しない人間だからこそ、そのような言を吐けるのだと激昂した父親の厳格な形相を思い出し、ヤサカ二は父と、眼前にいるカガミとを重ねた。

今なら、少しだけ理解できる。自分の命がなくなつてしまつたら、どうしようもないのだ。命の重みは皆一緒だと識者たちは説くが、それは違う。カガミとヤサカ二の命の重みは、違う。カガミの代わりとなれる者は決して存在しないのだ。生まれ落ちた時より王となるべく定められた者 その者に誰がなり代われようか。地上の国々から戦に臨んでいる者たちは、誰しもカガミの名を口にする。死ぬわけにはいかないのだ。カガミの命は、もう既に彼自身だけのものではない。何百……いや、何千の人の中もある。

高天原国が姫巫を何より大切に扱っているのと同じだ。地下の国々の者たちも、国ではなく、カガミ自身を寄る辺にしている。

妹であるヤナギと、小さき犠牲の一つだろう。胸の底では深く悲しむだろうが、カガミは迷わない。きっと、ヤサカ二が引けばすぐにもヤナギを殺す。

ヤナギが何の力も持つていらない少女だつたら、事態は変化したに違いない。いたいけな身よりなき少女であれば、カガミは黄昏国へ連れ帰り、大切に慈しみ妹姫をかわいがつたろう。ヤサカ二はカガミが高天原国に潜伏していた頃、彼が時折見せるヤナギに対する言動や行動がとても優しかったことを覚えている。珍しいこともあるものだと傍観していたが、まさか血を分けた兄妹だとは思いもしなかつた。

カガミは、ヤナギのことをとても大切に思つてゐるのは確かだ。しかし、それを差し引いても高天原国が懐刀である姫巫に沙汰を下

さないのは今後、黄昏国を復興するに当たつて障害になるのは必至である。姫巫がいれば、この戦は終息しない。

のちに、牙を剥くかもしない火種を残す危険を孕む者の生存を、力ガミが許すわけがなかつた。

高い鈴の音に似た音がぶつかり合う。ヤサカニは髪を振り乱しながら、目と鼻の先にいる力ガミを睨んだ。

「ヤナギ様は、殺させませんっ」

「お前、まだ言うか！」

怒号を上げ、怒りに満ち満ちた顔で力ガミは猛攻を仕かけてくる。どこにそれほどまでの力を温存していたのか疑問に思うくらい、彼は鮮やかにヤサカニを壁へ追いやる。溢れんばかりにふくらんだ気迫が、ヤサカニを劣勢へと押す。

そのまま壁を突き破らんばかりに渾身の力を込めた一撃を何とか受け止めた。手が痺れる。ヤサカニの右手から中剣が零れ落ちる。力ガミは激しく打ち込んでくる。何とかもう一方の中剣で白刃を受け止めたが、もともと強度のある剣ではない。どちらかと言えば、ヤサカニの持つ技巧を生かせる造りをした剣なのだ。力ガミの相次ぐ強打にずつと耐えきれるわけがない。

鉄で鍛えた剣であれば問題なかつたのだが、鉄剣は高価過ぎてヤサカニにはとても手が届く代物ではなかつた。

ヤサカニは右手を刀身に添えて、力ガミの攻撃をじつと耐える。きっと、この銅剣に亀裂が入つた時が唯一の形勢逆転の機会だ。力ガミはその時、己の勝利を確信して少しだけ隙を作るはず。もし、機会を逃す もしくは機会自体訪れなかつた場合、確實にヤサカニは死ぬ。

ヤサカニは、どうにかしてヤナギだけでも逃がせないかと様々に筋書きを脳内で構築する。

（力が欲しい。ヤナギ様を守れるだけの力が）

（ヤサカニは切に思つた。

自分は無力だ。

手負いの自分ではヤナギを守り通せない。かと言つて、自分以外が力ガミに相対せるかと言われば、答えは否だ。

ヤサカニは歯軋りする。ぽつかり穴の空いた左眼孔が熱い。思わず搔き鳩りたくなる。

（どんな代償も厭わない。楊様をお守りすることができるのは）

願いにも似た強い想いがヤサカニの全身に脈打つ。

それと同時に、閃光がヤサカニを包んだ。あまりの眩しさにヤサカニも力ガミも目を瞑る。

『 良いだらう青草よ。ひとときのみ、我はそちに少しだけ力を貸そうぞ』

重々しく低い声がヤサカニの右耳に囁いた。それは偉大な父の如く、何事にも動じない安心感を覚える声だつた。

左目に異物感が走る。鋭く走った痛みにヤサカニは片膝をつく。ヤサカニは恐る恐る左目に手をやつて、当惑した。いつもなら平らな感触であるはずの左眼孔に、田玉がある。田を開けば、いつもに比べて格段に視野が広い。

閃光が收まり、目を開けた力ガミもヤサカニの様子を見て驚愕の表情を象る。飛び上がるんばかりに驚いただらうに、彼はすぐに自分を取り戻して剣を構え直し、ヤサカニへ剣を向けた。不思議なことに、ヤサカニは彼の攻撃を難なく交わすことができる。

見えるのだ。幼い頃に見ていたのと同じ光景が。小さき神々の姿が見える。そして、瞬きする度、映り込むのは一瞬先に起ころる未来の光景。

力ガミの取るうとしている行動全てが、ヤサカニには手に取るようになつた。

（勝機が見えた……っ）

唇を白くなるまで強く噛みしめる力ガミを前にして、ヤサカニの両手に希望の光が宿つた。

力ガミは半ば茫然としてヤサカニの変貌を見ていた。

舞い降りた白き光は火柱のようにヤサカニを包み、数刻経つて跡形もなく消失した。

眩さに目を開けていられず、強く瞼を閉ざしている間に何が起つたかはわからないが、ヤサカニから発せられる神々しい空氣に力ガミは息を呑む。

神降ろしが、力ガミの眼前で一度も行なわれた。

その事実に歯噛みする。

ヤナギは自我を海若に奪われており、ぼんやりと虚空を見つめている。海若は依坐^{よりまし}を傀儡^{カマクラ}とすることを望んだのだ。対してヤサカニは、完全に自らの意思があつた。ヤサカニに力を貸した神は気まぐれに彼の意思を尊重したのだ。彼の場合、完全な神降ろしとは言い難い。ムロが神降ろしをする様を近くで見ていた力ガミには、その微細な違いを察することができる。ヤサカニに宿つた力は不完全なものだ。ヤサカニががむしゃらに打ち据えてくることを見るに、姫巫やムロがして見せたような自然事象を操るという芸当はできないようだつた。

力ガミはヤサカニの切れ味のある攻めに苦心した。銅剣のはずであるヤサカニの剣が、鉄剣を圧倒する。腕力から違つた。しかも、手負いとは思えない俊敏さをヤサカニは手に入れていった。不完全とは言つても、まさしく神の力。いくら剣の腕が立とうが、常人である力ガミにヤサカニと同等に渡り合つことはできない。

『……力を貸そうか』

頭の中に声が入り込んでくる。

地祇^{ちぎ}の声だと瞬時にわかつた。力ガミは答えない。目前に迫るヤサカニと刃を合わせながら、自分の考えを先読みしてくる彼に対抗するためにどんな手段を使おうか、と思案していた。

いっそ、左手を切らせて意識を朦朧とさせて、自分でも何も考えず行動を起こしてみようか、とカガミらしくも無い無謀な策が浮かぶ。

『高天原国^{タケミカツチノクニ}の都は完全にそちらの手中に墜ちた。我がムロからそちに身を動かしても、劣勢になることはなかひつ』

なおも地祇はカガミに語りかけてくる。

カガミは、神降ろしだけは行ないたくなかつた。幼い頃の出来事が、神を拒む。だが。

ヤサカニの左目は瞬きもせずに絶えずカガミ凝視している。昔、ヤサカニは全てを見通す左目と神々の声を聞くことができる左耳を持つていたと彼の父から聞いたことがある。

今、ヤサカニに宿つた神の力は左目に凝固しているのだろう。黒曜石のように艶めいた左目が、一国の王子として厳しく恐れを感じぬよう育てられたカガミでさえも足を竦ませた。

善灯村を訪れた折、サブライに言われたことが脳裏にひらめく。神降ろしを行使しろ。されば、老いを代償にして神の力が手に入る。

カガミは神の力を得たことで不幸になつた者たちに、思いを馳せた。ヤナギ、姫巫、そして、己の実弟・ムロ。彼らはもう自然な形での死を享受できない。神の力が宿つた武器によつて死するほか、方法はない。

一瞬逡巡したが、カガミは口を一文字に引き結び、声に出さず地祇に答えた。

(力を)

床が軋み、大地が意思を持つたように唸る。ヤサカニの剣舞が止まつた。地祇の気配を感じているのだ。

カガミはふと笑みを洩らした。ここに、三神が集おうとしている。古代史に書かれた神々の戦。彼らはそれぞれの領域を侵したがらない。神と神とのぶつかり合ひは、全てを無に帰するほど壮絶な戦いとなる。

今、ヤサカニに手を貸している神が何なのかカガミには皆目見当がつかないが、地祇や海若でないことは確かだ。しかし、辺境の地に住まう小さき神々のような力なき神ではないだろう。既に海若がいるにも関わらず場に姿を現し、力を貸すということは力ある神でないとできない。それも、海若と同等か、それ以上に力を持つ神でなければ。

その神の力を借りたヤサカニと戦うのだ。カガミは己の死を覚悟する。

稲穂の擦れ合う匂いが鼻孔をくすぐった。

金色の淡い光彩がカガミの中へ飛び込んでくる。手足が震えた。カガミは自身の意思とは関係なく、胸元を押さえて背を丸め、声を上げた。

大地が咆哮を上げる。

神々の戦は始まった。

雷鳴が轟き、大地が揺れた。

ムロは、頭できつく縛つた長い黒髪をはためかせて宮を振り返った。

貧困街にある丘上にいたムロは嫌な空気を感じて顔をしかめる。自分の体内から地祇の力が抜け出て行く。かの力が宮内へ向かったのを感じた。地祇の力は完璧にムロからカガミへ身を移した。ムロは親指を噛み、ヤナギがいると思われる宮殿を、苦しげに見据える。

地祇がカガミに力を貸す理由はただ一つ。申し子であるカガミが窮地に陥っているからだ。ムロは高天原国軍と戦っている最中に感じた不穏な気配が宮に集中しているのを感じる。地祇以外にも、地表に降りた神がいるのだろう。

ムロは高天原国を捨てた己にヤナギを案じる資格はないと思いながらも、瞑目し、ヤナギの無事を祈った。

「ムロ指揮官、捕縛した高天原国軍の奴らの処遇、どうする？」

後ろから声がかかる。凜とした女の声が、ムロをヤナギへの想いから戦の現実へと引き戻した。黄昏国から先陣を切つて進んできたムロの部隊が、強行軍であつたにも関わらず、誰一人としてくじけずここまでこれたのは、この女 副指揮官を務めるルイのおかげだった。彼女は自らの疲労や不安を押し潰して皆を励ましてくれた。ルイの笑顔は太陽のように暖かく、見ているだけで元気が出ると誰もが口を揃えて言う。

神の力を揮うムロは、慣れない自らの力に戸惑いつつ戦場を駆けて兵たちへ激を飛ばしていた。時に、眩みそうになる意識を必死に覚醒させて死ぬような思いで都を陥落させた。宮内にいる台王や王子、ヤナギたち巫のことはカガミに任せた。もとより、その手筈でこの国へ乗り込んだのだ。

高天原国の最期を飾るは、？神の腕？。

ムロは、高天原国軍と相対した時の彼らの顔を思い出した。苦渋が胸を満たす。誰もが、ムロに剣を向けて裏切り者と罵倒した。中には、西門軍の者の中には、ムロを前にしてがっくりと腰を碎き、自らの首を差し出す者もいた。

ムロが捨てたのは、高天原国武官長という軍の中でも抜きん出た地位だけではない。自らを主と慕つた者たちをも捨てたのだと思いう。 知る。

「……指揮官」

苛立たしげな口調でルイが再度呼びかけてくる。

「処遇はカガミに決断してもらう。逃亡したり、自害しないようにはしつかり縛つて見張りを置いておけ」

そう答えると、ルイは心得たとばかりに頷き、捕虜のいる方へ駆けて行つた。

「いいか、カガミが戻つてくるまでに一般人は保護して蜘蛛の廻廊へ連れて行け。我らに牙を向けてこようと、決して傷つけるな。傷つけた者は、それと同じ傷を俺が与える。敵兵もできる限り捕虜に

しろ

「はつ」

ムロはヤナギを助け出したい想いを抑え込み、近場にいた兵たちに指令を送る。ここでヤナギを守るために身を翻すわけにはいかなかつた。

ヤナギの願いを叶えるためには、高天原国を滅亡させるしかない。力ガミたちを助け出した、あの火事の時、彼女はムロに言った。救つて。神などいらないの。姫巫の呪から私を解放して、と何度も何度も、私は願つてきた。

彼女は、絶えぬ戦を心より憂いでいた。自らが姫巫という立場にいることを厭うていた。彼女は、望んでいた。姫巫がいなくなることを、切に望んでいた。

あの時、ヤナギの心の声を聞いたのは自分だけだ。彼女の願いを聞き届けることが、ヤナギを守ることになるとムロは自らを慰める。（ヤナギ様、高天原国さえ滅亡すれば姫巫は存在意義をなくすはず。あなたの願いは、叶います）

ムロはヤナギの存命を望んでいた。しかし、それを敢えて力ガミに伝えはしなかつた。決断を下すのはムロではなく、力ガミ。たとえ、ムロが黄昏国の第二王子だとしても、正當な王位継承者である力ガミに個人的な意見など述べることはできない。

ヤナギの微笑が瞼の裏に映り込む。柄にもなく、動搖した。

感傷に浸るムロの横に、ルイが並んだ。捕虜の対処を他の兵たち指示し、ムロのもとへ戻ってきたのだ。高天原国へ潜入していた折、薄茶の髪を黒くまだらに染めていた短い髪は、だいぶ伸びて肩につくまでになっていた。毛先は方々に跳ね、収まりがない。彼女は強行軍の途中、よくムロの髪を恨めしそうに見つめて嘆息した。力ガミ様と同じ直毛のあんたが羨ましい、と。蜜色の薄い目がムロを射抜く。

まるで、彼女にヤナギを慕う己の浅ましい心を見透かされたような気がして、ムロはルイから視線を外した。

ルイは傷付いたように顔を強張らせる。彼女は俯き加減で、呟いた。

「あたしの顔は、見てられないくらい醜いの？」

男勝りなルイの殊勝な声色に、ムロは驚き目を見張った。

「いや、そんなことは」

「……そう。なら良かつた」

へへつとルイは鼻をこする。その態度が、心に負った傷を無理矢理隠す仕草にムロは感じられた。ヤナギも心が折れそうになる時ほど、強い言葉を吐いて己を自戒していた。

ムロは改めてルイの顔面を見て、どうして彼女が視線を逸らしたことを感じたのかわかった。額に残った裂傷のせいだ。忌み部屋で兵たちから受けた傷は、彼女の額にしっかりと刻まれている。一向に薄くならないそれは、女の身として呪わしい証だろう。なのに、ルイはそれを隠そうとしなかった。これはカガミ様を売らなかつた誇り高き傷なのだと高らかに言い、黄昏国の皆を感心させた。

だが、彼女が傷付いていないわけがないのだ。

ムロは考えなしの己の行動を反省する。

「すまない」

思わず謝罪の言葉を口に出すと、ルイはムロの背を優しく叩く。

「何謝つてるんだよ。あたしが変に気にしてただけなんだから、あんたは気にしなくていいの。それより、ほら見て」

ルイが空を見上げて口角を持ち上げる。黒と藍が混じる夜空の奥が、薄く赤まつていた。都を包む炎の色ではなく、優しいまろやかな赤。

「宵の明星が光を放つて」

燃える都の真上には、夜明けを告げる星が一つ、瞬いていた。

陽炎が揺らめく宮殿の奥部に、一人の青年が倒れていた。神の加護を受けて奮闘したヤサカニは、神降ろしを行なつた力ガミの前に敗れた。神の力を借りただけのヤサカニと、神を身に降ろし器となつた力ガミの力の差は歴然としていた。それでも、ヤサカニは体の自由が効かなくなるまで双剣を振るつた。

ヤサカニは、弱々しく顔を上げて睫毛を震わせた。火の粉がヤサカニの視界を横切る。最早、起き上がる力もなく、彼は薄目を開けて手を伸ばした。その先にいる少女は、薄い笑みを浮かべて焦点の合わぬ目を彷徨わせていた。空虚な瞳が瞬いた。

少女に朽葉色の髪をした青年が近づく。それを見た黒髪の青年は、

「ヤナギ様、お逃げください」

と声を絞り出すが、少女は逃げない。その瞳は真撃に朽葉色の髪を持つ青年　　力ガミを見つめた。

「キヨウ力を返せ」

ひたとヤナギの首筋に力ガミは剣を向ける。

ヤナギの意識を乗つ取つた海若是、けらけらと不気味な笑い声を上げる。

「そなたに我は、倒せぬ。申し子に宿つた神を破ることができるのは、神剣のみ。そこに伏した男は神の加護を拝借しただけだったから、倒せたのじゃ。……わらわは、キヨウ力の中に宿つてある。そのなまくら刀は効かぬぞ」

力ガミの眉が撥ね上がる。

ヤナギの体を操る海若是笑んだ。その笑みは俗世離れした、恐怖さえ誘う美しさがあつた。

「悲しいものよ。そなたとキヨウ力。実の兄妹が争つさまは、海若是世を憐んでいた。

遙か昔、人間の手によつて壊された高天原国。それを加護してい
た海若は、國を懸命に現世へ繋ぎ止めようとしていたのだ。なのに、
自らが力を与えた氏族 台王は、それを自ら壊そうとする。戦を
起こし、國を肥やすことしか考えない。もう、自分たちの國が滅び
ているとも知らずに、彼らは増長していった。

腹立たしく、やるせなかつた。

しかし、海若は現世に於いて無力だつた。神世と違い、現世に神
が直接介入することは許されていない。古の盟約がとても口惜しく、
海若是それこそ氣の遠くなるほどの年月を自らの力を存分に揮える
存在の誕生を待つていた。

わずかながら海若の血脉しむを受け継ぐ一族 姫巫の一族の体へ乗
り移り、真の申し子が産声を上げる刻限をじつと待つていた。
そして、海若是二人の子供を見つけたのだ。

ハルセとキヨウカ。

姫巫の血脉を受け継ぐ、まぎれもない申し子だつた。兄のハルセ
は、黄昏国を加護する地祇の器としても存在していたため、おいそ
れと手を出せなかつたが、キヨウカは別だつた。少女は海若を身に
宿すことができる唯一の存在。

海若是狂喜した。キヨウカの体を手に入れられれば、この世全て
を無に帰し、全てを新たに作り直すことができる。

幼い時分には神を体内に宿し続けることはできないが、大きくな
れば体に負担をかけずに宿せるだらうと思い、海若是心躍らせてい
た。

なのに、何を思ったかキヨウカの祖母に当たる姫巫は、海若がキ
ヨウカの身の内へ入ることができぬように入柱を置いた。入柱とな
つた付き童 サコの、キヨウカに対する思いは深く、強く。海若
は一寸の隙をつくことも憚られ、手をこまねいていた。

それが、今。こうしてキヨウカの体を得ることができた。

海若是両手を広げて妖艶に目を細めた。目じりに引かれた紅い線
が見えなくなる。

「この地はわらわの領域。いくら地祇を身に宿していたとて、わらわに打ち勝つことはできな」

言葉が止まった。

カガミが腰帯に差していた黒々とした鞘を海若へ突き出したのだ。ゆっくりと、彼は鞘から剣を抜く。柄に刻まれた拯済の花と竹林の絵が海若の双眸に映る。柄の端に青い玉が嵌め込まれていた。海若の頬が引き攣る。

すっと引き抜かれた抜き身の白刃は、月を思わせる。波打つ刃は波紋の如く、揺らめいていた。

「剣が耳をつんざくような高い音で啼いた。
月水鏡剣……」

脱力した口調で海若が呟く。

昔、自らの神力を込めた剣を姫巫の一族へ贈った。剣は月水鏡剣と呼ばれ、神聖な神の秘宝として丁重に扱われた。それは代々、鏡月池に沈めており、戦や神儀の折にのみ使われていた。

「何故、そちがそれを……」

問う海若に、カガミは酷薄な笑みを送った。

「理に逆らつて存在するものなど、空しいだけ。キヨウカも薄薄そう感じていたはず」

彼は決然とした表情で海若を睨み据える。

「海若よ、しばし常世へ帰つてくれ」

「この体はヤナギのもの。切れば、こやつは死するぞ」

海若是必死の形相でカガミに叫んだ。そう言えど、己の妹可愛さにカガミの剣が下ろされたと思ったのだ。しかし、カガミは剣を握る手を微動だにしなかった。

カガミはひと思いに、剣を薙いだ。首の動脈が掻き切れ、血飛沫が噴き出す。返り血がカガミの顔や体にかかった。世を引き裂くような絶叫が上がる。

ヤナギの体が傾ぐ。カガミの手から剣が滑り落ちる。乾いた音を立てて剣の切つ先が床と衝突する。白刃には、血の一滴さえついて

いない。

カガミはヤナギの体を抱き止めた。

ぱうっと淡い光とともに、ヤナギの中から何かが抜け出して行く。

光が宙を舞つた。

「……申し子よ、何が望みだ」

光はカガミに訊いた。

「高天原国からの解放を」

何を、とは敢えてカガミは言わなかつた。

海若是咲笑の渦の中姿を消した。

薄い意識の中で、ヤサカニは動かなくなつたヤナギを支える力ガミを見た。彼女を見つめる彼の瞳は、揺れていた。

膨大な神の力を完璧に操つた力ガミ。彼の圧倒的な精神力に、ヤサカニは素直に尊敬の念を抱いた。

ヤサカニはうつ伏せだつた体を仰向けに直し、自分に力を貸してくれた神に胸中で礼を言つ。ヤナギから出て行つた海若と同じように、ヤサカニの中から小さき光が姿を現す。その瞬間、左目の視力がなくなる。ぼろぼろの自分に手を貸すのは、神にとつても複雑だつたろう。

静かに、ヤサカニは涙を流した。何より、ヤナギを喪つたことの方が彼にとつて大きかった。もう、ヤナギはこの世から姿を消したのだ。

守れなかつた。

ヤナギも、そして 力ガミも。

実の兄に殺された妹と、実の妹を殺した兄。

二人の心を救えなかつた力なき自分に不甲斐なかつた。

体は限界点を越えている。息もつけない。折れた肋骨が肺に突き刺さつているようだつた。

(叶うならば、どこまでもヤナギ様にお供できるよう)
決してヤナギが一人にならないよう、ヤサカニは祈りつつ瞳を閉

じた。脳裏によみがえるのは、ヤナギの壊れそうな笑顔。

「あなたと、このまほろばで出会えたことに感謝する」

その言葉を最期に遺し、ヤサカニは息を引き取つた。

ヤナギは深い闇の中にいた。ここが常闇洞泉だと気がついたのは、前に力ガミと二人でこの道を辿つたことがあつたからだ。

後ろの方から滝がとうとうと落ちる轟音が響いてくる。引き返すこととは叶わなかつた。死者の黄泉路であるここから、生者の住まう領域へ逆上ることは不可能だ。生きているのならまだしも、ヤナギは既に死んでいる。

ヤナギは自分が力ガミに殺されたのを知つていた。彼女の他にも幾人か鍾乳洞の奥部を目指す人の姿がある。彼らの体は透けており、うつすらと発光する水晶の光に淡く照らされている。

怖くなどなかつた。

「これでいい」

ヤナギは眩き、緩やかな風が吹き込む常闇洞泉の出口へ足を進めた。

「ヤナギ様」

声がかかる。横を見ると、ヤサカニがいた。ヤナギは微笑んだ。
「ほら、一人ともさつさと歩いて。あとがつつかえてるんだから」「どこからか、憤然としたチズコの声がする。じん、とヤナギの胸を温かなものが満たした。

生きている時に踏み入れた常闇洞泉は、恐怖の象徴でしかなかつた。しかし、死後の人々には安らかな光を感じさせる。

再び現世に生まれ落ちるための、道。

そう思つた。

ヤナギとヤサカニは、チズコの声をたよりに黄泉路を下る。

。

ヤナギは振り返つた。

自分を繰り返し呼ぶ、哀しい声が聞こえてくる。鍾乳洞内を反響し、涙に滲んだ声は更に歪む。

ヤナギは常闇洞泉の入り口から洩れる光に向かつて、花が綻ぶようになんで見せた。

「見渡す限り広がる大地は、貴台の前にある。どうか、高天原國のぶんまで皆が幸せである國を」

ヤナギを抱きしめていたカガミの頬を、一筋の涙が伝った。

炎に巻かれた高天原国の宮殿は、ついに大きな音を立てて崩れ落ちる。一旦、一か所が崩れてしまえば、あとはなし崩しに壊れて行く。

ムロは、いまだ宮から姿を見せないカガミを、今か今かと南門で待っていた。しかし、逃げ出してくるのは高天原国軍や宮ばかりで、その中にカガミの姿はない。

まずいと思つたムロは、頭から水を被る。

都に住む者たちの大半は、蜘蛛の廻廊より地下へおろした。

神をなくしたこの国は終わるのだ。

國の滅びる音がすれば、嘘だとのたまつ者も信じて蜘蛛の廻廊へ来てくれるだろう。ムロは、他の廻廊に待機中の者たちの采配を信じて、指揮官をルイに託して、単身王宮へ飛び込んだ。

火の海は深い。

神力の大きさを物語るように、燃え盛る炎は高く渦を巻く。きっと、カガミは台王のいる寝所付近にいるだろうと当たりをつけたムロは、懸命に記憶の糸を辿り、焼ける宮中を奔走した。

ようやく、寝所らしき部分に足を踏み入れる。謁見の間ほど焼けてはおらず、まだ抜け出そうと思えばすぐにでも逃げられそうだった。

た。

寝所の奥間に来たムロは、ぐるりと目を見張った。

まず、クルヌイの最期が目に入った。その死に顔は、すべてを悟つた安らかさを感じさせた。ムロは自分が武官長になつた時、本当に心から喜んでくれた優しき王子の横へ片膝をつき、黙祷を捧げた。台王の遺体もあるかと思つて近くに目を配るが、彼の遺体は見つけられなかつた。

ふと、ムロは奥間の飾り棚の横に、不自然な觀音扉を見つけた。彼はその扉を用心深く、ゆっくりと開ける。

戻が仕掛けられていないか、まず懐刀を部屋へ投げ入れてみる。反応はない。扉に身を寄せたまま、覗き込んだ。ムロの目に飛び込んで来たのは、無惨に裂かれた御簾がかかった上座だった。真っ暗な室の四隅には燈台が儚い灯を揺らしている。

上座のわきに、黒髪の青年がムロの方を向いて息絶えているのが見えた。愕然として、ムロは室内へ滑り込む。

黒髪の青年は、ぼろぼろになつて死んでいる。ムロは思わず呼吸を忘れた。彼の名を、ムロはよく知っていた。

ヤサカ二だ。

カガミの腹心だった彼は、高天原国軍の防具を身につけ、死んでいる。彼は、最後までヤナギを守るうと奮戦したのだ、とムロは苦い気持ちを抱いた。

ムロの足許に何か転がっている。それに目をやると、台玉だった。彼は白目を向いて死んでいた。汚らしいものに触れたように、ムロは鼻に皺を寄せるとそれを足で無造作に横へやる。

そして、ムロは上座の中央部で多量の血を流すヤナギを搔き抱いているカガミの前に腰を下ろした。敢えて、ヤナギの死に顔を見ることは避けた。泣きそうな思いを懸命に耐える。

カガミは声も立てず、泣いていた。

初めて見たカガミの涙に、ムロは衝撃を覚える。

「……カガミ、ここはもうじき陥落する。脱出するぞ」

「ムロ……。俺には、わからない。涙の、止め方が」

ムロは無言でカガミの左脇に腕を入れて引き上げた。

「俺は、楊との約束を破つてしまつたな」

そうカガミは呟く。

この世で一番幸せな姫に。

ムロはせめて、自分だけでも泣かないよう、まつすぐ前を見据えた。

ヤナギの遺体を運び出したいと懇願するカガミを何とか諫め、ムロはカガミを連れて宮を脱して都を駆ける。

ムロとて、ヤナギの遺体をあの宮から出してやりたかった。だが、ヤナギを背負つて火の手を搔い潜ることができるのはカガミもムロも持つていな。地祇の力を揮つたことで、カガミとムロの体力と精神力は限界に近かつた。

ムロがカガミを見つけた時、地祇はカガミの中から出て行つたとだつた。

神は気まぐれだ。ムロは何度も地祇を呼んだが、反応は返つてこない。あとは自分たちの力でどうにかしろということなのだろう。途中、逃げ惑う人々を誘導する兵たちがカガミの姿をとらえて笑顔を向けたが、カガミは無言でムロの後に続く。

高天原国の兵も人々も、カガミたちと一緒に逃げていた。ようやく渓谷を抜けて山一つ抜けた先にある蜘蛛の廻廊に着いた瞬間、地鳴りがした。

大きな水の音が彼方より近づいてくる。

姫巫という傀儡を手放し、海若是ようやく高天原国を解放するのだろう。まるで桃源郷のような、この国を。

しんがりを務めたムロとカガミは、見納めだと思つて高天原国を振り返る。

国全土に広がる夜明けは、目映いほどに美しかつた。

山々の連なりとその合間から射しこむ陽炎。虹色に輝く空。崩壊する直前の、危うい美しさが目に焼きつく。

カガミは、圧巻の眺めに見入つていたが、やがて口を開いた。

「必ず、この一国を奪つたに足る国を建国してみせる」
固く彼は決意を表した。

それにも、とムロは頭の後ろで手を組んだ。

「兄弟揃つて神の呪を受けることになろうとはな」とムロは溜め息混じりに口にした。

カガミは、それもいい、と笑つた。

終章 神燈国くしへりくじへ

深い溜め息が謁見の間に立ち込めた。

側近や女官たちは戸惑つたように顔を見合わせる。

神燈国。
しんとうくじへ

かつてこの世には、他国とは隔絶された亞空間にある高天原国と呼ばれる国があった。

その国は？神の口？から生まれた姫巫といつ軍神を有しており、姫巫の口から発せられた全ての事象は現実となつて敵国を襲つた。大きな旱魃、飢饉、津波。人々は喘ぎ苦しんだ。

そんな時、姫巫に対抗出来る唯一の希望が、黄昏国王の皇子として産声を上げた。

？神の腕？。

その王子は、自らの身に神を降ろし、神の力を使って姫巫との戦いに勝利した。

黄昏国第一王子ハルセは、その後、浮世にある全ての国を統治することとなつた。

そうして出来た国が、日輪国だ。由来は黄昏国の古称から来らしい。

ハルセはよく国を統治し、見る見るうちに國土は潤つた。民は大王であるハルセを神と崇め奉つた。

彼は五十年もの間、国を治めた。そして。

「大王……？」

恐る恐る、初老に差し掛かつた側近はムロに声をかけてきた。

「何だ」

ムロは艶のある髪の毛先をいじりながら、気のない返事をする。

玉座に座つてゐるにも関わらず、彼から大王の威厳や恐怖は感じられない。

「どうかなさつたのですか？」

「……どうもこうもない」

ばん、とムロは横に置かれていた卓を叩いた。

ああ、と女官は慌てた声を上げる。

その卓は一昨年前に地方の豪族より献上された、至高の技巧を凝らされた卓だつたからだ。

構わずムロは不満を口にする。

「何がどうしたら、俺が大王なんだ」

「ですから、ハルセ大王がそう文を遺されておりまして……」

「そのハルセは見つからぬのか

「は、はい」

ムロは親指の爪を強く噛む。

旅から戻つてきて、いきなり謁見の間に呼ばれたので何事かと思えば、ハルセが姿を消したのだという。

しかも、次期大王はムロにという厄介な木簡を残して。（あいつも、俺と同じように神の呪を受け入れた者だ。おいそれと死ぬことはあるまいが、まさか……）

一つの仮説に行き当たり、ムロは厳しい表情を浮かべる。

「まさか、常闇洞泉へ？」

いや、とムロは首を振る。

そんなはずはない、と自分の考えを打ち消す。

常闇洞泉が存在する高天原国へと続く道はもうこの世にはない。

それはムロが一番よくわかっている。

この五十年間、ヤナギのもとへ逝こうとあらゆる地へ放浪したのだ。

それでも、蜘蛛の廻廊は全て重き封じで塞がつていた。

「ムロ大王」

ムロは呼ばれてまた大きな溜め息を吐いた。

「わかつた。ハルセが帰還するまでならば、
安堵の溜め息がそこかしこから上がった。

どう見ても二十そこそこの青年に見えるムロは、側近から大王の
証である月水鏡剣を受け取る。

すつと鞘より抜いてみる。

抜き身の刃は鏡月池の水面のように静かに屈いであり、ヤナギを
殺した剣とは到底思えなかつた。

『あら、あなた、サコと一緒に宮へ来た子じゃない。私はヤナギと
いうの。よろしくね』

懐かしい声が脳裏に過ぎつた。

ムロは驚いて目を見開く。

『国を護りなさい』

優しい笑顔がちらつく。

『……………はい、ヤナギ様』

ムロの両の目より、透明な雫が滴つた。

滝の如く止まる』ことを知らない涙を流す自分自身に、ムロは酷く
戸惑つた。

ヤナギ様、ムロは高天原国^{こうてんがんこく}の平和を守れなつた。貴女との約
束を破つてしましました。

だから、せめて。ヤナギ様といつ大きな犠牲を払つて建国し
たこの国を、きっと守つてみせます。

のちに神燈国^{じんとうこく}と呼称^{しき}を変えることなる、田輪国^{たわいこく}が一代目の大王、
ムロ。

初代大王であるハルセの異母弟にして、武の天才。
神燈国建国の際には尽力し、姫巫討伐にも一役買つたとして、民
に敬われていた。

海松色^{みのる}に染めた一つ結びの髪に芥子^{けし}の実色をした瞳は、見る者を

捕らえて離さない魅力を持っている。

後に彼は、神燈国歴代大王の中でも體一の賢君と呼ばれることがなる。

平和を最も大切にした彼の治世は、とても穏やかで人々に安寧の時代をもたらした。

黄昏国たそがねいくと呼ばれていた傾国が、第一王子ハルセの功績によつて復興されて早五十年。日輪国と呼び名を変えた国は破竹の勢いで地上全土を統合していった。

そんな日輪国の一角で、深い皺の刻まれた顔を緩めて感慨に耽つている老人がいた。ほど良くなつた筋肉が、若い頃は武に通じていただらうことを窺わせる。

国々は自然とハルセの名のもとに傘下へ下り、かの王子は見事な手腕で国を纏め上げて大王として君臨した。

老人は、五十年前に見た、ハルセの必死なまでに迷いや不安を押し殺した顔を思い出し、苦笑する。

まだ二十前半だった彼が決断に苦渋するのは当たり前だつたろう。頼みの綱であるはずの父王は腑抜け、有能な部下は敵国へ寝返つた。あの激動の最中、異母弟だけがハルセを支えた。芥子の実色をした、意志が強い眼差しを向けるムロが、老人の脳裏に浮かぶ。

もとは炎來国との境目にあつて、絶えぬ戦禍に身を縮めていたこの善灯村も、ハルセが大王となつてからは争い一つ起こらない。

遠方の地ではまだ日輪国に抵抗する豪族がいると伝え聞くが、ハルセは、かの高天原国のように歯向かう者たちを、神の力で捩じ伏せることはしていない。

正しい道を彼は歩んだのだ、と老人 サブライは思う。

サブライの言に従い、神降ろしを行使したハルセは、自ら望んで神を身に降ろしたムロと同様に不老不死となつて、在位五十年を過ごした。

民は皆、ハルセやムロを神の子だと敬い、慕う。彼らがいる限り、日輪国は不滅だと詩人は唱う。

サブライは葦あしの揺れる中、歩いていた。老体には若干厳しい道の

りだつたが、一日たりともこの道を歩まない日はない。

家からそう遠くない場所にある葦原。黄金に色づいたその中にはいくつも墓石がある。

サブライはその一つ一つを、手にしていた桶の中に入れていた布切れで丁寧に磨いていく。

高天原国に屠られた哀れな魂が、天へ還れるように。

五十年経つた今でも、たまに黄泉路を見つけられずに戻つてくる魂がある。そんな魂が、自らの墓石を見た時、少しでも安らかになるようになると祈りを込めて、サブライは墓石を拭き上げた。

最後に、サブライは崖上にある四つの墓前へ手を向ける。

昔は、サコの墓石しかなかつた場所。

今はヤナギとチズコ、そしてヤサカ二の墓石もある。彼らの遺体はない。

ハルセとムロは一人で三つの墓を作つた。サブライは、一人に手伝おうかと申し出たが、ハルセたちはそれを断つた。

ハルセは墓石を作り上げたあとも、随分長い間じつとその場を動こうとしなかつた。ヤナギの墓に触れ、何を言つでもなく撫で続けていた。

それが、ハルセに会つた最後だつたとサブライは記憶している。ちょうど、五十年。

もう、そんなに時が経つたのだ。

ムロはちよくちよくサブライに顔を出してくれる。

彼はサブライのもとに来る折に触れて、旅で出会つた面白い土産話を持つてくる。そして、必ずヤナギたちの墓前に手を合わせる。

ムロの姿は十代後半で成長を止めているため、いつ見ても少年にしか見えなかつた。

サブライは随分年老いた自らの手を眺める。齡九十。よくもまあ、ここまで長生きしたものだと自分に感心してしまう。

ハルセは今頃、どうしているだろうか。

サブライは、知つている。

サブライの前には姿を現さないものの、ハルセはヤナギたちの墓石に何度も足げく通っていた。

大王となつたハルセが私情をまじえて墓前を訪れるることは良くないと自覚していながらも、こゝそりと彼は葦原へやつて来る。ハルセは必ず、墓前に花を添える。拯済の花だ。サブライもムロも、その花を供えようとはしない。

あまりに生々しく死者を思い出してしまつためだ。花の香りは呼び起こしたくもない過去を搖さぶる。

また、この五十年の間に拯済の花は大層希少なものとなつていた。昔は善灯村の水辺にも咲いていたのだが、段々数が減ってきて、ついには一つ残らず消え失せた。

時代の流れだらう。

神秘に満ちた時代は終わりを告げようとしている。霧が晴れるよう、国々に陽光が射し込んできた。それに伴い、古き時代のものは姿を隠す。

墓石を建てた折に、サブライは拯済の花を供えるハルセに訊いた。

『この花の持つ意味を知つてゐるか』と。

彼は否と首を横に振つたため、サブライは花の由来を教えてやつた。

『水に溺れてしまいそうな者を助ける 転じて常世への導き、現世へ還る折の標を担うという意味を持つ』

そう言つと、ハルセは何事か考え込むよつに遠くに眼差しを送つた。そして、サブライの方を振り返つて言つたのだ。

『では、この花はヤナギたちの標になるだらうか』

ハルセの顔は真剣だつた。

ただの言い伝えだと笑い飛ばしたりできず、サブライは頷くしかなかつた。ハルセが縋るような目をしていたせいだ。サブライの中での表情が消えることはない。

ふと、ヤナギたちの墓石を見やると、朝焼けに照らされて黒く光つていた。

石の下には拯済の花が飾つてある。水々しいとこうを見るに、まだ花が手折られてからそれほど時間は経っていないことがわかる。サブライは遙か遠くに連なる山の奥間から覗く太陽を見つめる。あまりの眩さに腕を田の上にやつた。

「常世に行つた時は、皆で杯を交わしたいな」

サブライは眩き、葦原の中を引き返した。

ムロは体を丸めて小さく息を吐く。

夜明けは遠い。

「無理に抗うな」

苦しげに顔を歪めるムロに、カガミはそう助言した。

「抗え、抗うほど、神の力は増大するぞ」

「……ああ」

ムロはカガミの助言に従い、体の力を抜く。

決戦の時は刻一刻を忍び寄っている。

ムロとルイの二人は、最前線に立つて地上軍を指揮する役目を負っている。カガミたちの中で誰よりも先に蜘蛛の廻廊へ足を踏み入れるのだ。きっと、ムロは上手くやつてくれるに違いない。カガミは異母弟を信じていた。

今までの戦は、常にヤサカニが采配を揮っていたが、今回の戦は違う。有能な軍師はここにいない。

ムロは素早く姿勢を正し、カガミと向かい合つた。漆黒に染め上げたムロの長い髪が滑らかに零れる。

「カガミ、約束しろ。俺はきっと高天原国を陥落させる。そのかわり、きっと……ヤナギ様を解放してくれ」

虚を突かれ、カガミは返事に窮した。

まさか、ここまできてムロからそんな言葉が飛び出すとは思つていなかつた。

ムロは自嘲の笑みを浮かべ、腰に手を当てて片眉を上げる。

「どうせ、何を今更思つているんだろう」

「ああ」

素直に答えるれば、はんつとムロは鼻を鳴らした。

「国など俺にとつては取るに足りないもの。お前のよつて王子として日々を暮らしたわけでもないしな」

力ガミは同じ王族の血を継ぎながら、あまりにも自分と違つムロを静かに見据える。ムロは宵の宴に興じる人々の方へ目線を転じた。戦へ行く者たちを鼓舞するために開かれた宴は、たいそう賑わっている。

「お前の肩に黄昏国の者たちの願いが乗つているように、俺の肩にはサコやチズコ、そしてヤナギ様の願いが乗つている。だから、きっとお前が高天原国を滅亡させられるよう血路を拓いてみせる。ヤナギ様は……解放されたいと 姫巫という業より抜け出したいと願つておられた。その願いを叶えてやつてくれ」

力ガミは下唇を噛みしめた。思わず拳に力がこもる。

羨ましかつた。ヤナギに対する誠実な想いを、まっすぐに口にすることが許されるムロが。己の立場を投げ打つてヤナギのもとに馳せ参じたヤサカ二が。

「お前が、叶えてやればいいじゃないか」

嫉妬混じりに言えば、ムロは苦笑した。

「俺はヤナギ様を殺せない。……笑えばいい。俺はヤナギ様を救いたいと思いながら、自分の想いを凍らせられない愚か者だ」

ムロは言い捨て、身を翻した。

宴席では、鼓や笛の音が楽しげに鳴つてゐる。笑い声と杯を合わせる音。どれもが力ガミの耳を空しくすり抜ける。

ムロは、ヤナギのことを真剣に好きなのだ。彼は出会つた時より、ヤナギ以外を見ていない。

それは力ガミにもわかる。力ガミもまた、ヤナギしか見ていないつたから。

異母弟は、ヤナギが自分の異母姉であると気がついていないはずだ。伝えようかとも思つたが、結局力ガミは真実を告げなかつた。告げれば、ムロは傷つくだろう。今より更に。ムロが辛い思いを抱えるような事態は避けたいと力ガミは考えた。

十分だろ？

ムロはヤナギに忠誠を誓つていたにも関わらず、彼女の願いを叶えるために、あれほど憎悪していた黄昏国へ下つた。そして、そこで自らが王族であるということを知つたのだ。これ以上、ムロが悲しみの連鎖で悲嘆するのをカガミは見たくなかった。

（俺だけで十分だ）

人の記憶はおかしなものだ。

カガミは、幼げでいたいけな少女だった妹とヤナギが同一人物に思えなかつた。

「出発するのか」

威厳ある声が暗がりからした。カガミは、影から現れた男の姿を見止めて肩を竦めた。

「ムロとルイの部隊だけ先に出発する。彼らが通る蜘蛛の廻廊は少し遠い。明朝、出発だな」

答えると、男は鷹揚に頷いた。

「して、サブライ。あなたは何をしにきたんだ。軍に加わりたいといふことならば、喜んで迎えるが……」

「いや、わしは中立の立場からこの戦を見届ける」

「そうか」

カガミはサブライの返しを予期していた。

サブライは顎鬚をさすり、まなじりを下げた。

「何、久しぶりにムロと手合させしてみたいとも思つたつてな」

「そうか 待つていてくれ。すぐにムロを呼んで 」

「王子」

宴に参加して酒をあおつてゐるムロを連れてこようとするカガミ

を、サブライは呼び止めた。

「強すぎる愛情は、時として憎悪を伴つ。逆もまたしかり。それは止められぬ定め」

カガミは、自分自身が何度も何度も「己に言い聞かせ戒めてきた言葉をサブライが放つたことに驚き、目を丸くした。

「……王子、愛しているのだろう。ヤナギ様を」

カガミは息が止まるかと思った。サブライは暗闇からカガミとムロの会話を盗み聞きしていたのだ。そして、会話の最中にカガミが見せた揺らぎを敏感に察知したのだろう。そうでないなら、心を見透かす占手が何かでしか有り得ない。

何も言わず、カガミは月を眺めた。上弦の月は、幼い頃ヤナギと見たものと似ていて。

「俺は、拯済の花でも、空に浮かぶ月でも、常にそばで見守つてやれる男でもないから」

サブライは黙つて聞いている。カガミはサブライの澄んだ目に向き合つ。

「以前、あいつは拯済の花が好きだと言つていた。摘んできてやれば、顔を綻ばせて笑つてくれたものだ。ある時は、闇夜に浮かぶ月に手を伸ばして綺麗だと言つていた。庭先にある池に月が映つてゐるのを見せてやれば、これまた嬉しそうに俺の手を握つてくれた」カガミは瞑目した。記憶の果てからヤナギの笑い声がする。

それを振り切つて、カガミは目を開いた。

「サブライ。俺は、ヤナギへの気持ちを、俺自身　いや、黄昏国で俺の勝利を待つ民のためにも認めるわけにはいかない」

遠い過去を振り返りながら、ハルセは歩き続ける。放浪の旅を始めてから早数ヶ月が経つた。

「どこに行くのですか」

行く先々で問うてくる声に、ハルセは曖昧に笑う。

ハルセは自分の統治した国々を見て回り、豊かさを知る。これも地祇の加護あつてのことだと思った。地祇は大地に豊穣をもたらした。

かの神は、自らに実りの一部を献上することを条件に、日輪国を加護してくれている。

天災もほもなく、人々の笑い声が野にも山にも木靈している。

当て所もない旅の最中、出会つ者たち全てが飢えや渴きから解放された顔をハルセに向ける。

良かった、と思つ。

民の様子が、高天原国を討つたことは間違いなんかではなかつたのだとハルセに思わせてくれる。

ハルセは長い間、高天原国を滅ぼしたことが果たして最善だつたのかと自分自身に問い合わせてきた。もう一度とあの国は蘇れない。天上と地上をたゆたつていた桃源郷は滅びたのだ。

私憤に駆られて高天原国を討つたのではない、と言い切れないのでが不甲斐なかつた。

そうは言つても、ハルセや地祇の恩恵へ贊美を口にする人々を見ていると、素直に嬉しいと感じる。

この五十年の間、ずっと日輪国のことだけを考えてきた。自らのことなどかなぐり捨てて、国に仕えてきた。

もう、いいだろ？

ハルセは、すっと息を吸い込んだ。新縁と土の匂いが入り混じつた匂いがする。

『そろそろ、終わりを迎えるのか』

体内より地祇の念が伝わつてくる。

地祇は気まぐれにハルセとムロの体に入り込んで、人は青草と呼んでいる　の暮らしを遊山していた。

ハルセは、そうだな、と笑んだ。

「宿命は、全うしただろう

いつの間にか落葉樹の生い茂る一帯に入り込んでいた。水辺には、優しげに拯済の花がざわめく。

チズコは耳を澄まし、川べりで衣を洗っていた手を止めて腰を上げた。

木漏れ日の柔らかい揺らめきと、清流の音。そしていつからか失われた自然の息吹。

太古が息づくこの地には、ただ安らぎと優しいまどろみだけがあつた。この地では、身分の違いも何も意味を為さない。

高天原国を地上の国々は桃源郷と呼んでいたが、ここにこそが常世。絶対に波風の立たない平穏の地。

幻のよだな危うさで、この地は存在していた。

現の体を失い、たゆたいながらチズコは常闇洞泉を抜けてこの地へやつて来た。もう何十年とここにとどまっている。まだ、生まれ変わりの予兆はない。きっと、再び生まれ変わる時は皆が集まつてからなのだ、とチズコは妙な確信を持っていた。

姫巫と神の腕を軸にして、彼らに関わりあつた者だけがいまだ生まれ変わりの道を示されていない。黄泉を司る神は理由を黙しているが、きっとそうなのだ。神々に関わつた者たちは再び同じ世を生きる定めにあるのだろう。

その証拠に、チズコと同じ時期に黄泉へやつて來た者たちは皆転生の道を示され、この地を去つて行つた。

繰り返す輪廻転生の合間の、小休止。

この地は善人も悪人も一様に受け入れ、緩やかに時を刻んでいく。チズコは心地よい風を受けて瞑目する。五感に届くもの全てが優しい。

ばしゃりと大きな音を立てて、チズコの横にいた男が川に遊ばせた衣を乱暴に引き上げる。

「なんで俺が……」

ヤサカニは小声で悪態を吐く。

彼はヤナギとともに竹林へ出かけたかったのだ。しかし、半ば強引にチズコはヤサカニの耳を引っ張つてこの小川までやつて来た。洗濯物はチズコ一人では片付けられない量だった。頼みの綱であるサコには、幼子たちの相手に手いっぱいのため手伝えないわ、と眉を下げる断られた。

チズコは文句を垂れるヤサカニを、腰に手を当てて叱咤した。
「ヤナギ様だつて言ってたるう。薬草くらい一人で採りに行けるつて。『ごらん、わたくしの方が大わらわじゃないか』
「……チズコはこの程度の洗濯物など、どうとでもなりそつだが、ヤナギ様は……」

全く、とチズコは嘆息した。ヤサカニは心配げに竹林の方角を見るやる。

「常世に来てまで、ヤナギ様が人々を助けなくとも良いだろうに」
「ぼやくヤサカニにチズコは苦笑した。彼の言つことは一理ある。常世でも風邪をこじらせたり傷をこさえたりするが、時が経てば治癒する。生まれ変わる前に死んでしまうことなど、まず有り得ない。なのに、ヤナギは度々竹林へ薬草を採取しに行つては、煎じ薬を作つたり、干し薬を作つたりして人々に分け与えている。

現世の時と、少しも変わつてない。ヤナギの心は透き通つてゐる。姫巫という呪われし重責より解放されたヤナギは、いつも笑つていた。

それを見ていると、自然チズコたちも笑顔になれた。このまま、生まれ変わらずここに留まりたいとさえ思つ。しかし

チズコはヤサカニと同じく竹林に目を転じる。
この世とあの世の狭間が荒れている。大きな気配が動いた。
強い、一陣の風が吹く。
チズコは目を細めた。

「ヤサカニ」

弾んだ声でチズコはヤサカニの名を呼んだ。

ふて腐れたヤサカニは恨めしげにチズコを見上げるが、彼女の顔に喜色が浮かんでるのを見ると瞠目した。

「どうした、そんな嬉しそう」

「……ようやくおでましのようだ。やれやれ、本当に待ちくたびれたな」

不可解なチズコの言にヤサカニは首を傾いだが、やがてその言葉の意味を理解したのか立ち上がる。彼の手から真白い衣がすり抜け、水草の上に着地した。

見る見るうちにヤサカニの表情が和らぎ、彼は破顔した。

清浄な風があつた。

青い竹が、ヤナギにさやさやと囁きかけてくる。

ヤナギは竹林の中で深呼吸した。遠くから匂い立つ湧水と、平穏を象徴する木々のざわめきが耳をくすぐる。

息を胸いっぱいに吸い込めば、現世にいたときと変わらないものに満たされていく。

常世には全てがあつた。ヤナギが望んだもの全てがあつた。平穏と飢餓のない暮らし、そして人々の笑顔。

ヤナギは漆黒の長い髪を解き放ち、天を仰いだ。黒曜石のように輝く濡れた瞳に蒼穹の空が映る。

何十年も、同じ日常を過ごしている。山に生えた薬草や食物を探つて皆で細々と寄り添つて時を歩んでいた。

一点の曇りもないまろやかな陽射しが竹の葉の間より射し込む。その光はヤナギの目を刺激する。ヤナギは緩く瞬きをしつつ、數を搔き分けて竹林の奥へ歩を進めた。

竹林の奥部には拓けた場所があり、野の花や薬草、そして拯済の花が咲き誇っている一角がある。そこには高天原国の梶子森の如く神聖な空気を纏つており、たくさんの貴重な薬草が生えていた。ヤナギは月に一度、そこへ薬草の採取へ行っている。少しだけ、高天原国《あの国》にある竹林に似ている常世の竹林が、ヤナギの心を落ち着かせる。

零れんばかりに拯済の花が咲き誇っている。ヤナギは腰を下ろし、精神を和ませる花の香りを体に取り込んだ。

拯済はこの世とあの世を繋ぐ標花。ヤナギは拯済の花の中、寝転んだ。

遙か彼方に空があつた。手を伸ばす。どこまでも気高く、澄み渡

つた空は、あの人を彷彿とさせて。

朽葉色をしたざんばら髪と意志の強い鋭き双眸でヤナギを見透かすかの人は、最後に見た時、髪をぱつさりと切っていた。瞼の裏にある残像は胸を締めつける。

（……会いたい……）

強く思った。いつかまた、ここで必ず会えると云つチズコの言葉を笑つて流しながらも、本当は信じていた。彼はきっと、ここへ辿り着く。そしてその時こそがヤナギにとって、現の終わり。そして始まり。

ふわりと花弁がヤナギの顔に零れた。それと同時に体が浮いた。慌てて眼を開けると、そこには困ったように微笑む力ガミがいた。

力ガミのいきなり過ぎる登場に仰天したのか、いきなり体を持ち上げられたから仰天したのかは定かでないが、ヤナギは目を剥いて手足をばたつかせて強引に地面へ降り立つと、後ずさる。彼女が手にしていた竹かごが花の上に落ちた。

幻影を見ていると思つているようだ。ヤナギはしきりに両目を擦つている。

その様子がおかしくてたまらず、力ガミは弾けるように笑つた。

力ガミ。

ヤナギの声を聞いた気がして、野を越え山を越え、落葉樹の生い茂る一帯の水辺に辿り着いた力ガミは、強く願つた。ヤナギに会いたい、と。

その瞬間、常闇洞泉じじやみどくせんは力ガミの前に姿を現した。旅の終わりにようやく力ガミは気付いた。必要だったのは、導いてくれる花と強い想いだったのだ、と。ヤナギのもとへ行けると確信した力ガミは、迷いもせずに常闇洞泉へ飛び込んだ。途中、体の中から地祇の気配が消えた。かの神は力ガミから手を引いてくれたのだ。不老不死の

体を力ガミはするりと脱ぎ捨て、洞窟の终わりに見える小さな光を目指して駆けた。次第に强まる光を浴びながら、歡喜に胸を震わせる。胸に去来するのは、力ガミを呼ぶヤナギだけ。五十年間、地上の救い手として生を貰いた青年は、ようやく自らの心を解き放った。そして光の先にあつたのは、いつか高天原国で見た竹林の中に咲き乱れる拯済の花と、その中に寝転び瞑目しているヤナギだった。

力ガミは両手を広げる。

「来い、キヨウカ」

優しげな面差しは遠い昔、ヤナギが見たものと同じで。

熱い想いがヤナギを満たした。会いたいと強く思うばかりに、もしや幻を見ているのではと自分の視覚を疑っていたヤナギは、泣き出しそうに優しく微笑む力ガミが本物だと確信し、抑制していた感情の渦に呑まれた。

ヤナギは力ガミに思い切り飛びついた。

「ただいま、キヨウカ」

「兄上、おかえりなさい」

声がする。耳に残る響きに導かれ、力ガミはようやく守るべきものではなく、守りたいもののもとへと還つて來た。

響くは始まりと終わりを告げる宿運が鬨の声。
歴史に埋もれし真実はそのままに、いざ逝かん。

導くは愛しい者の足跡。

大地に広がりし陽光はやがて、民を救わん。
巡りめぐつた全てを抱き、ようやく帰巢せん。

残響帰巢。さんきょ うきやう 唯一無一の居場所はかの心なり。

響くのは物事の始まりと終わりを告げる、運命の産声。
歴史の中に埋もれた真実は胸に秘めて、私はこの世を去りや。

私を導いてくれるのは、恋焦がれた者の辿った足跡。

大地に広がつた眩い太陽の光が、濶んだ空のもとにいる人々を救うだろう。

万物を巡つて繰り広げられた全てを私は受け入れ、ようやく巢へ戻つた。

耳に残る声を頼りにし、私はここへ帰つて來た。この世でたつた一つの私の居場所は、あなたの心そばだった。

それは古に語り継がれた伝承。太古の昔の記憶。
結ばれることなく世を去つた一人の、物語。

《
完
》

長かった……。

構想を練ったのが2008年の冬。書き出したのが翌年の春。そして、修正しながら書き終えたのが今。物語の結末は当初考えていたものと同じです。でも、そこに至る道筋は二転三転……。自分で書きながら、「何でここにこうなる…」と突つ込みながら執筆してました。

ヤナギの運命。力ガミの運命。そして、一人を取り巻く人々。いくつもの偶然と必然を綴りながら、物語は完結しました。

ヤナギと力ガミは正反対の性質を持つ子でした。でも、本質は同じだった。一人ともどこか寂しげで、葛藤していく。

逃避と向き合つことは対極にあるようでいて常に隣に寄り添いつていると、私は思っています。

物事から逃避すること。それは自分の中の何かを守るための行為。守ると同時に何かを喪う。ヤナギが辿った行く末。

物事に向き合うこと。それは自分を傷つける結果を招くことがある。力ガミが辿った行く末。

似ていないうで、とてもよく似た行く末。

この話はもともと短編用に作ったものだったんですが、せっかくだから長編で書いてみようという私の気まぐれによつて、ここまで長編となりました。

疲れました。

というのが今の心境です。

細かい修正や矛盾点や表現の変更など、あとで「ヨ」「チヨ」「いじりますが、一先ずここで『残響の導き』は完結です。ここまでじ覽になつて頂いた方全てに感謝致します。

それでは、また充電し終えたらまた長編を書き散らすと思います
ので、それまで頑張りまお!元氣で。

2010.08.09▲

番外編 大地の休息（前書き）

戦の合間の小休止 。
ハルセとキョウカの過去話です。

拯済の花片が、春の麗らかな風に吹かれている。視界一面を覆うそれに、ハルセは目を細めた。

蒼く晴れた空に灰色の花が舞う様は、何とも不釣り合いであつた。「あにうえ」

舌つ足らずな拙い声が花吹雪の向こう側から聞こえる。

ハルセは精悍な顔つきを少しだけ和らげ、声の主を振り返る。拯済の花弁の隙間より見え隠れするその幼い姫に手を差し伸べれば、姫はすぐに花吹雪を突つ切つてこちらへやつて来た。

「来い、キヨウカ」

キヨウカは豪勢な簪を揺らしながら、迷わずハルセの足に抱き着く。ハルセは軽く笑い、自分の腿の付け根程しかない背丈のキヨウ力を抱き上げる。

夕陽色をした衣を纏いし少女は天真爛漫に顔を緩めた。薄く色づいた頬は、走つてここまで来たのだということを如実に物語つていた。額と額を合わせて彼女の大きな黒い瞳を覗き込んだ。

「俺を捜しに来てくれたのか？」

「うん。きょうかは、あにうえと一緒にいたかったの」

温かな言葉に胸を突かれた。口溜まりの匂いがする。柔らかな頬を擦り寄せてくるその動作に愛しさを覚え、ハルセはキヨウカをより一層強く抱きしめた。

暗い戦が続く黄昏国。その渦中に、このような純粋な少女がいるなどと、ハルセはキヨウカと出会うままで微塵も信じていなかつた。

黄昏国の掟では兄妹（または姉弟）の場合、下の子が齡三つになるまで血が繋がつていようと面会することが出来ない。ハルセとキヨウカもそれに従い、昨年の冬に初めて顔を合わせた。

雪が降りしきる宵。そこで一人は出会つたのだ。ハルセが十とな

つた祝杯の宴のことであつた。血縁のみが寄り合い、円座に腰を下ろして酒を飲み交わす。新年の厳かな雰囲気の宴だつた。

あの時のことを見失ふことはないだろつ。

朱塗り盃を翳して口元に運ぶハルセを、真正面に座す母の後ろよりじつと観察していたキヨウカはやがて、小首を傾げてハルセの前に立つた。そして、母親譲りの黒髪をおかっぱにした姫はハルセの頭を撫でたのだ。

場の空氣は凍り付いた。

生まれ出でた際に？神の腕？と占者が結論づけた黄眉國たそがねこくが第一王子、ハルセ。神力を欲しいがままに扱える素質を持つとされた彼に進んで近付く者はいなかつた。母でさえ何かの秘密を隠すかのように、ハルセを避けて通つた。

そんな、無礼を働けば返り討ちに遭つと畏れられ、実父でさえ手を持て余していたハルセに、キヨウカは触れたのだ。既、姫が彼の逆鱗に触れたと思い、息を止めた。

錦糸の織り込まれた装束の裾を捌き、母がキヨウカをハルセより引き離そうとする。

「これ、兄上に無礼なことをするでない」

軽く諫める母の手を嫌がり、キヨウカは眦を吊り上げた。

「だつて先程から、あにうえ一人でいるのだもの。だから、きょうかが一緒にいるの」

予想外の返しにハルセは目を見張つた。

キヨウカは隙をついてハルセの懷に飛び込んだ。その振動で盃の中身が零れ、床に散つた。

「はじめまして、あにうえつ。きょうかはあにうえが大好き」

どうして自分がここまで懐かれるのか。困惑を隠せないハルセは立ち竦む母の顔を窺い見る。母は長く艶やかな髪を耳にかけ、ほうと息を吐いた。

「キヨウカは、そなたが毎朝鍛錬を行なつてゐる様を見ていたようです。物心ついてより、ずっと。いつ会えるのかとそればかり聞い

ておりました。今日、じつして会えたことに嬉しさが隠せなかつたのでしうね」

ハルセが鍛錬を行なつてゐる斎庭の垣根の向こうには、女子が住まう離れがある。垣根の隙間より、キヨウカは自分を知つたのだろう。

ハルセの着物を掴んでいるキヨウカの小さな手を、そつと自分の手で包んだ。すると、キヨウカは嬉しそうに顔を上げてハルセに笑いかける。屈託ない笑顔は、様々な重圧によつて大人ぶる他なかつた十の少年の心をほぐした。

「……キヨウカ……」と名を呼べば、はいと歯切れ良い返事をする。どうしようもなく温かな気持ちになつて、少女の頭を撫でた。すると、キヨウカも負けじと撫で返してくれる。

ハルセは自然と唇を綻ばせた。周囲は騒然とする。大人顔負けの余裕と貴禄を持つハルセが、今は年相応な顔をしているのだから仕方ない。

「お前がキヨウカを気に入つたのなら良かつた良かつた。少々じゃじゃ馬だが、たまには遊び相手になるのだぞ」

黄昏国王　父の言葉にハルセは頷く。

はたしてその言葉通り、ハルセとキヨウカは仲睦まじく暮らした。戦へハルセが赴く度、キヨウカは泣きべそをかきながらも、大きく手を振つて彼を送り出してくれる。

どこの夫婦のようだとは二人に近しい護衛はいつも離し立てた。

「もうつ」

縦皺を寄せてキヨウカはハルセの胸板を叩いた。はつとして彼女を見やれば、頬を膨らませて顔を逸らされた。

怪訝な表情でキヨウカの髪を撫でると、じと皿でこちらを睨んでくる。

「どうした?」

「きょうかが話しかけても上の空でした」

「ああ」

ふつとハルセは納得した。どうやら、物思いに耽り過ぎてキヨウ

力の声を拾えなかつたらしい。

「悪かつた。かわりに今日は一日中、キヨウカと遊んでやろう」
キヨウカは何も言わずにハルセへしがみつく。彼の着物の衿部分に顔面を押し付けた姫の表情はわからないが、喜んでいるのは伝わつてくる。

広い宮殿の中、一人でいるのは心細かるうとハルセは思う。空より垂れた目に見えぬ闇は、始終黄昏国を覆つてゐる。その核部にある王宮の腐敗具合と言つたら、目に余るものがあつた。父である王は政に戦にと忙しく、ろくに顔も見ることが出来ない。母である王妃は、高天原國の姫巫ひめみこ “神の口”という異名もある、戦女神と名高い神力を操る巫みこ より度々送り付けられる文に頭を抱えていた。その文の内容は、ハルセにもわかり兼ねる。しかし、あまり良い内容ではないのは容易に想像出来た。

「…………きょうかは、あにうえとずつと一緒にいたい」

唐突に、怖い夢を見た直後のような萎れた声で、キヨウカは言った。黙つていると、彼女は涙を湛えた黒曜石の瞳でハルセを見る。

「かあさまは駄目だと言つていたの。何故？」きょうかがあにうえ

に『相応しい姫』ではないとかあさまは言つたわ」

虚を突かれた。賢しげなキヨウカ。だが、まだ四つでしかない。どうやら彼女は彼女なりに、ハルセとどうしたらずつと共にいられるかを摸索していたらしい。

「…………この髪色がいけないの？ 顔が駄目？ 我が儘な中身が問題なの？」

キヨウカは兄上と一緒にいたい、と彼女は震える声で悲鳴を上げた。

ハルセは静謐な双眸でキヨウカを見据えた。朽葉色の長い髪が、瞳が、淡く煌めぐ。

「俺はキヨウカの、長く漆黒の髪が好きだけれど」

手入れが行き届いたその艶やかな髪を指ですいた。

「全てを見透す澄んだ瞳、可愛らしい顔立ちも好きだけれど」

ハルセは幼姫の輪郭をなぞった。

「何より好きなのは、一人でいる者に笑顔で手を伸ばす、その優しい中身」

穢れを知らない白い陶磁器の如き頬に唇を落とすと、誰にも渡しあくないと願いを込めて再び強く抱きしめる。

大地より巻き上がる突風に、拯済がまた吹雪く。

「歪んだ世、お前だけが美しい」

芯から凍える冬椿。

高天原国に怯えて暮らす、傾いた黄昏国。亡国同然のこの国を、復興する役目を担つて生まれたのだと周囲は口々に呟いた。崇めた。畏れた。

飛び交う幾多の情報。一体、どれが真なのだと頭を抱えた口もあつた。

だが、弱味は見せられない。自らが唯一、地上に残された一縷の希望なのだとハルセは自覚していた。

冬晴れの空は、宿運に翻弄されし王子と姫に、束の間の穏やかさを与えてくれた。

ハルセの過去話。短いです。

煌々とした赤き炎はとぐろを巻き、王宮を包んでいた。木造建築のそれは、激しい音を立てて燃え盛る。

ハルセは我が身も顧みず、王宮へと飛び込もうと駆け出す。

「よせ」

しづがれ、干乾びた声がそれを止めた。

ハルセはゆっくりと振り向く。重臣に支えられて立つ父王の姿に歯軋りした。

「何故、止めるのですか。宮内にはまだ、母上が……っ」

「あやつが火を放ったのだぞ」

低く、重苦しい言葉はハルセの鼓膜をじりじりと揺さぶる。

「ハルセ様、貴方様まで天に召されてしまったら、わたしもはどうして生きることができます」

女官が着物の袖に顔を埋めて静かに泣く。傍に控える兵達も一様に俯いていた。

ハルセは瞳に映り込む王宮に、全てを怨む醜悪な母親の姿を見た。最後に会つた時、彼女は笑つてハルセに言い放つたのだ。

『わたくしには、たかまのはら高天原国から逃げおおせることもできない。キヨウカさえ守れず、国王の心も繋ぎ止められない。ただの女。ならば

』

狂氣を孕んだ母親の眼が細められる。

『国王の願いくらい、わたくしが叶えて差し上げましょう』

赤紅を引いた唇が弧を描く。次の瞬間、彼女は掲げていた油を流した床に、松明の炎を落としたのだ。その様を目の前で見ていたハルセがよくもまあ、こうして脱出できたものだ。

「……まだ助かるかもしません。救援を」

「駄目だ」

「何故です。仮にもあの人はたそがれ黄昏国^{たそがれ}の王妃でございましょう

「姫巫より、伝達が来た。宮を明け渡して投降しろ。もしそれができないのならば、王妃を差し出せ、と」

ハルセは淡々と言葉を紡ぐ父王に、驚愕の表情を向けた。

「まさか……父上……」

煉獄の炎は、とどまることを知らず火の粉を吹く。父王の臉に翳が落ちる。

「赦せ」

その言葉にハルセは目のが白くなる。彼は言ったのだ。キヨウ力を失い、絶望する自分の正妃に向かって、非情とも言える願いを口にしたのだ。

高天原国の掌中に落ちるくらいなら、自害を選んでほしい、と。指先に震えが走る。

『黄昏国そのため、必要な犠牲だつたんだ』

『兄上』

脳裏にこびりついて消えない、癒えない記憶。

一体何度、失えばいいのか。

ハルセは下唇を噛みしめ、拳を握った。

「王子」

「ハルセ様」

「王太子」

数多の声が、ハルセの肩にのし掛かって来る。

「…………あなたは、どこまで愚かになつたのですか」

「何？」

父王は眉間に深く皺を刻んだ。

ハルセは威厳ある父の様子に臆することなく嘲笑を洩らした。

「必ず高天原国を殲滅する。そう言って俺を連れ、戦地を巡つたあなたはどこへ行つたというのですか」

至極、穏やかな物言い。

王宮から死に物狂いで逃げ出した官や兵たちは黙している。

「この国の主は、いつからそんなさもしい者となり下がつた！」

ハルセの激昂が飛んだ。

父王は険しい顔をしたまま、瞳を潤ませた。彼は声もなく、何筋もの涙を流す。諦めを知つた者が見せるその涙にハルセは顔を引き締めた。

王宮へと一步、また一步と進み出る。それを咎める兵たちの悲鳴が上がつたが、ハルセは気にも留めなかつた。

「あなたがこの国を守らないといふならば、俺が守ります」

そう言い、両腕を水平に薙ぐ。

「散れ」

腹の底から、彼はどぐろを巻く炎に向かつて言つた。それでもなお、収まる気配のないそれに、ハルセは再び「散れ」と言靈を紡ぐ。目奥に力をこめる。

瞬間、頭上に暗雲が立ち込め、雷が鳴つた。

遠くから近くから雷鳴は轟き、どこからともなく雨音がし出した。とても細かつた雨はやがて土砂降りとなり、炎に沈んだ王宮を鎮静させる。

辺りから聞こえるのは人の啜り泣く声と雨音ばかり。

ハルセは見事な朽葉色の御髪を拭うでもなく、その場に佇んでいた。

「おお」

ようやく我に返つたのだろう。父王はハルセに縋りついてきた。

そこには高天原国を倒すために尽力していた王ではなく、た

だの老人の姿があった。

「やはりお前……『神の腕』」

恐怖が籠もった、しかし、期待の滲んだ父王の言葉にハルセは視線を逸らす。そして、場にいる大勢の人々を前に、決意を新たにする。

これまで、救いの王子と呼ばれながらもハルセは大切なものを一つとして守れなかつた。

王子であるという前提がハルセの行動に足枷を嵌める。

ならば 。。

「これより、我が名はカガミ。国を復古する一兵に、王族の名は要らない」

カガミ。それは遙か昔、黄昏国を王が建国する際に最も貢献したと云われる異境の兵の名。彼は黄昏国が建国したのを見届け、静かに姿を隠したらしい。

自分もその兵の如く、黄昏国のはじとなれたなら、本望だ。そう思い、ハルセは灰色の空を仰ぐ。大粒の雨が顔を叩きつけ、頬を伝つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n52231/>

残響の導き

2010年11月15日19時40分発行